

桜洞城跡発掘調査報告書

2014

下呂市教育委員会

下呂市文化財調査報告書第3集

桜洞城跡発掘調査報告書

2014

下呂市教育委員会

桜洞城跡発掘調査報告書

2014

下呂市教育委員会



桜洞城跡出土陶磁器・土師器



桜洞城跡出土青磁酒会壺・蓋



桜洞城跡出土青磁・染付



桜洞城跡出土灰釉皿



桜洞城跡出土天目茶碗



桜洞城跡出土土師器皿

序

桜洞城跡は、戦国時代の城跡として地元の方々に「冬城」という通称で古くから知られた城跡です。戦国時代に飛騨を代表する大名・三木氏の居城として、過去どのような姿で萩原町萩原・桜洞地内に存在したのか不明確な部分が多い城であったこともまた周知の事実になっていました。

現在、城跡の空堀と土塁跡の一角が下呂市指定史跡になっており、現状を保存し、未来へとその姿を残すことが決まっておりますが、桜洞城跡内にて農業を営む方々から不整形な農地を整備したいとの強い要望がありました。そのため、圃場整備範囲内にかかる埋蔵文化財包蔵地を、記録保存のために緊急に発掘調査をすることに至りました。

平成 21 年度の本発掘調査の結果、城の東側から南側にて長大な堀跡が現在の農地の下から発見され、多くの方々を驚愕させました。また、空堀内からは日常容器である瀬戸・美濃窯の茶碗類が大量に出土し、また城内からは中国元代に由来する青磁酒会壺が出土するなど三木氏の権威を示す品々が出土し、大変注目されました。現在、出土品の一部は、市の公開施設である下呂ふるさと歴史記念館にて展示されています。

本書は、平成 21 年度の発掘調査成果をまとめたものです。本報告書が埋蔵文化財に対する認識を深めて頂くきっかけ、または当地の歴史研究の一助になれば幸いです。

最後に、発掘調査及び出土遺物の整理・報告書作成に当りまして、多大なご協力を賜りました土地地権者の皆様並びに関係諸機関の皆様に深く御礼申し上げます。

平成 26 年 1 月

下呂市教育委員会
教育長 長谷川 藤三

例　　言

- 1 本書は、岐阜県萩原町萩原地内に所在する桜洞城跡（岐阜県遺跡番号 21220-850）の発掘調査報告書である。
- 2 本調査は、萩原地内圃場整備事業に伴うもので、下呂市教育委員会が発掘調査及び整理作業を実施した。
- 3 発掘調査は平成 21 年度に、整理作業は平成 22・23・24 年度に実施した。
- 4 発掘調査及び整理作業の体制は第 1 章第 2 節に示した。
- 5 本書は、第 4 章以外の執筆を馬場伸一郎が行った。
- 6 放射性炭素年代測定や出土炭化物の同定等の自然科学分析は株式会社パレオ・ラボに委託して行い、その報告を第 4 章に掲載した。
- 7 発掘調査における作業員雇用、現場管理、掘削、測量の一部を株式会社イビソクに委託して行った。また、緊急雇用創出特例交付金を発掘調査の一部に充てた。
- 8 出土遺物の実測、観察表作成の一部、写真撮影、報告書編集作業を有限会社毛野考古学研究所富山支所に委託して行った。
- 9 出土陶器の時期については、愛知学院大学教授藤澤良祐氏にご鑑定頂いた。
- 10 発掘調査及び報告書の作成にあたって、次の方々や諸機関から御指導・御協力を頂いた。
記して感謝の意を表す次第である（敬称略・五十音順）。
赤澤徳明 吾郷武日 岩田隆 内堀信雄 押井正行 堀内光次郎 藤澤里奈 小山美紀
佐伯哲也 酒井重洋 杉山みさと 高橋方紀 高野豊計 田中彰 谷口研語 千早保之
常深尚 中井均 長瀬公昭 福井重治 八賀晋 藤沢良佑 三宅唯美 三好清超
岐阜県教育委員会 桜洞区桜洞の歴史を探る会 高山市教育委員会 飛騨市教育委員会
飛騨高山まちの博物館 福井県一乗谷朝倉氏遺跡資料館 福井県教育庁埋蔵文化財センター
古城地区地権者の皆様
- 11 本文中の方位は座標北であり、座標は国土交通省告示の平面直角座標系第 VII 系を使用する。
- 12 土層の色調は、小山正忠・竹原秀雄 2004『新版標準土色帖』（日本色研事業株式会社）による。
- 13 調査記録及び出土遺物は下呂市教育委員会で保管している。

出土遺物の分類基準

- 1 白磁・青磁の分類については、白磁碗皿は森田勉 1982「14 世紀～16 世紀の白磁の型式分類と編年」を、青磁碗は国立歴史民俗博物館 1994『日本出土の貿易陶磁』を、青磁酒会壺は森達也 2000「宋・元代竈泉窯青磁の編年的研究」を用いた。
- 2 土師器皿の分類については、井川祥子 1998「美濃における中世後期の土師器皿」『第 17 回中世土器研究会報告資料』を用いた。
- 3 古瀬戸製品は藤澤良祐 2007「編年表」『愛知県史別編 中世・近世 瀬戸系』を、瀬戸美濃窯製品は藤沢良祐 2002「瀬戸・美濃大窯編年の再検討」『財団法人瀬戸市埋蔵文化財センター第 10 輯』をそれぞれ用い、分類基準とした。

目 次

巻頭図版

序

例言

目次

第1章 調査の経緯	1
第1節 調査に至る経過	1
第2節 調査の方法と経過	2
第2章 遺跡の立地と環境	8
第1節 地理的環境	8
第2節 歴史的環境	11
第3章 発掘調査の成果	14
第1節 基本層序	14
第2節 溝跡（空堀跡）の調査	19
第3節 城跡内部の調査	40
第4章 自然科学分析	136
第1節 桜洞城跡出土遺物放射性炭素年代の測定	136
第2節 桜洞城跡出土炭化種実塊の同定および形状観察	143
第3節 桜洞城跡出土朱書き天目茶碗の元素マッピング分析	148
第5章 総括	150
第1節 桜洞城跡の城郭構造について	150
第2節 不明遺構 001 出土の貿易陶磁について	153
第3節 出土した中世陶磁器・土師器の組成	154
第4節 龍形青銅製品について	156
第5節 戦国時代の飛驒の大名三木氏と桜洞城の発掘調査成果	157

写真図版

抄録

奥付

挿図目次

第1図	試掘確認調査範囲と本発掘調査範囲	5
第2図	飛騨川沿いにおける段丘及び扇状地の平面分布図、飛騨川沿いにおける段丘面の垂直分布図	9
第3図	桜洞城跡周辺の地質図	10
第4図	桜洞城跡周辺の遺跡地図	13
第5図	基本層序	15
第6図	遺跡全体図①	16
第7図	遺跡全体図②	17
第8図	80・81区 東空堀1・2・3・4区 南空堀3区	21
第9図	東空堀2・3区	23
第10図	東空堀4区	25
第11図	東空堀1・2・3・4区土層断面	26
第12図	東空堀出土遺物①	27
第13図	東空堀出土遺物②	28
第14図	東空堀出土遺物③	29
第15図	東空堀出土遺物④	30
第16図	東空堀出土遺物⑤	31
第17図	南空堀3区土層断面	32
第18図	80・81区 東空堀1区 南空堀3区	33
第19図	南空堀出土遺物	35
第20図	溝002	37
第21図	溝002土層断面及び出土遺物①	38
第22図	溝002出土遺物②	39
第23図	80・81区	41
第24図	80・81区掘立柱建物跡	43
第25図	80・81区ピット①	45
第26図	80・81区ピット②	46
第27図	80・81区ピット③	47
第28図	80・81区土坑①	50
第29図	80・81区土坑②	52
第30図	80・81区土坑③	54
第31図	80・81区土坑④及び出土遺物	56
第32図	80・81区包含層出土遺物	57
第33図	72・79区土坑及び出土遺物	58
第34図	18・19・20・21・31・58・59・60・61区	59
第35図	31区	60
第36図	31区溝003及び出土遺物	62
第37図	31区掘立柱建物跡004	63
第38図	31区ピット	64
第39図	31区土坑	64
第40図	13～31区包含層出土遺物	65
第41図	58区	66
第42図	58区溝004	67
第43図	58区溝004周辺出土遺物	68
第44図	58区土坑①	70
第45図	58区土坑②	72
第46図	59区溝005出土遺物	73
第47図	59・60区	74
第48図	59区溝005	75
第49図	59区土坑①	76
第50図	59区土坑②	78
第51図	59区土坑③及び60区土坑	80
第52図	59区土坑及び60区包含層出土遺物	83
第53図	61区	84
第54図	61区溝006	85
第55図	61区溝006出土遺物	86
第56図	61区土坑①	88
第57図	61区土坑②	90
第58図	61区土坑③	92
第59図	61区土坑④	94
第60図	61区土坑⑤	96
第61図	61区土坑出土遺物	98
第62図	61区不明遺構 S X001	99
第63図	61区不明遺構 S X001土層断面	101
第64図	61区不明遺構 S X001出土遺物①	102
第65図	61区不明遺構 S X001出土遺物②	104
第66図	包含層出土遺物	105
第67図	灯明皿内面付着炭化物	138
第68図	曆年較正結果	139
第69図	曆年較正結果	142
第70図	桜洞城址から出土した炭化種実(1)	144
第71図	桜洞城址から出土した炭化種実(2)	145
第72図	プレバートの状況	147
第73図	桜洞城址出土朱書き土器の 元素マッピング分析	149
第74図	3つの古絵図・略測図にみる 桜洞城址の景観変化	151
第75図	桜洞城跡縄張図	152
第76図	桜洞城跡出土の中世陶磁器・士師器、 中世国産陶磁器の組成	155
第77図	飛騨地方の主要城郭位置図	158

表目次

第1表 発掘調査進捗状況表	4	第22表 桜洞城跡出土遺物観察表⑯	124
第2表 周辺の遺跡一覧	12	第23表 桜洞城跡出土遺物観察表⑰	125
第3表 ピット一覧表	44	第24表 桜洞城跡出土遺物観察表⑱	126
第4表 桜洞城跡出土遺物観察表①	106	第25表 桜洞城跡出土遺物観察表⑲	127
第5表 桜洞城跡出土遺物観察表②	107	第26表 桜洞城跡出土遺物観察表⑳	128
第6表 桜洞城跡出土遺物観察表③	108	第27表 桜洞城跡出土遺物観察表㉑	129
第7表 桜洞城跡出土遺物観察表④	109	第28表 桜洞城跡出土遺物観察表㉒	130
第8表 桜洞城跡出土遺物観察表⑤	110	第29表 桜洞城跡出土遺物観察表㉓	131
第9表 桜洞城跡出土遺物観察表⑥	111	第30表 桜洞城跡出土遺物観察表㉔	132
第10表 桜洞城跡出土遺物観察表⑦	112	第31表 桜洞城跡出土遺物観察表㉕	133
第11表 桜洞城跡出土遺物観察表⑧	113	第32表 桜洞城跡出土遺物観察表㉖	134
第12表 桜洞城跡出土遺物観察表⑨	114	第33表 桜洞城跡出土遺物観察表㉗	135
第13表 桜洞城跡出土遺物観察表⑩	115	第34表 測定試料及び処理	136
第14表 桜洞城跡出土遺物観察表⑪	116	第35表 放射性炭素年代測定及び	
第15表 桜洞城跡出土遺物観察表⑫	117	暦年較正の結果	137
第16表 桜洞城跡出土遺物観察表⑬	118	第36表 測定試料及び処理	140
第17表 桜洞城跡出土遺物観察表⑭	119	第37表 放射性炭素年代測定及び	
第18表 桜洞城跡出土遺物観察表⑮	120	暦年較正の結果	141
第19表 桜洞城跡出土遺物観察表⑯	121	第38表 三木氏主要事件年表①	162
第20表 桜洞城跡出土遺物観察表⑰	122	第39表 三木氏主要事件年表②	163
第21表 桜洞城跡出土遺物観察表⑱	123	第40表 三木氏主要事件年表③	164

写真図版目次

巻頭図版

図版 1

東空堀掘削前
東空堀北面断面
東空堀 2区北側断面
東空堀調査完了
東空堀 4区調査完了
東空堀 3区北面断面
東空堀 3区遺物出土状況
南空堀 1区47T付近

図版 2

南空堀 3区調査風景
南空堀 3区北面断面
南空堀 3区西側
南空堀 1区47T断面
溝002北側
溝002南側
溝002周辺全掘削
溝002掘削後

図版 3

溝002内出土状況
80-81区遠景
80-81区据立柱建物跡
80-81区据立柱建物跡拡大
80-81区据立柱建物跡柱穴拡大
S K 001遠景
S K 001半裁
30-31区溝003

図版 4

30-31区溝003出土遺物
58区調査完了
59区溝005
60区調査完了
60区不明遺構001断面
60区不明遺構001断面炭化材
60区不明遺構001遺物出土
60区不明遺構001断面炭化材

図版 5

東空堀出土遺物①

図版 6

東空堀出土遺物②

図版 7

東空堀出土遺物③

図版 8

南空堀出土遺物①

図版 9

80-81区土坑及び包含層出土遺物

72-79区出土遺物

13-31区出土遺物

図版10

58区出土遺物

59区出土遺物

図版11

61区溝・土坑出土遺物、不明遺構001出土遺物①

図版12

61区不明遺構001出土遺物②

図版13

61区不明遺構001出土遺物③

図版14

61区包含層出土遺物

第1章 調査の経緯

第1節 調査に至る経過

下呂市萩原町萩原字古城には、その小字名の由来と考えられる市指定史跡桜洞城跡がある。元来は田畠であったが、農業後継者の不足等から大多数が長らく休耕田になっている状況下にあった。

平成19年3月に下呂市農林部農務課より、新たな田畠の区画で農業生産性の上昇と後継者作りが必要であるため、当地を圃場整備したいとの希望が下呂市教育委員会社会教育課に伝達された。市指定史跡桜洞城跡は旧萩原町時代に指定された史跡であったが、明確な史跡の範囲指定がなされておらず、史跡指定範囲のなき状態から調整が開始されるという異例の状態にあった。

史跡指定地か、それとも埋蔵文化財包蔵地かというグレーゾーンのなかで土地所有者・農務課・社会教育課の3者協議が平成19年度中に7回持たれた。また、市指定史跡内に公共工事が実施されるという状況下を鑑み、岐阜県教育委員会社会教育文化課から平成19年度中に5回の指導を受け、最善策を勘案した。

桜洞城跡は市指定史跡でありかつ周知の埋蔵文化財包蔵地ではあるが、これまでに発掘調査実施の経緯がないため、試掘調査により保護すべき範囲を確定し、また包含層の深度等を点検する必要があった。そのため、平成19年8月の総合計画に試掘調査に必要な費用を盛り込み、平成20年度までに必要な試掘調査を完了させ、保護すべき埋蔵文化財包蔵地の範囲を確定することになった。

最終的に、土地所有者は圃場整備による土地改良を要望したため、その要望を最大限取り入れつつ、文化財保護法上の保護措置を図るという点で3者は一致した。平成19年10月31日、下呂市文化財審議会は市指定史跡桜洞城跡の現状変更を許可。そのため、平成22年度から着手する圃場整備に先立ち、平成19年・20年に試掘調査、平成21年に本発掘調査による記録保存という計画案にて農務課と合意に至った。

平成21年4月7日付けで下呂市長より文化財保護法第94条第1項による「埋蔵文化財発掘の通知について」が岐阜県教育委員会に送付され、圃場整備の土砂切り盛りにより記録保存が必要な約4,000m²の発掘調査を実施することに至った。また、平成21年7月13日付けで、下呂市教育委員会より文化財保護法第99条第1項による「埋蔵文化財発掘調査の報告について」が提出され、基準上本発掘調査を要しない約2,800m²の範囲を遺跡内容確認のために発掘調査することに至った。

第2節 調査の方法と経過

1) 発掘調査の方法と調査の経過

表土の剥ぎ取りは平成 21 年 4 月 27 日から 5 月 1 日、5 月 25 日から 5 月 29 日、7 月 9 日から 7 月 24 日の 3 回に分けて実施した。

作業員による掘削は平成 21 年 5 月 12 日から開始した。本発掘調査面積は約 6,800 m²である。約半年でおよそ 6,800 m²を調査という、かなり厳しい状況にあった。そのため、城跡構造を理解するための最低限の遺構情報の確認と遺物の回収に努めるよう、発掘調査を進展させた。

遺物の取り上げの際の基準になる発掘調査区名は、国土座標軸に沿って設定されるグリッド名ではなく、任意の番号を使用する発掘調査区名とした。

発掘調査は 11 月 27 日に完了し、現場備品等の撤去を 11 月 30 日に終えた。

① 試掘調査

試掘調査は 2 ヶ年にたって実施された。

平成 19 年の 11 月 15 日から 12 月 14 日に実施した試掘調査結果を報告する。桜洞城跡の空堀跡内にて、田畠一筆につき 2 m × 2 m の試掘坑と、最大 2 m × 6 m の試掘坑を合計 29 箇所設置し、土層の堆積状況と遺物包含層の確認を行った（第 1 図）。32T とした部分では、空堀跡の肩を検出するなど、地下の状況を確認することができた。だが、トレーナーを設定した場所の位置、面積が限られていた。試掘調査で 6T・7T・8T・9T・10T・11T・13T・14T とした箇所は、城内であり遺構の検出が充分に推定される場所である。また 8T・13T・14T の一段高いレベルにある田畠は、古絵図から推定するに過去の土塁跡の削平部分に相当する部分であった。平成 19 年度に「遺物包含層なし」と判定されたため、平成 20 年春の本発掘調査前に、本発掘調査後の圃場整備に使われる土砂を搬入する結果となった。

『飛州志』等の江戸時代の郷土書や、角竹喜登氏の『岐阜県史蹟天然記念物調査報告書』の過去の絵図と略図から、おおよその土塁・空堀の位置が割り出すことができるため、それをもとに試掘調査トレーナーの設定や範囲を決定していれば、城内の情報をより多く回収できる見込みが高かった。

以後、本報告書画面中に、「盛土」と示された範囲は、平成 19 年度の試掘調査の結果にて本発掘調査の必要がないと判断された範囲である。そのため、現況測量図もなく空白である。本報告書に情報を見つけることができないため、このような結果に至ったことを明記しておく。

平成 20 年度の試掘調査は、平成 20 年 6 月 25 日から 7 月 25 日の間、平成 20 年 11 月 25 日から 11 月 26 日、平成 21 年 3 月 16 日から 3 月 23 日まで実施した。平成 19 年度の試掘調査の反省を踏まえ、桜洞城跡の東部と南部の空堀跡付近に試掘坑を多めに設定し、また、平成 19 年度に着手していない城内部分の田畠に試掘坑を設定した。

試掘調査の結果、桜洞城跡の東側部分から南側部分にかけて「空堀」が巡ることが判明した。30T・33T・34T・36T・38T・47T では、地山の黄褐色砂質土を掘削した「空堀」の肩の部分を検出し、「空堀」の埋没土中では、戦国期の遺物包含層である黒褐色粘質土を検出した。なお、38T では、地下からの湧水が大量にあり、「空堀」底まで確認することができなかつた。本発掘調査外の一筆ということもあり、土層の確認は可能な範囲に留めた。47T は、現在もなお土塁と「空堀」の原型を留める良好な地点である（図版 1）。

そして、65Tとした田畠の筆が一段高い部分の試掘坑断面からは、表土層（旧耕作土）である第1層の直下に明黄褐色土が第2層に、また地山の土と共通する黄橙色砂質土が第3層に堆積し、第4層に遺物包含層と共通する黒褐色粘質土が堆積することが判明した。そのため、本来、65T付近には土壘があったが、過去の耕地整理の際に土壘の凸部分が削平されたことが推測された。試掘調査で確認された「空堀」跡の内側に、歴然と土壘が存在したことを確認するに至った。土壘の高さは、地山との比高差にして2m以上、最大5m近くまであったと推定する。

また、本発掘調査の対象外になる一筆に設定した37Tでは、表土層である第1層に、既に黄色砂質土が露出しており、その層の厚さは約20cmある。37Tである38T（本発掘調査範囲外一筆）での試掘調査で、38T付近に「空堀」が埋没していることを確認したので、37Tには、「空堀」内側を走る土壘が過去にあったことは想定できていた。現在は、畦道として平滑に均されているが、過去の土壘の痕跡が37T第1層の黄色砂質土に現れていると考えたい。

また、城跡西側部分に相当する48Tでは、現耕作土からおよそ15cm下にて、第4層にぶい黄褐色粘質土を検出した。そこには、明黄褐色土のブロックを含むことがある。第5層下には、黒色粘質土層が確認できた。そのため、これまでの試掘調査結果に照らし合わせ、過去にここに土壘が存在したことを充分に想定させるものであった。

48Tから49Tにかけてわずか10mの間で現地表面のレベルと地山のレベルが双方とも1.5m急激に下がっており、それを自然傾斜に理由を求めることができない。先の48T付近に土壘跡があったことを踏まえれば、その急激なレベル差を、「空堀」の存在と、その後に発生した人為的な削平であるとすれば、合点がいく。

このように、平成20年度の試掘調査により、現田畠の地下に埋没する「空堀」の位置、そして、田畠の造成時に削平はされてしまったものの、過去にあった土壘の位置を城跡北側の65T、城跡南側の37T、城跡西側の48Tで確認できた意義は大きかった。

なお、16T・21T・22Tを設定した一筆については、表土層直下より、大量の礫を検出した。田畠造成時の盛土が堆積し、遺物包含層は検出できなかった。

次に、高山本線が通過する側の、桜洞城跡西側部分の土層堆積状況について報告する。

桜洞城跡の西側部分に相当する高山本線線路の直上付近一帯では、56T・57T・58T・59Tで溝跡を検出した。過去の絵図や略図からは予測できなかった溝跡で、新たな「空堀」の存在を確認することができた。

また、42T・49T・50T・52T・53T・54T・55T・63T・69Tの、現在の田畠の中で最も地盤高が低い一帯は、表土層の下に遺物包含層を全く確認することができなかつた。地権者によれば、一帯は飛驒萩原駅から飛驒小坂駅間の開業に伴う鉄道敷設工事の際に、工事用の土砂確保のため、削平されたといふ。69Tから北側の5筆は、試掘坑空白帶になっている。水田耕作を引き続き継続する旨が土地利用者からあり、最小限の試掘坑設定に留めたためである。いずれの筆も69Tの現耕作面のレベルより低い位置にあったため、69Tと同様の土層堆積状況を想定した。

次に、桜洞城跡の北側部分に相当する一帯の土層堆積状況について報告する。北側は、桜谷川が流れる急峻な谷に面している。25T・27Tでは、現耕作土直下には大量の礫を含む明黄褐色粘質土を検出した。遺物包含層の堆積は確認できなかつた。そのため、本発掘調査の対象外とした。28T・29T

では、現耕作土直下から堆積の薄い黒色粘土層を断面で確認。その後、重機で地山面まで掘り下げた後、遺構精査を実施したが、遺構は認められなかつた。そのため、28T・29Tについても本発掘調査対象外とした。

次に、桜洞城跡の「城外」に相当する、遺跡南側の土層堆積状況について報告する。39T・40T・41T・43T・44T・45T・46Tとも、土層堆積状況は一定していない。過去の田畠造成時に、土壤の切り盛りが激しく行われたことが推定された。過去の田畠造成時に、不要な礫を投棄した廃棄物土坑や、その痕跡を検出したが、良質な遺物包含層を確認することはできなかつた。農閑期に試掘調査を実施した66T・67T・68Tでも良質な遺物包含層を確認することができなかつた。「城外」の一帯は、過去の田畠の造成により、土壤の相当が切り盛りされており、その際に、遺物包含層が破壊されたことが推定された。

以上の試掘調査の結果、本発掘調査の範囲を確定した（第1図）。面積は約6,800m²である。「空堀」が埋没する一帯以外の筆では、過去の田畠の造成の際の土壤の切り盛りにより、多くの遺物包含層が失われている。また、試掘調査を通じて判明したのが、田畠一筆ごとの土層に差異が大きいことである。元來の城跡の痕跡を大幅に改変した田畠造成部分と部分的な改変で田畠を造成した部分の差がそういった土層の差異に反映されたと考える。

②本発掘調査

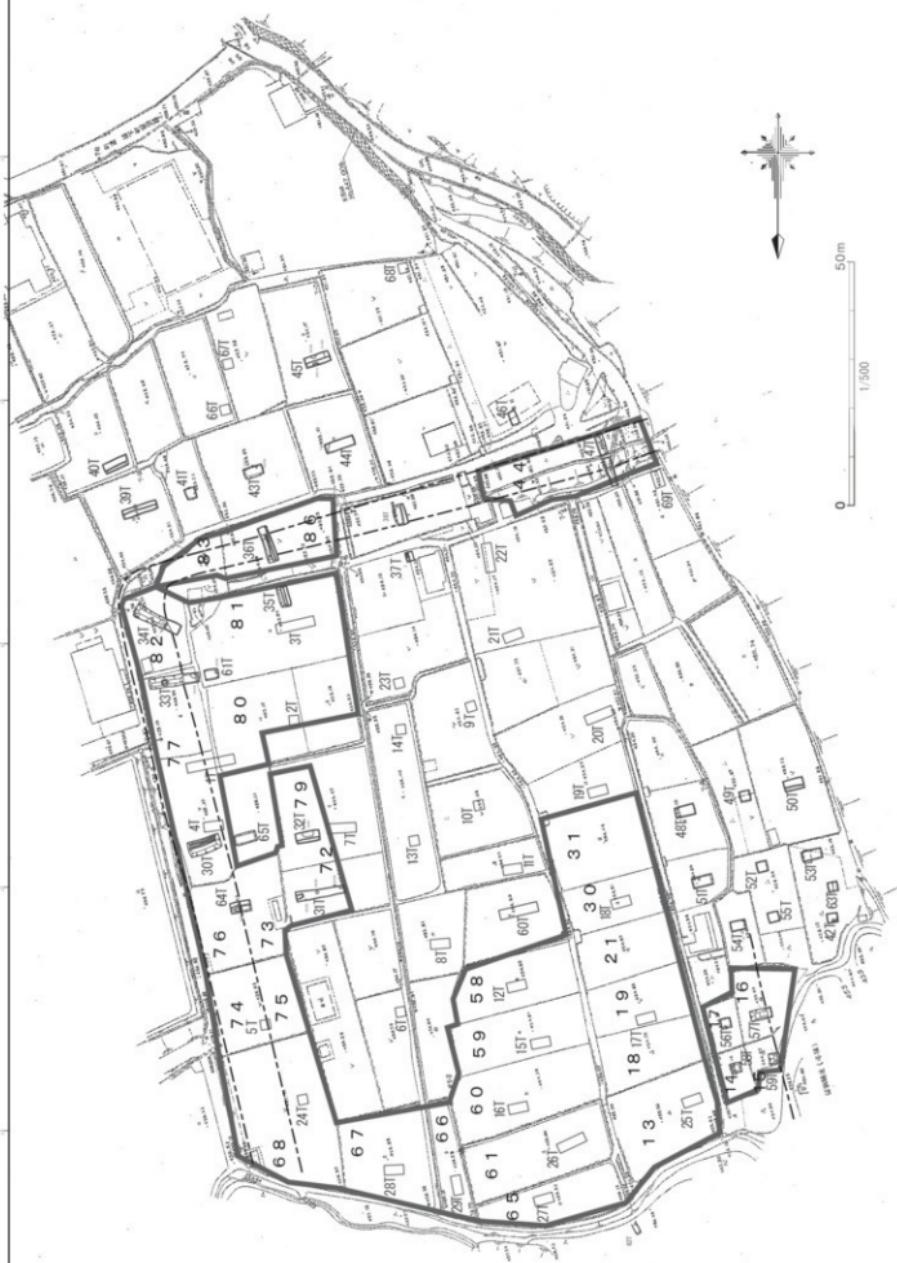
ア) 構跡の調査

本発掘調査の対象になる桜洞城跡内では、昭和初期に実施された当地の開墾の際に、城跡の空堀跡を大部分埋め立てたという事実を土地所有者から聞き取つてゐた。試掘調査により空堀跡の位置と範囲はおおよそ特定できていたが、その範囲の耕作土と床土（鷄床）を剥ぎ取ると、深さ約1mに及ぶ川原石により大部分が構成される埋め立て土石が現れた。その埋め立て土石こそ、昭和初期の開墾の際に空堀を埋めた土石であると特定するに至つた。埋め立て土石の量は膨大で、時に直径1mを超える巨石も含まれ、調査の行く手を阻む要因になつた。埋め立て土石の量はおおよそ1,050m³である。

構跡の掘削は、まず重機で埋め立て土石を除去することから開始した。重機により構跡の肩を破壊する危険性が常に伴つたが、立会の下、慎重に掘削を行い、構跡の肩の部分の破壊や傷みは最小限

第1表 発掘調査進捗状況表

発掘調査区名	発掘調査期間（元号・月・日）	検出された遺構等・備考
東空堀1区	21.5.26～21.6.25	溝001
東空堀2区	21.6.3～21.7.15	溝001
東空堀3区	21.7.15～21.8.19	溝001
東空堀4区	21.8.31～21.11.27	溝001
南空堀1区	21.6.3～21.7.15	溝001
南空堀3区	21.9.17～21.10.22	溝001
72・79番地地区	21.5.12～21.5.22	土坑001
80・81番地地区	21.8.6～21.9.14	掘立柱建物跡001・002・003 土坑
58・59・60・61番地地区	21.8.31～21.11.27	溝 土坑
18・19・21・30・31番地地区	21.7.9～21.8.27	溝003 掘立柱建物跡004 土坑
14・15・16・17番地地区	21.8.31～21.11.27	溝002



第1図 試掘確認調査範囲と本発掘調査範囲（太枠内）※数字は調査区名

に抑えた。

調査区外への埋め立て土石等の搬出は、重機とクローラーダンプにて行ったが、城跡内はもとより、周囲に適切な土石捨て場がなく、難渋を極めた。そのため、溝跡の調査では、排出される土石は、調査を完了した溝跡に捨てるこことし、順次、その手順で溝跡の調査をまず完了させた。その後、城内部分の調査に移行し、城内部分の排出土を、調査を終えた溝跡に投棄した。こうした事情により、城跡の全景写真が撮影できなかつた点は非常に悔やまれる。

また、田畠一筆の境界にある畦道やその他石垣には、コンクリート材や巨大石が使われており、大量の産業廃棄物や搬出物が発生することが予測された。法令・基準的に照らし合せた場合、調査が不要であった部分ではあったが、掘削の上、遺構間の関係を把握するのが望ましい箇所でもある。更に、作業員通路の確保、重機およびクローラーダンプ搬入路の確保があり、最終的に掘削・調査に至ることができなかつた。

イ) 溝跡以外の調査

表土層である耕土と床土を重機により鋤き取り、表土直下のレベルで遺構検出のための精査を実施した。遺構検出面で検出された遺構跡は、移植ゴテ等を使い慎重に掘削を実施。また必要に応じて、土層断面図の作成と土層の確認を行つた。田畠一筆の境にある畦道は、先と同様の事情により除去が不可能であった箇所がある。調査区名については、番地をそのまま調査区名に採用した。

第1表に本発掘調査の進捗状況を示す。

③出土品整理及び報告書刊行

出土品整理は、発掘調査完了後の平成21年12月1日より（株）イビソク、（株）アキジオに委託して洗浄・記名・接合を開始した。出土陶磁器、土師器、金属器の実測委託は平成22年12月16日から平成24年3月25日の間に有限会社毛野考古学研究所に委託し、実施した。平成22年12月26日から平成23年3月31日、及び平成23年12月1日から平成24年10月31日に遺構図面の点検、発掘調査区の事実記載等の原稿執筆を行う。

なお、発掘調査の遺構図や土層断面図、及び出土遺物の実測は、（株）イビソク、（有）毛野考古学研究所に委託し、成果品はadobe社illustrator型式にて保存した。遺物の属性表はmicrosoft社Excelにて作成し、adobe社InDesignによるDTP編集を（有）毛野考古学研究所に委託した。委託業務を除くデジタルデータの作成および全データの編集指示は馬場が行つた。

2) 調査の体制

平成19年度

- ・試掘調査期間 平成19年12月12日～平成19年12月20日
- ・試掘調査面積 約200 m²
- ・調査体制
 - 発掘調査担当 細江真理（社会教育課主事）
 - 事務局 田口正邦（教育長）、青木克昭（教育部長）
 - 熊崎達也（社会教育課長）、中川ひとみ（同課長補佐）
 - 上野晃（同主任）

平成20年度

- ・試掘確認調査期間 平成20年6月25日～7月25日

平成 20 年 11 月 25 日～11 月 26 日

平成 21 年 3 月 16 日～3 月 23 日

- ・試掘確認調査面積 約 735 m²
 - ・調査体制 発掘調査担当 馬場伸一郎（社会教育課・主任学芸員）
事務局 長谷川藤三（教育長）、杉山裕（教育部長）
熊崎達也（社会教育課長）、細江和子（同課長補佐）
上野晃（同主任）、細江真理（同主事）
- 平成 21 年度
- ・本発掘調査期間 平成 21 年 4 月 27 日～平成 21 年 11 月 30 日
 - ・本発掘調査面積 約 6800 m²
 - ・調査体制 発掘調査担当 馬場伸一郎（社会教育課・主任学芸員）
事務局 長谷川藤三（教育長）、中川好美（社会教育課長）
細江和子（同課長補佐）、上野晃（同主任）、細江真理（同主任）
- 平成 22 年度
- ・出土品整理及び報告書作成期間 平成 22 年 12 月 16 日～平成 23 年 3 月 31 日
 - ・整理体制 整理調査担当 馬場伸一郎（社会教育課・主査学芸員）
事務局 長谷川藤三（教育長）、池戸昇（教育部長）
中川好美（社会教育課長）、船坂勉（同課長補佐）
細江真理（同主任）
- 平成 23 年度
- ・出土品整理及び報告書作成期間 平成 23 年 12 月 1 日～平成 24 年 1 月 31 日
 - ・整理体制 整理調査担当 馬場伸一郎（社会教育課・主査学芸員）
事務局 長谷川藤三（教育長）、池戸昇（教育部長）
山中昌弘（社会教育課長）、熊崎浩（同主任主査）
細江真理（同主任）
- 平成 24 年度
- ・出土品整理及び報告書作成期間 平成 24 年 5 月 7 日～平成 24 年 10 月 31 日
 - ・整理体制 整理調査担当 馬場伸一郎（社会教育課・主査学芸員）
事務局 長谷川藤三（教育長）、今井能和（教育部長）
山中昌弘（社会教育課長）、熊崎浩（同主任主査）
松井智之（同主任主査）

第2章 遺跡の立地と環境

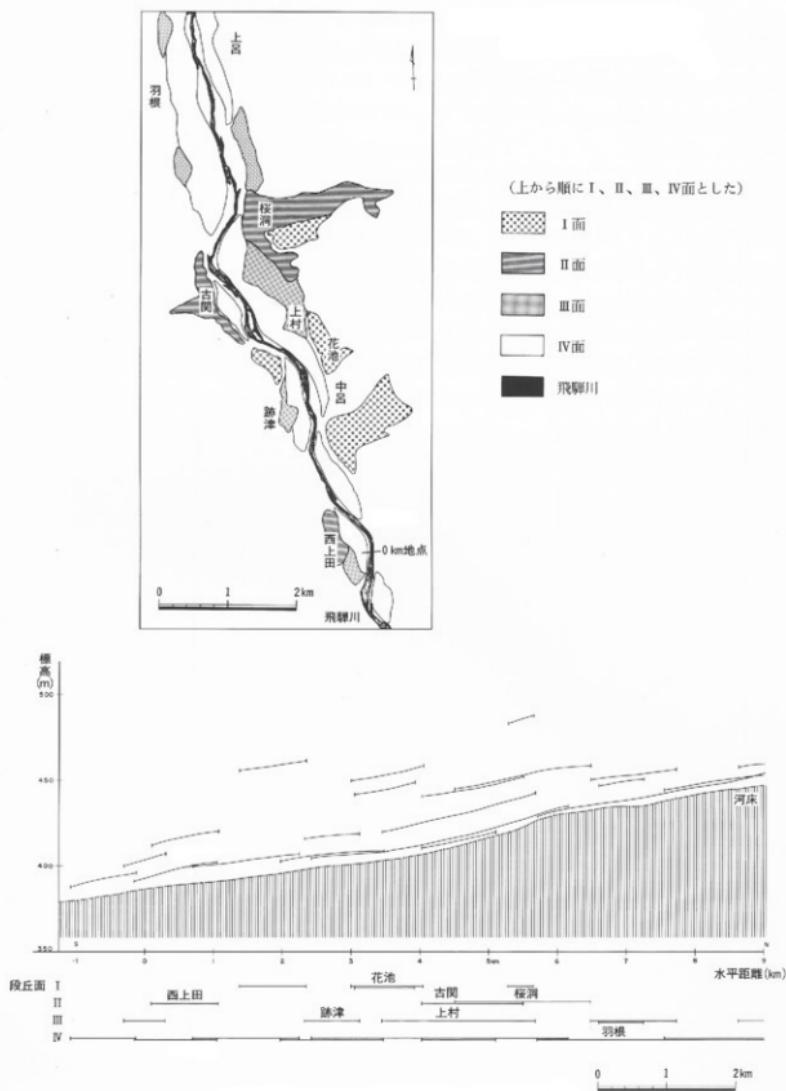
第1節 地理的環境

桜洞城跡は、飛騨川が形成した河岸段丘上と扇状地堆積物上に位置する。桜洞城跡がある段丘の西側を飛騨川が流れしており、益田橋河川付近の標高が416m、一段目の段丘面である下呂市萩原庄舎付近で標高419.9mである。桜洞城跡の段丘は一段目の段丘面から見上げて目視することができる。桜洞城跡の標高は、城跡南東側で455.3m、城跡南側で452.9m、城跡北側で456.5mである。現在の桜洞城跡からの視界には、飛騨川右岸一帯の風景と、馬瀬地域との連絡通路に相当する日和田峠方面を望むことができる。

さて、桜洞城跡周辺の地質については『沖田遺跡』(岐阜県文化財保護センター 1998) や『萩原の風土と生きもの』(岩田編 1984) に詳しい。それによれば、桜洞城跡は飛騨川や扇状地堆積物が形成した4つの段丘面のうち、II面の段丘・扇状地面に位置する(第2図)。II面の形成過程については、桜洞城跡北側の断崖面観察から推定されている。第1段階に飛騨川の河川堆積作用が中心になって堆積が開始され、第二段階に桜谷(桜谷川)の浸食・運搬・堆積作用が盛んになる。桜谷扇状地の形成である。その堆積は飛騨川の河床にまで達しており、そのため飛騨川は西方へ流路を変更させた。第三段階には阿寺断層との関連が深い萩原地域の断層活動により断崖が発生した。現在のかぶた公園の下に確認できる断崖は、その断層活動により形成された断崖であり、ここで桜洞は高位の段丘(I面)と、桜洞城跡の位置する低位の段丘(II面)に分割されることになる。第4段階以降は飛騨川の浸食活動が活発になり、現在の益田清風高等学校面(III面)が形成され、更なる浸食活動で萩原小学校面(IV面)が形成された(岩田編 1984)。

試掘確認調査及び本発掘調査で明らかになったが、桜洞城跡内には現地表面から約0.5mから1m下に段丘面を構成する砂礫層が堆積する。礫は亜円礫が主であるが、円礫も含まれている。城跡の空堀の最下層では、礫が4割程度含むことが常であり、拳大・人頭大が多数ではあるが、稀に人身大を含むことを確認した。礫の大半は、中生代白亜紀後期(約9000万年～6500万年前)に噴出した濃飛流紋岩であるが、若干、花崗閃緑斑岩が含まれる。周辺の地質(第3図)を反映した構成である。

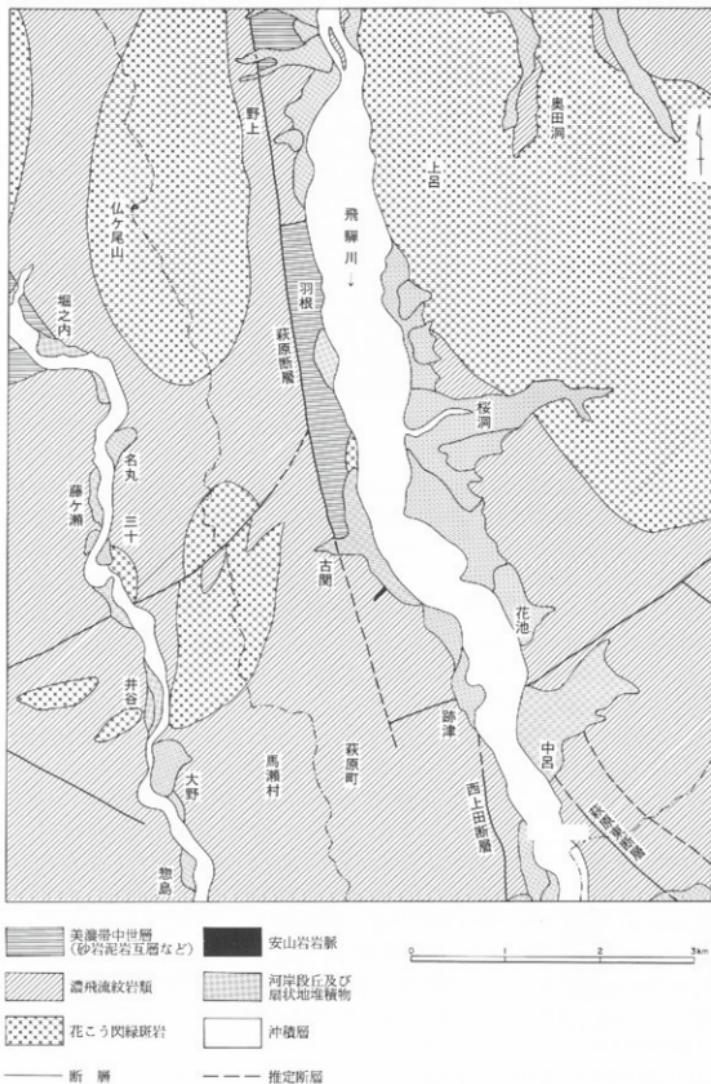
桜洞城跡の東方には標高1646mの御前山を控え、飛騨川へ向かって尾根が派生し、また尾根の間に小河川が流れ、谷が形成される。そうした自然地形にある桜洞城跡は、北を桜谷(桜谷川)に、西を飛騨川に、南を段丘の断崖に区切られる天然の要害であった。



・段丘面の高度は主に地形図から読みとった。・段丘面I～IVは第5図と同じである。
・水平距離の0kmは上図の0km地点と記入したところ(5万分の1の地形図「萩原」「下呂」の境界である)

第2図 飛騨川沿いにおける段丘及び扇状地の平面分布図(上)、飛騨川沿いにおける段丘面の垂直分布図(下)

(財團法人岐阜県文化財保護センター 1998『沖田道跡』を一部改変)



第3図 桜洞城跡周辺の地質図

(財団法人岐阜県文化財保護センター 1998『沖田道路』を一部改変)

第2節 歴史的環境

1) 周囲の遺跡について

下呂市萩原町内には現在 55 箇所の埋蔵文化財包蔵地が確認されている（第4図）。

旧石器時代の遺跡はこれまで認められず、散布地とされる遺跡は縄文時代の遺跡であることが多い。桜洞城跡の周囲で発掘調査された遺跡には、桜洞遺跡（縄文・弥生）と桜洞神田遺跡（縄文）、向洞遺跡（縄文・弥生・古墳）がある。桜洞遺跡と桜洞神田遺跡は、同一遺跡内での別地点調査であり、本来同一遺跡名であってもよい。桜洞遺跡と桜洞神田遺跡では、縄文中期初頭の鷹島式系土器を始め、中富・咲畠式、曾利式系、上山田式系、加曾利E式系の土器がある。飛騨北部独特の深鉢もあるが、型式名が定かではない。後期では、飛騨北部から南部に分布する宮田式が一定量確認できるほか、堀之内式が出土する。弥生時代では、前期後半から中期初頭に属する条痕文系土器が数片出土したが、その量は極めて少ない。

下呂市萩原町西上田の沖田遺跡は、縄文早期末の他、縄文中期を主とする集落遺跡であり、北陸系・近畿系・信州系土器が出土したこととして知られる。

その他、下呂市萩原町内の代表的な縄文時代遺跡に、四美の横倉遺跡（縄文後期・晩期）、羽根の的場遺跡（縄文早期・前期・中期）がある。的場遺跡では縄文時代の堅穴住居跡 20軒、7世紀代の堅穴住居跡 2軒を検出した。縄文時代の堅穴住居跡は前期後半段階のものが多い。また、紅村弘編『東海先史文化の諸段階（資料編 II）』（紅村 1978）には、宮田地区の宮田遺跡（縄文後期）、中呂地区的禪昌寺遺跡（縄文後期）もあり、萩原町内の飛騨川左岸・右岸の河岸段丘上には多くの縄文時代遺跡が存在することが確認されている。

さて、桜洞城跡と関わりのある周辺の中世城郭では、桜谷城、為坪城、橋尾山城、中根城跡（大ヶ洞城跡）、萩原諏訪城跡がある。萩原諏訪城跡を除く 4 つの城郭はいずれも山城で、一部は 16 世紀代に機能していたことが推定されている。また、萩原諏訪城については、元和元（1615）年の一国一城令により廃城になるが、良好な外輪形虎口を有する城郭であり、当地を金森氏が統治して以降に築城された城郭であると指摘されている（佐伯 2005）。

2) 桜洞城跡の歴史

下呂市萩原町萩原字古城にある桜洞城。飛騨川が形成した狭隘な谷のなかで、最も幅の広い平坦地をもつ一帯内に城はある。標高は約 450 メートル、扇状地の扇端部に位置する。城内の規模は最大長約 147 メートル、最大幅約 90 メートルである。

桜洞城は過去から現在までの間に大きく改変を受け、今は城の一角に土壘と堀の一部を残すのみである。草木の生い茂るこの城址にいったいどのような歴史があったのか、簡単に振り返ってみたい。

江戸時代享保年間に編纂された歴史書『飛州志』によれば、桜洞城は戦国大名・三木氏の居城である。そして戦国時代初期に相当する永正年中（1504～1521）に桜洞城は築城されたという。

しかし、三木氏の出自に関する史料は非常に乏しい。飛騨の地に三木氏が登場する一節は、『飛州志』の「三木氏略系」に記載された藤原正頼という人物に始まる。その人物の記述は以下の通りである。

「三木氏。忠右衛門。竹原に住す。応永年中飛騨国司征伐の時、追手の大将京極近江守高員（数）、忠

賞に依りて竹原郷を領す。故に家臣正頼当国に來たりてこれを守る（岡村編 1909『飛州志』）。

記述にある「飛驒国司征伐」とは応永18(1411)年の応水飛驒の乱を指す。飛驒国司姉小路伊綱らは、飛驒守護の京極氏らの連合軍に敗れる。三木氏はその合戦後に京極氏代官として益田竹原の任地に行くことになった。三木氏が飛驒に登場した一幕である。

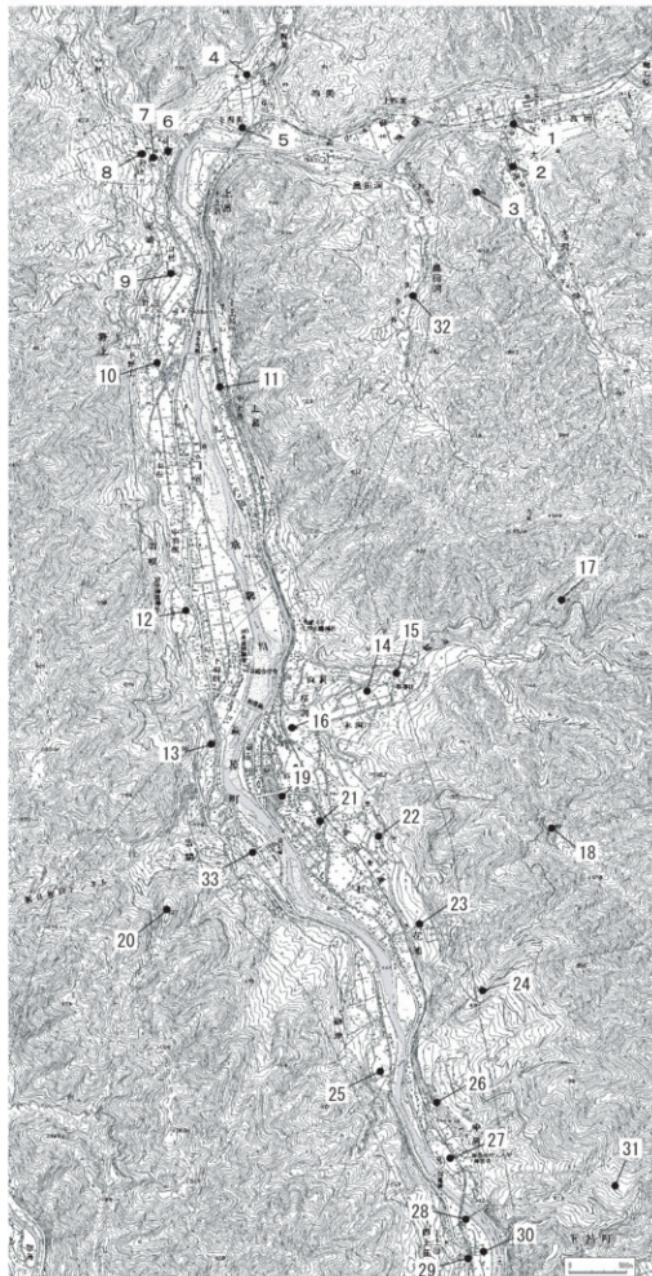
『飛州志』によれば三木氏の系譜は①正頼・②久頼・③重頼・④直頼・⑤良頼（嗣頼）・⑥自綱・⑦秀綱とたどれる。古文書に登場する人物名を年代順に配列すると重頼以降、秀綱まで『飛州志』の系譜と矛盾がない。

では、「桜洞城」という名称の登場はいつか。中世文書に「桜洞城」の名は認められない。そのため『飛州志』が最古の文献になる。それによれば、桜洞城の築城は三木氏4代目の直頼の代である。直頼が永正年中(1504～1520年)に桜洞城を築城して後、十数年後には飛驒南部の武力併合に留まらず、高山・古川盆地を自らの勢力下に置いた。その後、直頼が天文23(1554)年に没した後、良頼の代まで桜洞城は三木氏の本拠地であり、自綱の代に高山の松倉城に本拠地が移る。それは天正7(1579)年頃のことである。しかし、高山盆地の厳しい寒さに困り、冬季の間に自綱は桜洞城に戻り政務を行った。桜洞城が「冬城」と言われる所以はここにある。桜洞城は天正13(1585)年、豊臣秀吉の命を受けた金森長近の子、可重の攻撃を受け落城。三木氏が飛驒の歴史の舞台から姿を消すと同時に桜洞城は終焉を迎える。

第2表 周辺の遺跡一覧

番号	遺跡名	所在地
1	宮田遺跡	萩原
2	フギリ遺跡	萩原
3	中根城跡（大ヶ洞城跡）	萩原
4	西高遺跡	萩原
5	横倉遺跡	萩原
6	四美辻遺跡	萩原
7	四美辻平遺跡	萩原
8	杉谷平遺跡	萩原
9	森畠遺跡	萩原
10	八幡平遺跡	萩原
11	筒井平遺跡	萩原
12	的場遺跡	萩原
13	下垣内田代遺跡	萩原
14	桜洞遺跡	萩原
15	向洞遺跡	萩原
16	桜洞城跡	萩原
17	桜谷城跡	萩原

番号	遺跡名	所在地
18	為坪城跡	萩原
19	萩原諏訪城跡	萩原
20	橋尾山城跡	萩原
21	石原遺跡	萩原
22	竹ノ上遺跡	萩原
23	花池遺跡	萩原
24	禪昌寺平遺跡	萩原
25	上垣内遺跡	萩原
26	前田遺跡	萩原
27	禪昌寺遺跡	萩原
28	沖田遺跡	萩原
29	久末遺跡	萩原
30	大木ノ下遺跡	萩原
31	新開遺跡	下呂
32	長洞遺跡	萩原
33	宮垣内遺跡	萩原



第4図
桜洞城跡周辺の
遺跡地図

第3章 発掘調査の成果

第1節 基本層序

1) 溝の基本層序

先に触れた通り、空堀跡内は昭和前半期の埋め立て土石に大部分が覆われている。空堀跡内の土層堆積状況が良好に確認できるのは、東空堀2区北面土層である（第5図）。それを基に、上層から順に層序を説明する。

現水田の耕作土である1a層、現水田の動床に該当し、鉄分の固まりを含む1b層があり、1a層と1b層を本報告書では「表土」と呼ぶ。次に、2a層と2b層は当地内を昭和前半期に大々的に埋め立て、田畑に替えた際の客土である。2a層と2b層の大きな違いは含有される河原石の量の比率である。2b層は人頭大の礫を含む河原石を50%以上含む層である。2a層の色調は暗褐色土へ黄褐色土と場所により若干違いがあるが、含有される河原石の量は空堀跡地点のいずれも10%程度と共通する。

第3層は黒褐色粘質土層で、粘性・しまりに富む。直径10cmから20cm程度の礫を1%程度とわずかに含む。上層では、戦国時代と江戸時代の遺物が混在し、下層では戦国時代の遺物にはほぼ統一される傾向にある。

第4層は黒色粘質土層である。粘性・しまりに富み、直径10cmから20cm程度の礫を1%とわずかに含む。戦国時代の遺物包含層である。

第5層は溝の肩に堆積した層であり、層に含まれる礫のサイズと含有率で、5a層と5b層に細分した。5a層は黒色粘質土で、直径5cmから10cm程度の礫を約20%含む。5b層も同じく黒色粘質土で、直径5cmから20cm程度の礫を約10%含む。

第6層は地山層である。灰黄色砂質土で、粘性・しまりはない。地山層には、直径2cm程度の小さな礫から、人頭大、さらには人身大といった巨大な礫まで多種のサイズの礫を含有する。礫は稜線が磨滅した亜円礫であり、それは桜洞城跡が立地する河岸段丘の性質を良く反映している。

2) 溝以外の基本層序

城跡東側の基本層序については72・79番地地区内の31Tの土層を基準とする（第5図）。

第1層は、粘性もしまりもない黒褐色土で表土の第1a層と、水田動床に相当する第1b層の二つに細分できる。

第2層は黒褐色粘質土層で、戦国期と江戸期の遺物を含む遺物包含層である。第2層の下層に至ると、戦国期の遺物に限られる。ただし、色調・混入物で分層できるまでには至らなかった。

第3層は明黄褐色粘質土で、地山である。鉄分の塊を若干含み、また直径5cmから15cm程度の礫を少量含む。

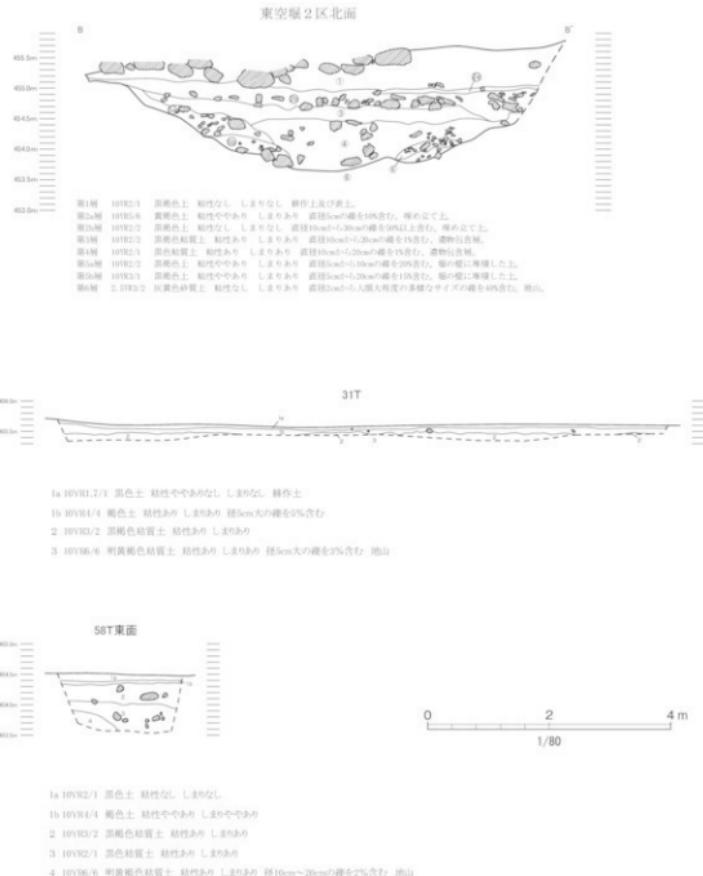
城跡西側では、同東側と基本層序が若干異なる。溝002付近の14番地地区内58Tの土層を基準とする（第5図）。

第1層と第2層は城跡東側と共に通する。

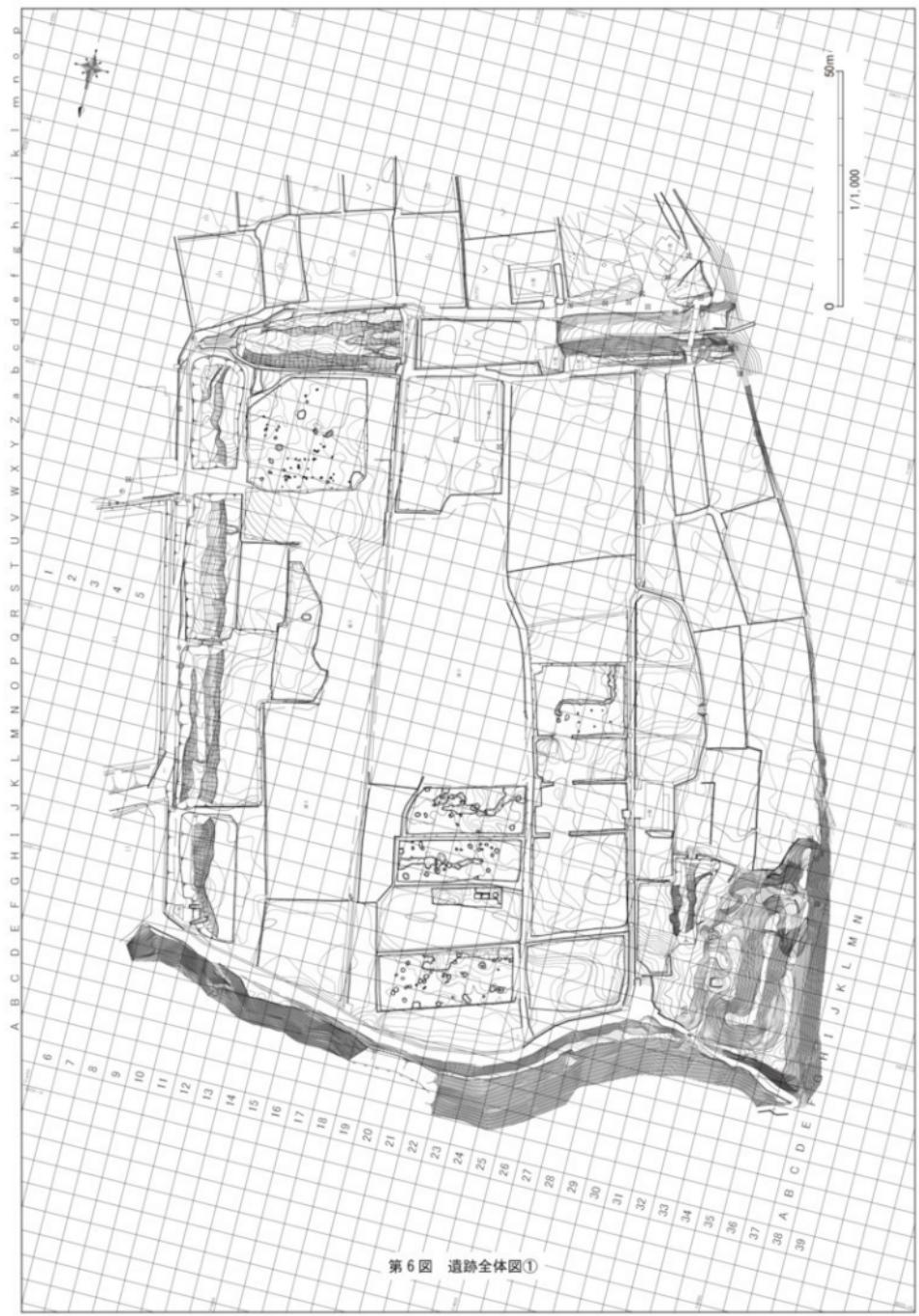
第3層は黒色粘質土層である。粘性・しまりに富む土層であり、同層からの出土品は戦国期の遺物

にはほぼ限定できる。

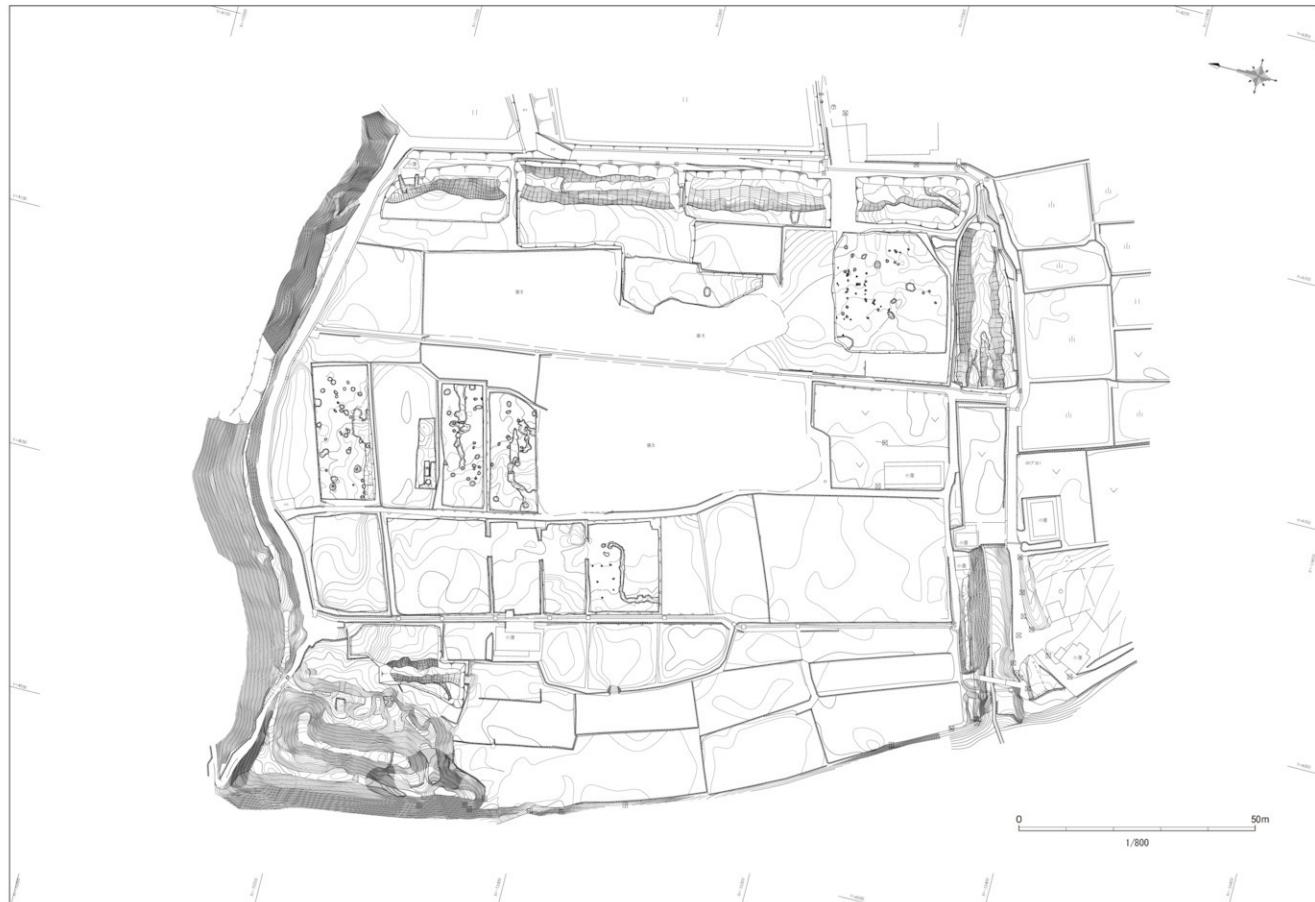
第4層は明黄褐色粘質土で、地山である。城跡東側第3層と共通する。



第5図 基本層序



第6図 遺跡全体図①



第7図 遺跡全体図②

第2節 溝跡（空堀跡）の調査

1) 溝〇〇1（東空堀）と遺物

位置) X座標 13240 ~ 13350 付近、Y座標 4140 ~ 4150 付近にて検出した。

検出状況) 空堀内部の遺物包含層は第3層下部にて検出。空堀の掘り込み口の検出は第1層下部にて精査の上、検出した。

形状と規模) 長さ約 122m、調査区を基準とした幅は最大 7.7mm、最少 3.6m。「箱堀」と呼ばれる堀の形状に近い。検出された溝のなかでは城址の最も外周を巡る。溝 001 は城址の北東から南東を経て南西まで連なる。いわゆる「空堀」に該当する。一連の「空堀」をくの字に折れ曲がる城址隅を境に「東空堀」と「南空堀」に別称する。

「東空堀」と呼ぶ城址の北東から南東にかけて延びる長さ約 122m の溝 001 では、溝の西壁を検出できたものの、東壁は発掘調査区外のため検出はできなかった。溝幅に広狭があり、発掘調査区外に広がる壁の存在を起点に、推定される溝の最大幅の位置は U7 から U8 グリッド付近で約 8.8m、最少幅は b6 グリッド付近で約 5.4m である。溝の断面形は隅丸の台形であり、溝の掘り込み口から緩やかなラインを引き溝の底へ達する。「箱堀」と呼ばれる堀の形状に近く、薬研堀と呼ばれる法面部分に急な角度をもつ断面は認められない。

土層堆積状況) X座標 13340 付近 A-A' ラインの土層堆積状況は、第1a 層から第1b 層にかけて耕作土・水田鋤床が堆積。第2a 層から第2b 層にかけて昭和初期の埋め立て土が堆積する。第3層の黒褐色粘質土層は無遺物層で、溝の肩の部分に堆積した土層である。第4層から第5層が遺物包含層であり、第4層上部は戦国時代から江戸時代の陶磁器を含み、第4層下部から第5層は戦国時代の陶磁器のみを含む。第4層は黒褐色粘質土層、第5層は黒色粘質土層で、第4層・第5層とも厚さは約 40cm 程度である。地山は灰黄色砂質土である。粘性はなく、少礫から人頭大の礫まで様々なサイズの亜角礫を多く含む。

X座標 13300 付近 B-B' ラインの土層堆積状況は、第1層が耕作土など表土、第2a 層から第2b 層が埋め立て土石、第3層の黒褐色粘質土は遺物包含層で、上層には戦国時代から江戸時代の陶磁器、下層は戦国時代の陶磁器を含む。第4層の黒色粘質土層からは戦国時代の陶磁器に限られる。第5a 層・第5b 層は無遺物層で、空堀の西壁に堆積した黒褐色土で、粘性は若干ある。礫を 15% から 20% 含む。土壌の一部崩落土であろうか。第6層は地山と同質の灰黄色砂質土で粘性はなく、直径 2cm 程度の小礫から人頭大の礫まで様々なサイズの亜角礫を多く含む。地山は、粘性のない灰黄色砂質土で、小礫から人頭大の礫まで多様な亜角礫を大量に含む。

X座標 13265 付近 C-C' ラインの土層堆積状況は、第1層が旧耕作土の表土、第2層が埋め立て土石層で、色調や土石の混合度合により、4 つに細分できる。第3層は溝の肩に堆積した土層、第4層は黒褐色粘質土層で、上部は戦国期と江戸期の遺物が混在し、下部は戦国期の遺物に限定できる。第5層は黒色粘質土層で、戦国期の遺物を出土する。地山は灰黄色砂質土で、大小の亜角礫を大量に含む。

X座標 13245 付近 D-D' ラインの土層堆積状況は、調査区の東側壁が迫り、崩落の危険があつたため、部分的な確認に留まった。表土部分および埋め立て土石層を重機で掘削した後、途中から土層断面用セクションを設定した。第1層が黒褐色粘質土で、10% 程度の小礫を含む。上部からは戦国期と江戸

期の遺物が混在して出土。下部は戦国期の遺物に限られた。第2層は黒褐色粘質土で、戦国期の遺物が出土。疊をほとんど含まない層である。第3層は黒褐色土層で、戦国期の遺物が出土した。小疊を20%含む層である。

出土遺物) 出土層位別に報告する。第4層からは、土師器皿(001～003)、土師器内耳鍋破片(004)、灰釉丸皿(005・006)、灰釉端反皿(007～009)、灰釉棱皿(010)、灰釉四耳壺破片(011・012)、天目茶碗(013～018)、擂鉢(019～021)、青磁碗破片(022)、小壺(023)、甕(024)、徳利(025)、硯(026)、銅錢(027)等の多数の遺物が出土した。小形の001は井川分類B2類、002は井川分類C類、大形の003は井川分類B2類に該当する。013天目茶碗の底部には、「昌十二」という朱書き文字が認められた。詳細は第4章自然科学分析にて説明する。009灰釉丸皿内面には、溶解した銅錢が数枚重なった状態で認められる。

第5層からは、土師器皿(028～036)、灰釉端反皿(037)、天目茶碗(038)、擂鉢(039)等の多数の遺物が出土した。028は桜洞城跡出土土師器皿の中で数少ない底部に回転糸切り痕のあるロクロ整成形の土師器皿である。内面にはところどころに油煙が付着する。029～036・040は井川分類B2類に該当しよう。

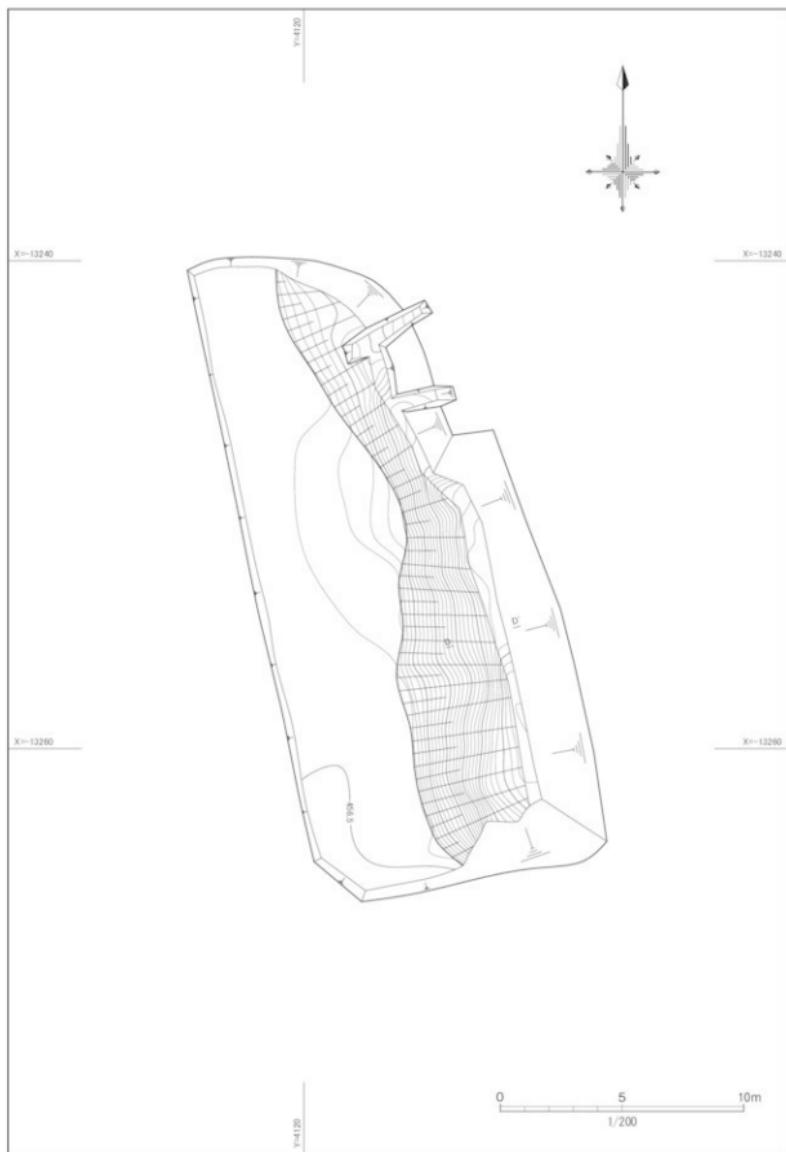
また、出土層位は不明だが、土師器皿(040)、擂鉢(041)が出土した。

出土陶器の時期は、山茶碗第5型式(042)、古瀬戸後期IV期新段階をより古い時期の資料とし、大窯1期から2期が時期幅の中心である。大窯3期の資料も散見されるが、その比率は低い。

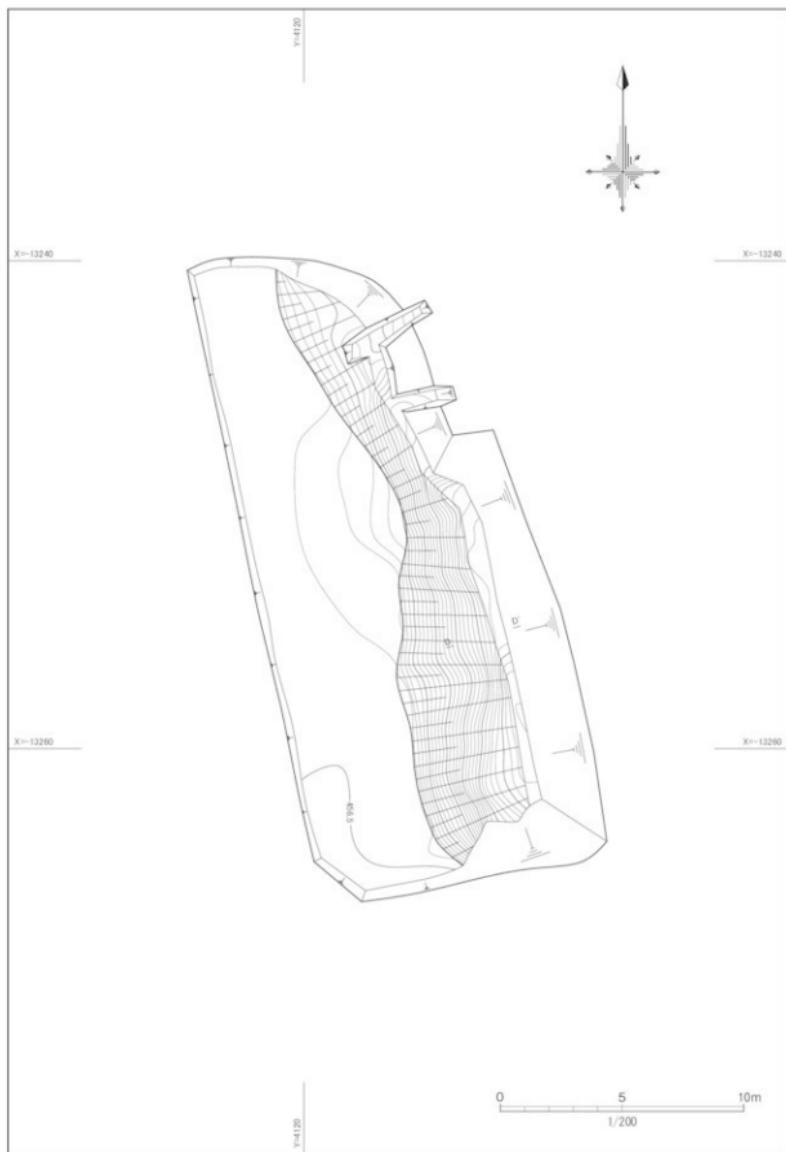


第8図 80・81区 東空堀1・2・3・4区 南空堀3区

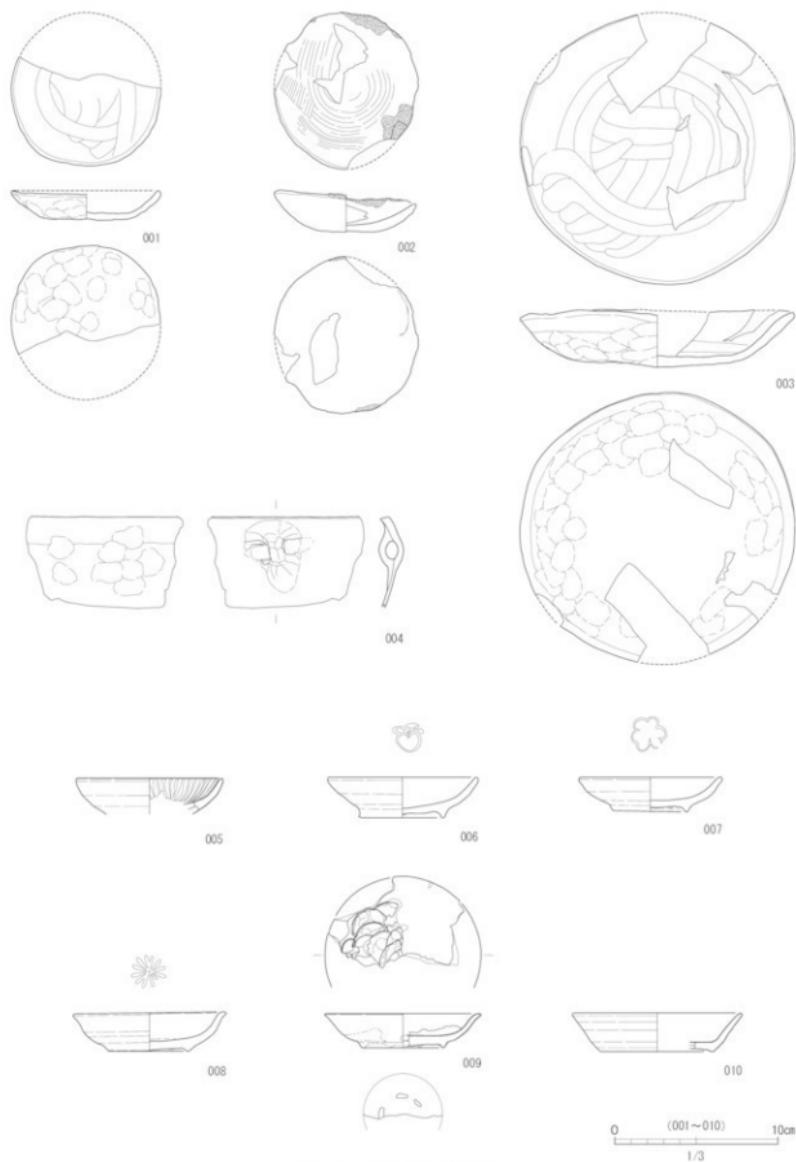
第9図 東空堀2・3区



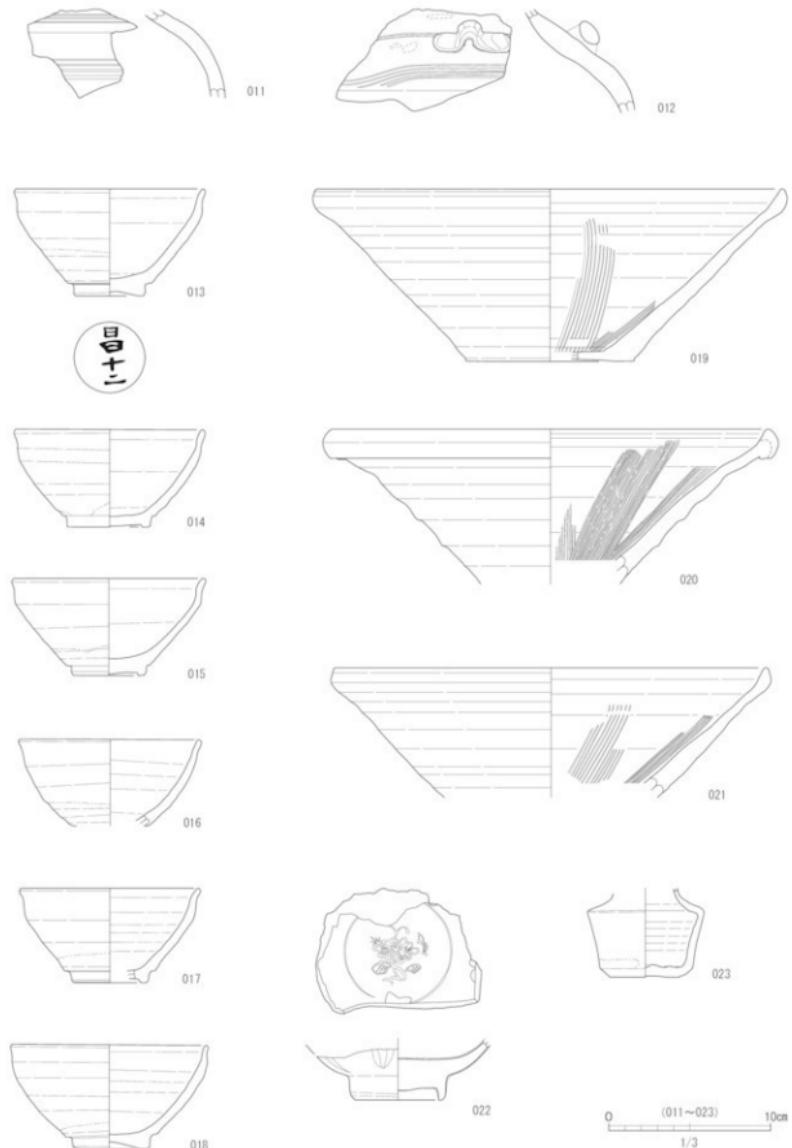
第10図 東空艇4区



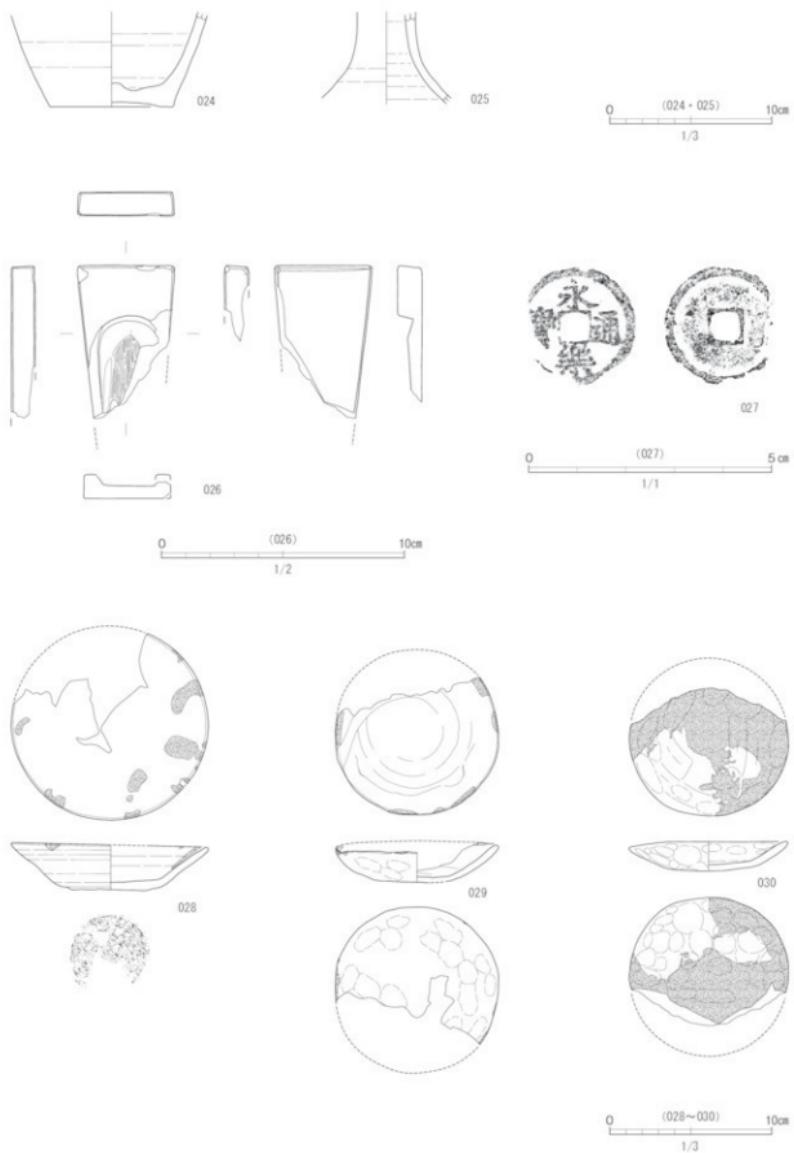
第10図 東空艇4区



第12図 東空堀出土遺物①



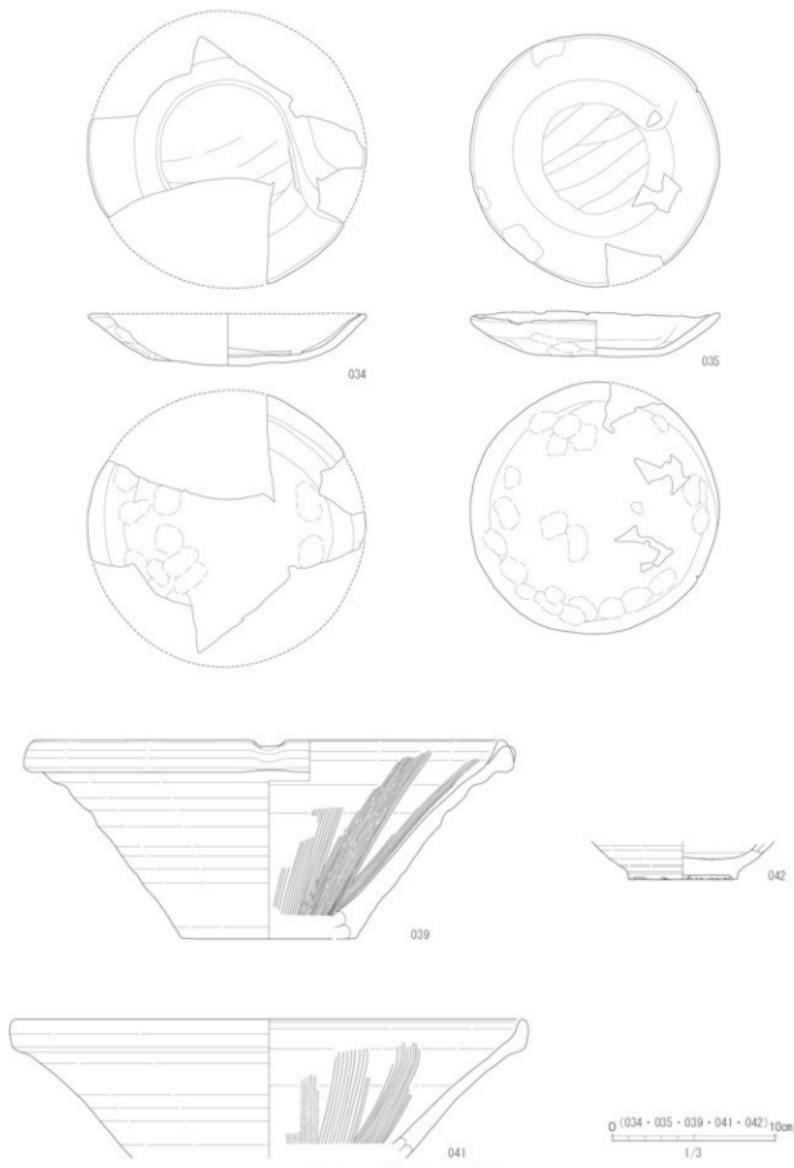
第13図 東空堀出土遺物②



第14図 東空堀出土遺物③



第15図 東空堀出土遺物④



第16図 東空堀出土遺物⑤

2) 溝〇〇1(南空堀)と遺物

位置 X座標 13660～13680、Y座標 4120～4140 付近にて検出した。

検出状況 空堀内部の遺物包含層は第3層下部にて検出。空堀の掘り込み口の検出は第1層下部にて精査の上、検出した。

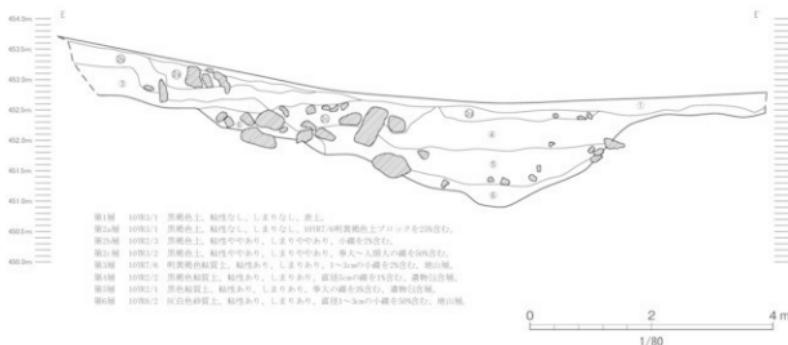
形状と規模 「南空堀」とした城跡南東隅から南西隅に連なる溝は、推定長約 109m である。今回の調査では、そのうち南東隅部分約 35m 幅を発掘した。南西隅は昭和 32 年から昭和 33 年にかけて施工された高木本線敷設工事に伴う土砂の切り盛りで消失する。城が機能していた当時の空堀の長さはおそらく 120m から 130m 程度であったと推定する。

東空堀と同様に溝には広狭があり、その調査区内を基準とした場合の最大幅の位置は Y 座標 4120 付近で、約 9.2m、最小幅は Y 座標 4140 付近で、約 7.0m である。溝の断面形は隅丸台形の「箱堀」と呼ばれるものに近い。

土層堆積状況 Y 座標 4120 付近の E-E' では第1層が旧耕作土に該当する表土、第2層は 2a から 2c 層の3つに細分できるが、埋め立て土石層である点で共通する。そこでは人頭大程度の巨大石を大量に含む。第3層は黒褐色土で、直径 10cm 程度の礫を 10% 含む層で、溝の肩に堆積した土である。第4層は黒褐色粘質土で、第4層上部には戦国時代の遺物に混ざり、江戸時代の遺物が出土する。第4層下部から第5層中は戦国時代の遺物包含層である。第5層は黒色粘質土層である。第6層は地山の灰黄色砂質土である。

出土遺物) 第4層から灰釉端反皿(043)、青磁碗底部(044)が、第5層から灰釉端反皿(045)が出土した。また、第4層から第5層にかけて土師器皿(046)、灰釉丸皿(047)、常滑窯の甕(048)が出土した。

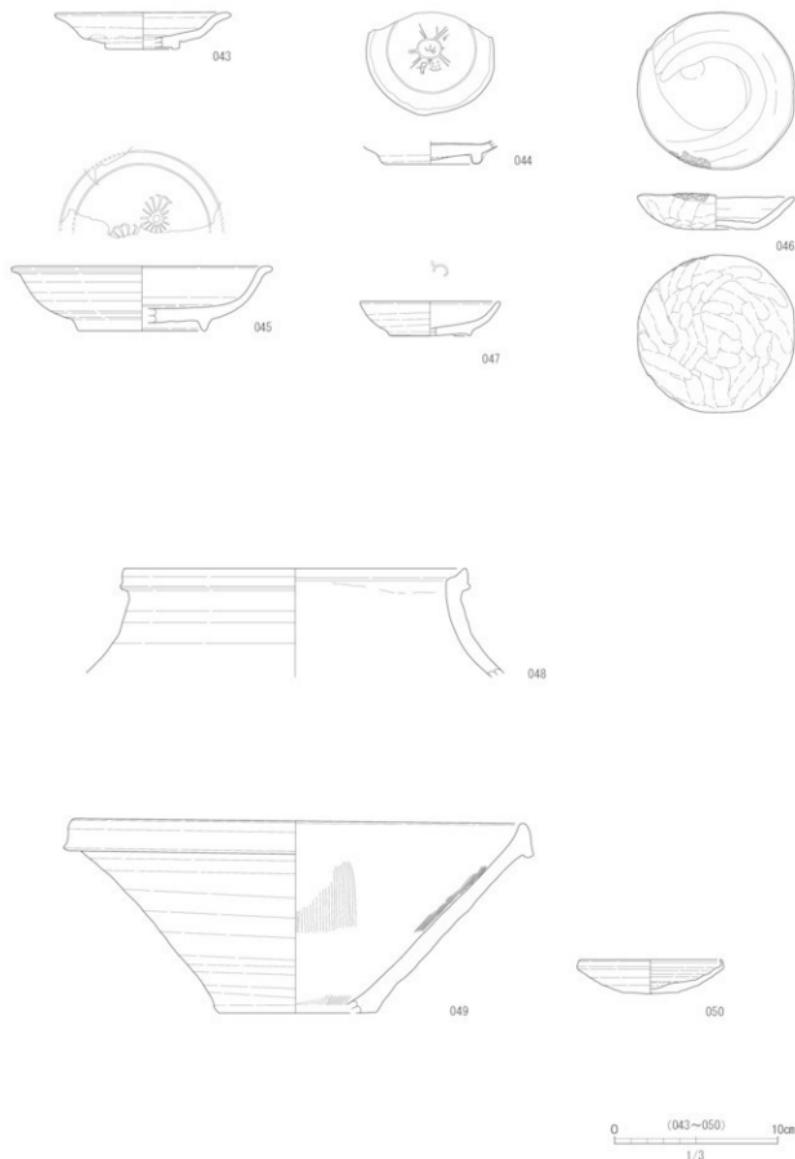
出土陶器の時期は、山茶碗第11型式(050)、古瀬戸後期IV期新段階(045)がより古い時期の資料であり、大窯1期から2期が時期幅の中心になる。大窯3期の資料も散見されるが、その比率は低い。



第17図 南空堀3区土層断面



第18図 80・81区 東空堀1区 南空堀3区



第19図 南空堀出土遺物

3) 溝002と遺物

位置）X座標 13260～13280、Y座標 4020～4030 付近にて検出した。

検出状況）「空堀」に相当する部分であるため、まず重機により「空堀」の掘り込み口を第1層下部にて精查の上検出した。次に、「空堀」跡の肩を痛めないよう養生した上で、第1層の表土層と第2層の埋め立て土石を掘削の上除去した。第3層上面より、人力で掘削を開始した。

形状と規模）南北方向に延びる溝跡で、溝跡の底を基準に、最大長は 14.4m、最大幅は 4.9m である。現地表面からの溝跡底面までの深さは、最も深い箇所で約 10.4m である。

なお、溝 002 の南側付近の X 座標軸 13280・Y 座標軸 4022 付近で、溝 002 に先行する溝 007 を検出した。発掘調査区外に延びているため、詳細な規模・形状は不明である。「空堀」に新旧関係が存在したことを示唆する痕跡である。

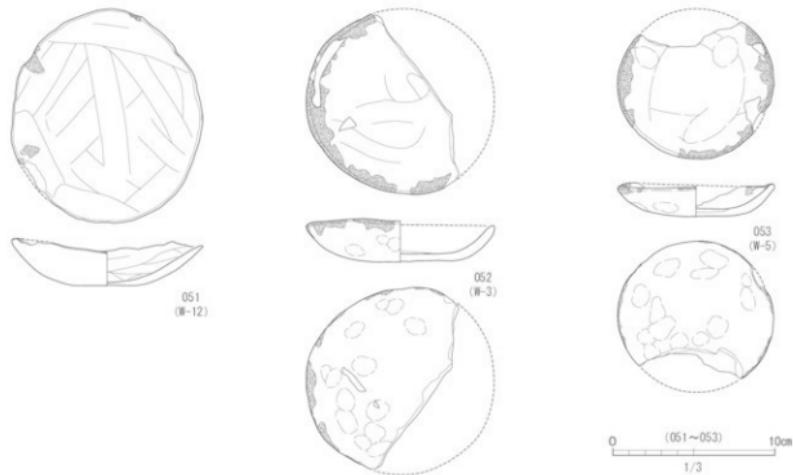
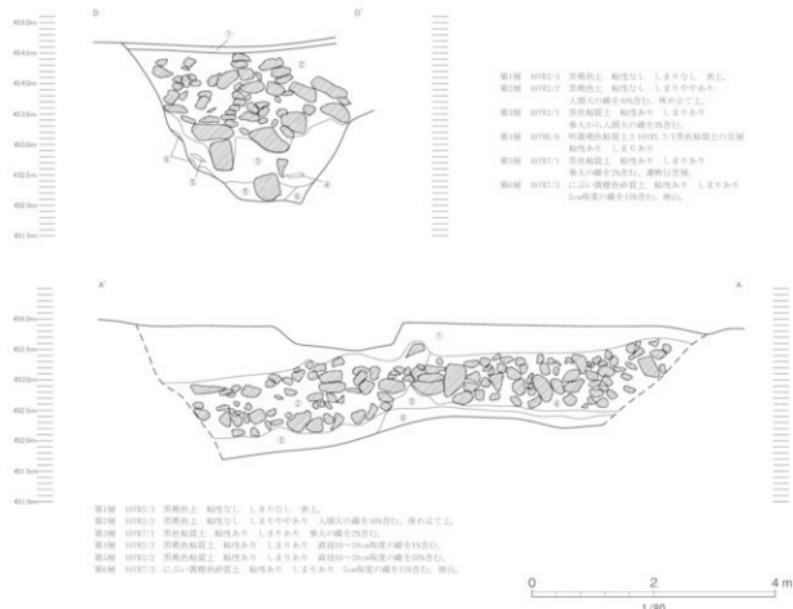
土層堆積状況）溝 002 の北側土層断面（D-D'）は、第1層が現耕作土である表土層、第2層が「空堀」を埋めた際の埋め立て土石混合土層である。人頭大の礫が過密に含まれていた。第3層は黒色粘質土層で、拳大から人頭大の礫を若干含む。遺物の出土はなく、「空堀」機能停止後の埋没土であろう。第5層が戦国期単純の遺物包含層である。溝 002 の南側部分の土層断面図（A-A'）は、溝 007 との新旧関係が土層に現れる。第1層が表土層である耕作土、第2層が人頭大の礫が過密に含まれる埋め立て土石層。第3層が黒色粘質土層で、戦国期単純の遺物包含層である。なお、第3層は D-D' ラインの土層の第5層に対応する層である。第4層は、溝 007 の底面付近に堆積した土層で、黒褐色粘質土層である。小さな礫を若干含む。遺物の出土はなかった。第5層は溝 007 の底面に堆積した土石であり、小さな礫がやや目立つ。遺物の出土はなかった。

出土遺物）溝 002 の南側部分で、陶器と土師器が集中して出土した。全て A-A' ラインの第3層出土である。051 は、口縁部を薄手に作る、やや不整形の土師器皿である。底部から口縁部にかけての立ち上がりはゆるやかである。外面・内面とも横ナデ整形を基本とするが、内面のナデの方向は一定しない。口縁部端に部分的にタールが付着する。052・053 は、外面は、口縁部付近に指頭圧痕に横ナデ、底部付近に指頭圧痕が認められる。051 は井川分類 C 類、052～053・055 は井川分類 B2 類に該当する。口縁部端にはタールが付着する。054 は灰釉端反皿である。内面底部に印花文がある。大窯 1 期である。また、051 と同類の土師器皿が 1 点（055）、052・053 と同類の土師器皿が 4 点、先の 051～053 とともにブロック状に出土した。

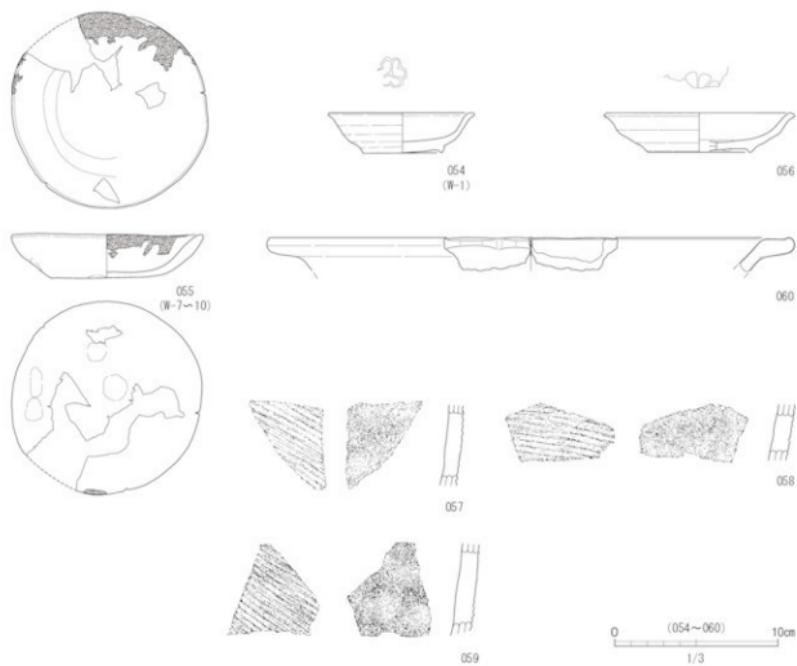
なお、溝 002 包含層出土の土師器・陶磁器類は、9 割が土師器皿およびその破片で占められる。若干の陶磁器には、大窯 1 期の灰釉端反皿破片 2 点（056）、天目茶碗破片 2 点と、珠洲焼の破片（057～059）が 3 点、青磁破片（060）が出土した。



第20図 溝002



第21図 溝002 土層断面及び出土遺物①



第22図 溝002出土遺物②

第3節 城跡内部の調査

1) 80区・81区の遺構と遺物

①掘立柱建物跡

掘立柱建物跡 001

位置) X 座標 13339 ~ 13344、Y 座標 4123 ~ 4129 付近にて検出した。

検出状況) 第2層黒褐色粘質土層下部から第3層明黄褐色粘質土層上部にて精査の上、遺構を検出した。

形状と規模) ピット 001 からピット 008 で構成される梁間1間、桁行3間の掘立柱建物跡 001 が検出された。梁間 3.75m、桁行 5.55m の小形の掘立柱建物跡で、桁行1間の長さは 1.80m から 1.90m に統一される。桁行 6 尺程度と推定される。

ピットの径はピット 001 が 0.34m × 0.26m、ピット 002 が 0.42m × 0.30m、ピット 003 が 0.46m × 0.36m、ピット 004 が 0.34m × 0.28m、ピット 005 が 0.48m × 0.40m、ピット 006 が 0.40m × 0.34m、ピット 007 が 0.42m × 0.38m、ピット 008 が 0.36m × 0.36m といずれも 0.30m から 0.50m の範囲に収まる。ピットの底はほぼ平坦である。覆土には黒褐色粘質土が堆積する。ピット底や側面に掘立柱建物跡構築に係る部材らしき痕跡は確認できなかった。

出土遺物) ピット 006 覆土から土師器皿の小破片が 1 点出土した。

掘立柱建物跡 002

位置) X 座標 13341 ~ 13343、Y 座標 4124 ~ 4126 付近にて検出した。

検出状況) 第2層黒褐色粘質土層下部から第3層明黄褐色粘質土層上部にて精査の上、遺構を検出した。

形状と規模) ピット 013・014・020・023 で構成される梁間1間、桁行1間の、ほぼ正方形の掘立柱建物跡である。梁間・桁行とも 1.95m で、ほぼ 6 尺の寸法である。ピット 021 に近接して、ピット 022・023・024 がある。柱穴の位置が移動した痕跡であろう。ピット覆土には、黒褐色粘質土が堆積する。

出土遺物) ピットからの遺物の出土はない。

掘立柱建物跡 003

位置) X 座標 13339 ~ 13341、Y 座標 4125 ~ 4129 付近にて検出した。

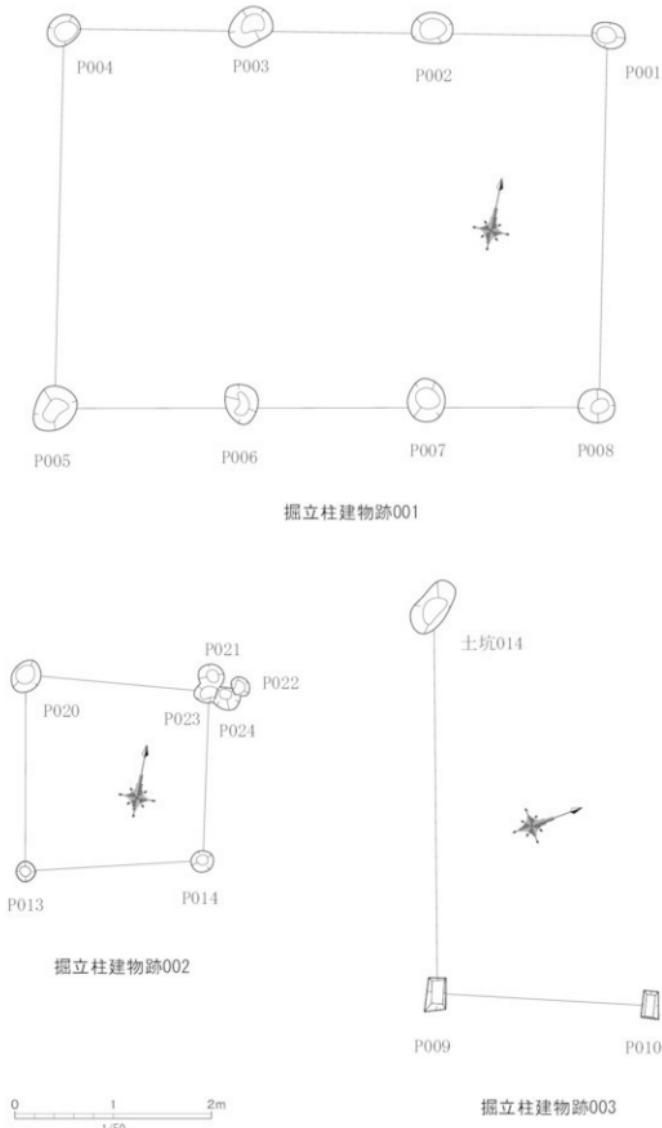
検出状況) 第2層黒褐色粘質土層下部から第3層明黄褐色粘質土層上部にて精査の上、遺構を検出した。

形状と規模) ピット 009・010 に、土坑 014 とした遺構が対応する掘立柱建物跡である。ピット 009・010 はピットの中では例外的で、長方形の角材が柱として設置された痕跡が明瞭である。覆土には黒褐色粘質土が堆積する。

出土遺物) ピットからの遺物の出土はない。



第23図 80・81区



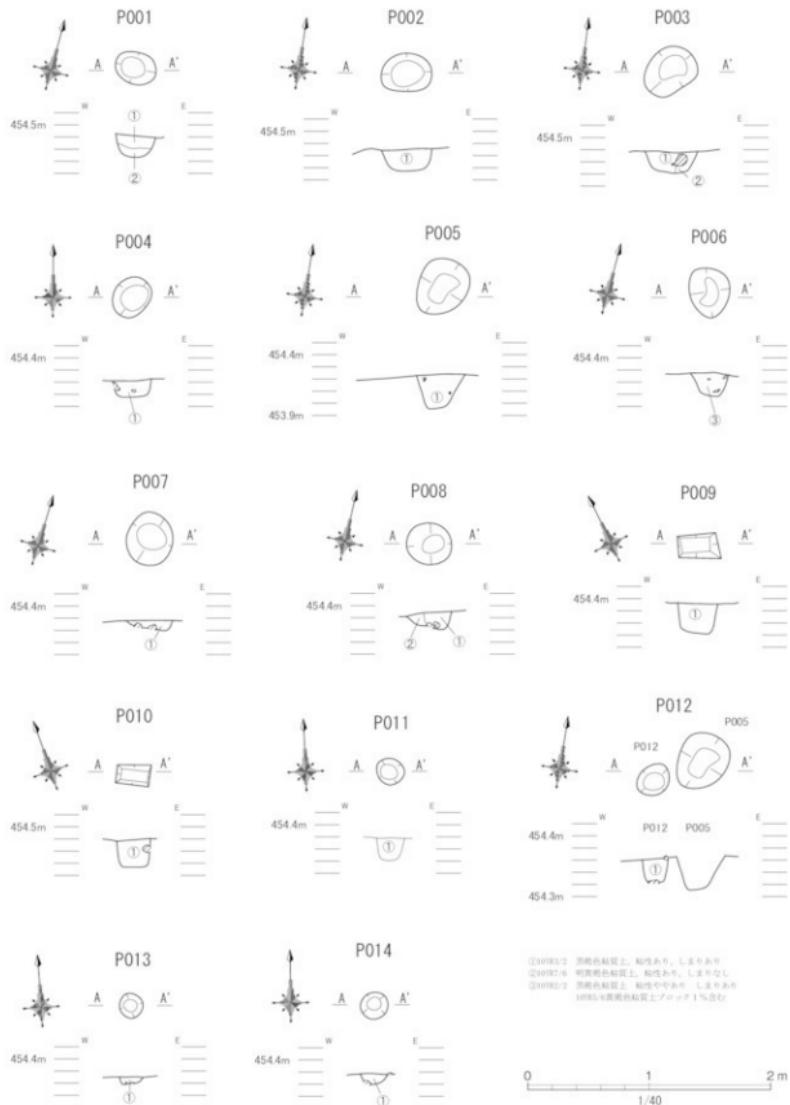
第24図 80・81区掘立柱建物跡

(2) ピット

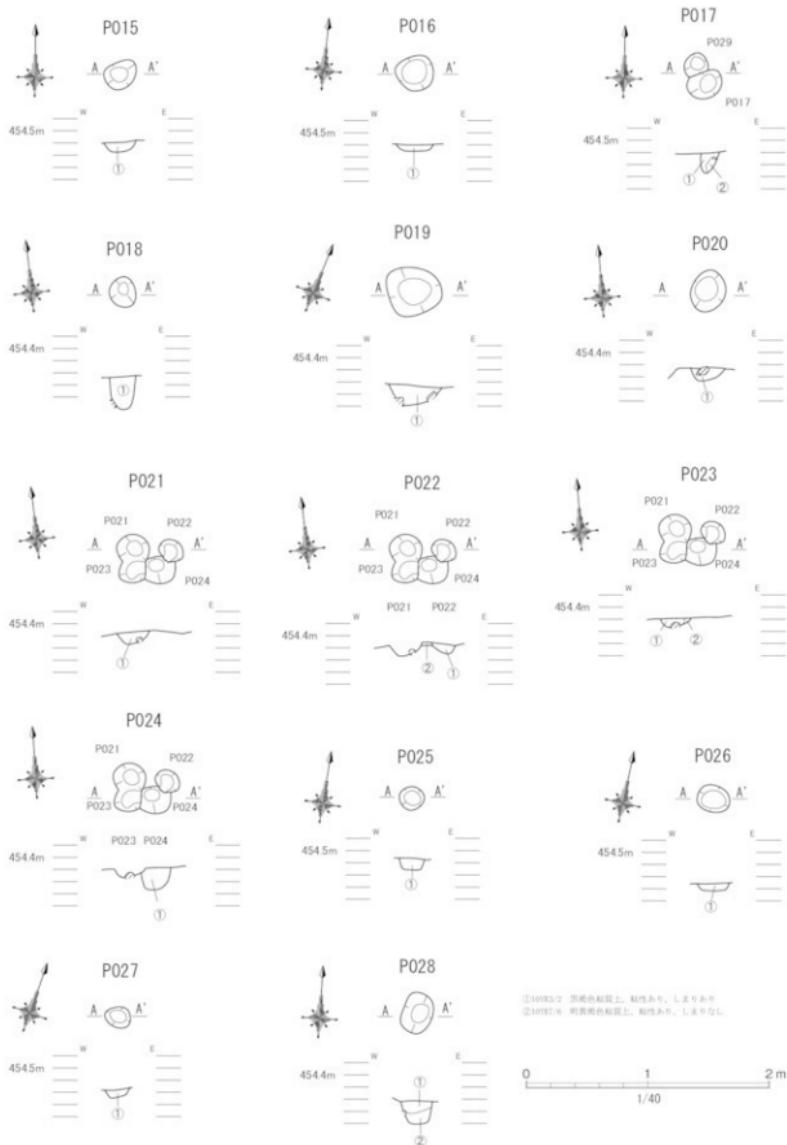
ここでは直径 0.50 m 程度のほぼ円形で底面が平滑な遺構をピットと呼称する。ピットは柱穴と推定される遺構である。ピットには、先述したように掘立柱建物跡 001・002・003 を構成するピットがある。それ以外は、80 区・81 区の北西側にややかたまる傾向があるが、明確に遺構を構成するピットであることは確認できなかった。ピットの詳細は第3表に示す。

第3表 ピット一覧表

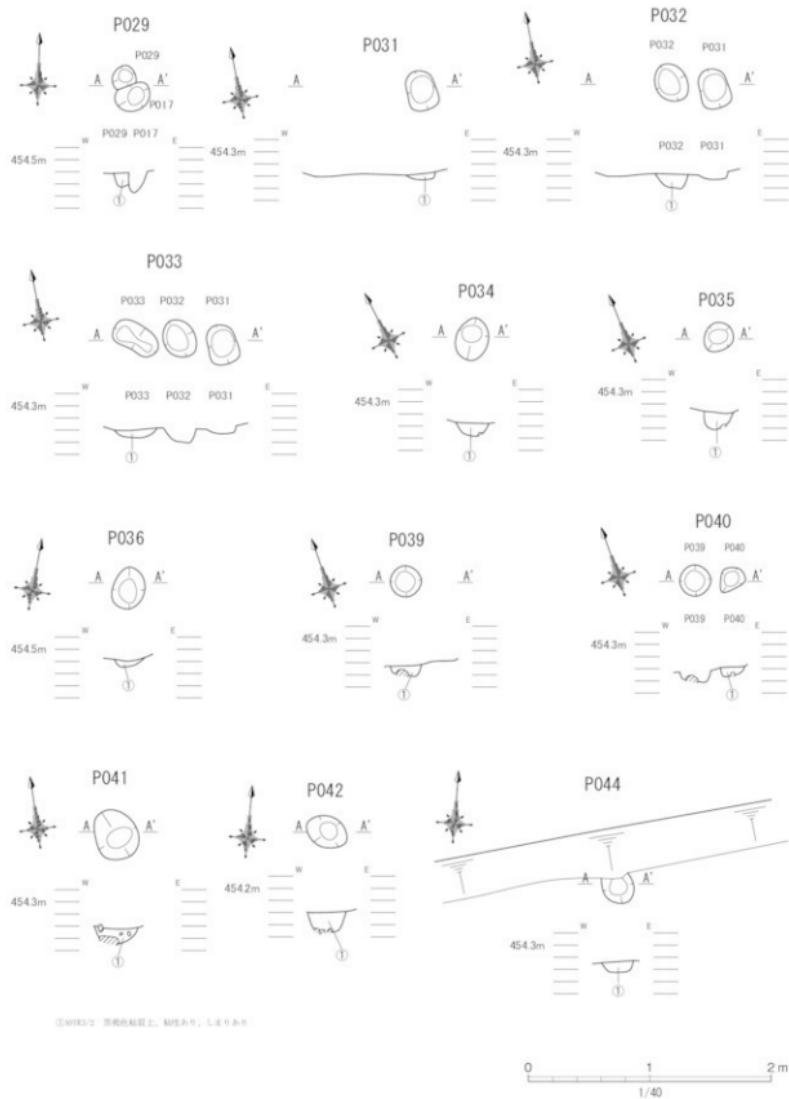
ピット番号	寸法			遺物破片数 土師器皿	備考
	長軸 m	短軸 m	最深 m		
001	0.36	0.26	0.18		掘立柱建物跡 001 の柱穴
002	0.41	0.30	0.18		掘立柱建物跡 001 の柱穴
003	0.46	0.36	0.18		掘立柱建物跡 001 の柱穴
004	0.36	0.26	0.14		掘立柱建物跡 001 の柱穴
005	0.49	0.38	0.28		掘立柱建物跡 001 の柱穴
006	0.40	0.36	0.19	1	掘立柱建物跡 001 の柱穴
007	0.41	0.38	0.08		掘立柱建物跡 001 の柱穴
008	0.38	0.36	0.14		掘立柱建物跡 001 の柱穴
009	0.34	0.21	0.24		掘立柱建物跡 003 の柱穴
010	0.29	0.18	0.21		掘立柱建物跡 003 の柱穴
011	0.24	0.21	0.18		
012	0.30	0.24	0.19		
013	0.20	0.19	0.08		掘立柱建物跡 002 の柱穴
014	0.21	0.21	0.09		掘立柱建物跡 002 の柱穴
015	0.30	0.24	0.08		
016	0.34	0.30	0.06		
017	0.30	0.24	0.18		
018	0.26	0.21	0.26		
019	0.42	0.42	0.18		
020	0.34	0.28	0.12		掘立柱建物跡 002 の柱穴
021	0.28	0.24	0.10		掘立柱建物跡 002 の柱穴
022	0.20	0.18	0.08		掘立柱建物跡 002 の柱穴、ピット 022<024
023	0.28	0.22	0.08		掘立柱建物跡 002 の柱穴、ピット 021<023<024
024	0.28	0.24	0.19		
025	0.20	0.20	0.08		
026	0.28	0.22	0.06		
027	0.22	0.18	0.08		
028	0.34	0.24	0.18		
029	0.20	0.18	0.12		
031	0.32	0.24	0.06		
032	0.32	0.26	0.12		
033	0.40	0.20	0.08		
034	0.36	0.28	0.11		
035	0.26	0.22	0.14		
036	0.58	0.30	0.18		掘立柱建物跡 003 の柱穴
039	0.24	0.24	0.08		
040	0.24	0.20	0.08		
041	0.41	0.38	0.12		
042	0.38	0.26	0.16		
044	0.24	0.20	0.08		掘立柱建物跡 004 の柱穴
045	0.30	0.28	0.16		
046	0.32	0.30	0.12		掘立柱建物跡 004 の柱穴
047	0.42	0.32	0.08		掘立柱建物跡 004 の柱穴
048	0.36	0.30	0.08		
049	0.40	0.30	0.14		掘立柱建物跡 004 の柱穴
050	0.32	0.30	0.14		
051	0.22	0.20	0.06		掘立柱建物跡 004 の柱穴



第25図 80・81区ピット①



第26図 80・81区ピット②



第27図 80・81区ピット③

③土坑

土坑 002

位置) X 座標 13337、Y 座標 4133 付近にて検出した。

検出状況) 第2層黒褐色粘質土層下部から第3層明黄褐色粘質土層上部で精査の上、遺構を検出した。

形状と規模) 長軸 0.78m、短軸 0.68m の楕円形の土坑である。検出面から土坑の底面まで 0.22m である。底面は一定している。

土層堆積状況) 土坑覆土には黒褐色粘質土が堆積する。

出土遺物) なし。

土坑 003

位置) X 座標 13338、Y 座標 4132 付近にて検出した。

検出状況) 第2層黒褐色粘質土層下部から第3層明黄褐色粘質土層上部で精査の上、遺構を検出した。

形状と規模) 長軸 1.62m、短軸 1.12m の楕円形の土坑である。底面は凹凸があり、一定しない。

土層堆積状況) 土坑覆土には黒褐色粘質土が堆積する。

出土遺物) なし。

土坑 004

位置) X 座標 13342、Y 座標 4133 付近にて検出した。

検出状況) 第2層黒褐色粘質土層下部から第3層明黄褐色粘質土層上部で精査の上、遺構を検出した。

形状と規模) 長軸 1.34m、短軸 0.94m の不整形の土坑である。底面は緩やかに湾曲する。

土層堆積状況) 土坑覆土には黒褐色粘質土が堆積する。

出土遺物) なし。

土坑 005

位置) X 座標 13349、Y 座標 4124 付近にて検出した。

検出状況) 第2層黒褐色粘質土層下部から第3層明黄褐色粘質土層上部で精査の上、遺構を検出した。

形状と規模) 長軸 1.84m、短軸 0.99m で、長楕円形の土坑である。底面は一定している。

土層堆積状況) 土坑覆土には暗褐色粘質土が堆積する。

出土遺物) なし。

土坑 006

位置) X 座標 13350、Y 座標 4124 付近にて検出した。

検出状況) 第2層黒褐色粘質土層下部から第3層明黄褐色粘質土層上部で精査の上、遺構を検出した。

形状と規模) 長軸 1.24m、短軸 0.86m で、不整形の土坑である。底面は一定している。

土層堆積状況) 土坑覆土には黒褐色粘質土が堆積する。

出土遺物) 覆土から擂鉢破片が出土した。

土坑 007

位置) X 座標 13340、Y 座標 4129 付近にて検出した。

検出状況) 第2層黒褐色粘質土層下部から第3層明黄褐色粘質土層上部で精査の上、遺構を検出した。

形状と規模) 長軸 0.76m、短軸 0.56m の楕円形の土坑である。底面は一定している。

土層堆積状況) 土坑覆土には黒褐色粘質土が堆積する。

出土遺物) なし。

土坑 008

位置) X 座標 13344、Y 座標 4132 付近にて検出した。

検出状況) 第2層黒褐色粘質土層下部から第3層明黄褐色粘質土層上部で精査の上、遺構を検出した。

形状と規模) 長軸 1.54m、短軸 1.22m の楕円形の土坑である。底面は一定している。

土層堆積状況) 土坑覆土には黒褐色粘質土が堆積する。

出土遺物) なし。

土坑 009

位置) X 座標 13342、Y 座標 4126 付近にて検出した。

検出状況) 第2層黒褐色粘質土層下部から第3層明黄褐色粘質土層上部で精査の上、遺構を検出した。

形状と規模) 長軸 0.54m、短軸 0.30m の不整形な土坑である。底面は一定している。

土層堆積状況) 土坑覆土には黒褐色粘質土が堆積する。

出土遺物) なし。

土坑 010

位置) X 座標 13338、Y 座標 4128 付近にて検出した。

検出状況) 第2層黒褐色粘質土層下部から第3層明黄褐色粘質土層上部で精査の上、遺構を検出した。

形状と規模) 長軸 0.58m、短軸 0.54m のほぼ円形の土坑である。底面は湾曲する。

土層堆積状況) 土坑覆土には黒褐色粘質土が堆積する。

出土遺物) なし。

土坑 011

位置) X 座標 13346、Y 座標 4132 付近にて検出した。

検出状況) 第2層黒褐色粘質土層下部から第3層明黄褐色粘質土層上部で精査の上、遺構を検出した。

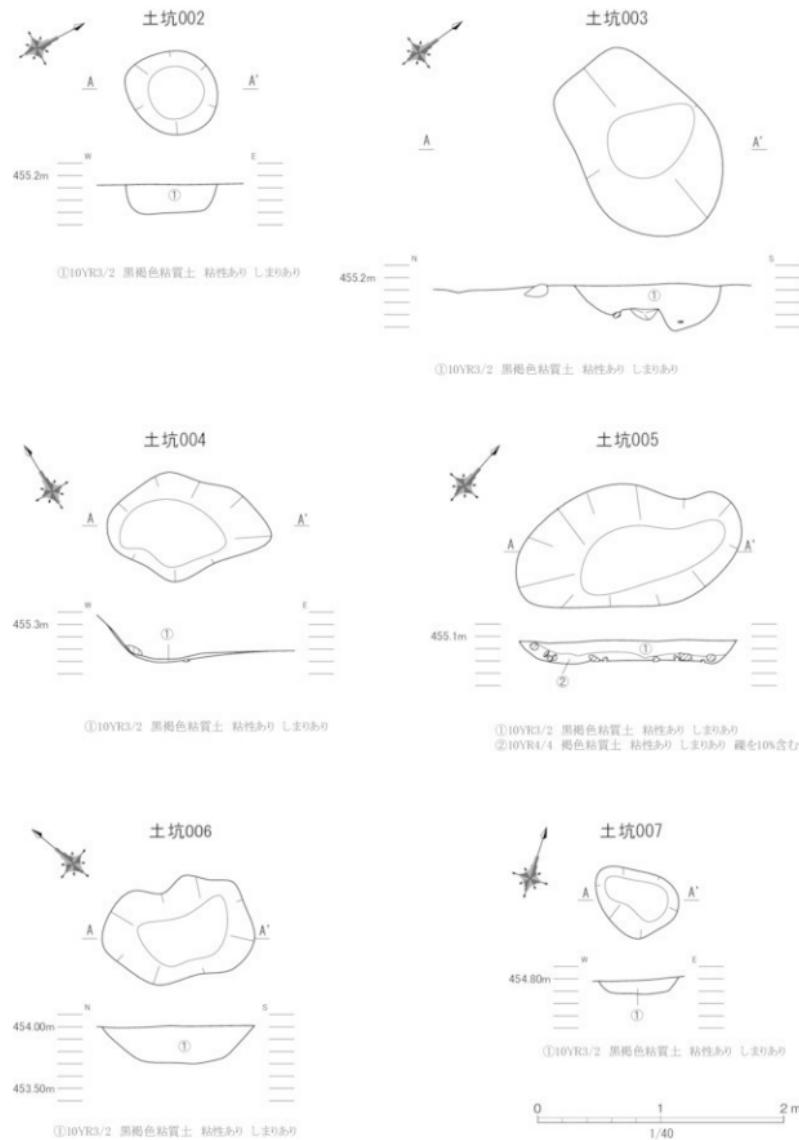
形状と規模) 長軸 0.68m、短軸 0.58m の楕円形の土坑である。底面は一定している。

土層堆積状況) 土坑覆土には黒褐色粘質土が堆積する。

出土遺物) なし。

土坑 012

位置) X 座標 13352、Y 座標 4128 付近にて検出した。



第28図 80・81区土坑①

検出状況) 第2層黒褐色粘質土層下部から第3層明黄褐色粘質土層上部で精査の上、遺構を検出した。
形状と規模) 長軸2.14m、短軸1.62mの不整形な土坑である。底面は一定している。
土層堆積状況) 土坑覆土には黒褐色粘質土が堆積する。
出土遺物) 土師器皿口縁部(061)の他、土師器皿の碎片が出土した。

土坑013

位置) X座標13340、Y座標4120付近にて検出した。
検出状況) 第2層黒褐色粘質土層下部から第3層明黄褐色粘質土層上部で精査の上、遺構を検出した。
形状と規模) 長軸0.68m、短軸0.64mの楕円形の土坑である。底面は一定している。
土層堆積状況) 土坑覆土には黒褐色粘質土が堆積する。
出土遺物) 灰釉丸皿口縁部(062)の他、土師器皿等の碎片が出土した。

土坑014

位置) X座標13339、Y座標4124付近にて検出した。
検出状況) 第2層黒褐色粘質土層下部から第3層明黄褐色粘質土層上部で精査の上、遺構を検出した。
形状と規模) 長軸0.60m、短軸0.36mの長楕円形の土坑である。底面は一定している。
土層堆積状況) 土坑覆土には黒褐色粘質土が堆積する。
出土遺物) なし

土坑015

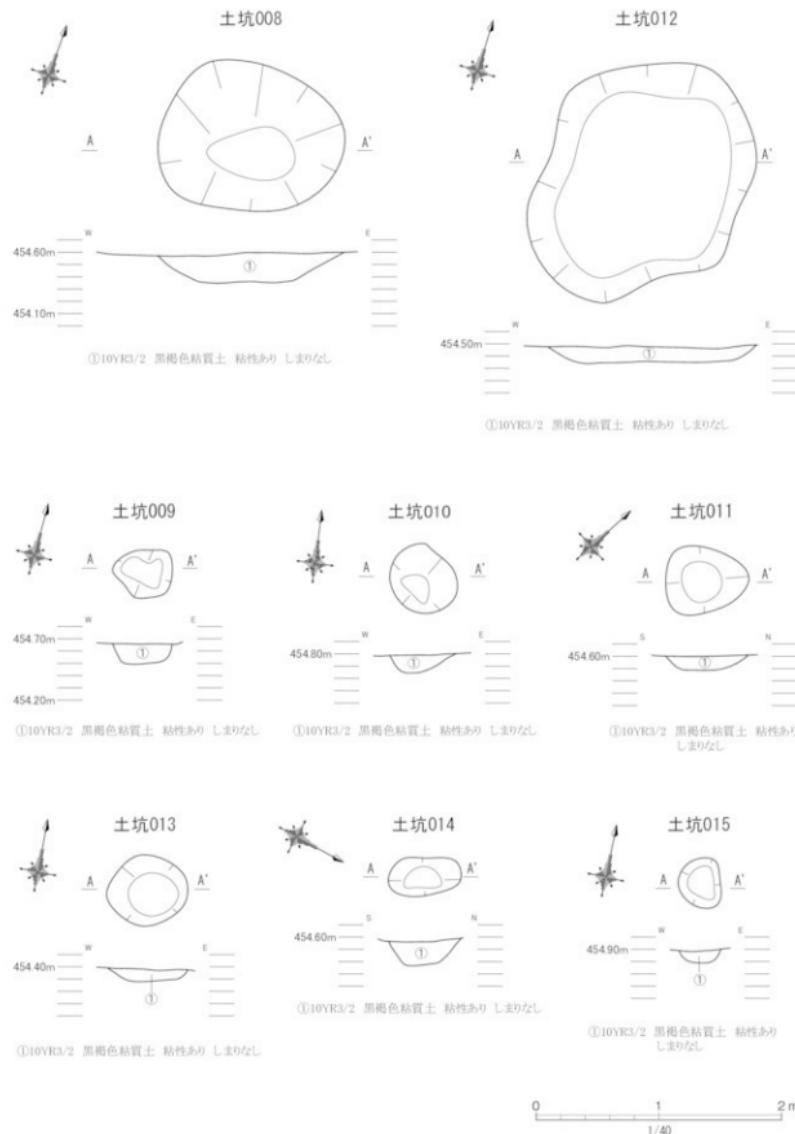
位置) X座標13346、Y座標4137付近にて検出した。
検出状況) 第2層黒褐色粘質土層下部から第3層明黄褐色粘質土層上部で精査の上、遺構を検出した。
形状と規模) 長軸0.42m、短軸0.38mのほぼ円形の土坑である。底面は一定している。
土層堆積状況) 土坑覆土には黒褐色粘質土が堆積する。
出土遺物) なし。

土坑016

位置) X座標13348、Y座標4135付近にて検出した。
検出状況) 第2層黒褐色粘質土層下部から第3層明黄褐色粘質土層上部で精査の上、遺構を検出した。
形状と規模) 長軸0.56m、短軸0.36mの長楕円形の土坑である。底面は一定している。
土層堆積状況) 土坑覆土には黒褐色粘質土が堆積する。
出土遺物) なし。

土坑017

位置) X座標13348、Y座標4135付近にて検出した。
検出状況) 第2層黒褐色粘質土層下部から第3層明黄褐色粘質土層上部で精査の上、遺構を検出した。
形状と規模) 長軸0.38m、短軸0.37mの円形の土坑である。底面はやや湾曲している。



第29図 80・81区土坑(2)

土層堆積状況) 土坑覆土には黒褐色粘質土が堆積する。

出土遺物) なし。

土坑 018

位置) X 座標 13348、Y 座標 4133 付近にて検出した。

検出状況) 第2層黒褐色粘質土層下部から第3層明黄褐色粘質土層上部で精査の上、遺構を検出した。

形状と規模) 長軸 0.52m、短軸 0.40m の楕円形の土坑である。底面は一定している。

土層堆積状況) 土坑覆土には黒褐色粘質土が堆積する。

出土遺物) なし。

土坑 019

位置) X 座標 13349、Y 座標 4133 付近にて検出した。

検出状況) 第2層黒褐色粘質土層下部から第3層明黄褐色粘質土層上部で精査の上、遺構を検出した。

形状と規模) 長軸 0.48m、短軸 0.46m のほぼ円形の土坑である。底面は一定している。

土層堆積状況) 土坑覆土には黒褐色粘質土が堆積する。

出土遺物) なし。

土坑 020

位置) X 座標 13357、Y 座標 4129 付近にて検出した。

検出状況) 第2層黒褐色粘質土層下部から第3層明黄褐色粘質土層上部で精査の上、遺構を検出した。

形状と規模) 長軸 0.56m、短軸 0.48m の不整形な土坑である。底面は一定している。

土層堆積状況) 土坑覆土には黒褐色粘質土が堆積する。

出土遺物) なし。

土坑 021

位置) X 座標 13347、Y 座標 4123 付近にて検出した。

検出状況) 第2層黒褐色粘質土層下部から第3層明黄褐色粘質土層上部で精査の上、遺構を検出した。

形状と規模) 長軸 0.52m、短軸 0.48m の楕円形の土坑である。底面は湾曲している。

土層堆積状況) 土坑覆土には小礫を含む黒褐色粘質土が堆積する。

出土遺物) なし。

土坑 022

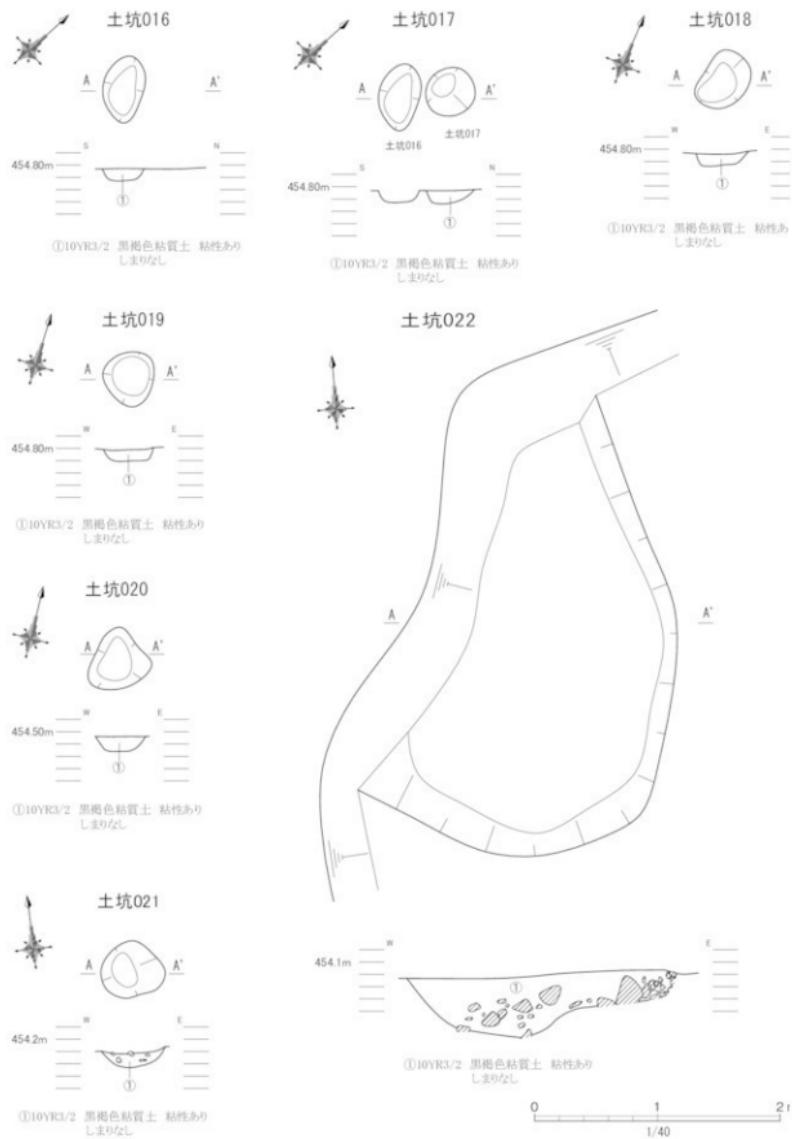
位置) X 座標 13340 ~ 13344、Y 座標 4112 ~ 4116 付近にて検出した。

検出状況) 第2層黒褐色粘質土層下部から第3層明黄褐色粘質土層上部で精査の上、遺構を検出した。

西側は調査区外へも広がる。

形状と規模) 長軸 3.86m、短軸 1.89m の不整形の土坑である。底面は湾曲している。

土層堆積状況) 土坑覆土には拳大から人頭大の礫を 20% 程度含む黒褐色粘質土が堆積する。



第30図 80・81区土坑(3)

出土遺物) なし。

土坑 094

位置) X 座標 13348、Y 座標 4135 付近にて検出した。

検出状況) 第2層黒褐色粘質土層下部から第3層明黄褐色粘質土層上部で精査の上、遺構を検出した。

形状と規模) 長軸 0.34m、短軸 0.26m の楕円形の土坑である。底面は湾曲している。

土層堆積状況) 覆土には黒褐色粘質土が堆積する。

出土遺物) なし。

土坑 095

位置) X 座標 13350、Y 座標 4136 付近にて検出した。

検出状況) 第2層黒褐色粘質土層下部から第3層明黄褐色粘質土層上部で精査の上、遺構を検出した。

形状と規模) 長軸 0.40m、短軸 0.26m の長楕円形の土坑である。底面は平坦である。

土層堆積状況) 覆土には黒褐色粘質土が堆積する。

出土遺物) なし。

土坑 096

位置) X 座標 13356、Y 座標 4128 付近にて検出した。

検出状況) 第2層黒褐色粘質土層下部から第3層明黄褐色粘質土層上部で精査の上、遺構を検出した。

形状と規模) 長軸 0.50m、短軸 0.46m のほぼ円形の土坑である。底面はほぼ平坦である。

土層堆積状況) 覆土には黒褐色粘質土が堆積する。

出土遺物) なし。

土坑 097

位置) X 座標 13358、Y 座標 4127 付近にて検出した。

検出状況) 第2層黒褐色粘質土層下部から第3層明黄褐色粘質土層上部で精査の上、遺構を検出した。

形状と規模) 長軸 0.50m、短軸 0.36m の楕円形の土坑である。底面はほぼ平坦である。

土層堆積状況) 覆土には黒褐色粘質土が堆積する。

出土遺物) なし。

土坑 098

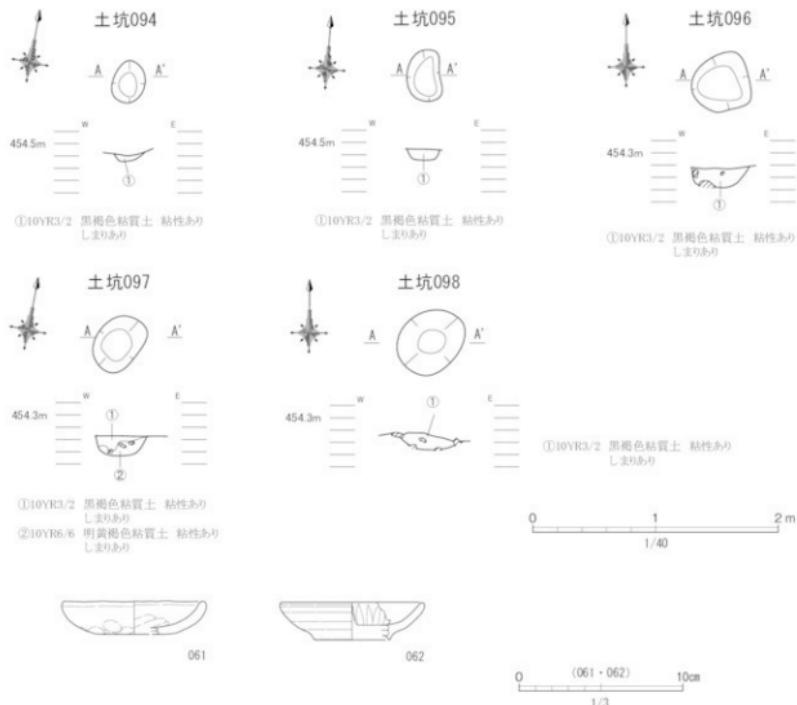
位置) X 座標 13341、Y 座標 4122 付近にて検出した。

検出状況) 第2層黒褐色粘質土層下部から第3層明黄褐色粘質土層上部で精査の上、遺構を検出した。

形状と規模) 長軸 0.58m、短軸 0.48m の楕円形の土坑である。底面は湾曲する。

土層堆積状況) 覆土には黒褐色粘質土が堆積する。

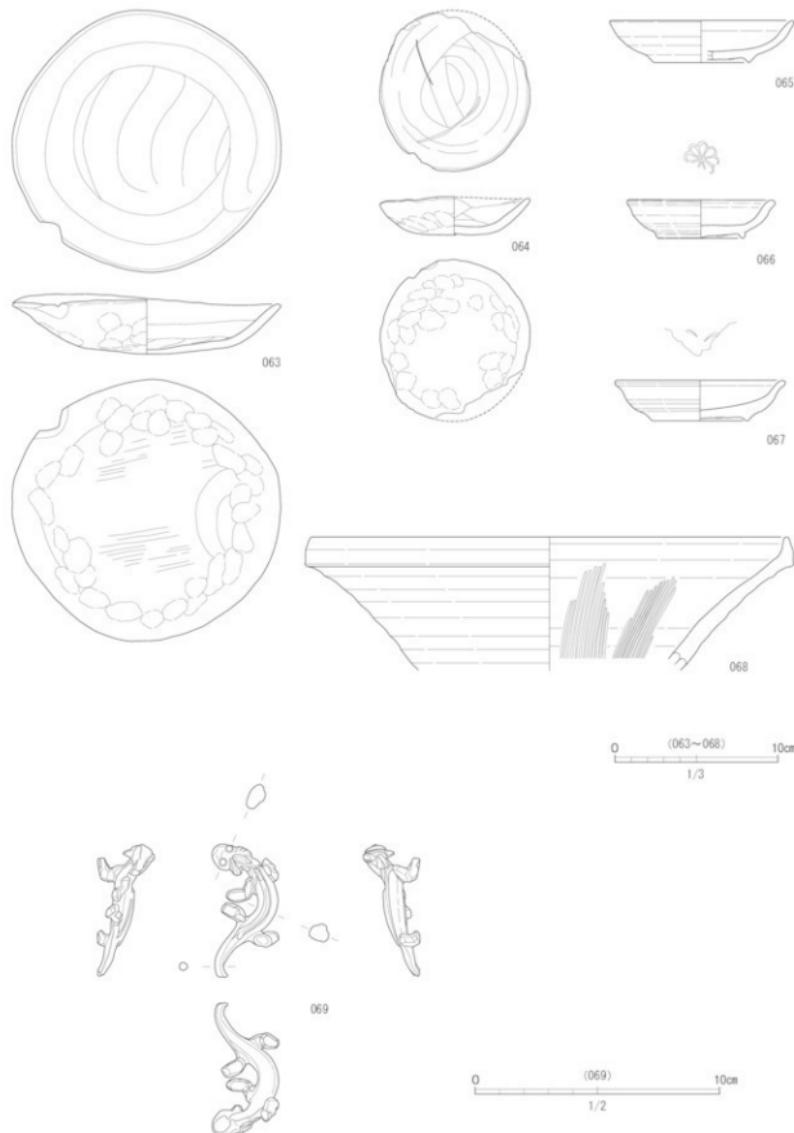
出土遺物) 戰国期の丸皿小破片が1点出土した。



第31図 80・81区土坑④及び出土遺物

④包含層出土の遺物

063は土師器皿である。井川分類B2類に該当する。体部底面に横ナデ、体部内面には一方向の横ナデが認められる。体部外底部には先行する横ナデに重なり指頭圧痕があり、体部外側の口縁部付近は横ナデが認められる。064の土師器皿は井川分類B2類に該当する。体部内面には一方向の横ナデを施し、体部外側には指頭圧痕が目立つが、口縁部には弱く横ナデを施す。065は大窯2期の灰釉丸皿である。066は灰釉丸皿で、内面底部に印花文が認められる。067は大窯1期の灰釉端反皿である。068は擂鉢で、大窯2期に該当する。069は青銅製品である。前足・後足には別な物体と接続していた痕跡が認められる。正面図の青銅製品身部中央部に、龍の彫（たてがみ）を模した隆起がある。また、頭部には、眼と角のような意匠もある。比較的忠実に模したものと考えられる。香炉の装飾部分と推定される類例が富山県高岡市の石名田木舟遺跡（酒井編2002）から出土している。



第32図 80・81区包含層出土遺物

2) 72・79区の遺構と遺物

土坑 001

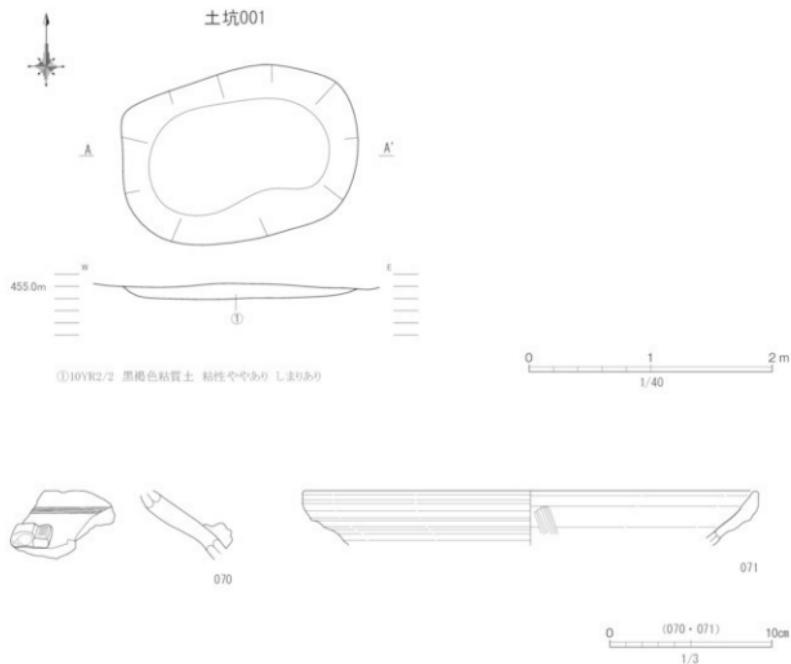
位置) X座標 13312 付近、Y座標 4116 付近にて検出した。

検出状況) 第2層黒褐色粘質土層下部から第3層明黄褐色粘質土層上部にて精査の上、遺構を検出した。

形状と規模) 長軸 1.96m、短軸 1.42m の橢円形状の土坑である。検出面から底面までは 0.52m と浅い。底面は一定している。

土層堆積状況) 土坑覆土には遺物包含層の黒褐色粘質土が堆積する。

出土遺物) 遺構精査中から捕鉢・土師器皿破片が出土。遺構覆土からは、古瀬戸後期 III 期から IV 期の灰釉四耳壺破片(070)、大窯2期と推定される捕鉢口縁部破片(071)が出土した。



第33図 72・79区土坑及び出土遺物



第34図 13・18・19・21・31・58・59・60・61区

3) 31区の遺構と遺物

①溝跡

溝 003

位置) X 座標 13300 ~ 13310、Y 座標 4050 ~ 4060 付近にて検出した。

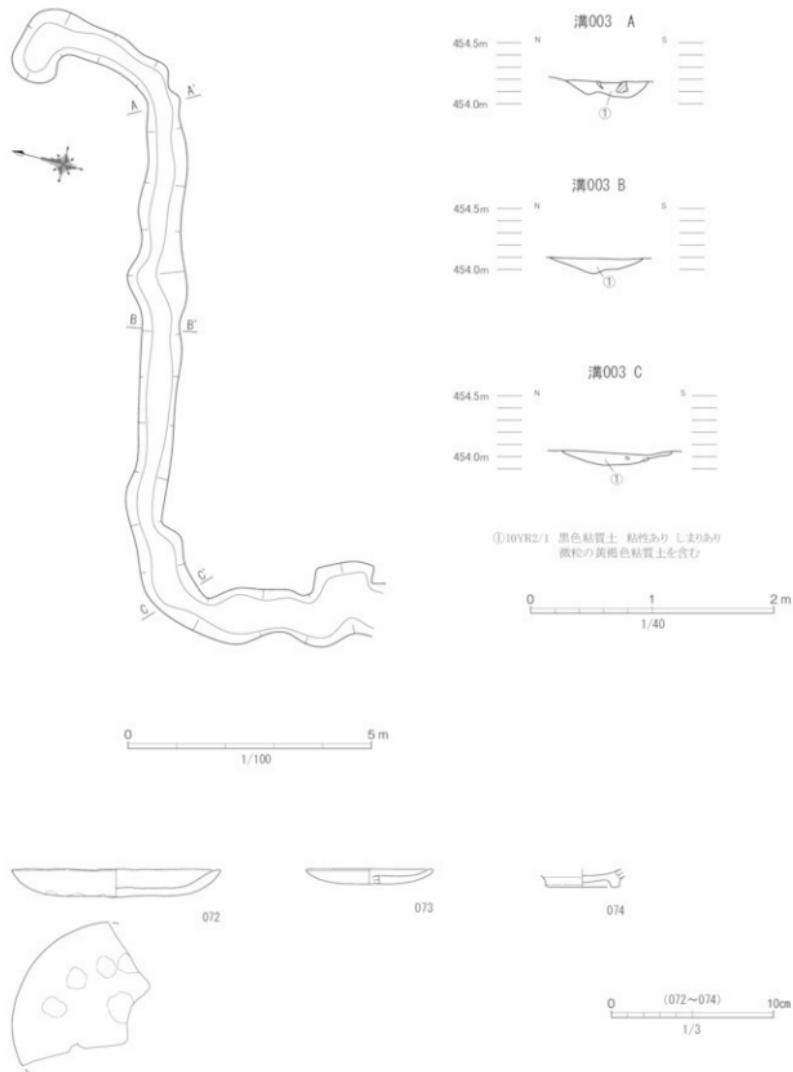
検出状況) 検出状況) 第2層黒褐色粘質土層下部から第3層黒色土層上部にて精査の上、遺構を検出した。

形状と規模) クランク状に延びる溝跡で、全長は約 20.5m である。検出面からの深さは A-A' ラインで約 12cm、B-B' ラインで約 11cm、C-C' ラインで約 10cm といずれの箇所でも浅い。溝 003 の北側に、掘立柱建物跡と推定されるピットがあり、建物を区画する布堀り溝であった可能性が高い。

土層堆積状況) A-A' ライン・B-B' ライン・C-C' ラインでは、いずれも溝内に黒色粘質土層が堆積する。出土遺物) 072 が井川分類 B2 類の土師器皿、073 が土師器皿で、底部に指頭圧痕、内面底部に一方向のナデを、そして体部内面に横ナデ痕が認められる。口縁部の一部にタールが付着する。井川分類 C2 類である。土坑 024 から出土した 074 は近世の天目茶碗の高台部分破片である。



第35図 31区



第36図 31区溝003 及び出土遺物

②掘立柱建物跡

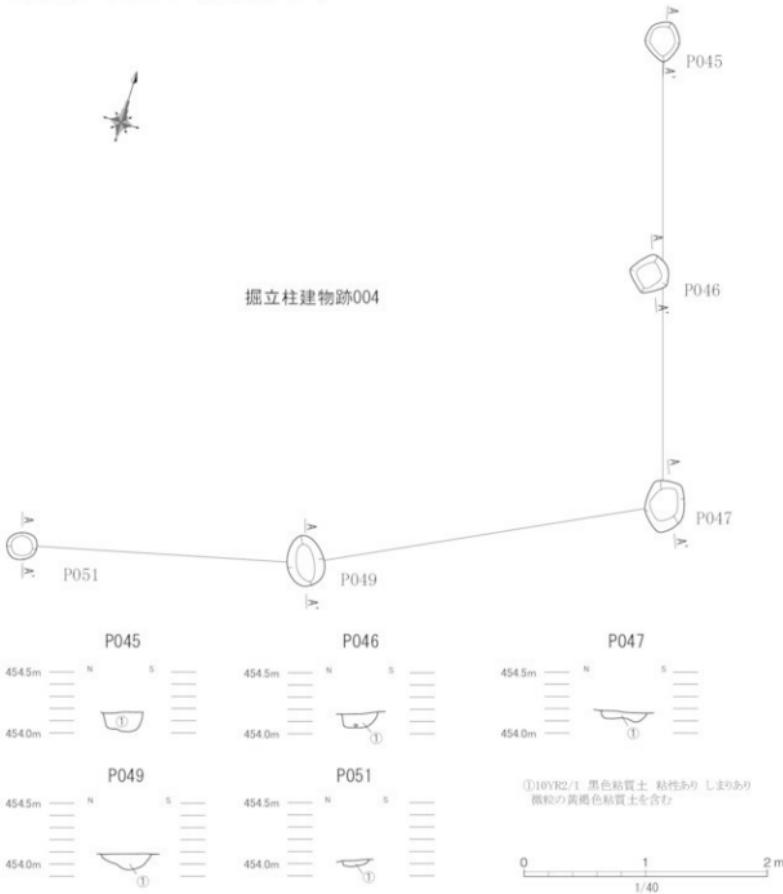
掘立柱建物跡 004

位置) X 座標 13325 ~ 13329、Y 座標 4052 ~ 4058 付近にて検出した。

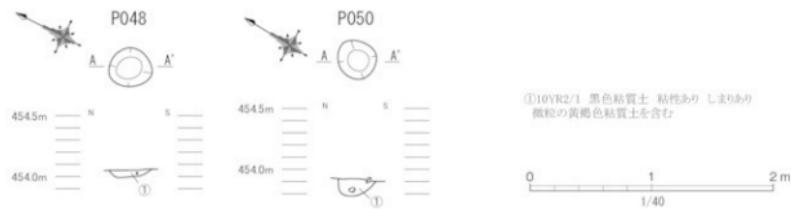
検出状況) 第 2 層黒褐色粘質土層下部から第 3 層黒色土層上部にて精査の上、遺構を検出した。

形状と規模) 梁間・桁行とも 2 間と推定される、ほぼ正方形の掘立柱建物跡である。ピット 045・046・047・049・051 が柱穴に該当する。ピット 048・050 については、掘立柱建物跡の柱穴との関連性は窺えない。掘立柱建物跡を構成するピット内には全て黒色粘質土が覆土として堆積していた。

出土遺物) ピットからの出土遺物はない。



第 37 図 31 区掘立柱建物跡 004



第38図 31区ピット

③土坑

土坑 023

位置) X座標 13279、Y座標 4075付近にて検出した。

検出状況) 第2層黒褐色粘質土層下部から第3層黒色土層上部にて精査の上、遺構を検出した。土坑西部分は調査区外へも広がる。

形状と規模) 長軸 0.52m、短軸 0.42m の楕円形の土坑である。底面は湾曲している。

土層堆積状況) 土坑覆土には、にぶい黄褐色粘質土が堆積する。

出土遺物) なし。

土坑 024

位置) X座標 13279、Y座標 4075付近にて検出した。

検出状況) 第2層黒褐色粘質土層下部から第3層黒色土層上部にて精査の上、遺構を検出した。

形状と規模) 長軸 0.61m、短軸 0.44m の楕円形の土坑である。底面には凹凸がある。

土層堆積状況) 土坑覆土には、黒褐色粘質土が堆積する。

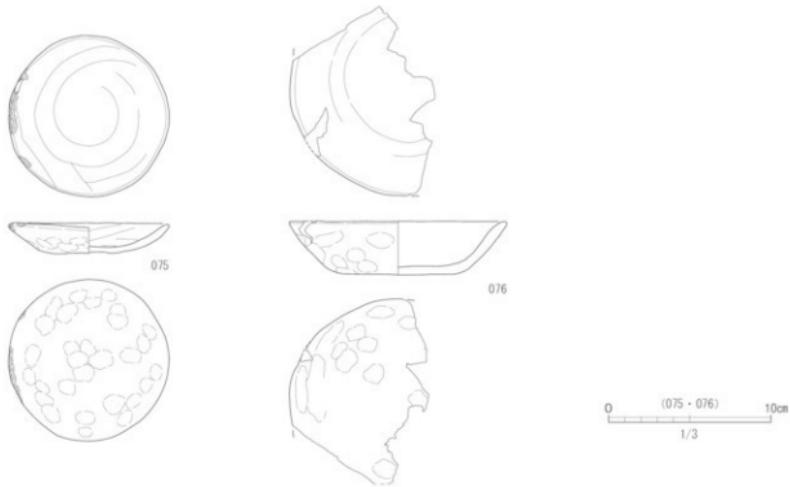
出土遺物) なし。



第39図 31区土坑

④包含層出土の遺物

075・076は土師器皿である。体部外面には指頭圧痕と横ナデ整形痕があり、体部内面には一方向の横ナデ整形痕が顕著である。井川分類B2類に該当する。



第40図 13・18・19・21・30・31区包含層出土遺物

4) 58区の遺構と遺物

①溝跡

溝004

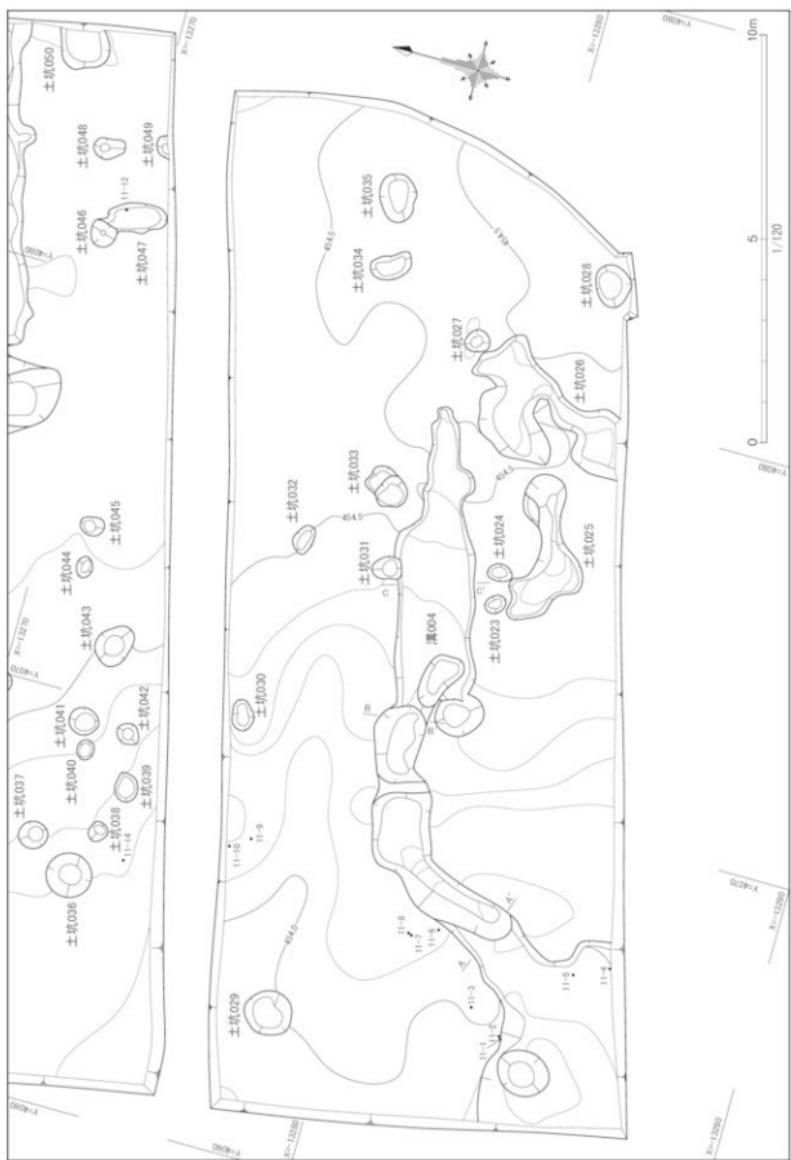
位置) X座標13280～13285、Y座標4065～4080付近にて検出した。

検出状況) 第2層黒褐色粘質土層下部から第3層黒色土層上部にて精査の上、遺構を検出した。

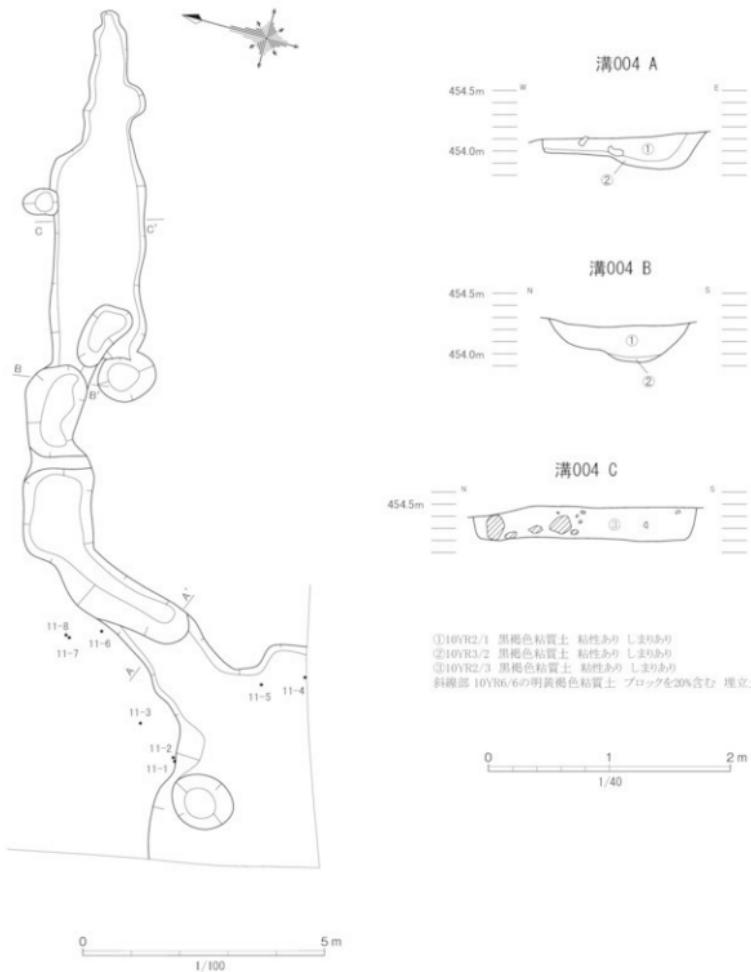
形状と規模) 東西方向に延びる溝跡で、不整形である。長さ約17.6mである。

土層堆積状況) A-A'ライン・B-B'ラインには、遺物包含層の土層である黒色粘質土・黒褐色粘質土が堆積する。C-C'ラインの土層は、黒褐色粘質土に、地山の土である明黄褐色粘質土がブロック状に含まれる。C-C'ライン付近の溝004一帯は、整地された可能性が高い。

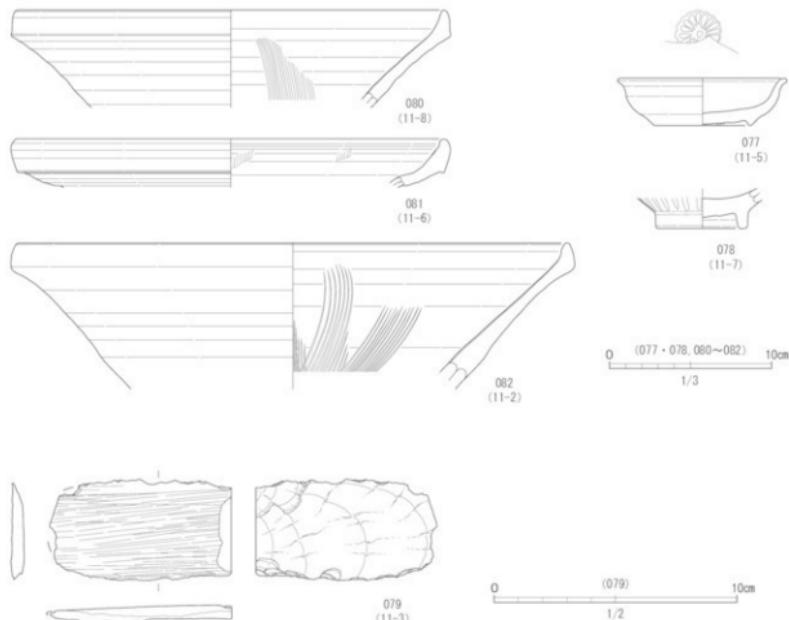
出土遺物) 溝内および溝周辺からは、土師器皿、擂鉢、大窯1期の灰軸丸皿(077)、天目茶碗、青磁碗の破片(078)の他、石製品破片(079)が出土した。擂鉢は、大窯1期が1点(080)、大窯2期が1点(081)出土した。



第41回 58区



第42図 58区溝004



第43図 58区溝004周辺出土遺物

②土坑

土坑 025

位置) X座標 13281～13284、Y座標 4075～4078付近にて検出した。

検出状況) 第2層黒褐色粘質土層下部から第3層黒色土層上部にて精査の上、遺構を検出した。

形状と規模) 長軸 3.60m、短軸 1.66m の不整形な土坑である。底面は湾曲する。

土層堆積状況) 土坑覆土には、黒褐色粘質土が堆積する。

出土遺物) なし。

土坑 026

位置) X座標 13279～13284、Y座標 4077～4082付近にて検出した。

検出状況) 第2層黒褐色粘質土層下部から第3層黒色土層上部にて精査の上、遺構を検出した。

形状と規模) 長軸 4.06m、短軸 3.06m の不整形な土坑である。底面は湾曲する。

土層堆積状況) 土坑覆土には、黒褐色粘質土が堆積する。

出土遺物) 土師器皿および灰釉丸皿の小破片が出土した。

土坑 027

位置) X 座標 13279、Y 座標 4081 付近にて検出した。

検出状況) 第2層黒褐色粘質土層下部から第3層黒色土層上部にて精査の上、遺構を検出した。

形状と規模) 長軸 0.64m、短軸 0.52m のほぼ円形の土坑である。底面は湾曲する。

土層堆積状況) 土坑覆土には、黒褐色粘質土が堆積する。

出土遺物) なし。

土坑 028

位置) X 座標 13282、Y 座標 4083 付近にて検出した。

検出状況) 第2層黒褐色粘質土層下部から第3層黒色土層上部にて精査の上、遺構を検出した。

形状と規模) 長軸 1.08m、短軸 0.84m の楕円形の土坑である。検出面から底面まで 0.84m と深い。底面はやや平坦である。

土層堆積状況) 土坑覆土には、黒褐色粘質土が堆積する。

出土遺物) なし。

土坑 029

位置) X 座標 13279、Y 座標 4064 付近にて検出した。

検出状況) 第2層黒褐色粘質土層下部から第3層黒色土層上部にて精査の上、遺構を検出した。

形状と規模) 長軸 1.18m、短軸 1.14m のほぼ円形の土坑である。底面は湾曲する。

土層堆積状況) 土坑覆土には、粘性の弱く大量の礫を包含する黒褐色土が堆積する。

出土遺物) 捕鉢破片（087）が出土した。

備考) 堆積層のあり方から、昭和初期の田畠造成時に、不要な礫を投棄した廃棄土坑と推定される。

土坑 030

位置) X 座標 13276、Y 座標 4071 付近にて検出した。

検出状況) 第2層黒褐色粘質土層下部から第3層黒色土層上部にて精査の上、遺構を検出した。

形状と規模) 長軸 0.78m、短軸 0.52m の楕円形の土坑である。底面は湾曲する。

土層堆積状況) 土坑覆土には黒褐色土が堆積する。

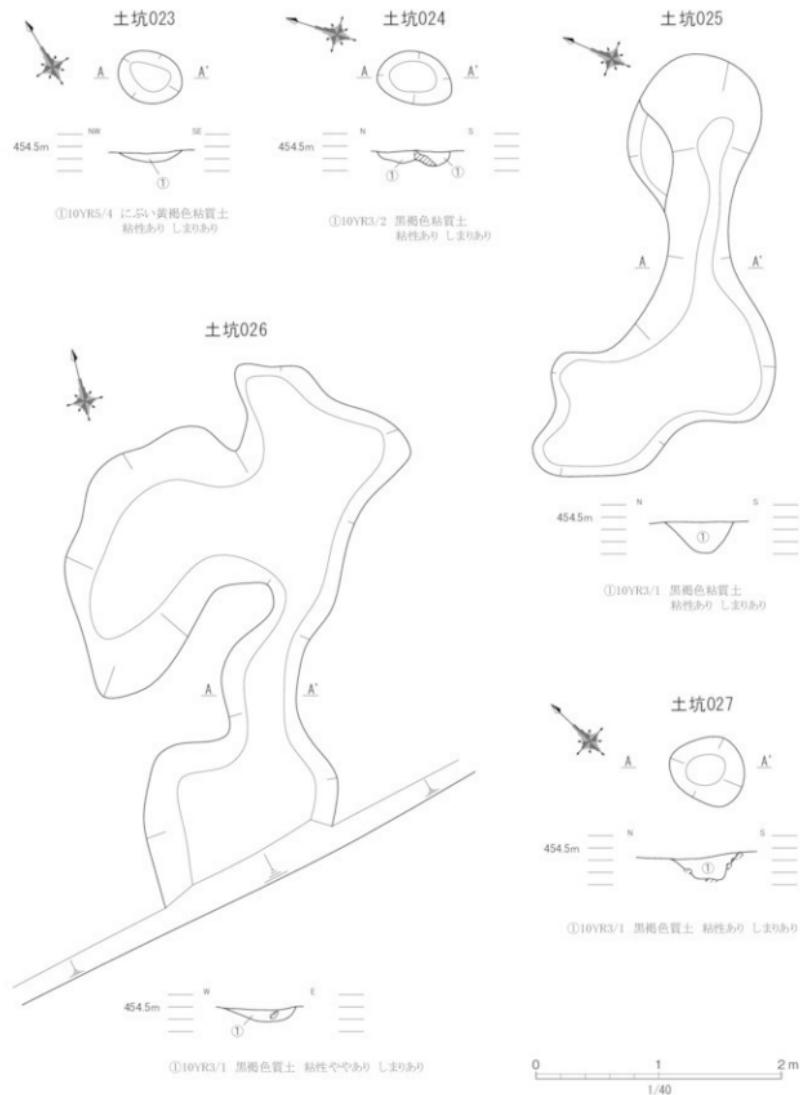
出土遺物) なし。

土坑 031

位置) X 座標 13278、Y 座標 4075 付近にて検出した。

検出状況) 第2層黒褐色粘質土層下部から第3層黒色土層上部にて精査の上、遺構を検出した。

形状と規模) 長軸 0.78m、短軸 0.58m の楕円形の土坑である。底面は平坦である。溝 004 と前後関係にあり、溝 004 より新しく形成された土坑である。



第44図 58区土坑①

土層堆積状況) 土坑覆土には黒色粘質土が堆積する。

出土遺物) なし。

土坑 032

位置) X 座標 13276、Y 座標 4075 付近にて検出した。

検出状況) 第 2 層黒褐色粘質土層下部から第 3 層黒色土層上部にて精査の上、遺構を検出した。

形状と規模) 長軸 0.70m、短軸 0.48m の長楕円形の土坑である。底面は平坦である。

土層堆積状況) 土坑覆土には灰黄褐色土が堆積する。

出土遺物) なし。

土坑 033a

位置) X 座標 13278、Y 座標 4077 付近にて検出した。

検出状況) 第 2 層黒褐色粘質土層下部から第 3 層黒色土層上部にて精査の上、遺構を検出した。

形状と規模) 土坑 033b と前後関係にあり、土坑 033b より古く形成された土坑である。推定長軸 0.76m、推定短軸 0.74m の土坑である。底面は平坦である。

土層堆積状況) 土坑覆土には黒褐色粘質土が堆積する。

出土遺物) 土坑 033a か、あるいは土坑 033b のいずれかに帰属する土師器皿の小破片が出土。

土坑 033b

位置) X 座標 13278、Y 座標 4077 付近にて検出した。

検出状況) 第 2 層黒褐色粘質土層下部から第 3 層黒色土層上部にて精査の上、遺構を検出した。

形状と規模) 土坑 033a と前後関係にあり、土坑 033a より新しく形成された土坑である。長軸 0.81m、短軸 0.76m のほぼ円形の土坑である。底面は平坦である。

土層堆積状況) 土坑覆土には黒褐色粘質土が堆積する。

出土遺物) 土坑 033a か、あるいは土坑 033b のいずれかに帰属する土師器皿の小破片が出土。

土坑 034

位置) X 座標 13276、Y 座標 4082 付近にて検出した。

検出状況) 第 2 層黒褐色粘質土層下部から第 3 層黒色土層上部にて精査の上、遺構を検出した。

形状と規模) 長軸 1.02m、短軸 0.58m の楕円形の土坑である。底面はほぼ平坦である。

土層堆積状況) 土坑覆土には黒褐色土が堆積する。

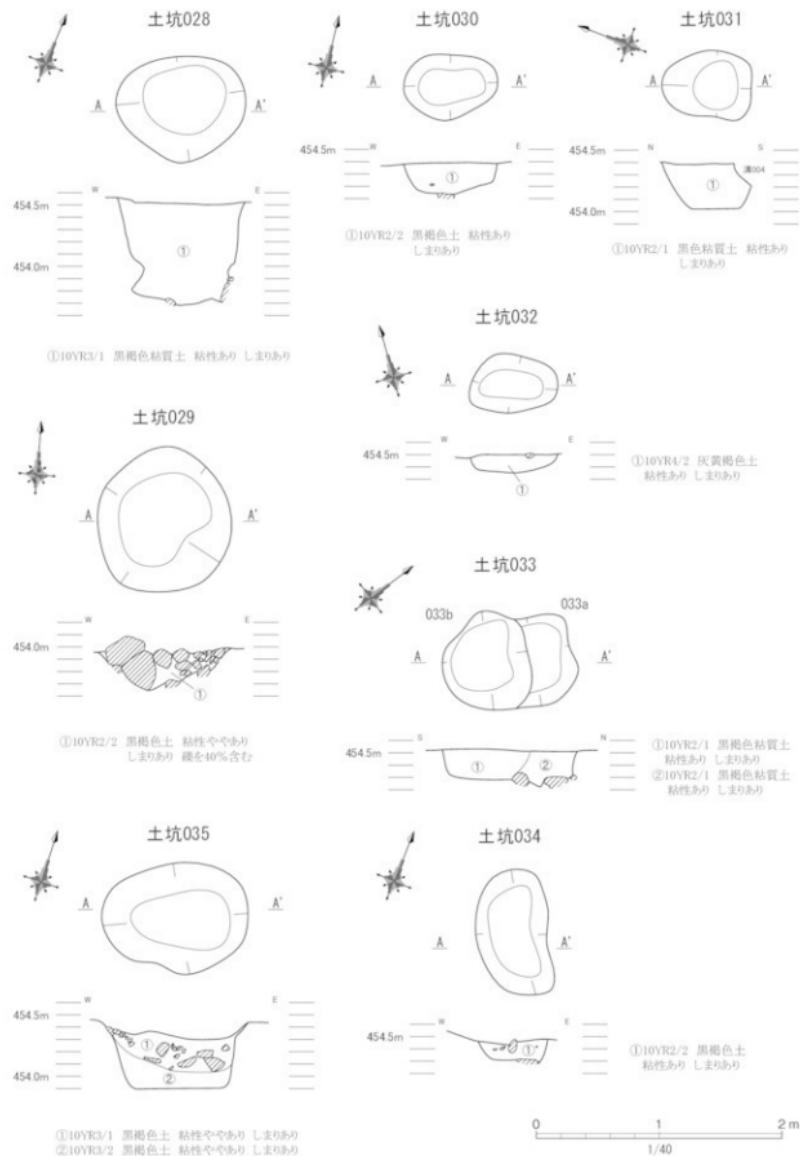
出土遺物) なし。

土坑 035

位置) X 座標 13276、Y 座標 4084 付近にて検出した。

検出状況) 第 2 層黒褐色粘質土層下部から第 3 層黒色土層上部にて精査の上、遺構を検出した。

形状と規模) 長軸 1.21m、短軸 0.92m の長楕円形の土坑である。底面はほぼ平坦である。



第45図 58区土坑②

土層堆積状況) 土坑覆土には、第1層に礫を30%程包含する粘性のやや弱い黒褐色土が、第2層に粘性のやや弱い黒褐色土が堆積する。

出土遺物) なし。

備考) 堆積層のあり方から、昭和初期の田畠造成時に、不要な礫を投棄した廃棄土坑と推定される。

5) 59区・60区の遺構と遺物

①溝跡

溝005

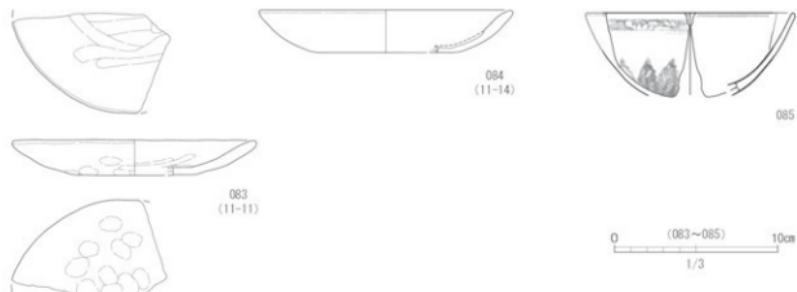
位置) X座標 13260～13270、Y座標 4070～4085付近にて検出した。

検出状況) 検出状況) 第2層黒褐色粘質土層下部から第3層黒色土層上部にて精査の上、遺構を検出した。

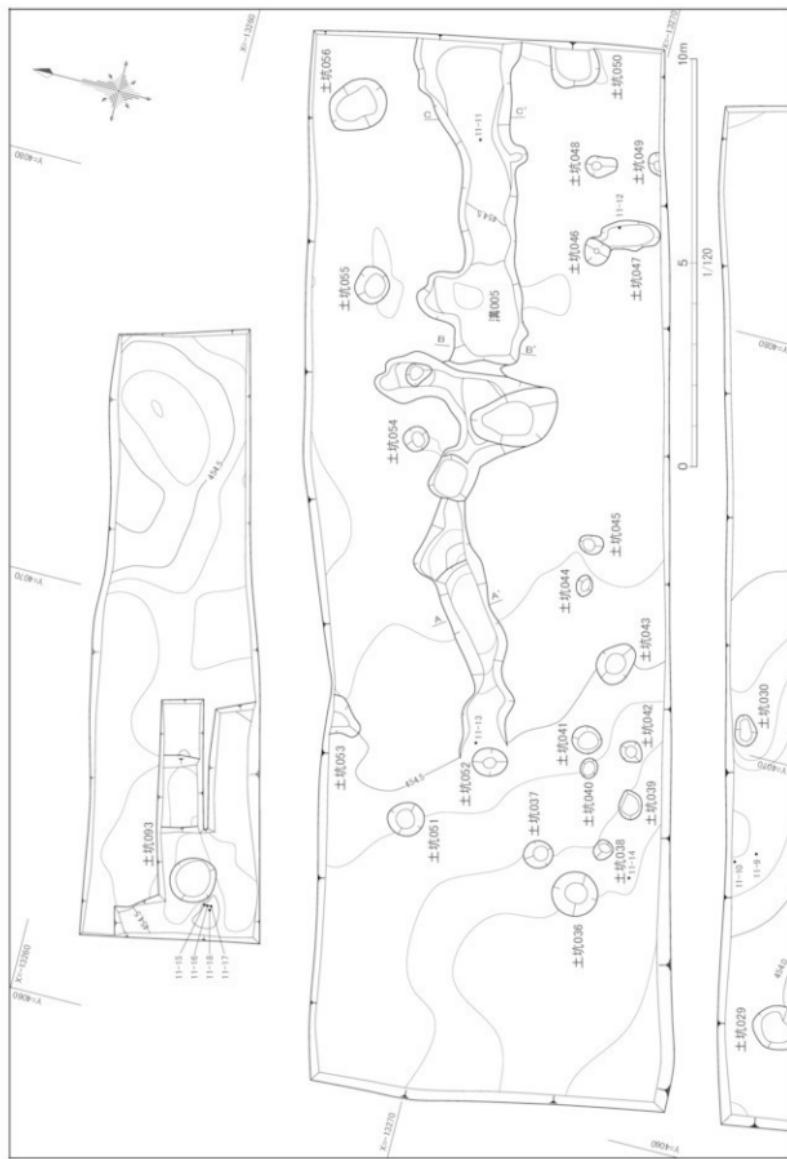
形状と規模) 東西に延びる溝跡で、不整形である。長さ約17.4mである。

土層堆積状況) A-A'ラインでは、溝の最下層に遺物包含層と同じ土層が確認できたが、他のB-B'断面ライン、C-C'ラインでは遺物包含層は確認できず、埋め立て土石と同じ土層が確認できた。そのため、B-B'ラインより東側の溝跡は、昭和初期の田畠の造成の際に、なんらかの掘削により形成された痕跡と推定される。

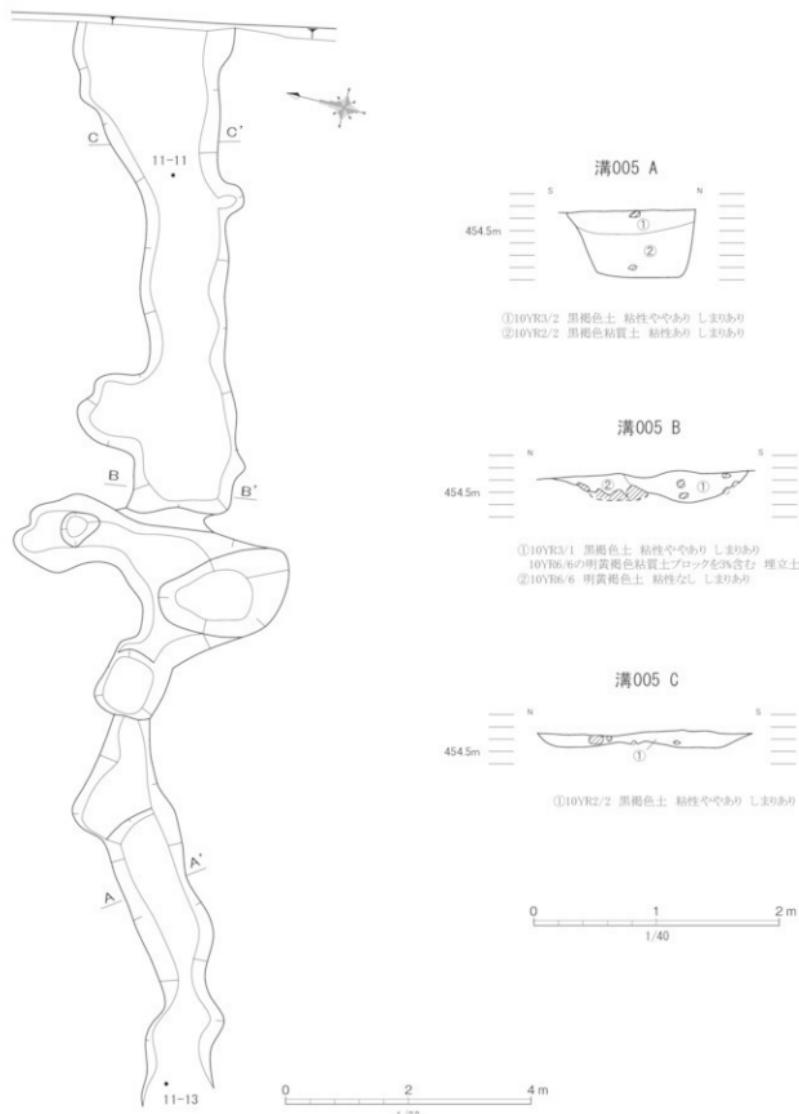
出土遺物) 溝004からは、土師器皿・灰釉丸皿・天目茶碗・擂鉢破片の他、青磁と白磁破片が出土した。土師器破片を除き、器形を復元できる資料はない。溝005からは井川分類B2類の土師器皿口縁部破片(083・084)がそれぞれ出土した。



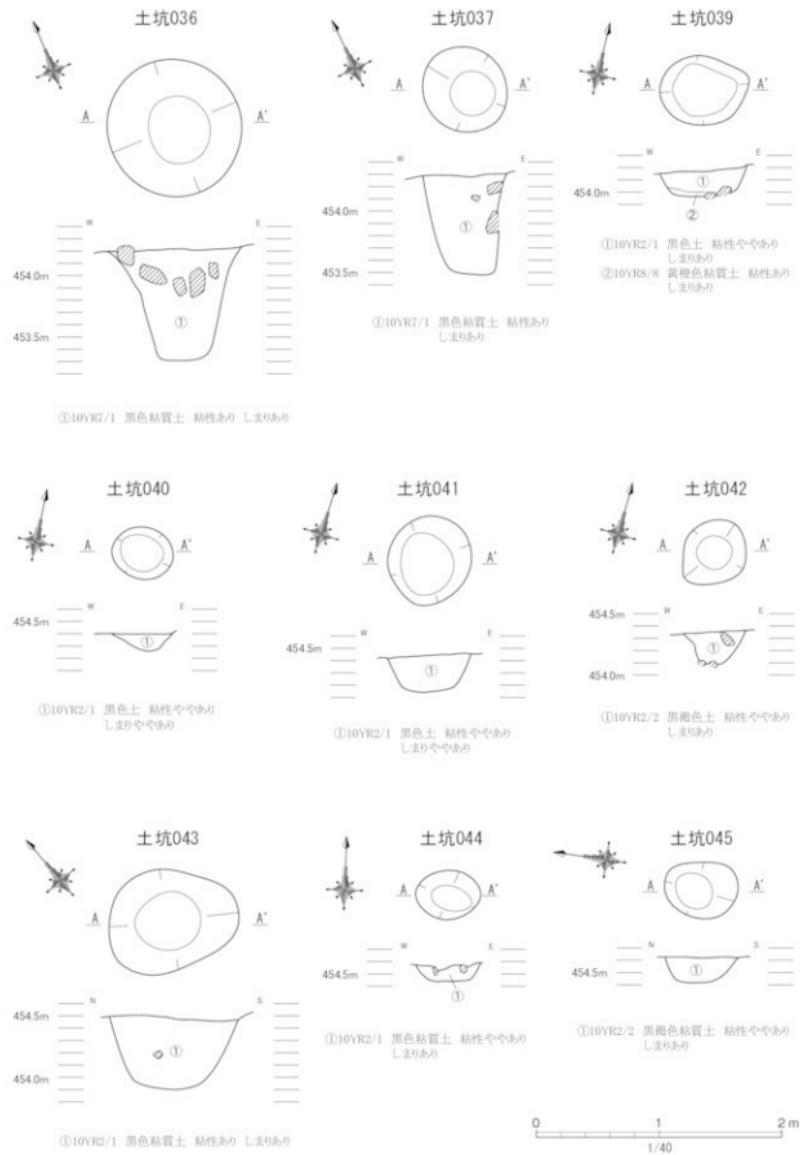
第46図 59区溝005出土遺物



第47図 59・60区



第48図 59区溝005



第49図 59区土坑①

②土坑

土坑 036

位置) X 座標 13273、Y 座標 4066 付近にて検出した。

検出状況) 第2層黒褐色粘質土層下部から第3層黒色土層上部にて精査の上、遺構を検出した。

形状と規模) 長軸 1.11m、短軸 1.09m の円形の土坑である。底面は平坦である。

土層堆積状況) 土坑覆土には黒色粘質土が、巨大な礫を含み堆積する。

出土遺物) なし。

備考) 堆積層のあり方から、昭和初期の田畑造成時に、不要な礫を投棄した廃棄土坑と推定される。

土坑 037

位置) X 座標 13272、Y 座標 4067 付近にて検出した。

検出状況) 第2層黒褐色粘質土層下部から第3層黒色土層上部にて精査の上、遺構を検出した。

形状と規模) 長軸 0.79m、短軸 0.68m の円形の土坑である。底面は平坦である。

土層堆積状況) 土坑覆土には黒色粘質土が、やや大きな礫を含み堆積する。

出土遺物) なし。

備考) 堆積層のあり方から、昭和初期の田畑造成時に、不要な礫を投棄した廃棄土坑と推定される。

土坑 039

位置) X 座標 13274、Y 座標 4068 付近にて検出した。

検出状況) 第2層黒褐色粘質土層下部から第3層黒色土層上部にて精査の上、遺構を検出した。

形状と規模) 長軸 0.74m、短軸 0.58m の楕円形の土坑である。底面はほぼ平坦である。

土層堆積状況) 土坑覆土上層に、粘性の弱い黒色土が堆積する。

出土遺物) 近世陶器の碗破片が黒色土層中から 1 点 (085) 出土した。

土坑 040

位置) X 座標 13272、Y 座標 4067 付近にて検出した。

検出状況) 第2層黒褐色粘質土層下部から第3層黒色土層上部にて精査の上、遺構を検出した。

形状と規模) 長軸 0.48m、短軸 0.44m の楕円形の土坑である。底面は湾曲する。

土層堆積状況) 土坑覆土に粘性の弱い黒色土が堆積する。

出土遺物) なし。

土坑 041

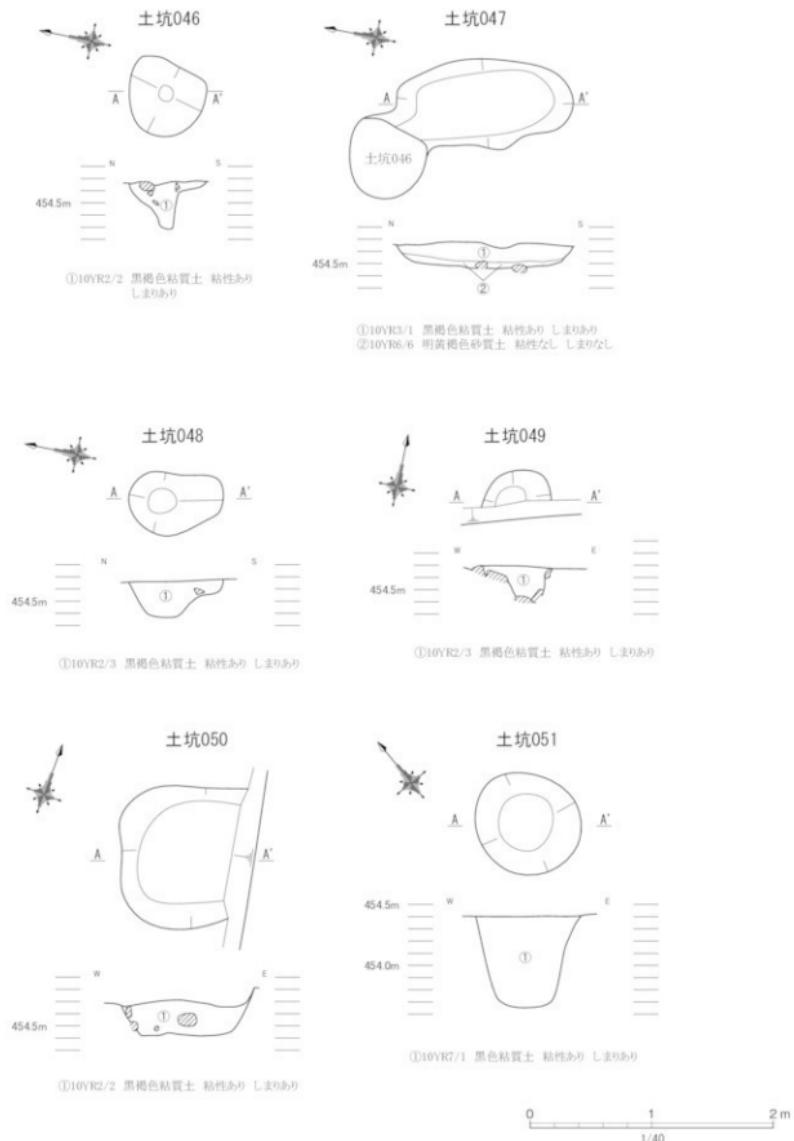
位置) X 座標 13272、Y 座標 4067 付近にて検出した。

検出状況) 第2層黒褐色粘質土層下部から第3層黒色土層上部にて精査の上、遺構を検出した。

形状と規模) 長軸 0.74m、短軸 0.66m の円形の土坑である。底面はほぼ平坦である。

土層堆積状況) 土坑覆土に粘性の弱い黒色土が堆積する。

出土遺物) なし。



第50図 59区土坑②

土坑 042

位置) X 座標 13273、Y 座標 4067 付近にて検出した。

検出状況) 第2層黒褐色粘質土層下部から第3層黒色土層上部にて精査の上、遺構を検出した。

形状と規模) 長軸 0.62m、短軸 0.54m のやや楕円形の土坑である。底面は湾曲する。

土層堆積状況) 土坑覆土に粘性の弱い黒褐色土が堆積する。

出土遺物) なし。

土坑 043

位置) X 座標 13273、Y 座標 4072 付近にて検出した。

検出状況) 第2層黒褐色粘質土層下部から第3層黒色土層上部にて精査の上、遺構を検出した。

形状と規模) 長軸 1.08m、短軸 0.82m の楕円形の土坑である。底面は湾曲する。

土層堆積状況) 土坑覆土に黒褐色粘質土が堆積する。

出土遺物) なし。

土坑 044

位置) X 座標 13271、Y 座標 4073 付近にて検出した。

検出状況) 第2層黒褐色粘質土層下部から第3層黒色土層上部にて精査の上、遺構を検出した。

形状と規模) 長軸 0.52m、短軸 0.42m の楕円形の土坑である。底面はほぼ平坦である。

土層堆積状況) 土坑覆土に黒褐色粘質土が堆積する。

出土遺物) なし。

土坑 045

位置) X 座標 13271、Y 座標 4074 付近にて検出した。

検出状況) 第2層黒褐色粘質土層下部から第3層黒色土層上部にて精査の上、遺構を検出した。

形状と規模) 長軸 0.52m、短軸 0.42m の楕円形の土坑である。底面はほぼ平坦である。

土層堆積状況) 土坑覆土に黒褐色粘質土が堆積する。

出土遺物) なし。

土坑 046

位置) X 座標 13269、Y 座標 4081 付近にて検出した。

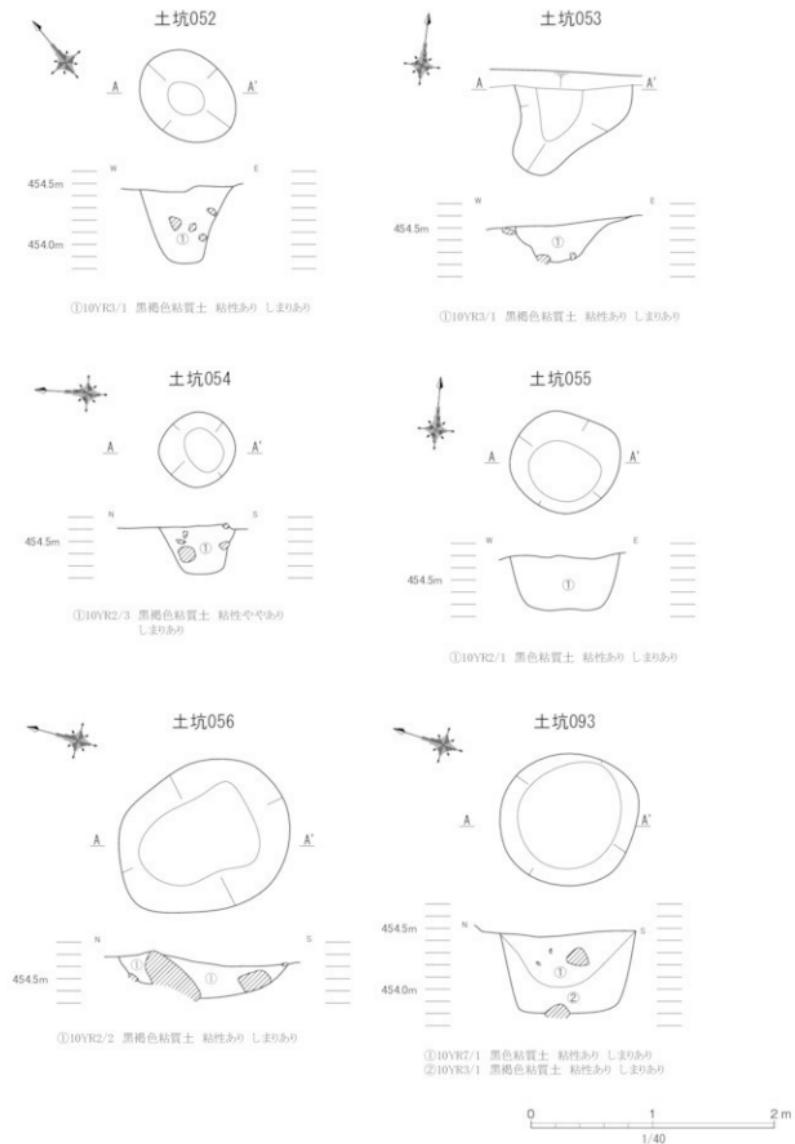
検出状況) 第2層黒褐色粘質土層下部から第3層黒色土層上部にて精査の上、遺構を検出した。

形状と規模) 長軸 0.68m、短軸 0.58m のほぼ円形の土坑である。底面は平坦ではなく、尖頭状である。

土層堆積状況) 土坑覆土に黒褐色粘質土が堆積する。

出土遺物) 灰釉陶器小破片が 1 点出土した。

土坑 047



第51図 59区土坑③及び60区土坑

位置) X 座標 13270、Y 座標 4081 付近にて検出した。

検出状況) 第2層黒褐色粘質土層下部から第3層黒色土層上部にて精査の上、遺構を検出した。

形状と規模) 長軸 1.50m、短軸 0.76m の長楕円形の土坑である。底面はおおむね平坦である。

土層堆積状況) 土坑覆土上層に黒褐色粘質土が堆積する。

出土遺物) 土師器皿などの小破片が 6 点、擂鉢小破片が 1 点、瀬戸美濃窯の鉄軸徳利 (088) が出土した。

土坑 048

位置) X 座標 13269、Y 座標 4083 付近にて検出した。

検出状況) 第2層黒褐色粘質土層下部から第3層黒色土層上部にて精査の上、遺構を検出した。

形状と規模) 長軸 0.76m、短軸 0.52m の長楕円形の土坑である。底面は湾曲する。

土層堆積状況) 土坑覆土に黒褐色粘質土が堆積する。

出土遺物) 土師器の小破片が 2 点出土した。

土坑 049

位置) X 座標 13270、Y 座標 4083 付近にて検出した。一部は調査区域外に存在する。

検出状況) 第2層黒褐色粘質土層下部から第3層黒色土層上部にて精査の上、遺構を検出した。

形状と規模) 長軸 0.58m、短軸 0.26m の楕円形の土坑である。底面は湾曲する。

土層堆積状況) 土坑覆土に黒褐色粘質土が堆積する。

出土遺物) 土師器の小破片が 1 点出土した。

点出土した。

土坑 050

位置) X 座標 13268、Y 座標 4085 付近にて検出した。一部は調査区域外に存在する。

検出状況) 第2層黒褐色粘質土層下部から第3層黒色土層上部にて精査の上、遺構を検出した。

形状と規模) 長軸 1.18m、短軸 0.96m の楕円形の土坑である。底面は平坦である。

土層堆積状況) 土坑覆土に黒褐色粘質土が堆積する。

出土遺物) 擂鉢破片が 1 点出土した。

土坑 051

位置) X 座標 13270、Y 座標 4083 付近にて検出した。一部は調査区域外に存在する。

検出状況) 第2層黒褐色粘質土層下部から第3層黒色土層上部にて精査の上、遺構を検出した。

形状と規模) 長軸 0.88m、短軸 0.86m のほぼ円形の土坑である。底面は平坦である。

土層堆積状況) 土坑覆土に黒色粘質土が堆積する。

出土遺物) なし。

備考) 堆積土のあり方から、昭和初期の田畠造成時に不要な礫を投棄した廃棄土坑と推定される。

土坑 052

位置) X 座標 13270、Y 座標 4068 付近にて検出した。一部は調査区域外に存在する。

検出状況) 第2層黒褐色粘質土層下部から第3層黒色土層上部にて精査の上、遺構を検出した。

形状と規模) 長軸 0.86m、短軸 0.68m の長楕円形の土坑である。底面は平坦である。

土層堆積状況) 土坑覆土に小礫を 2 % 程度含む黒褐色粘質土が堆積する。

出土遺物) 出土遺物なし。

土坑 053

位置) X 座標 13267、Y 座標 4068 付近にて検出した。一部は調査区域外に存在する。

検出状況) 第2層黒褐色粘質土層下部から第3層黒色土層上部にて精査の上、遺構を検出した。

形状と規模) 長軸 0.98m、短軸 0.74m 不整形の土坑である。底面は湾曲する。

土層堆積状況) 土坑覆土に黒褐色粘質土が堆積する。

出土遺物) 梶鉢破片が 1 点出土した。

土坑 054

位置) X 座標 13266、Y 座標 4076 付近にて検出した。

検出状況) 第2層黒褐色粘質土層下部から第3層黒色土層上部にて精査の上、遺構を検出した。

形状と規模) 長軸 0.64m、短軸 0.62m のほぼ円形の土坑である。底面は平坦である。

土層堆積状況) 土坑覆土に黒褐色粘質土が堆積する。

出土遺物) なし。

土坑 055

位置) X 座標 13264、Y 座標 4079 付近にて検出した。

検出状況) 第2層黒褐色粘質土層下部から第3層黒色土層上部にて精査の上、遺構を検出した。

形状と規模) 長軸 0.72m、短軸 0.64m のほぼ円形の土坑である。底面はほぼ平坦である。

土層堆積状況) 土坑覆土に黒色粘質土が堆積する。

出土遺物) なし。

土坑 056

位置) X 座標 13263、Y 座標 4083 付近にて検出した。

検出状況) 第2層黒褐色粘質土層下部から第3層黒色土層上部にて精査の上、遺構を検出した。

形状と規模) 長軸 1.48m、短軸 1.24m の楕円形の土坑である。底面は湾曲する。

土層堆積状況) 土坑覆土に巨大礫を含む黒褐色粘質土が堆積する。

出土遺物) なし。

土坑 093

位置) X 座標 13264、Y 座標 4064 付近にて検出した。

検出状況) 第 2 層黒褐色粘質土層下部から第 3 層黒色土層上部にて精査の上、遺構を検出した。

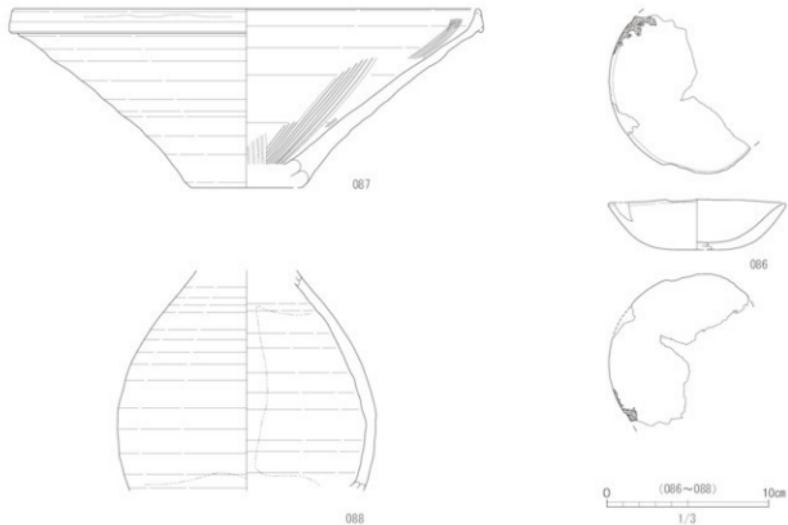
形状と規模) 長軸 1.12m、短軸 1.11m の円形の土坑である。底面は平坦である。

土層堆積状況) 覆土下層に黒褐色粘質土が堆積し、覆土上層に黒色粘質土が堆積する。

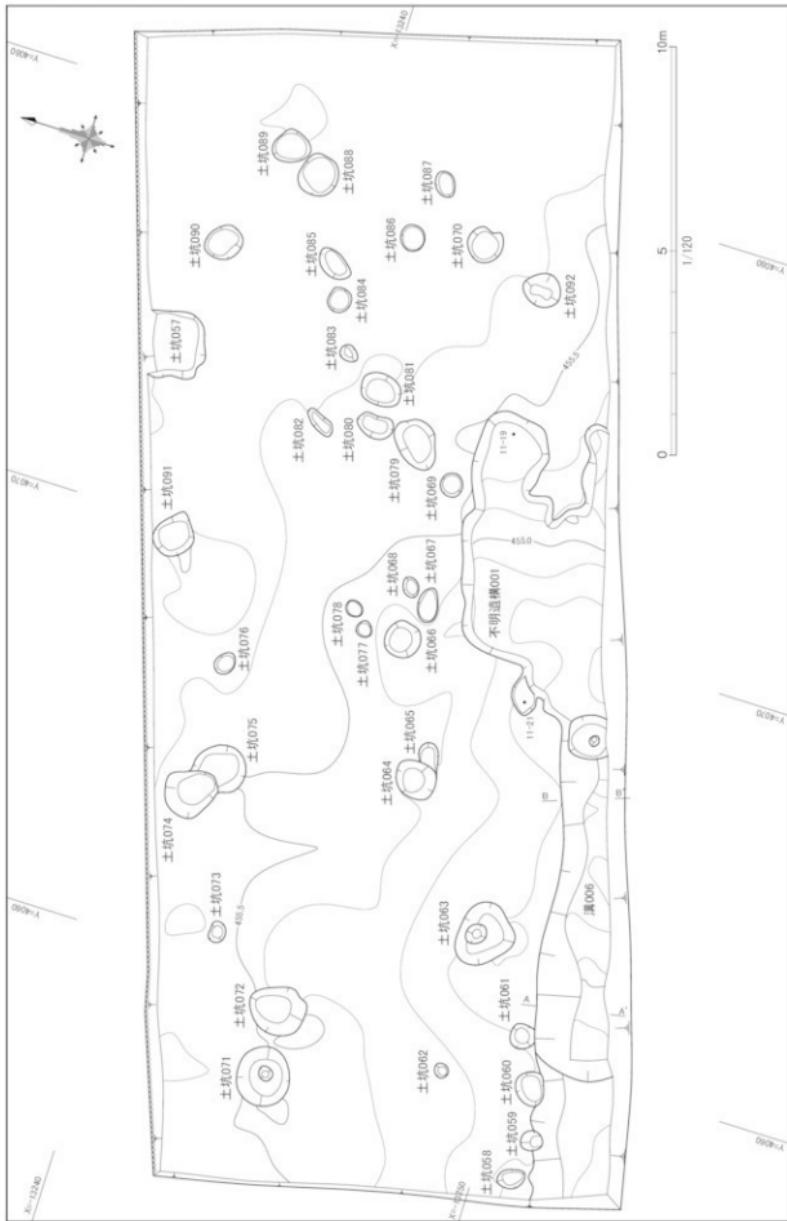
出土遺物) なし。

③包含層出土の遺物

086 は土師器の皿である。内面・外面とも横ナデで端正に仕上げられ、指頭圧痕はほとんど認められない。口縁部の処理も、先端がやや細くなる。口縁部の一部にタールが付着する。



第 52 図 59 区土坑及び 60 区包含層出土遺物



第53図 61区

6) 61区の遺構と遺物

①溝跡

溝006

位置) X座標 13250 ~ 13255 付近、Y座標 4060 ~ 4075 付近にて検出した

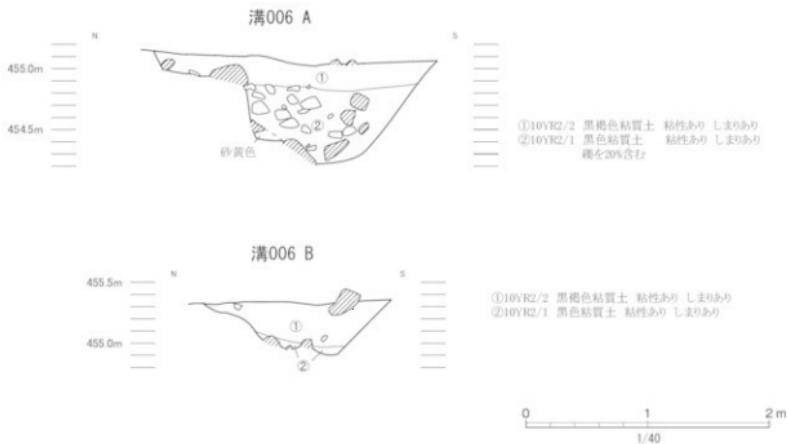
検出状況) 第2層黒褐色粘質土層下部から第3層明黄褐色粘質土層上部にて精査の上、遺構を検出した。なお、後述する不明遺構001とは、X座標 13248・Y座標 4068 付近の擾乱によって形成された土坑を挟み、連続的な関係にある。しかしながら、不明遺構001から出土する遺物の特殊性、そして土層の堆積状況を鑑み、ここでは不明遺構001を溝006から分離し報告することにする。

形状と規模) 東西に延びる溝跡で、長さ約 11.8m である。

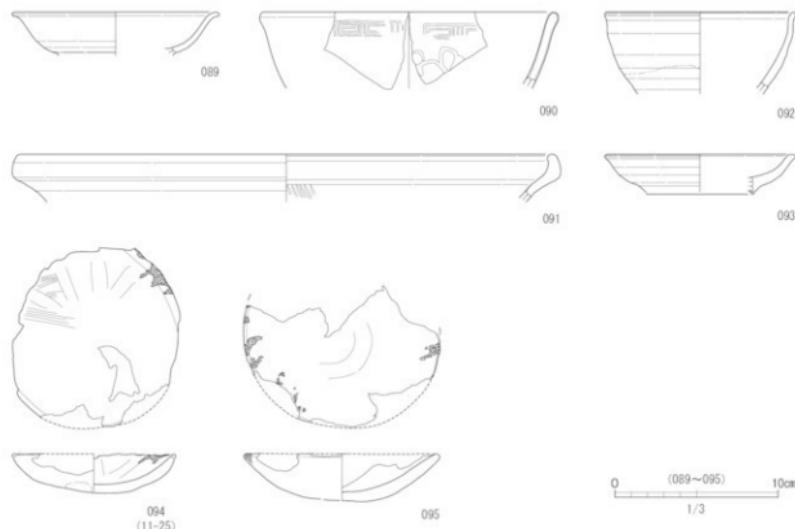
土層堆積状況) A-A' ラインでは、溝の下部に疊を含む黒色粘質土が堆積し、その上部に黒褐色粘質土が堆積する。B-B' ラインでも A-A' 断面ラインと同様な堆積が認められた。

出土遺物) 土師器皿、灰釉丸皿、天目茶碗、擂鉢、青磁、白磁の破片が出土するが、多くは断片的なもので、器形を復元できる資料はわずかである。089は白磁で、森田分類のE群に該当する端反り皿である。090は青磁破片で、香炉の口縁部破片であろう。091は擂鉢口縁部破片で、古瀬戸後期IV期新段階に該当する。092は天目茶碗破片である。大窯1期に該当する。093は灰釉端反皿で、大窯1期に該当する。094・095は土師器皿である。両方とも口縁にタールが付着する。

②土坑



第54図 61区溝006



第55図 61区溝006出土遺物

土坑 057

位置) X座標 13236、Y座標 4074 付近にて検出した。

検出状況) 第2層黒褐色粘質土層下部から第3層黒色土層上部にて精査の上、遺構を検出した。

形状と規模) 長軸 1.62m、短軸 1.30m の長方形の土坑である。底面は湾曲する。

土層堆積状況) 土坑覆土に黒褐色粘質土が堆積する。

出土遺物) 覆土中から、戦国期の擂鉢破片の他、近世の土瓶（096・097・099）、染付碗破片（098）が出土した。

土坑 058

位置) X座標 13251、Y座標 4057 付近にて検出した。

検出状況) 第2層黒褐色粘質土層下部から第3層黒色土層上部にて精査の上、遺構を検出した。

形状と規模) 長軸 0.68m、短軸 0.46m の長楕円形の土坑である。底面は湾曲する。

土層堆積状況) 土坑覆土に黒褐色粘質土が堆積する。

出土遺物) なし。

土坑 059

位置) X 座標 13251、Y 座標 4058 付近にて検出した。

検出状況) 第2層黒褐色粘質土層下部から第3層黒色土層上部にて精査の上、遺構を検出した。

形状と規模) 長軸 0.54m、短軸 0.50m のほぼ円形の土坑である。底面は湾曲する。

土層堆積状況) 土坑覆土に黒褐色粘質土が堆積する。

出土遺物) なし。

土坑 060

位置) X 座標 13251、Y 座標 4059 付近にて検出した。

検出状況) 第2層黒褐色粘質土層下部から第3層黒色土層上部にて精査の上、遺構を検出した。

形状と規模) 長軸 0.86m、短軸 0.68m のほぼ長楕円形の土坑である。底面はほぼ平坦である。

土層堆積状況) 土坑覆土に黒褐色粘質土が堆積する。

出土遺物) なし。

土坑 061

位置) X 座標 13250、Y 座標 4060 付近にて検出した。

検出状況) 第2層黒褐色粘質土層下部から第3層黒色土層上部にて精査の上、遺構を検出した。

形状と規模) 長軸 0.64m、短軸 0.62m のほぼ長楕円形の土坑である。底面は湾曲する。

土層堆積状況) 土坑覆土に黒褐色粘質土が堆積する。

出土遺物) なし。

土坑 062

位置) X 座標 13249、Y 座標 4058 付近にて検出した。

検出状況) 第2層黒褐色粘質土層下部から第3層黒色土層上部にて精査の上、遺構を検出した。

形状と規模) 長軸 0.38m、短軸 0.30m のほぼ円形の土坑である。底面は湾曲する。

土層堆積状況) 土坑覆土に黒褐色粘質土が堆積する。

出土遺物) なし。

土坑 063

位置) X 座標 13248、Y 座標 4063 付近にて検出した。

検出状況) 第2層黒褐色粘質土層下部から第3層黒色土層上部にて精査の上、遺構を検出した。

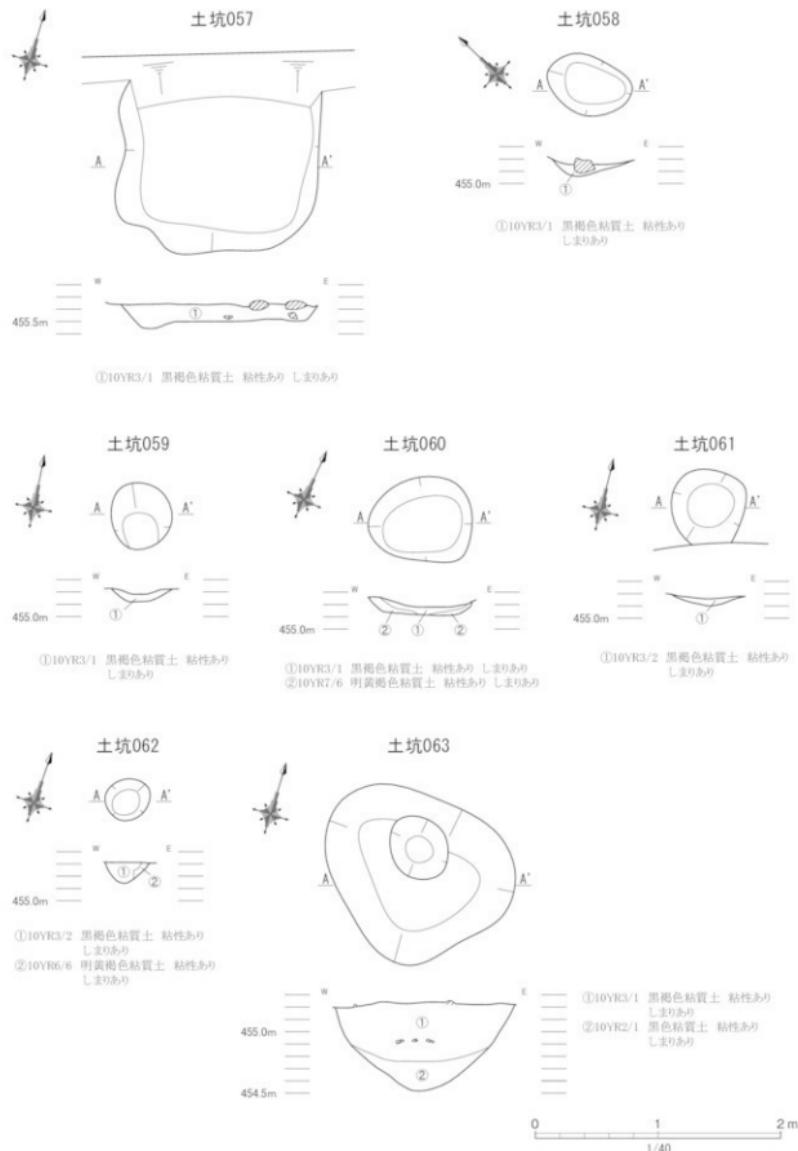
形状と規模) 長軸 1.62m、短軸 1.36m の不整形の土坑である。底面は湾曲する。

土層堆積状況) 土坑覆土に黒褐色粘質土が堆積する。

出土遺物) なし。

土坑 064

位置) X 座標 13246、Y 座標 4066 付近にて検出した。



第56図 61区土坑①

検出状況) 第2層黒褐色粘質土層下部から第3層黒色土層上部にて精査の上、遺構を検出した。

形状と規模) 長軸1.02m、短軸0.90mの不整形の土坑である。底面は平坦である。

土層堆積状況) 土坑覆土に、人頭大等の巨石を30%程度含む黒色粘質土が堆積する。

出土遺物) なし。

備考) 堆積層のあり方から、昭和初期の田畑造成時に、不要な礫を投棄した廃棄土坑と推定される。

土坑 065

位置) X座標13246、Y座標4066付近にて検出した。土坑064に先行する土坑である。

検出状況) 第2層黒褐色粘質土層下部から第3層黒色土層上部にて精査の上、遺構を検出した。

形状と規模) 長軸0.56m、短軸0.48mの長楕円形の土坑である。底面は平坦である。

土層堆積状況) 土坑覆土に黒褐色粘質土が堆積する。

出土遺物) なし。

土坑 066

位置) X座標13245、Y座標4070付近にて検出した。

検出状況) 第2層黒褐色粘質土層下部から第3層黒色土層上部にて精査の上、遺構を検出した。

形状と規模) 長軸0.56m、短軸0.48mのほぼ円形の土坑である。底面はやや湾曲する。

土層堆積状況) 土坑覆土に人頭大の巨石を2%程度含む黒色粘質土が堆積する。

出土遺物) なし。

備考) 堆積層のあり方から、昭和初期の田畑造成時に、不要な礫を投棄した廃棄土坑と推定される。

土坑 067（図面なし）

位置) X座標13245、Y座標4070付近にて検出した。

検出状況) 第2層黒褐色粘質土層下部から第3層黒色土層上部にて精査の上、遺構を検出した。

形状と規模) 長軸0.56m、短軸0.48mのほぼ円形の土坑である。底面はやや湾曲する。

土層堆積状況) 不明。

出土遺物) なし。

土坑 068

位置) X座標13244、Y座標4070付近にて検出した。

検出状況) 第2層黒褐色粘質土層下部から第3層黒色土層上部にて精査の上、遺構を検出した。

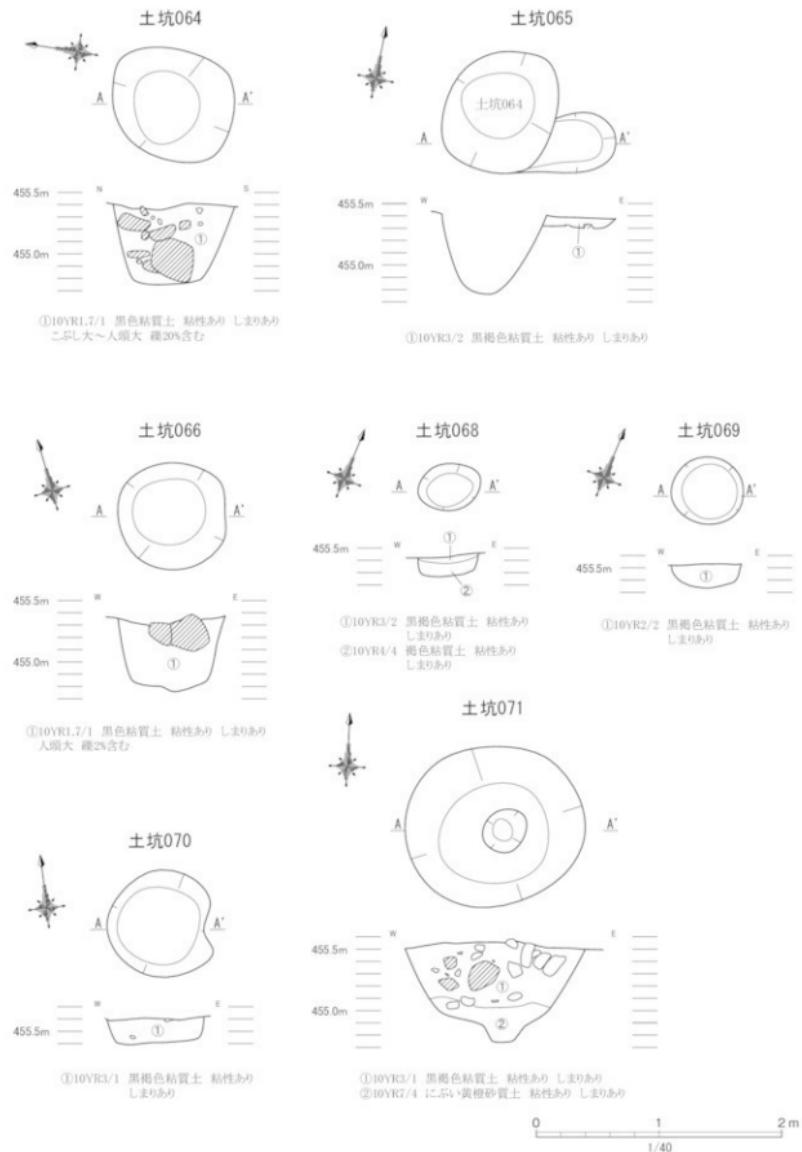
形状と規模) 長軸0.48m、短軸0.40mの長楕円形の土坑である。底面はほぼ平坦である。

土層堆積状況) 覆土上層に黒褐色粘質土、覆土下層に褐色粘質土が堆積する。

出土遺物) なし。

土坑 069

位置) X座標13244、Y座標4073付近にて検出した。



第57図 61区土坑②

検出状況) 第2層黒褐色粘質土層下部から第3層黒色土層上部にて精査の上、遺構を検出した。

形状と規模) 長軸0.60m、短軸0.56mの円形の土坑である。底面はやや湾曲する。

土層堆積状況) 覆土には黒褐色粘質土が堆積する。

出土遺物) なし。

土坑 070

位置) X座標13244、Y座標4079付近にて検出した。

検出状況) 第2層黒褐色粘質土層下部から第3層黒色土層上部にて精査の上、遺構を検出した。

形状と規模) 長軸0.90m、短軸0.88mのほぼ円形の土坑である。底面はほぼ平坦である。

土層堆積状況) 覆土には黒褐色粘質土が堆積する。

出土遺物) なし。

土坑 071

位置) X座標13244、Y座標4057付近にて検出した。

検出状況) 第2層黒褐色粘質土層下部から第3層黒色土層上部にて精査の上、遺構を検出した。

形状と規模) 長軸1.46m、短軸1.28mのほぼ円形の土坑である。底面は湾曲し、最も深い部分に更に円形の掘り込みがある。

土層堆積状況) 覆土下層にはにぶい黄橙砂質土が堆積し、覆土上層には黒褐色粘質土が堆積する。

出土遺物) なし。

土坑 072

位置) X座標13244、Y座標4059付近にて検出した。

検出状況) 第2層黒褐色粘質土層下部から第3層黒色土層上部にて精査の上、遺構を検出した。

形状と規模) 長軸1.40m、短軸1.24mの長楕円形の土坑である。底面はゆるく湾曲する。

土層堆積状況) 覆土下層には黒褐色粘質土が堆積し、覆土上層には黒色粘質土が堆積する。

出土遺物) なし。

土坑 073

位置) X座標13242、Y座標4061付近にて検出した。

検出状況) 第2層黒褐色粘質土層下部から第3層黒色土層上部にて精査の上、遺構を検出した。

形状と規模) 長軸0.52m、短軸0.42mの長楕円形の土坑である。底面はゆるく湾曲する。

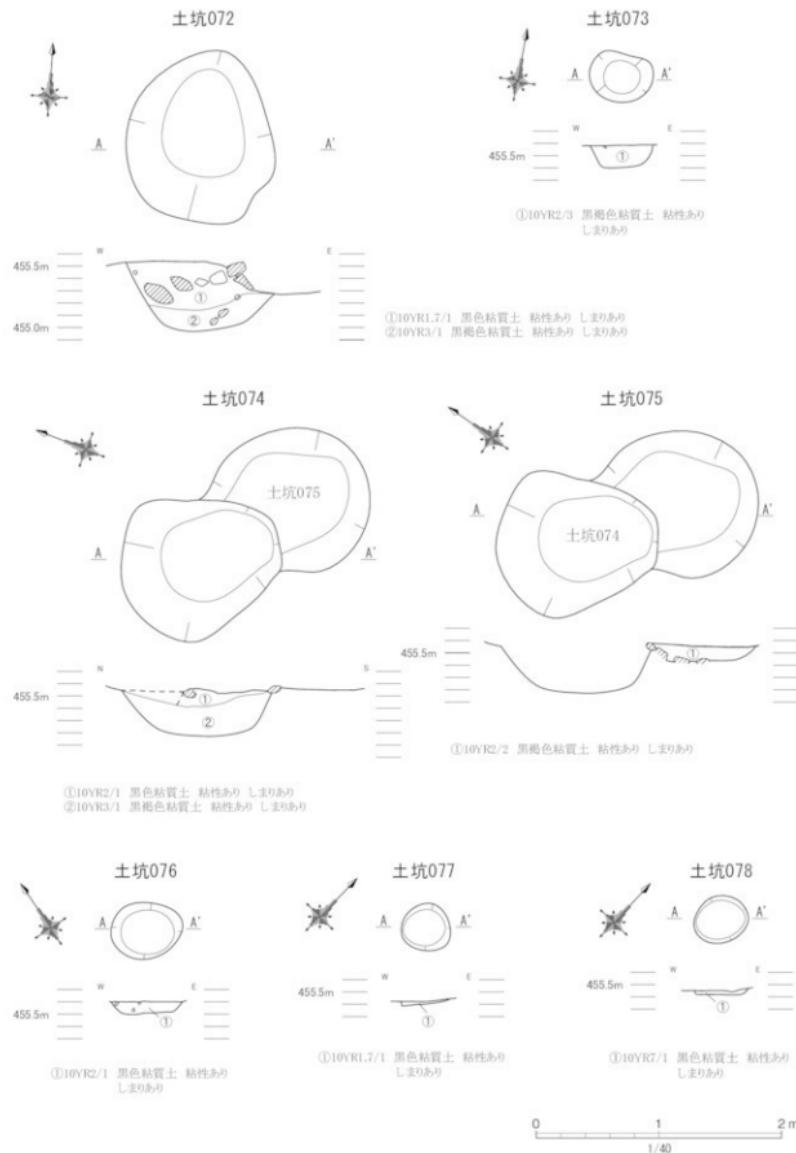
土層堆積状況) 覆土には黒色粘質土が堆積する。

出土遺物) なし。

土坑 074・075

位置) X座標13242、Y座標4061付近にて検出した。

検出状況) 第2層黒褐色粘質土層下部から第3層黒色土層上部にて精査の上、遺構を検出した。



第58図 61区土坑(3)

形状と規模) 長軸 2.20m、短軸 0.80m の長楕円形の土坑である。底面はゆるく湾曲する。

土層堆積状況) 土坑 074 の覆土下層には黒褐色粘質土が、覆土上層には黒色粘質土が堆積する。土坑 075 の覆土には黒褐色粘質土が堆積する。

出土遺物) なし。

土坑 076

位置) X 座標 13241、Y 座標 4067 付近にて検出した。

検出状況) 第 2 層黒褐色粘質土層下部から第 3 層黒色土層上部にて精査の上、遺構を検出した。

形状と規模) 長軸 2.20m、短軸 0.80m の長楕円形の土坑である。底面はゆるく湾曲する。

土層堆積状況) 覆土下層には黒褐色粘質土が、覆土上層には黒色粘質土が堆積する。

出土遺物) なし。

土坑 077

位置) X 座標 13244、Y 座標 4069 付近にて検出した。

検出状況) 第 2 層黒褐色粘質土層下部から第 3 層黒色土層上部にて精査の上、遺構を検出した。

形状と規模) 長軸 0.39m、短軸 0.38m の円形の土坑である。底面はゆるく湾曲する。

土層堆積状況) 覆土には黒色粘質土が堆積する。

出土遺物) 戦国期の擂鉢破片が 1 点出土した。

土坑 078

位置) X 座標 13243、Y 座標 4069 付近にて検出した。

検出状況) 第 2 層黒褐色粘質土層下部から第 3 層黒色土層上部にて精査の上、遺構を検出した。

形状と規模) 長軸 0.42m、短軸 0.38m の円形の土坑である。底面はゆるく湾曲する。

土層堆積状況) 覆土には黒色粘質土が堆積する。

出土遺物) なし。

土坑 079

位置) X 座標 13243、Y 座標 4073 付近にて検出した。

検出状況) 第 2 層黒褐色粘質土層下部から第 3 層黒色土層上部にて精査の上、遺構を検出した。

形状と規模) 長軸 1.32m、短軸 0.96m の長円形の土坑である。底面はゆるく湾曲する。

土層堆積状況) 覆土には直径 30cm 程度の巨大礫を 2 % 程度含む黒色粘質土が堆積する。

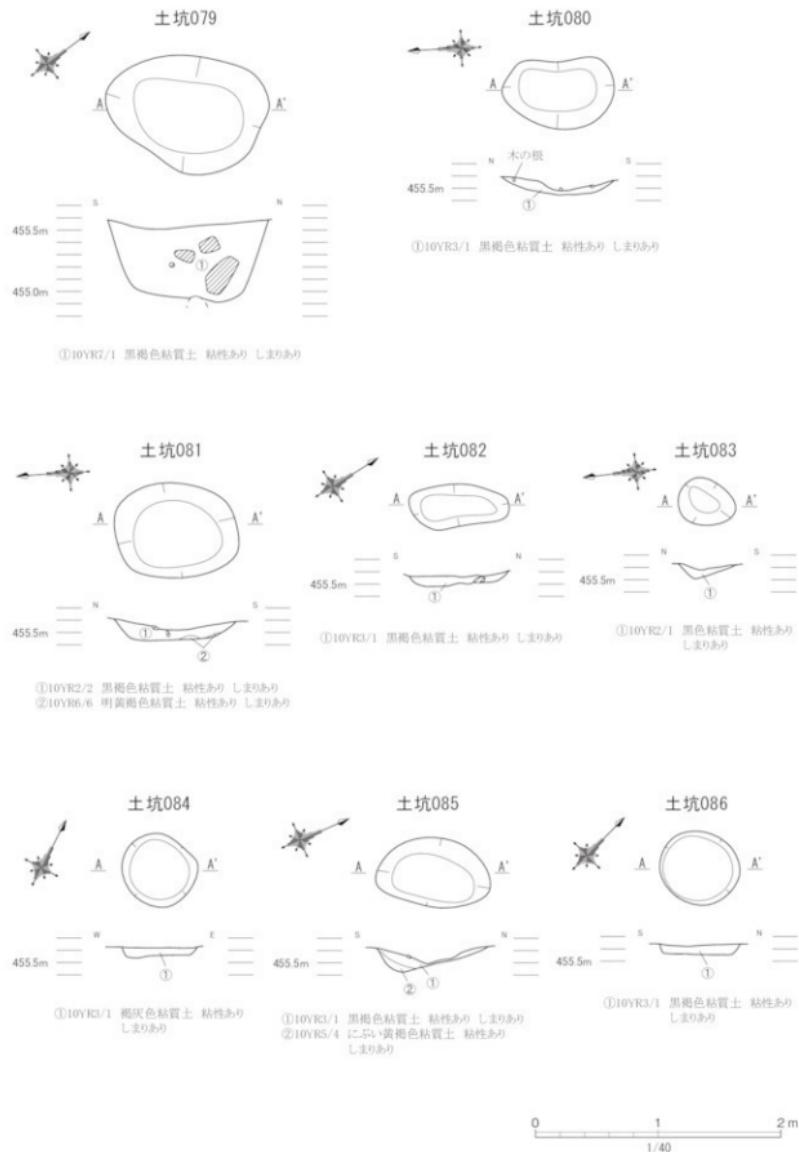
出土遺物) なし。

土坑 080

位置) X 座標 13243、Y 座標 4074 付近にて検出した。

検出状況) 第 2 層黒褐色粘質土層下部から第 3 層黒色土層上部にて精査の上、遺構を検出した。

形状と規模) 長軸 0.90m、短軸 0.56m の長円形の土坑である。底面はゆるく湾曲する。



第59図 61区土坑(4)

土層堆積状況) 覆土には黒褐色粘質土が堆積する。

出土遺物) なし。

土坑 081

位置) X 座標 13242、Y 座標 4074 付近にて検出した。

検出状況) 第2層黒褐色粘質土層下部から第3層黒色土層上部にて精査の上、遺構を検出した。

形状と規模) 長軸 0.98m、短軸 0.78m の長円形の土坑である。底面はほぼ平坦である。

土層堆積状況) 覆土には黒褐色粘質土が堆積する。

出土遺物) なし。

土坑 082

位置) X 座標 13242、Y 座標 4074 付近にて検出した。

検出状況) 第2層黒褐色粘質土層下部から第3層黒色土層上部にて精査の上、遺構を検出した。

形状と規模) 長軸 0.81m、短軸 0.36m の長楕円形の土坑である。底面は緩く湾曲する。

土層堆積状況) 覆土には黒褐色粘質土が堆積する。

出土遺物) なし。

土坑 083

位置) X 座標 13242、Y 座標 4075 付近にて検出した。

検出状況) 第2層黒褐色粘質土層下部から第3層黒色土層上部にて精査の上、遺構を検出した。

形状と規模) 長軸 0.46m、短軸 0.38m の楕円形の土坑である。底面は緩く湾曲する。

土層堆積状況) 覆土には黒褐色粘質土が堆積する。

出土遺物) なし。

土坑 084

位置) X 座標 13240、Y 座標 4076 付近にて検出した。

検出状況) 第2層黒褐色粘質土層下部から第3層黒色土層上部にて精査の上、遺構を検出した。

形状と規模) 長軸 0.62m、短軸 0.60m の楕円形の土坑である。底面は緩く湾曲する。

土層堆積状況) 覆土には黒褐色粘質土が堆積する。

出土遺物) なし。

土坑 085

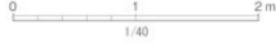
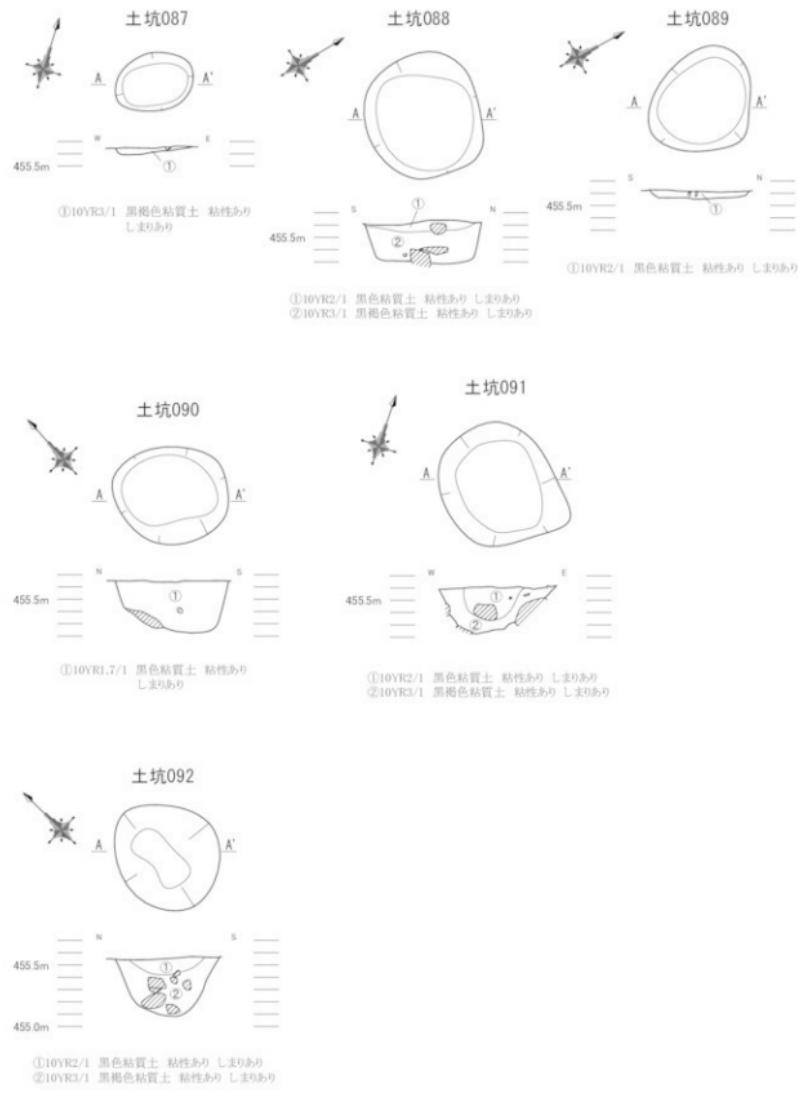
位置) X 座標 13240、Y 座標 4076 付近にて検出した。

検出状況) 第2層黒褐色粘質土層下部から第3層黒色土層上部にて精査の上、遺構を検出した。

形状と規模) 長軸 0.92m、短軸 0.56m の楕円形の土坑である。底面は緩く湾曲する。

土層堆積状況) 覆土には黒褐色粘質土が堆積する。

出土遺物) なし。



第60図 61区土坑⑤

土坑 086

位置) X 座標 13239、Y 座標 4079 付近にて検出した。

検出状況) 第2層黒褐色粘質土層下部から第3層黒色土層上部にて精査の上、遺構を検出した。

形状と規模) 長軸 0.66m、短軸 0.60m の円形の土坑である。底面はほぼ平坦である。

土層堆積状況) 覆土には黒褐色粘質土が堆積する。

出土遺物) なし。

土坑 087

位置) X 座標 13242、Y 座標 4079 付近にて検出した。

検出状況) 第2層黒褐色粘質土層下部から第3層黒色土層上部にて精査の上、遺構を検出した。

形状と規模) 長軸 0.68m、短軸 0.48m の楕円形の土坑である。底面はほぼ平坦である。

土層堆積状況) 覆土には黒褐色粘質土が堆積する。

出土遺物) なし。

土坑 088

位置) X 座標 13238、Y 座標 4079 付近にて検出した。

検出状況) 第2層黒褐色粘質土層下部から第3層黒色土層上部にて精査の上、遺構を検出した。

形状と規模) 長軸 0.98m、短軸 0.94m の楕円形の土坑である。底面はほぼ平坦である。

土層堆積状況) 覆土下層には黒褐色粘質土が堆積し、覆土上層には黒色粘質土が堆積する。

出土遺物) なし。

土坑 089

位置) X 座標 13238、Y 座標 4080 付近にて検出した。

検出状況) 第2層黒褐色粘質土層下部から第3層黒色土層上部にて精査の上、遺構を検出した。

形状と規模) 長軸 0.96m、短軸 0.80m の楕円形の土坑である。底面はほぼ平坦である。

土層堆積状況) 覆土には黒褐色粘質土が堆積する。

出土遺物) なし。

土坑 090

位置) X 座標 13238、Y 座標 4077 付近にて検出した。

検出状況) 第2層黒褐色粘質土層下部から第3層黒色土層上部にて精査の上、遺構を検出した。

形状と規模) 長軸 0.96m、短軸 0.80m の楕円形の土坑である。底面はほぼ平坦である。

土層堆積状況) 覆土には黒色粘質土が堆積する。

出土遺物) なし。

土坑 091

位置) X 座標 13239、Y 座標 4070 付近にて検出した。

検出状況) 第2層黒褐色粘質土層下部から第3層黒色土層上部にて精査の上、遺構を検出した。

形状と規模) 長軸 1.08m、短軸 0.96m の楕円形の土坑である。底面はほぼ平坦である。

土層堆積状況) 覆土下層には黒褐色粘質土が堆積し、覆土上層には黒色粘質土が堆積する。

出土遺物) 近世陶器碗の破片が1点出土した。

土坑 092

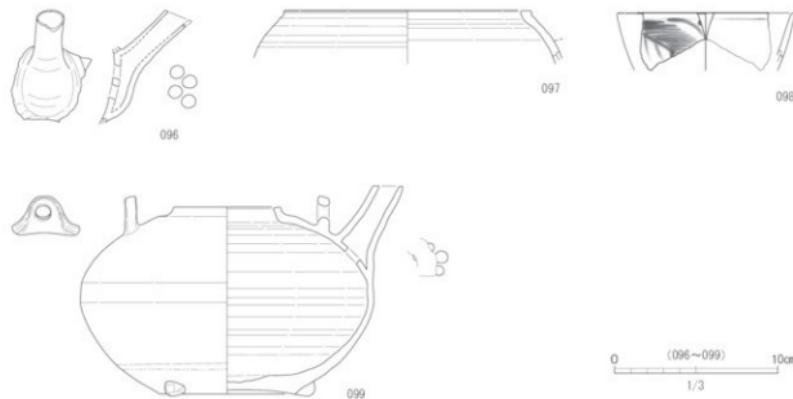
位置) X 座標 13246、Y 座標 4078 付近にて検出した。

検出状況) 第2層黒褐色粘質土層下部から第3層黒色土層上部にて精査の上、遺構を検出した。

形状と規模) 長軸 0.96m、短軸 0.81m の楕円形の土坑である。底面は湾曲する。

土層堆積状況) 覆土下層には黒褐色粘質土が堆積し、覆土上層には黒色粘質土が堆積する。

出土遺物) なし



第61図 61区土坑出土遺物



第62図 61区不明遺構 SX001

③不明遺構

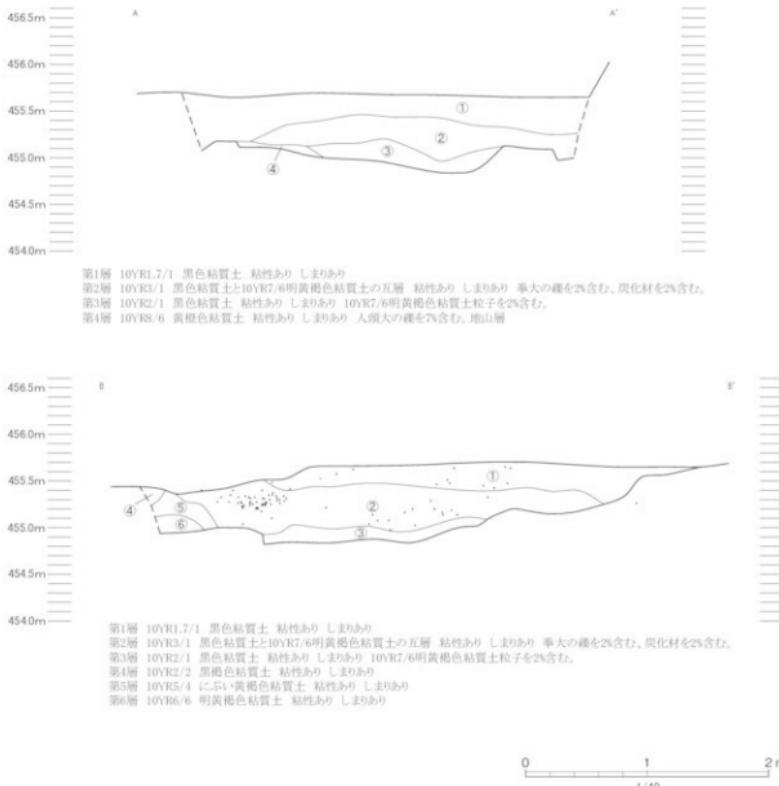
不明遺構 001

位置) X 座標 13245 ~ 13250、Y 座標 4070 ~ 4075 付近にて検出した。

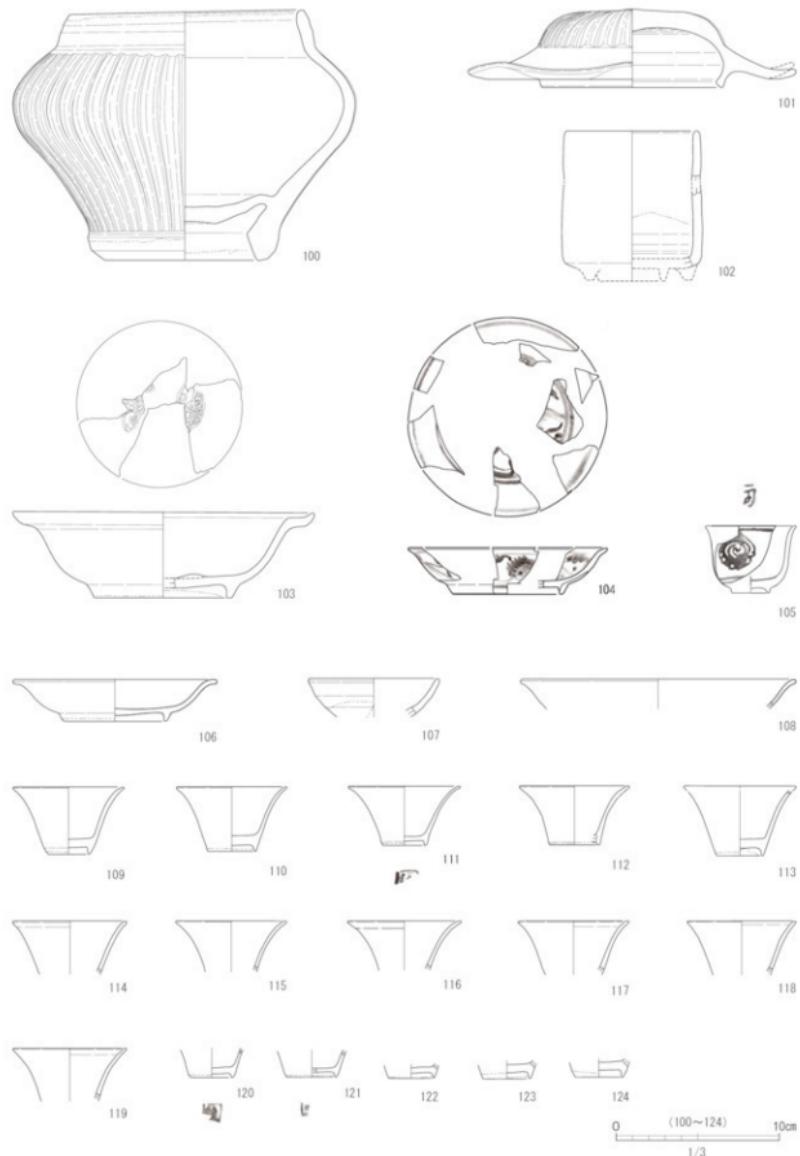
検出状況) 第2層黒褐色粘質土層下部にて遺構精査中、約2m四方に広がる黒味を帯びたシミを検出。十字にベルトを設定して地山層に達するまで掘り下げを実施した。

形状と規模) 不明遺構 001 の主要範囲の規模は、長軸 7.46m、短軸 3.48m である。遺構底面は平滑ではなく、地山層の傾斜に沿い東から西にかけて緩やかに傾斜する。遺構内底面の比高差は約 0.6m である。

土層堆積状況) A-A' ライン第1層は黒色粘質土層で、基準土層堆積の第3層に相当する土層である。第2層が黒色粘質土と明黄褐色粘質土の互層（バームクーヘン状）で、拳大の礫と炭化材を 2% 程度



第 63 図 61 区不明遺構 SX001 土層断面

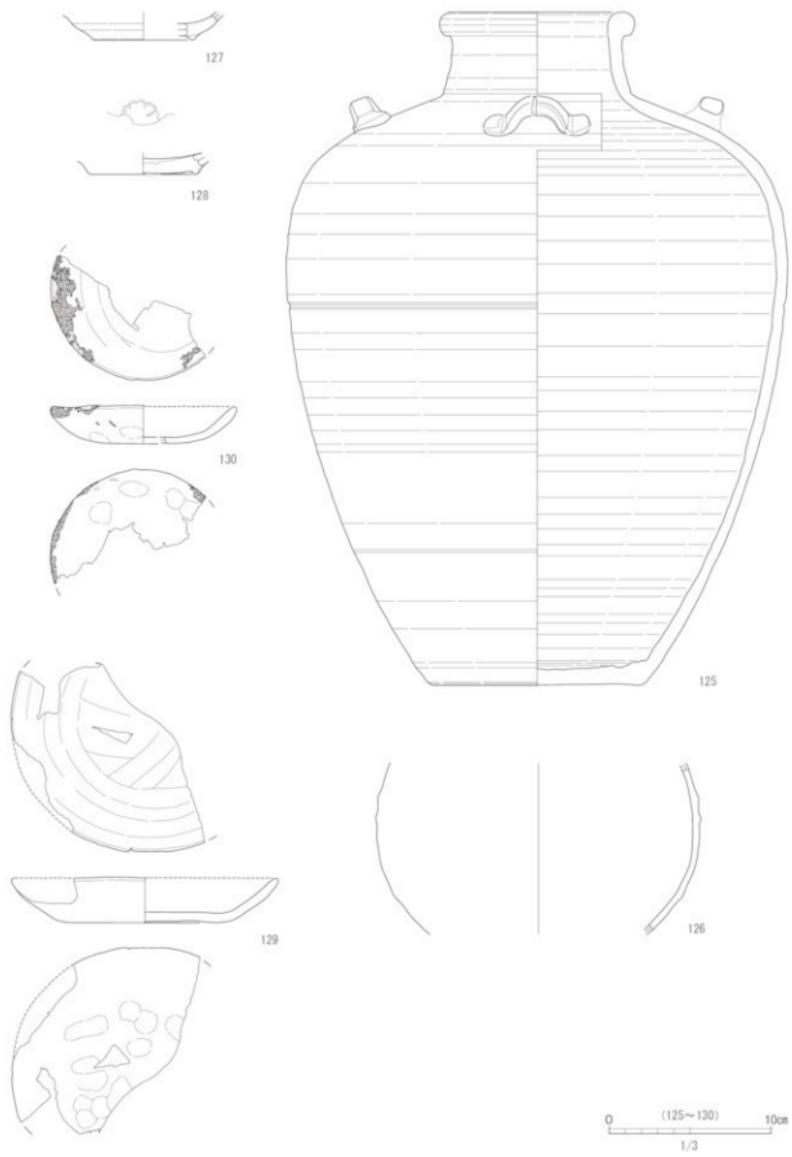


第64図 61区不明造構 SX001出土遺物①

含む。第3層は黒色粘質土層である。第1層黒色粘質土より色調がやや明るい。第2層にある明黄褐色粘質土の粒子を2%程度含む。第4層は明黄褐色粘質土層で、地山である。人頭大の礫を7%程度含む。B-B'ラインの第1層から第3層は、A-A'ラインと共に共通する土層である。第4層は明黄褐色粘質土層、第5層は黒褐色粘質土層、第6層はにぶい黄褐色粘質土層である。

出土遺物) 出土遺物の多くは第2層から出土し、次いで第1層から出土した。第3層以下の層位からの出土は認められない。100は龍泉窯系青磁酒会壺である。器高15.3cm、口径15.9cm、底径9.4cmである。復元の結果、1/3ほどは器体が失われていることがわかった。森達也編年(森2000)に本例を照らし合わせると、底部から胴部の屈曲の強さ、胴部の張り出しの強さの程度は新安沖沈没船例よりも更に大きい。101は龍泉窯系青磁酒会壺の蓋である。3/4の器体が失われている。口縁部の波状は6単位である。100の口径に組み合わさる。ただし、100の胴部色調が「エメラルドグリーン」であるのに対し、101の蓋の色調は「濃緑色」である。元々一対で生産されたものではなく、別々の生産品が最終的に組み合わさったものとも考えられる。100・101とも14世紀の元代に該当する。102は青磁香炉である。熱を受けた跡がある。103は鍾状口縁のある龍泉窯系青磁盤である。内面見込みの部分に双魚が貼花される。時期は13世紀後半から14世紀前半に比定できる。104は染付(青花)皿である。体部外面に牡丹唐草文、体部内面に玉取獅子文を施す。熱を受けた跡がある。小野正敏分類の染付皿B1類に該当する。時期は、15世紀後半から16世紀前半である。106は白磁皿で森田勉編年(森田1982)の皿E-2類である。107は白磁皿で、森田編年の皿E-3類に相当する。熱を受けた跡がある。108は白磁碗で、森田編年の碗E類に該当する。口縁部の一部のみで、体部は欠損する。109~124は白磁小杯である。いずれも熱を受けた痕跡がある。器高約4cm程度の同類の杯で、111・120・121・122の底部外面には「福」の文字が染付られている。白磁杯は少なくとも10数個体分存在してようである。白磁については、いずれも森田編年E類に属する16世紀代のものである。125は鉄釉四耳壺で、茶葉入れのいわゆる大窯の「祖母懐壺」、126は朝鮮半島系の船徳利の可能性がある。127は大窯1期ないしは2期の灰釉端反皿が丸皿である。その他、灰釉端反皿が丸皿の断片が14点出土したが。時期は大窯1期から2期に該当するものである。また大窯1期か2期の灰釉皿が1点出土した(128)。129は土師器皿である。体部外面に指頭圧痕と横ナデ整形痕があり、同底部には指頭圧痕が残る。体部底面は一方向の横ナデ整形痕、体部内面には横ナデ整形痕が明瞭である。井川分類のB2類である。130は土師器皿である。体部外面は底部も含め指頭圧痕が残りつつも横ナデ整形が行われる。体部内面は横ナデ整形で仕上げられる。口縁部端にタールが付着する。井川分類のB2類である。その他、天目茶碗断片6点は古瀬戸後期IV期新段階か大窯2期の範囲に収まる。

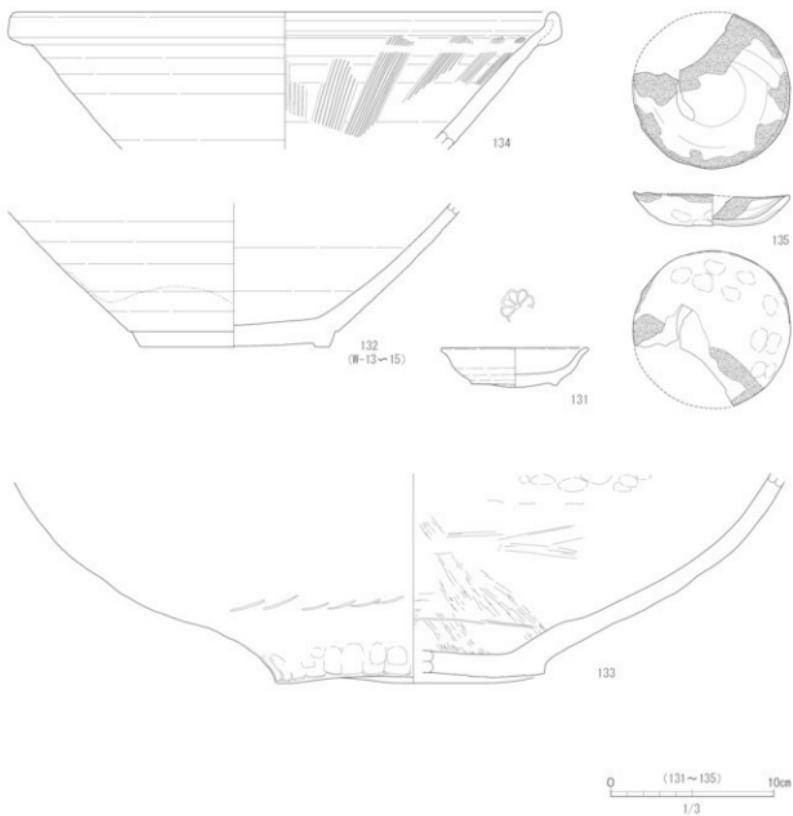
遺構概要) 本不明遺構は、A-A'ラインとB-B'ラインの第2層の存在が示すように、「整地により形成された遺構」である。整地をしなければならなかった背景・理由は定かではない。また、第2層中から焦土の検出もない。ただし、第2層中から、意図的に小破片にされた青磁酒会壺等の貿易磁器の数々は、他の地点から出土した陶磁器に比べ特殊な位置を占めるものである。本遺構の評価については「総括」にて改め述べたい。



第65図 61区不明遺構 SX001 出土遺物②

7) その他包含層出土の遺物

131は大窯1期の灰釉端反皿、132は大窯3期の鉢、133は常滑窯の甕、134は大窯3期の擂鉢、135は土師器皿である。



第66図 包含層出土遺物

第4表 桜洞城跡出土遺物観察一覧表①

桝固	区段番号	遺物番号	出土遺構	出土地区	出土層位	取上番号	種類	器種名	編分年類	産年代	口径cm	器高cm	底径cm	成形・調整・施釉等特徴	備考
第11回	区段5_001	唐091	E2区	4層下	26	土師器	瓶			9.2	1.8			底部内面一定方ナメ施し体部から右縁部右回りに字状ナメ。外面部全体に細網目、外面部に付いた状痕。	色調:浅黄褐色。
第11回	区段5_002	唐091	E2区	4層		土師器	瓶			8.7	2.6	-		横円形に近い平面形、内面ハグ状工具痕、外面部に字状ナメ。口縁部内外面に細網目付着。	色調:にぶい黄褐色。
第11回	区段5_003	唐091	E2区	4層		土師器	瓶			16.8	3.6	-		底部内面二方向にナメ施し体部から右縁部右回りに字状ナメで外面部は工具痕付着で、見込み部面に細網目を生じる。体部外面部頸部、外面部に均様付着。	色調:浅黄褐色。
第11回	区段5_004	唐091	E2区	4層		内灰土器				-	-			口縁部は面取り、胴部は邵壘厚以外、外面部に煤付着。	色調:にぶい褐色。
第11回	区段5_005	唐091	E2区	4層上		陶器	灰釉丸皿	大業2期前半		8.8	-	-		内面ノギに接する沈線文。	胎土:灰白色。 灰釉:灰オリーブ色。
第11回	区段5_006	唐091	E2区	4層上		陶器	灰釉丸皿	大業2期		9.3	2.5	5.3		見込み中央に印花文(模?)、貼付高台、底部外面にトチ痕。	胎土:灰黄色。 灰釉:浅黄色。
第11回	区段5_007	唐091	E2区	4層下		陶器	灰釉丸皿	大業2期		8.8	2.2	4.5		見込み中央に印花文(カタバミ?)、貼付高台、底部外面にトチ痕。	胎土:灰黄色。 灰釉:浅黄色。
第11回	区段5_008	唐091	E2区	4層F	24	陶器	灰釉暗反皿	大業1期		9.4	2.4	5.0		見込み中央に印花文(2枚菊文)、貼付高台、底部外面に輪ドチ版。	胎土:にぶい黄褐色。 灰釉:茂黄色。
第11回	区段5_009	唐091	E2区	4層上		陶器	灰釉暗反皿	大業1期		9.6	2.1	5.0		見込みに脚踏着、貼付高台、底部外面にトチ痕。	胎土:灰白色。 灰釉:灰オリーブ色。
第11回	区段5_010	唐091	E2区	4層上		陶器	灰釉暗反皿	大業2期		10.4	2.4	7.0		外面部下端回転へラケズリ、削り出しあ高台。	胎土:灰白色。 灰釉:灰白色。
第12回	区段5_011	唐091	E2区	4層F	27	陶器	瓶子	古廐戸後期 Ⅳ期~Ⅴ期		-					胎土:灰白色。 釉:茂黄色。
第12回	区段5_012	唐091	E3区	4層上	3	陶器	西耳壺	古廐戸後期 Ⅳ期~Ⅴ期		-	-	-		内外面網目。	胎土:浅黄色。 釉:茂黄色。
第12回	区段6_013	唐091	E1区	4層		陶器	天日茶碗	大業2期		11.8	6.6	4.4		外面部下半から底部は網目を施す。底部は内反り高台。底部外面に朱書き(昌十二)。	胎土:灰白色。 鉄釉:黒色。
第12回	区段6_014	唐091	E1区	4層		陶器	天日茶碗	大業1期後半		11.8	6.1	5.2		外面部下半から底部は網目を施す。底部は削り出し輪高台。	胎土:灰白色。 鉄釉:暗褐色。
第12回	区段6_015	唐091	E2区	4層上		陶器	天日茶碗	大業1期後半		12.0	6.0	4.7		外面部下半から底部は網目を施す。底部は削り出し輪高台。	胎土:にぶい黄褐色。 鉄釉:褐色。
第12回	区段6_016	唐091	E2区	4層下		陶器	天日茶碗	大業1期か		11.3				外面部下半は薄い精錬を施す。	胎土:灰白色。 鉄釉:黒色。
第12回	区段6_017	唐091	E3区	4層		陶器	天日茶碗	大業1期後半		11.2	5.9	4.8		外面部下半から底部は薄い精錬を施す。底部は削り出し輪高台。	胎土:灰褐色。 鉄釉:にぶい黄褐色。
第12回	区段6_018	唐091	E3区	4層上		陶器	天日茶碗	大業2期		12.2	6.5	4.8		外面部下半から底部は薄い精錬を施す。底部は削り出し輪高台。	胎土:にぶい褐色。 鉄釉:黒色。
第12回	区段5_019	唐091	E1区	4層		陶器	瓶	古廐戸後期IV 期後段階		29.4	10.7	10.4		口縁部をつまみ上げる。即日は12条以上で、見込みから外部に施す。全面網目、底部斜面切り。	胎土:茂黄色。 網目:相火色。
第12回	区段5_020	唐091	E1区	4層		陶器	瓶	大業3期		28.2	-	-		口縁部2縁部が口に愈れて丸みを帯びる。即日は22条で、底部から口縁部にかけて斜面斜面切りに施す。外面部網目。	胎土:茂黄色。 網目:相火色。
第12回	区段6_021	唐091	E2区			陶器	瓶	古廐戸後期IV 期後段階小大 業1期		27.2				口縁部をつまみ上げる。即日は12条以上で、既窯から口縁部に施す。内外面網目。	胎土:茂黄色。 網目:相火色。
第12回	区段6_022	唐091	E2区	4層	1	青磁	碗			-	5.3			体部外面に幅広の蓮瓣文、全面網目後に高台内の袖を袋状に削る。圓錐部分と袋錐部分に朱書き(赤色)に施す。見込みに草花文。	胎土:灰白色。 鉄釉:オーリーブ灰色。
第12回	区段6_023	唐091	E1区	5層下		陶器	青釉碗	大業		-	4.7			底部右側斜面切付。外外面網目後に鉄釉。	胎土:灰白色。 鉄釉:暗赤褐色。
第13回	区段6_024	唐091	E2区	4層		陶器	青釉碗		中国	-	-	7.6		内外面網目後に鉄釉。	胎土:灰白色。 鉄釉:暗赤褐色。
第13回	区段6_025	唐091	E2区	4層F	9	陶器	仁化瓶	古廐戸後期 Ⅳ期~Ⅴ期		-	-	-			胎土:灰黄色。 鉄釉:オーリーブ黄色。

第5表 桜洞城跡出土遺物観察一覧表②

桜洞 探査 番号	区段 番号	遺物 番号	出土 遺構	出土 地区	出土 位置	取上 番号	種類	器種名	編 分	年 代	産 地	口径 cm	器高 cm	底径 cm	成形・調整・施釉等特徴	備考	
第13回	区段6	026	唐001	E2区	4層上	50	石製品	硯			高島研				横長6.3cm、最大4.9cm、厚さ1.0cm、小型品で使用痕跡有、粘板岩質。		
第13回	区段6	027	唐001	E1区	5層	4	青銅製	水差道具									
第13回	区段6	028	唐001	E2区	5層		土師器	瓶				12.2	3.0	4.7	口クロ成形、底部右回転斜切り、内外面擦付有着目にあたる刻跡有。	色調:にぶい褐色。	
第13回	区段6	029	唐001	E2区	5層	67	土師器	瓶		10.1	2.3				底部内面一定方向ナデ後に体部から右縫合右回りの字状ナデ、体部外表面擦付有、内面にあたる刻跡有。	色調:浅黄褐色。	
第13回	区段6	030	唐001	E2区	5層上	64	土師器	瓶		9.8	1.8	5.7			内面体部から右縫合右回りの字状ナデ、体部外表面擦付有、内外面に擦付有。	色調:にぶい褐色。	
第14回	区段6	031	唐002	E2区	5層上	65	土師器	瓶		9.1	1.8	5.0			体部外表面擦付有、内外面に擦付有。	色調:にぶい黄褐色。	
第14回	区段7	032	唐001	E3区	5層		土師器	瓶		17.2	3.0	-			底部内面一定方向ナデ後に体部から右縫合右回りにく字状ナデ、体部外表面擦付有、内外面に擦付有。	色調:浅黄褐色。	
第14回	区段7	033	唐001	E3区	5層		土師器	瓶		16.3	3.4	-			底部内面一定方向ナデ後に体部から右縫合右回りにく字状ナデ、体部外表面擦付有、内外面に擦付有。	色調:にぶい黄褐色。	
第15回	区段7	034	唐001	E3区	5層		土師器	瓶		17.1	3.2	-			底部内面一定方向ナデ後に体部から右縫合右回りにく字状ナデ(ナデは工具使用で、見込み部に擦痕を生じる)、体部外表面擦付有、内外面に擦付有。	色調:にぶい黄褐色。	
第15回	区段7	035	唐001	E3区	5層		土師器	瓶		15.3	2.8	-			底部内面一定方向ナデ後に体部から右縫合右回りにく字状ナデ、体部外表面擦付有、内外面に薄く擦付有。	色調:灰白色。	
第14回	区段7	036	唐001	E3区	6層		土師器	瓶		11.0	2.9				底部内面一定方向ナデ後に体部から右縫合右回りの字状ナデ、体部外表面擦付有、内外面に擦付有。	色調:灰黄色。	
第14回	区段7	037	唐001	E3区	5層		陶器	灰釉丸瓶	大業2期前半	11.7	2.9	6.7			内面ノブに接する二重の縁起文と見込み中央に印文有、貼付高台、底部外側に輪ドザ。	灰釉:浅黄色。	
第14回	区段7	038	唐001	E3区	5層		陶器	天日茶碗	大業2期	11.8	6.3	4.5			外側体部下部分から底部は擦痕を施す、底面は内反り高台。	脚土:浅黄褐色。 鉢輪:黑褐色。	
第15回	区段7	039	唐001	E3区	5層	13	陶器	植鉢	大業3期	30.0	12.2	10.8			口縁部に縁起文が3回重ねられ丸みを帯びる、即ち20巻以上で、体部から右縫合右回りに向て反時計回りに施す、全面施釉。	脚土:浅黄褐色。 鉢輪:褐灰色。	
第14回	区段7	040	600C	E-4	土師器					11.4	2.6				内面のカタマリ方向は不明だが、わずかにハクメ板張る、体部外表面の擦痕は弱く、口縁部外側に擦痕有。内面に擦痕方向のワツ多。	色調:灰白色。	
第15回	区段7	041	唐001	E3区			陶器	植鉢	大業2期	31.8	-				口縁部をつまみ上げる、即ち21巻以上で、体部から右縁部に施す。内外出筋。	脚土:浅黄褐色。 鉢輪:褐灰色。	
第15回	区段7	042	唐001	E2区	5層上		陶器	山茶碗	東濃第合式型 (600年)	12世紀 13世紀	-	-	6.4				色調:黄灰色
第18回	区段8	043	唐001	S3区	4層		陶器	灰釉闊口瓶	大業	10.8	2.3	4.6			体部下端回転ヘラケズリ、削りだし輪高台、見込みに輪ドザ瓶、外側は体部上部まで施釉、黒褐色。	脚土:灰白色。 鉢輪:灰褐色。	
第19回	区段8	044	唐001	S3区	4層		青磁	瓶		-	-	6.1			全面施釉後に高台内の縁を覆状に削る、蓋切部分と施釉部分の境は赤色に発色、見込みに印文、縁は施釉多い。	脚土:灰白色。 鉢輪:オーラー灰。	
第19回	区段8	045	唐001	S3区	5層		陶器	灰釉腰折瓶	古戸戸後 IV期新段階	16.0	4.0	7.8			見込みに印文花(菊文、2ヶ所)と二重の縁起文、貼付高台、底部外側に輪ドザ瓶。	脚土:灰暗黄色。 鉢輪:オーラー灰。	
第19回	区段7	046	唐001	S3区	20	土師器	瓶			9.7	2.2				内面体部から右縫合右回りの字状ナデ一度施す(ナデは工具使用で、見込み部に擦痕を生じる)、外側全面に擦痕有、内外面に擦付有。	色調:褐色。	
第19回	区段8	047	唐001	S3区	14	陶器	灰釉丸瓶	大業2期		8.6	2.1	5.0			見込み中央に印文花、貼付高台、底部外側にトナシ瓶。	脚土:にぶい黄褐色。 鉢輪:灰褐色。	
第19回	区段7	048	唐001	S3区	22	陶器	便	大業		21.4	-	-			縁部下端は横に引き出す。	脚土:にぶい黄褐色。 鉢輪:褐色。	

第5表 桜洞城跡出土遺物観察一覧表②

桝固	区段番号	遺物番号	出土遺構	出土地区	出土層位	取上番号	種類	器種名	編分	年類	産年代	口径cm	器高cm	底径cm	成形・調整・施釉等特徴	備考
第13回	区段6 026	遺001	E2区	4層上	50	石製品	硯				高島研				横長6.3cm、最大4.9cm、厚さ1.0cm。小型品で使用痕跡有、粘板岩質。	
第13回	区段6 027	遺001	E1区	5層	4	青銅製	水差道具									
第13回	区段6 028	遺001	E2区	5層		土師器	瓶					12.2	3.0	4.7	口クロ成形、底部右回転斜切り、内外面擦付有着目にあたる刻跡有。	色調:にぶい褐色。
第13回	区段6 029	遺001	E2区	5層	67	土師器	瓶					10.1	2.3		底部内面一定方向ナデ後に体部から右縫合右回りの字状ナデ、体部外表面擦付有、内面にあたる刻跡有。	色調:浅黄褐色。
第13回	区段6 030	遺001	E2区	5層上	64	土師器	瓶					9.8	1.8	5.7	内面体部から右縫合右回りの字状ナデ、体部外表面擦付有、内外面に擦付有。	色調:にぶい褐色。
第14回	区段6 031	遺002	E2区	5層上	65	土師器	瓶					9.1	1.8	5.0	体部外表面擦付有、内外面に擦付有。	色調:にぶい黄褐色。
第14回	区段7 032	遺001	E3区	5層		土師器	瓶					17.2	3.0	-	底部内面一定方向ナデ後に体部から右縫合右回りにく字状ナデ、体部外表面擦付有、内外面に擦付有。	色調:浅黄褐色。
第14回	区段7 033	遺001	E3区	5層		土師器	瓶					16.3	3.4	-	底部内面一定方向ナデ後に体部から右縫合右回りにく字状ナデ、体部外表面擦付有、内外面に擦付有。	色調:にぶい黄褐色。
第15回	区段7 034	遺001	E3区	5層		土師器	瓶					17.1	3.2	-	底部内面一定方向ナデ後に体部から右縫合右回りにく字状ナデ(ナデは工具使用で、見込み槽部に擦痕を生じる)、体部外表面擦付有、内外面に擦付有。	色調:にぶい黄褐色。
第15回	区段7 035	遺001	E3区	5層		土師器	瓶					15.3	2.8	-	底部内面一定方向ナデ後に体部から右縫合右回りにく字状ナデ、体部外表面擦付有、内外面に薄く擦付有。	色調:灰白色。
第14回	区段7 036	遺001	E3区	6層		土師器	瓶					11.0	2.9	-	底部内面一定方向ナデ後に体部から右縫合右回りの字状ナデ、体部外表面擦付有、内外面に擦付有。	色調:灰黄色。
第14回	区段7 037	遺001	E3区	5層		陶器	灰釉丸瓶	大業2期前半				11.7	2.9	6.7	内面ノブに接する二重の擦痕文と見込み中央に印文有、貼付高台、底部外面に輪ドザ。	灰釉:浅黄色。
第14回	区段7 038	遺001	E3区	5層		陶器	天日茶碗	大業2期				11.8	6.3	4.5	外面部下部分から底部は擦痕を施す、底面は内反り高台。	脚土:浅黄褐色。 鉄輪:黑褐色。
第15回	区段7 039	遺001	E3区	5層	13	陶器	植鉢	大業3期				30.0	12.2	10.8	口縫合部に縫合部がよく垂れで丸みを帯びる、即ち20巻以上で、体部から右縫合に向て反時計回りに施す、全面施釉。	脚土:浅黄褐色。 鉄輪:褐灰色。
第14回	区段7 040	60区	E-4	土師器	瓶							11.4	2.6	-	内面のカタマリ方向は不明だが、わずかにハクメ板張る、体部外表面の擦痕は弱く、口縫合部外面上に擦痕有。内面に擦痕方向のワツ多。	色調:灰白色。
第15回	区段7 041	遺001	E3区			陶器	植鉢	大業2期				31.8	-	-	口縫合部をつまみ上げる、即ち21巻以上で、体部から右縫合に施す。内外面施釉。	脚土:浅黄褐色。 鉄輪:褐灰色。
第15回	区段7 042	遺001	E2区	5層上		陶器	山茶碗	東濃第合式型 (区段架下)	12世紀	-	-	6.4				色調:黄灰色
第18回	区段8 043	遺001	S3区	4層		陶器	灰釉覆面瓶	大業				10.8	2.3	4.6	体部下端回転ヘラケズリ、削りだし輪高台、見込みに輪ドザ瓶、外面上は体部上端まで施釉、黒褐色。	脚土:灰白色。 鉄輪:灰褐色。
第19回	区段8 044	遺001	S3区	4層		青磁	瓶					-	-	6.1	全面施釉後に高台内の縫を覆面に削る、蓋切部分と施釉部分の縫は赤色に発色、見込みに印文、縫はオーバー施釉多い。	脚土:灰白色。 鉄輪:オーバー灰白色。
第19回	区段8 045	遺001	S3区	5層		陶器	灰釉腰折瓶	古戸戸後 IV期新段階				16.0	4.0	7.8	見込みに印文花(菊文、2ヶ所)と二重の擦痕文、貼付高台、底部外面上に輪ドザ瓶。	脚土:暗灰黄色。 鉄輪:オーバー黄褐色。
第19回	区段7 046	遺001	S3区	20	土師器	瓶						9.7	2.2	-	内面体部から右縫合右回りの字状ナデ一度施す(ナデは工具使用で、見込み槽部に擦痕を生じる)、外面上に輪ドザ瓶、外面上に擦付有。	色調:褐色。
第19回	区段8 047	遺001	S3区	14	陶器	灰釉丸瓶	大業2期					8.6	2.1	5.0	見込み中央に印文花、貼付高台、底部外面上にトナボ瓶。	脚土:にぶい黄褐色。 鉄輪:灰褐色。
第19回	区段7 048	遺001	S3区	22	陶器	便	大業					21.4	-	-	縫合部下端は横に引き出す。	脚土:にぶい黄褐色。 鉄輪:褐色。

第7表 桜洞城跡出土遺物観察一覧表④

桝番	図版 番号	遺物 番号	出土 遺構	出土 地区	出土 層位	取上 番号	種類	器種名	編 分	年 代	產 年	地 代	口徑 cm	器高 cm	底径 cm	成形・調整・施釉等特徴	備考
第39回	図版9	075	13EK 引合 層	2	土師器	瓶			9.9	1.9	-	底面に一定方向ナフツ内に体部 から白綠部に回りの字ナフツ。体 部外側指擦痕。口縁部内外間に消 済行。	色調:浅黃褐色。 跡:灰白色。				
第39回	図版9	076	31EK	5-1	土師器	瓶			33.0	3.3	(7.0)	内表面同心円伏子彫。外表面部 から白綠部に回りの字ナフツ。体 部外側指擦痕。	色調:灰白色。				
第42回	図版10	077	58EK	11-5	陶器	灰輪窓双耳 大室1期			30.0	2.9	(6.0)	見込み中に印文(1サウセイ?)。基 材白色。底面外側面にチザレ。	胎土:にぶい黄褐色。 色調:灰白色。				
第42回	図版10	078	58EK	11-7	青磁	碗	15e中頃～ 後半		-	-	5.5	外側に墨文。高台發付はやや擴 張行割。	胎土:灰白色。 色調:明緑灰色。				
第42回	図版10	079	58EK	11-3	石製品	石劍?			-	-	-	長さ14.5cm。残幅2.4cm。厚さ0.7 cm。重さ21.1g。両側面に刃部(片 刃)。右端部は切削面に溝。左端 部は火炙。刃部は研磨により作出 され、光沢を帯びる。刃端部に進 続する微細網状。	刀片類。被燃。				
第42回	図版10	080	58EK	11-8	陶器	植林	大室1期		25.0	-	-	口縁部の外側に綠帶を小さく引 き出。即日は20mmで、体部下か ら上へ延べ。内表面指擦。	胎土:にぶい黄褐色。 色調:暗赤褐色。				
第42回	図版10	081	58EK	11-6	陶器	植林	大室2期		25.0	-	-	口縁部は墨を2~3mmで引き出 す。即日は20mm以上。外表面指 擦。	胎土:浅黃褐色。 色調:暗赤褐色。				
第42回	図版10	082	58EK	11-2	陶器	植林	大室1期		25.0	-	-	口縁部をつまみ上げる。即日は 12mmで、底面から白綠部に溝す。 内表面指擦。	胎土:浅黃褐色。 色調:暗赤褐色。				
第45回	図版10	083	圖版95	59EK	11-11	土師器	瓶		35.0	2.1	(7.0)	底面内面一定方向ナフツ後に体部 から白綠部右回り逆字ナフツ。 外表面部から白綠部指擦。	色調:浅黃褐色。				
第45回	図版10	084	59EK	11-14	土師器	瓶			35.0	2.6	(8.0)	内表面部から底面剥落。	色調:灰白色。				
第45回	図版10	085	土岸039	59EK	覆土	染付	碗		32.0	-	-	外側に綠帶波浪文・胴部芭蕉葉 文。内面に綠部界線。	胎土:灰白色。 色調:明緑灰色。				
第51回	図版10	086	60EK		土師器	瓶			31.0	3.1	-	外表面部は指擦軋ぐ。縱方向の 縮れ行割。口縁部外側に消済行。	色調:にぶい黄褐色。				
第51回	図版10	087	土岸029	59EK	陶器	植林	大室1期		29.3	11.1	7.0	口縁部は綠帶が下に熱れる。即日 (12.1)で、体部から口縁部に向 けて溝す。内外面指擦。	胎土:浅黃褐色。 色調:灰褐色。				
第51回	図版10	088	土岸047	59EK	陶器	鉄輪セリ	大室2期5~ 3期		-	-	-	内表面は鍛錬後に鉄輪。	胎土:灰白色。 鉄輪:黒色。 色調:灰白色。				
第54回	図版11	089	唐006	61EK	白磁	周反皿			21.0	-	-		胎土:灰白色。 色調:灰白色。				
第54回	図版11	090	唐006	61EK	青磁	碗	15e中頃～ 後半		38.0	-	-	内表面の口縁部底下に墨文。内面 見込みに不明文様。	胎土:灰白色。 色調:オーラー灰。				
第54回	図版11	091	唐006	61EK	陶器	植林	古窯戸後期 IV期新段階		32.0	-	-	口縁部をつまみ上げる。即日は 7mm以上。内外面指擦。	胎土:にぶい黄褐色。 色調:灰褐色。				
第54回	図版11	092	唐006	61EK	陶器	天目茶碗	大室1期		31.0	-	-	外表面部下は薄い指擦を施す。	胎土:にぶい黄褐色。 色調:灰褐色。 鉄輪:黒色。				
第54回	図版11	093	唐006	61EK	陶器	灰輪窓双耳 大室1期			31.0	-	-	貼付高台。	胎土:灰白色。 色調:にぶい黄褐色。				
第54回	図版11	094	唐006	61EK		11-25	土師器	瓶	9.8	2.4	-	内面に凹状其底後に放射状の 折りたて。内面指擦凹削痕。口縁部 内面に指擦行。	色調:浅黃褐色。				
第54回	図版11	095	唐006	61EK	土師器	瓶			12.0	2.9	-	内表面部の字ナフツ。外表面部 は指擦無し。縱方向の細部 割。口縁部外側に消済行。	色調:にぶい黄褐色。				
第60回	図版11	096	土岸057	61EK	覆土	陶器	土瓶	18e後半～	-	-	-	外表面指擦。内面4孔。	胎土:浅黃褐色。 色調:暗赤褐色。				
第60回	図版11	097	土岸057	61EK	覆土	陶器	土瓶	18e後半～	33.0	-	-	外面上に剥離痕。内外面指擦。	胎土:にぶい黄褐色。 色調:暗赤褐色。				
第60回	図版11	098	土岸057	61EK	覆土	染付	碗		30.0	-	-		胎土:灰白色。 色調:灰白色。				
第60回	図版11	099	土岸057	61EK	覆土	陶器	土瓶	18e後半～	46.0	12.7	(8.0)	外表面绿部から胴部移動。胴部下 端から底部は無釉。内面灰釉。底 部は指擦の一定がつづ。内外面 に消済行。	胎土:灰白色。 鉄輪:黒色。 色調:にぶい黄褐色。				
第63回	図版11	100	不明遺構 001	61EK	青磁	酒食器	龍泉窯系 14中頃～ 後半		15.9	15.3	9.4	口縁部と底部は釉剥げ。熟然。	胎土:灰白色。 色調:灰褐色。				
第63回	図版11	101	不明遺構 001	61EK	青磁	酒食器(酒)	龍泉窯系 14中頃～ 後半		11.0	4.8	-	内面は釉剥げ。熟然。	胎土:灰白色。 色調:オーラー灰。				
第63回	図版12	102	不明遺構 001	61EK	青磁	香炉			8.0	-	8.2	剥離。	胎土:灰白色。 色調:オーラー灰。				

第8表 桜洞城跡出土遺物観察一覧表⑤

種類	園版番号	標本番号	出土遺物	出土地区	出土層位	取上番号	種類	器種名	編分	年齢	産年代	口径cm	器高cm	底径cm	成形・調整・施釉等特徴	備考	
第63回	園版12	103	不明遺構	611K 001	青磁	盤		鹿児島系 14~19年半 ~中期	18.3	5.3	8.5	高台西面に斜削ぎ。外面部無文。内 面見込みに反対の貼付文(内文) を有する。被熱。	胎土:灰白色。 釉:明緑色。				
第63回	園版12	104	不明遺構	611K 001	変付	皿			16e須半	12.2	2.9	6.6	外面部沙唐草文、内面部三脚子 文。被熱。	胎土:灰白色。 釉:明緑色。			
第63回	園版12	105	不明遺構	611K 001	覆土	変付	环		(5.6)	(5.6)	2.3						
第63回	園版12	106	不明遺構	611K 001	覆土	白磁	皿			12.3	2.6	6.2					
第63回	園版12	107	不明遺構	611K 001	覆土	白磁	皿			(8.6)	—						
第63回	園版12	108	不明遺構	611K 001	覆土	60	白磁	皿		(16.8)	—						
第63回	園版12	109	不明遺構	611K 001	覆土	32他	白磁	环		6.8	4.1	2.6					
第63回	園版12	110	不明遺構	611K 001	覆土	白磁	环			6.7	4.0	(3.0)					
第63回	園版12	111	不明遺構	611K 001	覆土	36他	白磁	环		6.8	3.6	(2.6)	施鉛印。				
第63回	園版12	112	不明遺構	611K 001	覆土	白磁	环			(6.7)	3.6	(3.0)					
第63回	園版12	113	不明遺構	611K 001	覆土	白磁	环			—		2.9					
第63回	園版12	114	不明遺構	611K 001	覆土	白磁	环			7.0	7.0	—					
第63回	園版12	115	不明遺構	611K 001	覆土	白磁	环			(6.8)	(6.8)	—					
第63回	園版12	116	不明遺構	611K 001	覆土	白磁	环			(7.0)	(7.0)	—					
第63回	園版12	117	不明遺構	611K 001	覆土	白磁	环			(6.8)	(6.8)	—					
第63回	園版12	118	不明遺構	611K 001	覆土	白磁	环			(6.7)	(6.7)	—					
第63回	園版12	119	不明遺構	611K 001	覆土	白磁	环			7.0	7.0	—					
第63回	園版12	120	不明遺構	611K 001	覆土	10他	白磁	环		—	2.6	鉛印。					
第63回	園版12	121	不明遺構	611K 001	覆土	白磁	环			—	(3.0)	鉛印。					
第63回	園版12	122	不明遺構	611K 001	覆土	白磁	环			—	(2.8)	鉛印。					
第63回	園版12	123	不明遺構	611K 001	覆土	白磁	环			—	—	3.9					
第63回	園版12	124	不明遺構	611K 001	覆土	白磁	环			—	—	3.9					
第64回	園版13	125	不明遺構	611K 001	覆土	陶器	铁軸西耳壺	16e須半	(10.4)	(41.6)	(12.8)	外面部縁から脚部下段鉄軸、 脚部上段から底底部鉄軸。被熱。	胎土:灰白色。 鉄軸:褐色赤褐色。 縁部:にごり赤褐色。				
第64回	園版13	126	不明遺構	611K 001	覆土	陶器	利他			—	—	—	鉄軸の船形利他。外面部鉄軸、内 面部鉄軸。外面部火打文とトシ痕。	胎土:にごり赤褐色。 鉄軸:黒褐色。 縁部:黄褐色。			
第64回	園版13	127	不明遺構	611K 001	覆土	陶器	灰釉反覆 小丸瓶	大業1期 5.2期		—	(6.9)	—	點打目。	胎土:灰白色。 灰釉:灰白色。			
第64回	園版13	128	不明遺構	611K 001	覆土	陶器	灰釉瓶	大業1期 5.2期		—	(6.6)	—	見込み中央に印花文(菊文)、腹 部高台、底面部外面にトシ痕。	胎土:灰白色。 灰釉:オーバー黄。			
第64回	園版13	129	不明遺構	611K 001	覆土	土師器	皿			(16.5)	2.8	(9.0)	内面部底部反方向のナメ字に体 積同心折のナメ、外面部鉄軸痕、 口縁部内外面に鉄軸痕。	色調:灰白色。			
第64回	園版13	130	不明遺構	611K 001	覆土	土師器	皿			(11.5)	2.3	—	内面部底部同様のナメ字ナメ、外 面部鉄軸痕。口縁部内外面に 鉄軸痕。	色調:灰白色。			
第65回	園版14	131	180K* 190K 包合 層	150K ~15 ~15	陶器	灰釉反覆	大業1期		9.1	2.5	5.3	見込み中央に印花文(菊文)、胎 部高台、底面部外面にトシ痕。	胎土:粉黄色。 灰釉:灰白色。				
第65回	園版14	132	磨001	150K ~15	陶器	灰釉	鉢	大業3期		—	—	11.6	脚部2脚出し、輪高台、外面部 底面部2脚出しが底部は無し。	胎土:帶色。 灰釉:黑褐色。			
第65回	園版14	133	210K 包合 層	陶器	灰釉	便	溜滑			—	—	11.6	脚部内部2脚出しが底部 2脚出しが底部は無し。	胎土:帶色。 灰釉:黑褐色。			
第65回	園版14	134	50K	陶器	灰釉	桂林	大業3期		34.0	—	—	—	口縁部2脚出しが底部 2脚出しが底部は無し。	胎土:浅褐色。 灰釉:灰白色。頭 部:頭部。			
第65回	園版14	135	磨006	611K 包合 層	土師器	皿			9.6	2.1	—	底面部内一定方角ナメ板に体部 から脚部2脚出しが底部 2脚出しが底部は無し。	胎土:淡黃褐色。 灰釉:灰白色。頭 部:頭部。				

第9表 桜洞城跡出土遺物観察一覧表⑥

件名	団体 番号	整理 ID	出土遺構	出土 地区	出土 層番	取上 番号	種類	器物名	編年 分類	產年 地代	口径 en	底径 en	成形・調整・軸輪 等特徴	備考
—	—	1	不明遺構001	610K	複土	陶器	天日茶碗	古漸戸後期IV期新段階	—	—	—	—	—	—
—	—	2	不明遺構0001	610K	複土	陶器	天日茶碗	天業1期か2期	—	—	—	—	590K包含層と接合	—
—	—	3	不明遺構0001	610K	複土	陶器	天日茶碗	天業1期か2期	—	—	—	—	—	—
—	—	4	不明遺構001	610K	複土	陶器	天日茶碗	天業1期か2期	—	—	—	—	—	—
—	—	5	不明遺構001	610K	複土	陶器	天日茶碗	天業2期	—	—	—	—	—	—
—	—	6	不明遺構001	610K	複土	陶器	天日茶碗	天業2期	—	—	—	—	—	—
—	—	7	不明遺構001	610K	複土	陶器	灰釉開口粗小丸皿	天業1期か2期	—	—	—	—	—	—
—	—	8	不明遺構001	610K	複土	陶器	灰釉開口粗小丸皿	天業1期か2期	—	—	—	—	—	—
—	—	9	不明遺構001	610K	複土	陶器	灰釉開口粗小丸皿	天業1期か2期	—	—	—	—	—	—
—	—	10	不明遺構001	610K	複土	陶器	灰釉開口粗小丸皿	天業1期か2期	—	—	—	—	—	—
—	—	11	不明遺構001	610K	複土	陶器	灰釉開口粗小丸皿	天業1期か2期	—	—	—	—	—	—
—	—	12	不明遺構001	610K	複土	陶器	灰釉開口粗小丸皿	天業1期か2期	—	—	—	—	—	—
—	—	13	不明遺構001	610K	複土	陶器	灰釉開口粗小丸皿	天業1期か2期	—	—	—	—	—	—
—	—	14	不明遺構001	610K	複土	陶器	灰釉開口粗小丸皿	天業1期	—	—	—	—	—	—
—	—	15	不明遺構001	610K	複土	陶器	灰釉開口粗小丸皿	天業1期	—	—	—	—	—	—
—	—	16	不明遺構001	610K	複土	陶器	灰釉開口粗小丸皿	天業1期	—	—	—	—	—	—
—	—	17	不明遺構001	610K	複土	陶器	灰釉開口粗小丸皿	天業1期	—	—	—	—	—	—
—	—	18	不明遺構001	610K	複土	陶器	灰釉開口粗小丸皿	天業1期	—	—	—	—	—	—
—	—	19	不明遺構001	610K	複土	陶器	灰釉開口粗小丸皿	天業1期	—	—	—	—	—	—
—	—	20	不明遺構001	610K	複土	陶器	灰釉開口粗小丸皿	天業1期	—	—	—	—	—	—
—	—	21	不明遺構001	610K	複土	陶器	埴輪	大雲	—	—	—	—	—	—
—	—	22	不明遺構001	610K	複土	青磁	瓶	—	—	—	—	—	—	—
—	—	23	不明遺構001	610K	複土	青磁	酒会盃(蓋)	—	—	—	—	—	—	—
—	—	24	不明遺構001	610K	複土	青磁	酒会盃	—	—	—	—	—	—	—
—	—	25	不明遺構0001	610K	複土	青磁	酒会盃	—	—	—	—	—	—	—
—	—	26	不明遺構001	610K	複土	青磁	酒会盃	—	—	—	—	—	—	—
—	—	27	不明遺構0001	610K	複土	青磁	酒会盃	—	—	—	—	—	—	—
—	—	28	不明遺構001	610K	複土	青磁	酒会盃	—	—	—	—	—	—	—
—	—	29	不明遺構001	610K	複土	青磁	酒会盃	—	—	—	—	—	—	—
—	—	30	不明遺構0001	610K	複土	青磁	酒会盃	—	—	—	—	—	—	—
—	—	31	不明遺構001	610K	複土	青磁	不明	—	—	—	—	—	—	—
—	—	32	不明遺構0001	610K	複土	青磁	不明	—	—	—	—	—	—	—
—	—	33	不明遺構001	610K	複土	青磁	不明	—	—	—	—	—	—	—
—	—	34	溝006	610K	複土	陶器	灰釉開口粗小丸皿	天業1期か2期	—	—	—	—	—	—
—	—	35	溝006	610K	複土	陶器	灰釉開口粗小丸皿	天業1期か2期	—	—	—	—	—	—
—	—	36	溝006	610K	複土	陶器	灰釉開口粗小丸皿	天業1期か2期	—	—	—	—	—	—
—	—	37	溝006	610K	複土	陶器	灰釉丸皿	天業2期	—	—	—	—	—	—
—	—	38	600K	包含層	—	埴輪	大雲	—	—	—	—	—	—	—
—	—	39	600K	包含層	—	埴輪	灰釉圓底	—	—	—	—	—	—	—
—	—	40	溝006	610K	複土	陶器	灰釉開口粗	天業1期	—	—	—	—	—	—
—	—	41	600K	包含層	—	陶器	天日茶碗	天業1期	—	—	—	—	—	—
—	—	42	溝006	610K	包含層	陶器	天日茶碗	天業1期か2期	—	—	—	—	—	—
—	—	43	溝006	610K	複土	陶器	埴輪	大雲	—	—	—	—	—	—
—	—	44	600K	扶土	—	埴輪	埴輪	—	—	—	—	—	—	—
—	—	45	600K	扶土	—	埴輪	埴輪	—	—	—	—	—	—	—
—	—	46	600K	扶土	—	埴輪	埴輪	天業2期	—	—	—	—	—	—
—	—	47	600K	包含層	—	埴輪	灰釉丸皿	天業2期	—	—	—	—	—	—
—	—	48	600K	包含層	—	陶器	灰釉開口粗	古漸戸後期IV期新段階	—	—	—	—	—	—
—	—	49	600K	包含層	—	陶器	灰釉開口粗	天業1期	—	—	—	—	—	—
—	—	50	600K	包含層	—	陶器	灰釉開口粗	天業1期	—	—	—	—	—	—
—	—	51	600K	包含層	—	陶器	灰釉開口粗	天業1期	—	—	—	—	—	—
—	—	52	600K	包含層	—	陶器	灰釉開口粗	天業1期	—	—	—	—	—	—
—	—	53	600K	包含層	—	陶器	灰釉開口粗	天業1期	—	—	—	—	—	—
—	—	54	600K	包含層	—	陶器	灰釉開口粗	天業1期	—	—	—	—	—	—
—	—	55	600K	包含層	—	陶器	灰釉開口粗	天業1期	—	—	—	—	—	—
—	—	56	600K	包含層	—	陶器	平柄	天業1期	—	—	—	—	—	—

第10表 桜洞城跡出土遺物観察一覧表⑦

件目	団版 番号	整理 ID	出土遺構	出土 地区	出土 層位	取上 番号	種類	器種名	編 年 表	産 年	地 代	口徑 en	底径 en	成形・調整・軸袖 等特徴	備考
—	—	57	60区	包含層	陶器	天日茶碗	天業1期か2期			—	—	—	—	—	
—	—	58	60区	包含層	陶器	天日茶碗	天業1期か2期		—	—	—	—	—	—	
—	—	59	60区	包含層	陶器	天日茶碗	天業1期か2期		—	—	—	—	—	—	
—	—	60	60区	包含層	陶器	天日茶碗	天業1期か2期		—	—	—	—	—	—	
—	—	61	60区	包含層	陶器	天日茶碗	天業1期か2期		—	—	—	—	—	—	
—	—	62	60区	包含層	陶器	天日茶碗	天業1期か2期		—	—	—	—	—	—	
—	—	63	60区	包含層	陶器	灰釉面反屈小丸皿	天業1期か2期		—	—	—	—	—	—	
—	—	64	60区	包含層	陶器	灰釉面反屈小丸皿	天業1期か2期		—	—	—	—	—	—	
—	—	65	60区	包含層	陶器	灰釉面反屈小丸皿	天業1期か2期		—	—	—	—	—	—	
—	—	66	60区	包含層	陶器	灰釉面反屈小丸皿	天業1期か2期		—	—	—	—	—	—	
—	—	67	60区	包含層	陶器	灰釉面反屈小丸皿	天業1期か2期		—	—	—	—	—	—	
—	—	68	60区	包含層	陶器	灰釉面反屈小丸皿	天業1期か2期		—	—	—	—	—	—	
—	—	69	60区	包含層	陶器	灰釉面反屈小丸皿	天業1期か2期		—	—	—	—	—	—	
—	—	70	60区	包含層	陶器	灰釉面反屈小丸皿	天業1期か2期		—	—	—	—	—	—	
—	—	71	60区	包含層	陶器	天日茶碗	天業1期		—	—	—	—	—	—	
—	—	72	60区	包含層	陶器	天日茶碗	天業1期		—	—	—	—	—	—	
—	—	73	60区	包含層	陶器	天日茶碗	天業1期		—	—	—	—	—	—	
—	—	74	60区	包含層	陶器	天日茶碗	天業1期		—	—	—	—	—	—	
—	—	75	60区	包含層	陶器	天日茶碗	天業1期		—	—	—	—	—	—	
—	—	76	60区	包含層	陶器	天日茶碗	天業1期		—	—	—	—	—	—	
—	—	77	60区	包含層	陶器	德利	天業		—	—	—	—	—	—	
—	—	78	60区	包含層	陶器	桙林	天業2期		—	—	—	—	—	—	
—	—	79	60区	包含層	陶器	桙林	天業1期		—	—	—	—	—	—	
—	—	80	60区	包含層	陶器	桙林	天業		—	—	—	—	—	—	
—	—	81	60区	包含層	陶器	桙林	天業		—	—	—	—	—	—	
—	—	82	60区	包含層	陶器	桙林	天業		—	—	—	—	—	—	
—	—	83	60区	包含層	陶器	桙林	天業		—	—	—	—	—	—	
—	—	84	60区	包含層	陶器	桙林	天業		—	—	—	—	—	—	
—	—	85	60区	包含層	陶器	桙林	天業		—	—	—	—	—	—	
—	—	86	60区	包含層	陶器	桙林	天業2期か3期		—	—	—	—	—	—	
—	—	87	60区	包含層	陶器	桙林	天業		—	—	—	—	—	—	
—	—	88	58区	包含層	陶器	天日茶碗	天業1期		—	—	—	—	—	—	
—	—	89	58区	包含層	陶器	天日茶碗	天業1期		—	—	—	—	—	—	
—	—	90	58区	包含層	陶器	天日茶碗	天業1期		—	—	—	—	—	—	
—	—	91	58区	包含層	陶器	天日茶碗	天業1期		—	—	—	—	—	—	
—	—	92	58区	包含層	陶器	桙林	天業2期		—	—	—	—	—	—	
—	—	93	58区	包含層	陶器	桙林	天業2期		—	—	—	—	—	—	
—	—	94	58区	包含層	陶器	天日茶碗	古瀬戸焼IV期新設期		—	—	—	—	—	—	
—	—	95	58区	包含層	陶器	天日茶碗	天業2期		—	—	—	—	—	—	
—	—	96	58区	包含層	陶器	天日茶碗	天業		—	—	—	—	—	—	
—	—	97	58区	包含層	陶器	天日茶碗		中津川か	—	—	—	—	—	—	
—	—	98	58区	包含層	陶器	荷輪		中国	—	—	—	—	—	—	
—	—	99	58区	包含層	青磁	碗			—	—	—	—	—	—	
—	—	100	58区	包含層	白磁	盤			—	—	—	—	—	—	
—	—	101	58区	包含層	白磁	盤			—	—	—	—	—	—	
—	—	102	58区	包含層	白磁	盤			—	—	—	—	—	—	
—	—	103	58区	包含層	白磁	盤			—	—	—	—	—	—	
—	—	104	58区	包含層	陶器	灰釉面反屈			—	—	—	—	—	—	
—	—	105	58区	包含層	陶器	灰釉面反屈			—	—	—	—	—	—	
—	—	106	58区	包含層	陶器	灰釉面反屈			—	—	—	—	—	—	
—	—	107	58区	包含層	陶器	灰釉面反屈			—	—	—	—	—	—	
—	—	108	58区	包含層	陶器	天日茶碗	天業1期か2期		—	—	—	—	—	—	
—	—	109	58区	包含層	陶器	天日茶碗	天業1期か2期		—	—	—	—	—	—	
—	—	110	58区	包含層	陶器	天日茶碗	天業1期か2期		—	—	—	—	—	—	
—	—	111	58区	包含層	陶器	天日茶碗	天業1期か2期		—	—	—	—	—	—	
—	—	112	58区	包含層	陶器	天日茶碗	天業1期か2期		—	—	—	—	—	—	

第11表 桜洞城跡出土遺物観察一覧表⑧

第12表 桜洞城跡出土遺物観察一覧表⑨

第13表 桜洞城跡出土遺物観察一覧表⑩

件名	区段番号	整理番号	出土遺構	出土地区	出土層位	取上番号	種類	器種名	編分年類	産年	年代	口径cm	底径cm	成形・調整・施釉等特徴	備考
—	—	225	供土				陶器	天日茶碗	大案	—	—	—	—	—	
—	—	226	供土				陶器	植輪	大案	—	—	—	—	—	
—	—	227	供土				陶器	植輪	大案3期前半	—	—	—	—	—	
—	—	228	80+81区	表土			陶器	植輪	大案2期	—	—	—	—	—	
—	—	229	80+81区	表土			陶器	灰釉圓反籠小丸皿	大案1期小2期	—	—	—	—	—	
—	—	230	80+81区	包含層			陶器	植輪	大案1期	—	—	—	—	—	
—	—	231	80+81区	包含層			陶器	植輪	大案2期	—	—	—	—	—	
—	—	232	80+81区	包含層			陶器	灰釉丸皿	大案2期	—	—	—	—	—	
—	—	233	80+81区	包含層			陶器	灰釉丸皿	大案2期	—	—	—	—	—	
—	—	234	80+81区				陶器	植輪	大案	—	—	—	—	—	
—	—	235	80+81区				陶器	植輪	大案	—	—	—	—	—	
—	—	236	80+81区	土坑内覆土			陶器	天日茶碗	大案1期	—	—	—	—	—	
—	—	237	80+81区	土坑内覆土			陶器	天日茶碗	大案1期小2期	—	—	—	—	—	
—	—	238	80+81区	土坑内覆土			陶器	天日茶碗	大案1期小2期	—	—	—	—	—	
—	—	239	80+81区	土坑内覆土			陶器	天日茶碗	大案1期小2期	—	—	—	—	—	
—	—	240	80+81区	土坑内覆土			陶器	灰釉圓反籠	大案1期	—	—	—	—	—	
—	—	241	80+81区	土坑内覆土			陶器	灰釉圓反籠	大案1期	—	—	—	—	—	
—	—	242	80+81区	土坑内覆土			陶器	灰釉圓反籠小丸皿	大案1期小2期	—	—	—	—	—	
—	—	243	80+81区	土坑内覆土			陶器	灰釉圓反籠小丸皿	大案1期小2期	—	—	—	—	—	
—	—	244	80+81区	土坑内覆土			陶器	灰釉圓反籠小丸皿	大案1期小2期	—	—	—	—	—	
—	—	245	80+81区	土坑内覆土			陶器	灰釉圓反籠小丸皿	大案1期小2期	—	—	—	—	—	
—	—	246	13区	表土			陶器	植輪	大案1期	—	—	—	—	—	
—	—	247	13区	表土			陶器	植輪	大案1期	—	—	—	—	—	
—	—	248	13区	表土			陶器	植輪	大案2期	—	—	—	—	—	
—	—	249	13区	表土			陶器	天日茶碗	大案1期	—	—	—	—	—	
—	—	250	13区	表土			陶器	灰釉圓反籠	大案1期	—	—	—	—	—	
—	—	251	13区	表土			陶器	灰釉圓反籠小丸皿	大案1期小2期	—	—	—	—	—	
—	—	252	13区	表土			陶器	天日茶碗	大案	—	—	—	—	—	
—	—	253	13区	表土			陶器	天日茶碗	大案	—	—	—	—	—	
—	—	254	16区	包含層			陶器	天日茶碗	大案1期	—	—	—	—	—	
—	—	255	16区	包含層			陶器	灰釉丸皿	大案2期	—	—	—	—	—	
—	—	256	16区	包含層			陶器	灰釉圓反籠小丸皿	大案1期小2期	—	—	—	—	—	
—	—	257	16区	包含層			陶器	天日茶碗	大案	—	—	—	—	—	
—	—	258	16区	表土			陶器	天日茶碗	大案2期	—	—	—	—	—	
—	—	259	16区	表土			陶器	植輪	大案2期	—	—	—	—	—	
—	—	260	21区	包含層			白磁	不明		—	—	—	—	—	
—	—	261	21区	包含層			白磁	不明		—	—	—	—	—	
—	—	262	21区	包含層			陶器	植輪		—	—	—	—	—	
—	—	263	21区	包含層			陶器	植輪		—	—	—	—	—	
—	—	264	21区	包含層			陶器	植輪		—	—	—	—	—	
—	—	265	21区	包含層			陶器	植輪		—	—	—	—	—	
—	—	266	21区	表土			陶器	灰釉丸皿	大案2期	—	—	—	—	—	
—	—	267	17区	包含層			陶器	茶入	大案	—	—	—	—	—	
—	—	268	17区	包含層			陶器	天日茶碗	古瀬戸後期Ⅳ期新波浪	—	—	—	—	—	
—	—	269	17区	包含層			陶器	植輪	古瀬戸後期Ⅳ期新波浪	—	—	—	—	—	
—	—	270	17区	包含層			陶器	灰釉圓反籠小丸皿	大案1期小2期	—	—	—	—	—	
—	—	271	31区	包含層			陶器	植輪	大案	—	—	—	—	—	
—	—	272	31区	包含層			陶器	植輪	大案3期	—	—	—	—	—	
—	—	273	31区	包含層			陶器	灰釉丸皿	大案2期	—	—	—	—	—	
—	—	274	31区	包含層			陶器	天日茶碗	古瀬戸後期Ⅳ期新波浪	—	—	—	—	—	
—	—	275	31区	表土			白磁	不明		—	—	—	—	—	
—	—	276	31区	表土			陶器	灰釉圓反籠小丸皿	大案	—	—	—	—	—	
—	—	277	31区	表土			陶器	灰釉圓反籠	大案1期	—	—	—	—	—	
—	—	278	31区	表土			陶器	天日茶碗	大案	—	—	—	—	—	
—	—	279	31区	表土			陶器	植輪	大案	—	—	—	—	—	
—	—	280	31区	表土			陶器	天日茶碗	大案2期	—	—	—	—	—	

第14表 桜洞城跡出土遺物観察一覧表⑪

第15表 桜洞城跡出土遺物観察一覧表⑫

件番	区段番号	整理番号	出土遺構	出土地区	出土層位	取上番号	種類	器種名	編分年類	產年	地代	口径cm	底径cm	成形・調整・ 施作等特徴	備考	
-	-	337	80+81K	包衣署	陶器	粗粒			大業1期	-	-	-	-	-		
-	-	338	80+81K	包衣署	陶器	粗粒			大業	-	-	-	-	-		
-	-	339	80+81K	包衣署	陶器	粗粒			大業	-	-	-	-	-		
-	-	340	80+81K	包衣署	陶器	粗粒			大業	-	-	-	-	-		
-	-	341	80+81K	包衣署	陶器	粗粒			大業	-	-	-	-	-		
-	-	342	80+81K	包衣署	陶器	粗粒			大業	-	-	-	-	-		
-	-	343	80+81K	包衣署	陶器	粗粒			大業	-	-	-	-	-		
-	-	344	80+81K	包衣署	陶器	粗粒			大業	-	-	-	-	-		
-	-	345	80+81K	包衣署	陶器	粗粒			大業	-	-	-	-	-		
-	-	346	(唐001)	E3K	4層上	陶器	灰釉暗反屈か丸頭		大業1期5~2期	-	-	-	-	-		
-	-	347	(唐001)	E3K	4層上	陶器	灰釉暗反屈か丸頭		大業1期5~2期	-	-	-	-	-		
-	-	348	(唐001)	E3K	4層上	陶器	灰釉暗反屈か丸頭		大業1期5~2期	-	-	-	-	-		
-	-	349	(唐001)	E1K	4層	陶器	灰釉暗折屈		古墳戸後期IV期新段階	-	-	-	-	-		
-	-	350	(唐001)	E2K	4層下	陶器	灰釉暗反屈		大業1期	-	-	-	-	-		
-	-	351	(唐001)	E2K	4層下	陶器	灰釉暗反屈		大業1期	-	-	-	-	-		
-	-	352	(唐001)	E2K	4層下	陶器	灰釉暗反屈		大業1期	-	-	-	-	-		
-	-	353	(唐001)	E2K	4層下	陶器	灰釉暗反屈		大業1期	-	-	-	-	-		
-	-	354	(唐001)	E2K	4層下	陶器	灰釉暗反屈		大業1期	-	-	-	-	-		
-	-	355	(唐001)	E2K	4層下	陶器	灰釉暗反屈		大業1期	-	-	-	-	-		
-	-	356	(唐001)	E2K	4層上	陶器	灰釉暗反屈		大業1期	-	-	-	-	-		
-	-	357	(唐001)	E2K	4層上	陶器	灰釉暗反屈		大業1期	-	-	-	-	-		
-	-	358	(唐001)	S3K	5層	陶器	灰釉暗反屈		大業1期	-	-	-	-	-		
-	-	359	80+81K	包衣署	陶器	灰釉暗反屈			大業1期	-	-	-	-	-		
-	-	360	(唐001)	E2K	4層下	陶器	灰釉暗反屈		大業1期	-	-	-	-	-		
-	-	361	(唐001)	S3K	5層	陶器	灰釉暗反屈		大業1期	-	-	-	-	-		
-	-	362	(唐001)	E2K	4層下	陶器	灰釉暗反屈		大業1期	-	-	-	-	-		
-	-	363	(唐001)	S3K	4層	陶器	灰釉暗反屈		大業1期	-	-	-	-	-		
-	-	364	(唐001)	E3K	4層	陶器	灰釉暗反屈		大業1期	-	-	-	-	-		
-	-	365	(唐001)	E3K	4層上	陶器	灰釉暗反屈		大業1期	-	-	-	-	-		
-	-	366	(唐001)	E3K	4層上	陶器	灰釉暗反屈		大業1期	-	-	-	-	-		
-	-	367	(唐001)	E3K	4層上	陶器	灰釉暗反屈		大業1期	-	-	-	-	-		
-	-	368	(唐001)	E2K	4層下	陶器	灰釉暗反屈		大業1期	-	-	-	-	-		
-	-	369	(唐001)	E2K	4層下	陶器	灰釉丸底		大業2期	-	-	-	-	-		
-	-	370	(唐001)	E2K	4層下	陶器	灰釉丸底		大業2期	-	-	-	-	-		
-	-	371	(唐001)	E2K	5層	陶器	灰釉丸底		大業2期	-	-	-	-	-		
-	-	372	(唐001)	S3K	4層	陶器	灰釉丸底		大業2期	-	-	-	-	-		
-	-	373	(唐001)	S3K	5層	陶器	灰釉丸底		大業2期	-	-	-	-	-		
-	-	374	(唐001)	E2K	4層下	陶器	灰釉丸底		大業2期	-	-	-	-	-		
-	-	375	(唐001)	S3K	5層	陶器	灰釉丸底		大業2期	-	-	-	-	-		
-	-	376	(唐001)	E3K	4層上	陶器	灰釉丸底		大業2期	-	-	-	-	-		
-	-	377	(唐001)	E2K	4層下	陶器	灰釉丸底		大業2期	-	-	-	-	-		
-	-	378	(唐001)	E1K	5層下	陶器	灰釉丸底		大業2期	-	-	-	-	-		
-	-	379	(唐001)	E2K	4層上	陶器	灰釉丸底		大業2期	-	-	-	-	-		
-	-	380	(唐001)	E3K	4層	陶器	灰釉丸底		大業2期	-	-	-	-	-		
-	-	381	(唐001)	E2K	5層上	陶器	灰釉丸底		大業2期	-	-	-	-	-		
-	-	382	(唐001)	E2K	4層下	陶器	灰釉丸底		大業2期	-	-	-	-	-		
-	-	383	(唐001)	E1K	5層下	陶器	灰釉丸底		大業2期前半	-	-	-	-	-		
-	-	384	(唐001)	E2K	4層上	陶器	灰釉丸底		大業2期前半	-	-	-	-	-		
-	-	385	(唐001)	E2K	4層下	陶器	灰釉丸底		大業2期前半	-	-	-	-	-		
-	-	386	(唐001)	E3K	4層上	陶器	灰釉丸底		大業2期前半	-	-	-	-	-		
-	-	387	(唐001)	E2K	4層上	陶器	灰釉丸底		大業2期前半	-	-	-	-	-		
-	-	388	(唐001)	S3K	4層	陶器	灰釉丸底		大業2期前半	-	-	-	-	-		
-	-	389	(唐001)	E3K	5層	陶器	灰釉丸底		大業2期前半	-	-	-	-	-		
-	-	390	(唐001)	E2K	4層上	陶器	灰釉模底		大業2期前半	-	-	-	-	-		
-	-	391	(唐001)	E3K	4層	陶器	灰釉天目茶碗(白目)		大業2期前半	-	-	-	-	-		
-	-	392	(唐001)	E2K	4層下	陶器	灰釉丸底		大業1期	中伊川山	-	-	-	-	-	

第16表 桜洞城跡出土遺物観察一覧表⑬

件目	団版 番号	整理 ID	出土遺構	出土 地区	出土 層位	取上 番号	種類	器種名	編 分	年 代	産 年	地 代	口径 cm	底径 cm	成形・調整・施 工等特徴	備考
-	303	南001	E21K	4層上	陶器	灰褐丸盤	大業1期			中津川式	-	-	-	-	-	-
-	394	南001	S31K	5層	陶器	綠釉天日茶碗	大業2期			-	-	-	-	-	-	-
-	395	南001	S30K	5層	陶器	綠釉天日茶碗	大業2期			-	-	-	-	-	-	-
-	396	南001	E25K	4層上	陶器	綠釉瓶	大業2期			-	-	-	-	-	-	-
-	397	南001	E25K	4層上	陶器	植林	古瀬戸後期IV期新設期			-	-	-	-	-	-	-
-	398	南001	E25K	5層	陶器	植林	古瀬戸後期IV期新設期			-	-	-	-	-	-	-
-	399	南001	E25K	4層上	陶器	植林	古瀬戸後期IV期新設期			-	-	-	-	-	-	-
-	400	南001	E11K	4層	陶器	植林	大業1期			-	-	-	-	-	-	-
-	401	南001	E25K	4層下	陶器	植林	大業1期			-	-	-	-	-	-	-
-	402	南001	E25K	4層下	陶器	植林	大業1期			-	-	-	-	-	-	-
-	403	南001	E25K	4層下	陶器	植林	大業1期			-	-	-	-	-	-	-
-	404	南001	E25K	10番下	陶器	植林	大業1期			-	-	-	-	-	-	-
-	405	南001	E30K	4層	陶器	植林	大業1期			-	-	-	-	-	-	-
-	406	南001	E30K	4層	陶器	植林	大業1期			-	-	-	-	-	-	-
-	407	南001	S30K	5層	陶器	植林	大業1期			-	-	-	-	-	-	-
-	408	南001	E11K	4層	陶器	植林	大業1期			-	-	-	-	-	-	-
-	409	南001	E25K	4層上	陶器	植林	大業1期			-	-	-	-	-	-	-
-	410	南001	E25K	4層下	陶器	植林	大業1期			-	-	-	-	-	-	-
-	411	南001	E11K	4層	陶器	植林	大業1期			-	-	-	-	-	-	-
-	412	南001	S30K	4層	陶器	植林	大業1期			-	-	-	-	-	-	-
-	413	南001	E25K	4層上	陶器	植林	大業1期			-	-	-	-	-	-	-
-	414	南001	E11K	5層下	陶器	植林	大業1期			-	-	-	-	-	-	-
-	415	南001	E11K	4層	陶器	植林	大業1期			-	-	-	-	-	-	-
-	416	南001	S31K	4層	陶器	植林	大業1期			-	-	-	-	-	-	-
-	417	南001	E11K	4層	陶器	植林	大業1期			-	-	-	-	-	-	-
-	418	南001	E25K	4層下	陶器	植林	大業2期			-	-	-	-	-	-	-
-	419	南001	E25K	5層上	陶器	植林	大業2期			-	-	-	-	-	-	-
-	420	南001	E25K	4層下	陶器	植林	大業2期			-	-	-	-	-	-	-
-	421	南001	E11K		陶器	植林	大業2期			-	-	-	-	-	-	-
-	422	南001	E11K	4層	陶器	植林	大業2期			-	-	-	-	-	-	-
-	423	南001	80-81K	包含層	陶器	植林	大業2期			-	-	-	-	-	-	-
-	424	南001	E11K	4層	陶器	植林	大業2期			-	-	-	-	-	-	-
-	425	南001	E25K	4層上	陶器	植林	大業2期			-	-	-	-	-	-	-
-	426	南001	E25K	4層上	陶器	植林	大業2期			-	-	-	-	-	-	-
-	427	南001	E25K	5層	陶器	植林	大業2期			-	-	-	-	-	-	-
-	428	南001	E25K	4層上	陶器	植林	大業2期			-	-	-	-	-	-	-
-	429	南001	E11K	4層	陶器	植林	大業2期			-	-	-	-	-	-	-
-	430	南001	72-79K	包含層	陶器	植林	大業2期			-	-	-	-	-	-	-
-	431	南001	E11K	5層下	陶器	植林	大業2期			-	-	-	-	-	-	-
-	432	南001	E25K	4層上	陶器	植林	大業2期			-	-	-	-	-	-	-
-	433	南001	E11K	5層	陶器	植林	大業2期			-	-	-	-	-	-	-
-	434	南001	E25K	4層上	陶器	植林	大業2期			-	-	-	-	-	-	-
-	435	南001	80-81K	包含層	陶器	植林	大業2期			-	-	-	-	-	-	-
-	436	南001	E25K	包含層	陶器	植林	大業2期			-	-	-	-	-	-	-
-	437	南001	E25K	包含層	陶器	植林	大業2期			-	-	-	-	-	-	-
-	438	南001	S30K	包含層	陶器	植林	大業2期			-	-	-	-	-	-	-
-	439	南001	S31K	4層	陶器	植林	大業2期			-	-	-	-	-	-	-
-	440	南001	E25K	4層上	陶器	植林	大業2期			-	-	-	-	-	-	-
-	441	南001	E25K	4層上	陶器	植林	大業2期			-	-	-	-	-	-	-
-	442	南001	E25K	4層上	陶器	植林	大業2期			-	-	-	-	-	-	-
-	443	南001	E11K	4層	陶器	植林	大業2期			-	-	-	-	-	-	-
-	444	南001	E25K	4層上	陶器	植林	大業2期			-	-	-	-	-	-	-
-	445	南001	E25K	4層上	陶器	植林	大業2期			-	-	-	-	-	-	-
-	446	南001	E25K	4層	陶器	植林	大業2期			-	-	-	-	-	-	-
-	447	南001	E25K	4層上	陶器	植林	大業2期			-	-	-	-	-	-	-
-	448	南001	E11K	4層	陶器	植林	大業2期			-	-	-	-	-	-	-

第17表 桜洞城跡出土遺物観察一覧表④

件名	団版 番号	整理 ID	出土遺構	出土 地区	出土 層位	取上 番号	種類	器種名	編 分	年 代	產 年	地 代	口徑 en	底径 en	成形・調整・施釉 等特徴	備考
—	449	南001	E1区	包含層	陶器	柱林		天安2期			—	—	—	—	—	
—	450	南001	E1区	4層	陶器	柱林		天安2期			—	—	—	—	—	
—	451	南001	E1区	5層下	陶器	柱林		天安2期			—	—	—	—	—	
—	452	南001	E1区	5層下	陶器	柱林		天安2期			—	—	—	—	—	
—	453	南001	E3区	4層	陶器	柱林		天安3期			—	—	—	—	—	
—	454	南001	E2区	4層下	陶器	柱林		天安3期			—	—	—	—	—	
—	455	南001	E2区	4層上	陶器	柱林		天安3期			—	—	—	—	—	
—	456	南001	S3区	4層	陶器	柱林		天安3期			—	—	—	—	—	
—	457	南001	E2区	4層	陶器	柱林		天安3期			—	—	—	—	—	
—	458	南001	E2区	4層下	陶器	柱林		天安3期			—	—	—	—	—	
—	459	南001	E2区	4層上	陶器	柱林		天安3期			—	—	—	—	—	
—	460	南001	S3区	4層	陶器	柱林		天安3期			—	—	—	—	—	
—	461	南001	S3区	4層	陶器	柱林		天安3期			—	—	—	—	—	
—	462	南001	E1区	5層下	陶器	柱林		天安3期			—	—	—	—	—	
—	463	南001	E1区	4層	陶器	柱林		天安3期			—	—	—	—	—	
—	464	南001	E1区	4層	陶器	柱林		天安1期			—	—	—	—	—	
—	465	南001	E3区	5層	陶器	柱林		天安3期			—	—	—	—	—	
—	466	南001	S3区	包含層	陶器	柱林		天安			—	—	—	—	—	
—	467	南001	E2区	4層上	陶器	鉢		天安			—	—	—	—	—	
—	468	南001	E3区	5層	陶器	天日茶碗		天安1期			—	—	—	—	—	
—	469	南001	E3区	5層	陶器	天日茶碗		天安1期			—	—	—	—	—	
—	470	南001	E2区	5層	陶器	天日茶碗		天安1期			—	—	—	—	—	
—	471	南001	E2区	5層上	陶器	天日茶碗		天安1期			—	—	—	—	—	
—	472	南001	E2区	4層下	陶器	天日茶碗		天安1期			—	—	—	—	—	
—	473	南001	E3区	4層	陶器	天日茶碗		天安1期			—	—	—	—	—	
—	474	南001	S3区	包含層	陶器	天日茶碗		天安1期			—	—	—	—	—	
—	475	南001	E2区	5層	陶器	天日茶碗		天安1期			—	—	—	—	—	
—	476	南001	E2区	包含層	陶器	天日茶碗		天安1期			—	—	—	—	—	
—	477	南001	E2区	4層下	陶器	天日茶碗		天安1期			—	—	—	—	—	
—	478	南001	E2区	4層下	陶器	天日茶碗		天安1期後半			—	—	—	—	—	
—	479	南001	E3区	4層	陶器	天日茶碗		天安1期後半			—	—	—	—	—	
—	480	南001	E3区	4層上	陶器	天日茶碗		天安1期後半			—	—	—	—	—	
—	481	南001	E1区	4層	陶器	天日茶碗		天安1期後半			—	—	—	—	—	
—	482	南001	S3区	包含層	陶器	天日茶碗		天安1期後半			—	—	—	—	—	
—	483	南001	E2区	4層下	陶器	天日茶碗		天安1期後半			—	—	—	—	—	
—	484	南001	S3区	包含層	陶器	天日茶碗		天安1期後半			—	—	—	—	—	
—	485	南001	E2区	4層上	陶器	天日茶碗		天安1期後半			—	—	—	—	—	
—	486	南001	S3区	表土	陶器	天日茶碗		天安1期後半			—	—	—	—	—	
—	487	南001	S3区	4層	陶器	天日茶碗		天安1期後半			—	—	—	—	—	
—	488	南001	E2区	4層下	陶器	天日茶碗		天安2期			—	—	—	—	—	
—	489	南001	E2区	4層下	陶器	天日茶碗		天安2期			—	—	—	—	—	
—	490	南001	E2区	4層上	陶器	天日茶碗		天安2期			—	—	—	—	—	
—	491	南001	E2区	4層下	陶器	天日茶碗		天安2期			—	—	—	—	—	
—	492	南001	E2区	4層下	陶器	天日茶碗		天安2期			—	—	—	—	—	
—	493	南001	E2区	4層上	陶器	天日茶碗		天安2期			—	—	—	—	—	
—	494	南001	E1区	5層下	陶器	天日茶碗		天安2期			—	—	—	—	—	
—	495	南001	E1区	5層下	陶器	天日茶碗		天安2期			—	—	—	—	—	
—	496	南001	E2区	表土	陶器	天日茶碗		天安2期			—	—	—	—	—	
—	497	南001	E2区	4層下	陶器	天日茶碗		天安2期			—	—	—	—	—	
—	498	南001	E1区	5層下	陶器	天日茶碗		天安2期			—	—	—	—	—	
—	499	南001	S3区	5層	陶器	天日茶碗		天安2期			—	—	—	—	—	
—	500	南001	E2区	4層上	陶器	天日茶碗		天安2期			—	—	—	—	—	
—	501	南001	S3区	包含層	陶器	天日茶碗		天安2期			—	—	—	—	—	
—	502	南001	E1区	4層	陶器	天日茶碗		天安2期			—	—	—	—	—	
—	503	南001	E1区	4層	陶器	天日茶碗		天安2期			—	—	—	—	—	
—	504	南001	E2区	4層上	陶器	天日茶碗		天安2期			—	—	—	—	—	

第18表 桜洞城跡出土遺物観察一覧表⑨

件目	団版 番号	整理 ID	出土遺構	出土 地区	出土 層番	取上 番号	種類	器種名	編年 分類	産 年	地 代	口径 en	底径 en	成形・調整・軸轆 等特徴	備考	
-	505	南001	E1区	5層+			陶器	天日茶碗	古瀬戸後期IV期新段階	-	-	-	-	-	-	
-	506	南001	E1区	5層+			陶器	天日茶碗	古瀬戸後期IV期新段階	-	-	-	-	-	-	
-	507	南001	E1区	5層+			陶器	天日茶碗	古瀬戸後期IV期新段階	-	-	-	-	-	-	
-	508	南001	E3区	5層			陶器	天日茶碗	大業1期	中津川か	-	-	-	-	-	-
-	509	南001	E3区	4層+			陶器	天日茶碗	大業1期	中津川か	-	-	-	-	-	-
-	510	南001	E2区	4層+			陶器	丸皿		大業2期		-	-	-	-	-
-	511	南001	E1区	4層			陶器	天日茶碗	大業1期	-	-	-	-	-	-	
-	512	南001	E1区	4層			陶器	天日茶碗	大業1期	-	-	-	-	-	-	
-	513	南001	E1区	4層			陶器	天日茶碗	大業1期	-	-	-	-	-	-	
-	514	南001	E1区	4層			陶器	天日茶碗	大業1期	-	-	-	-	-	-	
-	515	南001	E1区	4層			陶器	天日茶碗	大業1期	-	-	-	-	-	-	
-	516	南001	E1区	4層			陶器	天日茶碗	大業1期	-	-	-	-	-	-	
-	517	南001	E1区	4層			陶器	天日茶碗	大業1期	-	-	-	-	-	-	
-	518	南001	E1区	4層			陶器	楕円		大業1期	-	-	-	-	-	-
-	519	南001	E1区	4層			陶器	楕円		大業3期	-	-	-	-	-	-
-	520	南001	E1区	4層			陶器	天日茶碗	大業2期	-	-	-	-	-	-	
-	521	南001	E1区	4層			陶器	天日茶碗	大業2期	-	-	-	-	-	-	
-	522	南001	E1区	4層			陶器	天日茶碗		中国	-	-	-	-	-	-
-	523	南001	E1区	4層			陶器	天日茶碗		中国	-	-	-	-	-	-
-	524	南001	E1区	4層			陶器	小壺×小瓶	大業	-	-	-	-	-	-	
-	525	南001	E1区	4層			陶器	小壺×小瓶	大業	-	-	-	-	-	-	
-	526	南001	E1区	4層			陶器	灰釉瓦罈	大業1期か2期	-	-	-	-	-	-	
-	527	南001	E1区	4層			陶器	灰釉瓦罈	大業1期か2期	-	-	-	-	-	-	
-	528	南001	E1区	4層			陶器	灰釉瓦罈	大業1期か2期	-	-	-	-	-	-	
-	529	南001	E1区	4層			陶器	灰釉瓦罈	大業1期か2期	-	-	-	-	-	-	
-	530	南001	E1区	4層			陶器	灰釉瓦罈	大業1期か2期	-	-	-	-	-	-	
-	531	南001	E1区	4層			陶器	灰釉瓦罈	大業1期か2期	-	-	-	-	-	-	
-	532	南001	E1区	4層			陶器	灰釉瓦罈	大業1期か2期	-	-	-	-	-	-	
-	533	南001	E1区	4層			陶器	灰釉瓦罈	大業1期か2期	-	-	-	-	-	-	
-	534	南001	E1区	4層			陶器	灰釉瓦罈	大業1期か2期	-	-	-	-	-	-	
-	535	南001	E1区	4層			陶器	灰釉瓦罈	大業1期か2期	-	-	-	-	-	-	
-	536	南001	E1区	4層			陶器	灰釉瓦罈	大業1期か2期	-	-	-	-	-	-	
-	537	南001	E1区	4層			陶器	灰釉瓦罈	大業1期か2期	-	-	-	-	-	-	
-	538	南001	E1区	4層			陶器	灰釉瓦罈	大業1期か2期	-	-	-	-	-	-	
-	539	南001	E1区	4層			陶器	灰釉瓦罈	大業1期か2期	-	-	-	-	-	-	
-	540	南001	E1区	4層			陶器	灰釉瓦罈	大業1期か2期	-	-	-	-	-	-	
-	541	南001	E1区	4層			陶器	灰釉瓦罈	大業1期か2期	-	-	-	-	-	-	
-	542	南001	E1区	4層			陶器	灰釉瓦罈	大業1期か2期	-	-	-	-	-	-	
-	543	南001	E1区	4層			陶器	灰釉瓦罈か丸皿	大業1期か2期	-	-	-	-	-	-	
-	544	南001	E1区	4層			陶器	灰釉瓦罈か丸皿	大業1期か2期	-	-	-	-	-	-	
-	545	南001	E1区	4層			陶器	灰釉瓦罈か丸皿	大業1期か2期	-	-	-	-	-	-	
-	546	南001	E1区	4層			陶器	灰釉瓦罈か丸皿	大業1期か2期	-	-	-	-	-	-	
-	547	南001	E1区	4層			陶器	灰釉瓦罈か丸皿	大業1期か2期	-	-	-	-	-	-	
-	548	南001	E1区	4層			陶器	灰釉瓦罈	大業1期か2期	-	-	-	-	-	-	
-	549	南001	E1区	4層			陶器	灰釉瓦罈	大業1期か2期	-	-	-	-	-	-	
-	550	南001	E1区	4層			陶器	灰釉瓦罈か丸皿	大業1期か2期	-	-	-	-	-	-	
-	551	南001	E1区	4層			陶器	灰釉瓦罈か丸皿	大業1期か2期	-	-	-	-	-	-	
-	552	南001	E1区	4層			陶器	灰釉		大業	-	-	-	-	-	-
-	553	南001	E1区	4層			陶器	施利		大業	-	-	-	-	-	-
-	554	南001	E1区	4層			陶器	施釉		中国	-	-	-	-	-	-
-	555	南001	E1区	4層			陶器	錐輪小瓶	古瀬戸後期IV期新段階	-	-	-	-	-	-	
-	556	南001	E1区	4層			陶器	錐輪小瓶	古瀬戸後期IV期新段階	-	-	-	-	-	-	
-	557	南001	E1区	4層			陶器	天日茶碗	大業1期か2期	-	-	-	-	-	-	
-	558	南001	E1区	4層			陶器	天日茶碗	大業1期か2期	-	-	-	-	-	-	
-	559	南001	E1区	4層			陶器	天日茶碗	大業1期か2期	-	-	-	-	-	-	
-	560	南001	E1区	4層			陶器	天日茶碗	大業1期か2期	-	-	-	-	-	-	

第19表 桜洞城跡出土遺物観察一覧表⑯

件番	団版 番号	整理 ID	出土遺物	出土 地区	出土 層位	取上 番号	種類	器種名	編 年 類	產 年	地 代	口徑 en	底径 en	成形・調整・輪軸 等特徴	備考
—	561	南001	E1K	4層			陶器	天日茶碗	大業1期か2期			—	—	—	
—	562	南001	E1K	4層			陶器	天日茶碗	大業1期か2期			—	—	—	
—	563	南001	E1K	4層			陶器	天日茶碗	大業1期か2期			—	—	—	
—	564	南001	E1K	4層			陶器	天日茶碗	大業1期か2期			—	—	—	
—	565	南001	E1K	4層			陶器	天日茶碗	大業1期か2期			—	—	—	
—	566	南001	E1K	4層			陶器	天日茶碗	大業1期か2期			—	—	—	
—	567	南001	E1K	4層			陶器	天日茶碗	大業1期か2期			—	—	—	
—	568	南001	E1K	4層			陶器	天日茶碗	大業1期か2期			—	—	—	
—	569	南001	E1K	4層			陶器	天日茶碗	大業1期か2期			—	—	—	
—	570	南001	E1K	4層			陶器	天日茶碗	大業1期か2期			—	—	—	
—	571	南001	E1K	4層			白磁	瓶				—	—	—	
—	572	南001	E1K	4層			白磁	瓶				—	—	—	
—	573	南001	E1K	4層			陶器	埴輪	大業			—	—	—	
—	574	南001	E1K	4層			陶器	埴輪	大業			—	—	—	
—	575	南001	E1K	4層			陶器	埴輪	大業			—	—	—	
—	576	南001	E1K	4層			陶器	埴輪	大業			—	—	—	
—	577	南001	E1K	4層			陶器	埴輪	大業			—	—	—	
—	578	南001	E1K	4層			陶器	埴輪	大業			—	—	—	
—	579	南001	E1K	4層			陶器	埴輪	大業			—	—	—	
—	580	南001	E1K	4層			陶器	埴輪	大業			—	—	—	
—	581	南001	E1K	4層			陶器	埴輪	大業			—	—	—	
—	582	南001	E1K	4層			陶器	埴輪	大業			—	—	—	
—	583	南001	E1K	4層			陶器	埴輪	大業			—	—	—	
—	584	南001	E1K	4層			陶器	埴輪	大業			—	—	—	
—	585	南001	E1K	4層			陶器	埴輪	大業			—	—	—	
—	586	南001	E1K	4層			陶器	埴輪	大業			—	—	—	
—	587	南001	E1K	4層			陶器	埴輪	大業			—	—	—	
—	588	南001	E1K	4層			陶器	埴輪	大業			—	—	—	
—	589	南001	E1K	4層			陶器	埴輪	大業			—	—	—	
—	590	南001	E1K	4層			陶器	埴輪	大業			—	—	—	
—	591	南001	E1K	4層			陶器	埴輪	大業			—	—	—	
—	592	南001	E1K	4層			陶器	埴輪	大業			—	—	—	
—	593	南001	E1K	4層			陶器	埴輪	大業			—	—	—	
—	594	南001	E1K	4層			陶器	埴輪	大業			—	—	—	
—	595	南001	E1K	4層			陶器	埴輪	大業			—	—	—	
—	596	南001	E1K	4層			陶器	埴輪	大業			—	—	—	
—	597	南001	E1K	4層			陶器	埴輪	大業			—	—	—	
—	598	南001	E1K	4層			陶器	埴輪	大業			—	—	—	
—	599	南001	E1K	4層			陶器	埴輪	大業			—	—	—	
—	600	南001	E1K	4層			陶器	埴輪	大業			—	—	—	
—	601	南001	E1K	4層			陶器	埴輪	大業			—	—	—	
—	602	南001	E1K	4層			陶器	埴輪	大業			—	—	—	
—	603	南001	E1K	4層			陶器	埴輪	大業			—	—	—	
—	604	南001	E1K	4層			陶器	埴輪	大業			—	—	—	
—	605	南001	E1K	4層			陶器	埴輪	大業			—	—	—	
—	606	南001	E1K	4層			陶器	埴輪	大業			—	—	—	
—	607	南001	E1K	4層			陶器	埴輪	大業			—	—	—	
—	608	南001	E1K	4層			陶器	埴輪	大業			—	—	—	
—	609	南001	E1K	4層			陶器	埴輪	大業			—	—	—	
—	610	南001	E1K	4層			陶器	埴輪	大業			—	—	—	
—	611	南001	E1K	4層			陶器	埴輪	大業			—	—	—	
—	612	南001	E1K	4層			陶器	埴輪	大業			—	—	—	
—	613	南001	E1K	4層			陶器	埴輪	大業			—	—	—	
—	614	南001	E1K	4層			陶器	埴輪	大業			—	—	—	
—	615	南001	E1K	4層5層-柄			陶器	天日茶碗	大業1期か2期			—	—	—	
—	616	南001	E1K	4層5層-柄			陶器	天日茶碗	大業1期か2期			—	—	—	

第20表 桜洞城跡出土遺物観察一覧表①

件番	団版 番号	整理 ID	出土遺構	出土 地区	出土 層位	取上 番号	種類	器種名	編年 分類	產年 地代	口径 en	底径 en	成形・調整・輪軸 等特徴	備考
-	617	南001	E1K	4層5層	柱	陶器	天日茶碗	大室1期小2期	-	-	-	-	-	-
-	618	南001	E1K	4層5層	柱	陶器	灰釉丸瓶	-	-	-	-	-	-	-
-	619	南001	E1K	4層5層	柱	陶器	灰釉壺(腹巻か丸瓶)	大室1期小2期	-	-	-	-	-	-
-	620	南001	E1K	4層5層	柱	陶器	罐	大室	-	-	-	-	-	-
-	621	南001	E1K	4層5層	柱	陶器	罐	大室	-	-	-	-	-	-
-	622	南001	E1K	4層5層	柱	陶器	天日茶碗	大室2期	-	-	-	-	-	-
-	623	南001	E1K	4層5層	柱	陶器	天日茶碗	大室2期	-	-	-	-	-	-
-	624	南001	E1K	4層5層	柱	陶器	天日茶碗	大室2期	-	-	-	-	-	-
-	625	南001	E1K	4層5層	柱	陶器	天日茶碗	大室1期	-	-	-	-	-	-
-	626	南001	E1K	4層5層	柱	陶器	天日茶碗	大室1期	-	-	-	-	-	-
-	627	南001	E1K	4層5層	柱	陶器	天日茶碗	大室1期	-	-	-	-	-	-
-	628	南001	E1K	5層	陶器	天日茶碗	古窯戸後期Ⅳ期新出現	-	-	-	-	-	-	-
-	629	南001	E1K	5層	陶器	天日茶碗	大室1期	-	-	-	-	-	-	-
-	630	南001	E1K	5層	陶器	天日茶碗	大室1期	-	-	-	-	-	-	-
-	631	南001	E1K	5層	陶器	天日茶碗	大室1期	-	-	-	-	-	-	-
-	632	南001	E1K	5層	陶器	天日茶碗	大室1期	-	-	-	-	-	-	-
-	633	南001	E1K	5層	陶器	天日茶碗	大室1期	-	-	-	-	-	-	-
-	634	南001	E1K	5層	陶器	天日茶碗	大室1期	-	-	-	-	-	-	-
-	635	南001	E1K	5層	陶器	天日茶碗	大室1期	-	-	-	-	-	-	-
-	636	南001	E1K	5層	陶器	天日茶碗	大室1期	-	-	-	-	-	-	-
-	637	南001	E1K	5層	陶器	天日茶碗	大室1期小2期	-	-	-	-	-	-	-
-	638	南001	E1K	5層	陶器	天日茶碗	大室1期小2期	-	-	-	-	-	-	-
-	639	南001	E1K	5層	陶器	天日茶碗	大室1期小2期	-	-	-	-	-	-	-
-	640	南001	E1K	5層	陶器	天日茶碗	大室1期小2期	-	-	-	-	-	-	-
-	641	南001	E1K	5層	陶器	天日茶碗	大室1期小2期	-	-	-	-	-	-	-
-	642	南001	E1K	5層	陶器	天日茶碗	大室1期小2期	-	-	-	-	-	-	-
-	643	南001	E1K	5層	陶器	天日茶碗	大室1期小2期	-	-	-	-	-	-	-
-	644	南001	E1K	5層	陶器	天日茶碗	大室1期小2期	-	-	-	-	-	-	-
-	645	南001	E1K	5層	陶器	天日茶碗	大室1期小2期	-	-	-	-	-	-	-
-	646	南001	E1K	5層	陶器	天日茶碗	大室1期小2期	-	-	-	-	-	-	-
-	647	南001	E1K	5層	陶器	天日茶碗	大室1期小2期	-	-	-	-	-	-	-
-	648	南001	E1K	5層	陶器	天日茶碗	大室1期小2期	-	-	-	-	-	-	-
-	649	南001	E1K	5層	陶器	天日茶碗	大室1期小2期	-	-	-	-	-	-	-
-	650	南001	E1K	5層	陶器	天日茶碗	大室1期小2期	-	-	-	-	-	-	-
-	651	南001	E1K	5層	陶器	天日茶碗	大室1期小2期	-	-	-	-	-	-	-
-	652	南001	E1K	5層	陶器	天日茶碗	大室1期小2期	-	-	-	-	-	-	-
-	653	南001	E1K	5層	陶器	天日茶碗	大室2期	-	-	-	-	-	-	-
-	654	南001	E1K	5層	陶器	天日茶碗	大室2期	-	-	-	-	-	-	-
-	655	南001	E1K	5層	陶器	粗袖造	-	中国	-	-	-	-	-	-
-	656	南001	E1K	5層	白磁	-	-	-	-	-	-	-	-	-
-	657	南001	E1K	5層	白磁	瓶	-	-	-	-	-	-	-	-
-	658	南001	E1K	5層	陶器	灰釉壺(腹巻)	大室1期	-	-	-	-	-	-	-
-	659	南001	E1K	5層	陶器	灰釉壺(腹巻)	大室1期	-	-	-	-	-	-	-
-	660	南001	E1K	5層	陶器	灰釉壺(腹巻)	大室1期	-	-	-	-	-	-	-
-	661	南001	E1K	5層	陶器	綠釉小瓶	古窯戸後期Ⅳ期	-	-	-	-	-	-	-
-	662	南001	E1K	5層	陶器	綠釉小瓶	古窯戸後期Ⅳ期	-	-	-	-	-	-	-
-	663	南001	E1K	5層	陶器	灰釉丸瓶	大室2期	-	-	-	-	-	-	-
-	664	南001	E1K	5層	陶器	灰釉丸瓶	大室2期	-	-	-	-	-	-	-
-	665	南001	E1K	5層	陶器	灰釉丸瓶	大室2期	-	-	-	-	-	-	-
-	666	南001	E1K	5層	陶器	灰釉壺(腹巻)小丸瓶	大室1期小2期	-	-	-	-	-	-	-
-	667	南001	E1K	5層	陶器	灰釉壺(腹巻)小丸瓶	大室1期小2期	-	-	-	-	-	-	-
-	668	南001	E1K	5層	陶器	灰釉壺(腹巻)小丸瓶	大室1期小2期	-	-	-	-	-	-	-
-	669	南001	E1K	5層	陶器	灰釉壺(腹巻)小丸瓶	大室1期小2期	-	-	-	-	-	-	-
-	670	南001	E1K	5層	陶器	灰釉壺(腹巻)小丸瓶	大室1期小2期	-	-	-	-	-	-	-
-	671	南001	E1K	5層	陶器	灰釉壺(腹巻)小丸瓶	大室1期小2期	-	-	-	-	-	-	-
-	672	南001	E1K	5層	陶器	灰釉壺(腹巻)小丸瓶	大室1期小2期	-	-	-	-	-	-	-

第21表 桜洞城跡出土遺物観察一覧表⑧

件目	団版 番号	整理 ID	出土遺構	出土 地区	出土 層番	取上 番号	種類	器種名	編年 分類	產 年	地 代	口徑 en	底径 en	成形・調整・軸轆等特徴	備考
—	673	南001	E1区	5層			陶器	縁付小瓶	古漸戸後期IV層古段階	—	—	—	—	—	—
—	674	南001	E1区	5層			陶器	縁付小瓶	古漸戸後期IV層古段階	—	—	—	—	—	—
—	675	南001	E1区	5層下			陶器	縁付小瓶	古漸戸後期IV層古段階	—	—	—	—	—	—
—	676	南001	E1B区	5層下			陶器	罐林	大業2期	—	—	—	—	—	—
—	677	南001	E1B区	5層下			陶器	罐林	大業	—	—	—	—	—	—
—	678	南001	E1区	5層下			陶器	罐林	大業	—	—	—	—	—	—
—	679	南001	E1区	5層下			陶器	罐林	大業	—	—	—	—	—	—
—	680	南001	E1区	5層下			陶器	罐林	大業	—	—	—	—	—	—
—	681	南001	E1B区	5層下			陶器	罐林	大業	—	—	—	—	—	—
—	682	南001	E1B区	5層下			陶器	罐林	大業	—	—	—	—	—	—
—	683	南001	E1区	5層下			陶器	罐林	大業	—	—	—	—	—	—
—	684	南001	E1区	5層下			陶器	罐林	大業	—	—	—	—	—	—
—	685	南001	E1区	5層下			陶器	罐林	大業	—	—	—	—	—	—
—	686	南001	E1B区	5層下			陶器	罐林	大業	—	—	—	—	—	—
—	687	南001	E1B区	5層下			陶器	罐林	大業	—	—	—	—	—	—
—	688	南001	E1B区	5層下			陶器	罐林	大業	—	—	—	—	—	—
—	689	南001	E1区	5層下			陶器	罐林	大業	—	—	—	—	—	—
—	690	南001	E1区	5層下			陶器	罐林	大業	—	—	—	—	—	—
—	691	南001	E1B区	5層下			陶器	罐林	大業	—	—	—	—	—	—
—	692	南001	E1B区	5層下			陶器	罐林	大業	—	—	—	—	—	—
—	693	南001	E1区	5層下			陶器	罐林	大業	—	—	—	—	—	—
—	694	南001	E1区	5層下			陶器	罐林	大業	—	—	—	—	—	—
—	695	南001	E1区	5層下			陶器	罐林	大業	—	—	—	—	—	—
—	696	南001	E1区	5層下			陶器	罐林	大業	—	—	—	—	—	—
—	697	南001	E1区	5層下			陶器	罐林	大業	—	—	—	—	—	—
—	698	南001	E1区	5層下			陶器	罐林	大業	—	—	—	—	—	—
—	699	南001	E1区	5層下			陶器	罐林	大業	—	—	—	—	—	—
—	700	南001	E1区	5層下			陶器	罐林	大業	—	—	—	—	—	—
—	701	南001	E1区	5層下			陶器	罐林	大業	—	—	—	—	—	—
—	702	南001	E1区	5層下			陶器	罐林	大業	—	—	—	—	—	—
—	703	南001	E1区	5層下			陶器	罐林	大業	—	—	—	—	—	—
—	704	南001	E1区	5層			陶器	罐林	大業	—	—	—	—	—	—
—	705	南001	E1区	5層			陶器	罐林	大業	—	—	—	—	—	—
—	706	南001	E1区	5層			陶器	罐林	大業	—	—	—	—	—	—
—	707	南001	E1区	5層			陶器	罐林	大業	—	—	—	—	—	—
—	708	南001	E1区	5層			陶器	罐林	大業	—	—	—	—	—	—
—	709	南001	E1B区	包含層			陶器	罐林	大業	—	—	—	—	—	—
—	710	南001	E1B区	包含層			陶器	灰釉陶反置小丸瓶	大業1期か2期	—	—	—	—	—	—
—	711	南001	E1B区	包含層			陶器	灰釉陶反置小丸瓶	大業1期か2期	—	—	—	—	—	—
—	712	南001	E1B区	包含層			陶器	灰釉陶反置	大業1期	—	—	—	—	—	—
—	713	南001	E1区	包含層			陶器	罐林	大業3期前半	—	—	—	—	—	—
—	714	南001	E1区	包含層			陶器	天日茶碗	大業1期か2期	—	—	—	—	—	—
—	715	南001	E1区	包含層			陶器	天日茶碗	大業1期か2期	—	—	—	—	—	—
—	716	南001	E1B区	土器			陶器	罐林	大業	—	—	—	—	—	—
—	717	南001	E1B区	4層上			陶器	灰釉陶反置小丸瓶	大業1期か2期	—	—	—	—	—	—
—	718	南001	E1B区	4層上			陶器	灰釉陶反置小丸瓶	大業1期か2期	—	—	—	—	—	—
—	719	南001	E1B区	4層上			陶器	灰釉陶反置小丸瓶	大業1期か2期	—	—	—	—	—	—
—	720	南001	E1B区	4層上			陶器	灰釉陶反置小丸瓶	大業1期か2期	—	—	—	—	—	—
—	721	南001	E1B区	4層上			陶器	灰釉陶反置小丸瓶	大業1期か2期	—	—	—	—	—	—
—	722	南001	E1B区	4層上			陶器	灰釉陶反置小丸瓶	大業1期か2期	—	—	—	—	—	—
—	723	南001	E1B区	4層上			陶器	灰釉陶反置小丸瓶	大業1期か2期	—	—	—	—	—	—
—	724	南001	E1区	4層上			陶器	灰釉陶反置小丸瓶	大業1期か2期	—	—	—	—	—	—
—	725	南001	E1区	4層上			陶器	灰釉陶反置小丸瓶	大業1期か2期	—	—	—	—	—	—
—	726	南001	E1B区	4層下			陶器	灰釉陶反置小丸瓶	大業1期か2期	—	—	—	—	—	—
—	727	南001	E1B区	4層下			陶器	灰釉陶反置小丸瓶	大業1期か2期	—	—	—	—	—	—
—	728	南001	E1区	4層下			陶器	灰釉陶反置小丸瓶	大業1期か2期	—	—	—	—	—	—

第22表 桜洞城跡出土遺物観察一覧表(19)

第23表 桜洞城跡出土遺物観察一覧表②

第24表 桜洞城跡出土遺物観察一覧表②

種類	団版 番号	整理 ID	出土遺構	出土 地区	出土 層位	取上 番号	種類	器種名	編 年 類	產 年 代	口径 cm	底径 cm	成形・調整・施 等特徴	備考	
—	841	南001	EIK	4層下	陶器	灰釉丸皿	天安2期	—	—	—	—	—	—	—	
—	842	南001	EIK	4層下	陶器	灰釉丸皿	天安2期	—	—	—	—	—	—	—	
—	843	南001	EIK	4層下	陶器	灰釉丸皿	天安2期	—	—	—	—	—	—	—	
—	844	南001	EIK	4層下	陶器	灰釉丸皿	天安2期	—	—	—	—	—	—	—	
—	845	南001	EIK	4層下	陶器	灰釉丸皿	天安2期	—	—	—	—	—	—	—	
—	846	南001	EIK	4層下	陶器	灰釉丸皿	天安2期	—	—	—	—	—	—	—	
—	847	南001	EIK	4層下	陶器	灰釉丸皿	天安2期	—	—	—	—	—	—	—	
—	848	南001	EIK	4層下	陶器	灰釉丸皿	天安2期	—	—	—	—	—	—	—	
—	849	南001	EIK	4層下	陶器	抹棒	天安1期	—	—	—	—	—	—	—	
—	850	南001	EIK	4層下	陶器	灰釉丸碗	天安1期	—	—	—	—	—	—	—	
—	851	南001	EIK	4層下	陶器	平碗	天安1期	—	—	—	—	—	—	—	
—	852	南001	EIK	4層上	陶器	平碗	天安1期	—	—	—	—	—	—	—	
—	853	南001	EIK	4層上	陶器	灰釉内斬皿	天安3期後半	—	—	—	—	—	—	—	
—	854	南001	EIK	4層上	陶器	泡利	天安	—	—	—	—	—	—	—	
—	855	南001	EIK	4層上	陶器	泡利	天安	—	—	—	—	—	—	—	
—	856	南001	EIK	4層上	陶器	相袖舟	—	中国	—	—	—	—	—	—	—
—	857	南001	EIK	4層上	陶器	綠釉小皿	古漁戸後期IV期古段階	—	—	—	—	—	—	—	
—	858	南001	EIK	4層上	陶器	灰釉腰折皿	古漁戸後期IV期古段階	—	—	—	—	—	—	—	
—	859	南001	EIK	4層上	陶器	灰釉平碗	古漁戸後期	—	—	—	—	—	—	—	
—	860	南001	EIK	4層上	陶器	灰釉平碗	古漁戸後期	—	—	—	—	—	—	—	
—	861	南001	EIK	4層上	陶器	鉢皿	古漁戸後期	—	—	—	—	—	—	—	
—	862	南001	EIK	4層上	陶器	山茶碗	東濃型第5型式	12世紀～13世紀	—	—	—	—	—	—	
—	863	南001	EIK	4層上	陶器	山茶碗	東濃型第5型式	12世紀～13世紀	—	—	—	—	—	—	
—	864	南001	EIK	4層上	陶器	山茶碗	東濃型第5型式	12世紀～13世紀	—	—	—	—	—	—	
—	865	南001	EIK	4層上	陶器	山茶碗	東濃型第5型式	12世紀～13世紀	—	—	—	—	—	—	
—	866	南001	EIK	4層上	陶器	山茶碗	不明	—	—	—	—	—	—	—	
—	867	南001	EIK	4層上	陶器	山茶碗	不明	—	—	—	—	—	—	—	
—	868	南001	EIK	4層上	陶器	山茶碗	不明	—	—	—	—	—	—	—	
—	869	南001	EIK	4層上	陶器	山茶碗	不明	—	—	—	—	—	—	—	
—	870	南001	EIK	4層上	陶器	天日茶碗	古漁戸後期IV期古段階	—	—	—	—	—	—	—	
—	871	南001	EIK	4層上	陶器	天日茶碗	古漁戸後期IV期	—	—	—	—	—	—	—	
—	872	南001	EIK	4層上	陶器	天日茶碗	天安1期	—	—	—	—	—	—	—	
—	873	南001	EIK	4層上	陶器	天日茶碗	天安1期	—	—	—	—	—	—	—	
—	874	南001	EIK	4層上	陶器	天日茶碗	天安1期	—	—	—	—	—	—	—	
—	875	南001	EIK	4層上	陶器	天日茶碗	天安1期	—	—	—	—	—	—	—	
—	876	南001	EIK	4層上	陶器	天日茶碗	天安1期	—	—	—	—	—	—	—	
—	877	南001	EIK	4層上	陶器	天日茶碗	天安1期	—	—	—	—	—	—	—	
—	878	南001	EIK	4層上	陶器	天日茶碗	天安1期	—	—	—	—	—	—	—	
—	879	南001	EIK	4層上	陶器	天日茶碗	天安1期	—	—	—	—	—	—	—	
—	880	南001	EIK	4層上	陶器	天日茶碗	天安1期	—	—	—	—	—	—	—	
—	881	南001	EIK	4層上	陶器	天日茶碗	天安1期	—	—	—	—	—	—	—	
—	882	南001	EIK	4層上	陶器	天日茶碗	天安1期	—	—	—	—	—	—	—	
—	883	南001	EIK	4層上	陶器	天日茶碗	天安1期	—	—	—	—	—	—	—	
—	884	南001	EIK	4層上	陶器	天日茶碗	天安1期	—	—	—	—	—	—	—	
—	885	南001	EIK	4層上	陶器	天日茶碗	天安1期	—	—	—	—	—	—	—	
—	886	南001	EIK	4層上	陶器	天日茶碗	天安1期	—	—	—	—	—	—	—	
—	887	南001	EIK	4層上	陶器	天日茶碗	天安1期か2期	—	—	—	—	—	—	—	
—	888	南001	EIK	4層上	陶器	天日茶碗	天安1期か2期	—	—	—	—	—	—	—	
—	889	南001	EIK	4層上	陶器	天日茶碗	天安1期か2期	—	—	—	—	—	—	—	
—	890	南001	EIK	4層上	陶器	天日茶碗	天安1期か2期	—	—	—	—	—	—	—	
—	891	南001	EIK	4層上	陶器	天日茶碗	天安1期か2期	—	—	—	—	—	—	—	
—	892	南001	EIK	4層上	陶器	天日茶碗	天安1期か2期	—	—	—	—	—	—	—	
—	893	南001	EIK	4層上	陶器	天日茶碗	天安1期か2期	—	—	—	—	—	—	—	
—	894	南001	EIK	4層上	陶器	天日茶碗	天安1期か2期	—	—	—	—	—	—	—	
—	895	南001	EIK	4層上	陶器	天日茶碗	天安1期か2期	—	—	—	—	—	—	—	
—	896	南001	EIK	4層上	陶器	天日茶碗	天安1期か2期	—	—	—	—	—	—	—	

第25表 桜洞城跡出土遺物観察一覧表(2)

第26表 桜洞城跡出土遺物観察一覧表²³⁾

件番	団版 番号	整理 ID	出土遺構	出土 地区	出土 層位	取上 番号	種類	器種名	編 分	年 代	產 年	地 代	口徑 en	底径 en	成形・調整・軸袖 等特徴	備考
—	953	[南001]	E1区	4層上	陶器	埴林	大業						—	—	—	
—	954	[南001]	E1区	4層上	陶器	埴林	大業						—	—	—	
—	955	[南001]	E1区	4層上	陶器	埴林	大業						—	—	—	
—	956	[南001]	E1区	4層下	陶器	埴林	大業						—	—	—	
—	957	[南001]	E1区	4層下	陶器	埴林	大業						—	—	—	
—	958	[南001]	E1区	4層下	陶器	埴林	大業						—	—	—	
—	959	[南001]	E1区	4層下	陶器	埴林	大業						—	—	—	
—	960	[南001]	E1区	4層下	陶器	埴林	大業						—	—	—	
—	961	[南001]	E1区	4層下	陶器	埴林	大業						—	—	—	
—	962	[南001]	E1区	4層下	陶器	埴林	大業						—	—	—	
—	963	[南001]	E1区	4層下	陶器	埴林	大業						—	—	—	
—	964	[南001]	E1区	4層下	陶器	埴林	大業						—	—	—	
—	965	[南001]	E1区	4層下	陶器	埴林	大業						—	—	—	
—	966	[南001]	E1区	4層下	陶器	埴林	大業						—	—	—	
—	967	[南001]	E1区	4層下	陶器	埴林	大業						—	—	—	
—	968	[南001]	E1区	4層下	陶器	埴林	大業						—	—	—	
—	969	[南001]	E1区	4層下	陶器	埴林	大業						—	—	—	
—	970	[南001]	E1区	4層下	陶器	埴林	大業						—	—	—	
—	971	[南001]	E1区	4層下	陶器	埴林	大業						—	—	—	
—	972	[南001]	E1区	4層下	陶器	埴林	大業						—	—	—	
—	973	[南001]	E1区	4層下	陶器	埴林	大業						—	—	—	
—	974	[南001]	E1区	4層下	陶器	埴林	大業						—	—	—	
—	975	[南001]	E1区	4層下	陶器	埴林	大業						—	—	—	
—	976	[南001]	E1区	4層下	陶器	埴林	大業						—	—	—	
—	977	[南001]	E1区	4層下	陶器	埴林	大業						—	—	—	
—	978	[南001]	E1区	4層下	陶器	埴林	大業						—	—	—	
—	979	[南001]	E1区	4層下	陶器	埴林	大業						—	—	—	
—	980	[南001]	E1区	4層上	陶器	口広有耳造	古瀬戸燒Ⅲ期						—	—	—	
—	981	[南001]	E1区	4層上	陶器	口広有耳造	古瀬戸燒Ⅲ期						—	—	—	
—	982	[南001]	E1区	4層上	陶器	丸皿	大業1期						—	—	—	
—	983	[南001]	E1区	4層上	陶器	丸皿	大業1期						—	—	—	
—	984	[南001]	E1区	4層上	陶器	丸皿	大業1期						—	—	—	
—	985	[南001]	E1区	4層上	陶器	丸皿	大業1期						—	—	—	
—	986	[南001]	E1区	4層上	陶器	丸皿	大業1期						—	—	—	
—	987	[南001]	E1区	4層上	陶器	丸皿	大業1期						—	—	—	
—	988	[南001]	E1区	4層上	陶器	丸皿	大業2期前半						—	—	—	
—	989	[南001]	E1区	4層上	陶器	丸皿	大業2期前半						—	—	—	
—	990	[南001]	E1区	4層上	陶器	丸皿	大業2期前半						—	—	—	
—	991	[南001]	E1区	4層上	陶器	丸皿	大業2期前半						—	—	—	
—	992	[南001]	E1区	4層上	陶器	丸皿	大業2期前半						—	—	—	
—	993	[南001]	E1区	4層上	陶器	丸皿	大業2期前半						—	—	—	
—	994	[南001]	E1区	4層上	陶器	丸皿	大業2期前半						—	—	—	
—	995	[南001]	E1区	4層下	陶器	丸皿	大業2期前半						—	—	—	
—	996	[南001]	E1区	4層下	陶器	丸皿	大業2期前半						—	—	—	
—	997	[南001]	E1区	4層下	陶器	丸皿	大業2期前半						—	—	—	
—	998	[南001]	E1区	4層下	陶器	丸皿	大業2期前半						—	—	—	
—	999	[南001]	E1区	4層下	陶器	丸皿	大業2期前半						—	—	—	
—	1000	[南001]	E1区	4層上	陶器	灰釉瓦盤	大業2期						—	—	—	
—	1001	[南001]	E1区	4層上	陶器	灰釉瓦盤	大業2期						—	—	—	
—	1002	[南001]	E1区	4層下	陶器	灰釉瓦盤	大業2期						—	—	—	
—	1003	[南001]	E1区	4層上	陶器	模量	大業2期						—	—	—	
—	1004	[南001]	E1区	4層上	陶器	模量	大業2期						—	—	—	
—	1005	[南001]	E1区	4層上	青磁	碗							—	—	—	
—	1006	[南001]	E1区	4層上	青磁	不明							—	—	—	
—	1007	[南001]	E1区	4層上	青磁	不明							—	—	—	
—	1008	[南001]	E1区	4層上	白磁	瓶小口							—	—	—	

第27表 桜洞城跡出土遺物観察一覧表²⁴⁾

種類	団版 番号	整理 番号	出土構 造	出土 地区	出土 層位	取上 番号	種類	器種名	編年 分類	產 年代	口径 cm	底径 cm	成形・調整・ 施作等特徴	備考
—	—	1009	南001	E11K	4層上	白磁	瓶小網			—	—	—		
—	—	1010	南001	E11K	4層上	白磁	瓶小網			—	—	—		
—	—	1011	南001	E11K	4層上	白磁	瓶小網			—	—	—		
—	—	1012	南001	E11K	4層上	白磁	瓶小網			—	—	—		
—	—	1013	南001	E11K	4層上	白磁	瓶小網			—	—	—		
—	—	1014	南001	E11K	4層上	白磁	瓶小網			—	—	—		
—	—	1015	南001	E11K	4層上	白磁	瓶小網			—	—	—		
—	—	1016	南001	E11K	4層上	白磁	瓶小網			—	—	—		
—	—	1017	南001	E11K	4層上	白磁	瓶小網			—	—	—		
—	—	1018	南001	E11K	4層上	白磁	瓶小網			—	—	—		
—	—	1019	南001	E11K	4層上	白磁	瓶小網			—	—	—		
—	—	1020	南001	E11K	4層上	白磁	瓶小網			—	—	—		
—	—	1021	南001	E11K	4層上	白磁	瓶小網			—	—	—		
—	—	1022	南001	E11K	4層上	白磁	瓶小網			—	—	—		
—	—	1023	南001	E11K	4層上	白磁	小坪			—	—	—		
—	—	1024	南001	E21K	5層	陶器	灰釉開反面小丸瓶	大室1期か2期		—	—	—		
—	—	1025	南001	E21K	5層	陶器	灰釉開反面	大室1期		—	—	—		
—	—	1027	南001	E21K	5層上	陶器	山茶網	東濃第5型式(浅間葉下)	12世紀~13世紀	—	—	—		
—	—	1028	南001	E21K	5層上	陶器	山茶網	東濃第10型式(大頭束)	14世紀~15世紀	—	—	—		
—	—	1029	南001	E21K	5層上	陶器	天日茶網	大室1期		—	—	—		
—	—	1030	南001	E21K	5層上	陶器	天日茶網	大室1期		—	—	—		
—	—	1031	南001	E21K	5層上	陶器	天日茶網	大室1期		—	—	—		
—	—	1032	南001	E21K	5層	陶器	天日茶網	大室1期		—	—	—		
—	—	1033	南001	E21K	5層上	陶器	天日茶網	大室1期か2期		—	—	—		
—	—	1034	南001	E21K	5層	陶器	天日茶網	大室2期		—	—	—		
—	—	1035	南001	E21K	5層	陶器	灰釉丸瓶	大室1期		—	—	—		
—	—	1036	南001	E21K	5層	陶器	桂林	大室		—	—	—		
—	—	1037	南001	E21K	5層	陶器	甕	古戸戸後期か		—	—	—		
—	—	1038	南001	E21K	5層	陶器	甕	古戸戸後期か		—	—	—		
—	—	1039	南001	E21K	5層上	白磁	瓶小網			—	—	—		
—	—	1040	南001	E21K	5層上	白磁	瓶小網			—	—	—		
—	—	1041	南001	E21K	5層上	白磁	瓶小網			—	—	—		
—	—	1042	南001	E21K	5層上	白磁	瓶小網			—	—	—		
—	—	1043	南001	E21K	5層	青磁	甕			—	—	—		
—	—	1044	南001	E21K	表土	陶器	池利	大室1期か2期		—	—	—		
—	—	1045	南001	E21K	表土	陶器	天日茶網	大室1期か2期		—	—	—		
—	—	1046	南001	E21K	表土	陶器	天日茶網	大室		—	—	—		
—	—	1047	南001	E21K	表土	陶器	天日茶網	大室2期か3期		—	—	—		
—	—	1048	南001	E21K	表土	陶器	灰釉開反面小丸瓶	大室1期か2期		—	—	—		
—	—	1049	南001	E21K	表土	陶器	灰釉開反面小丸瓶	大室1期か2期		—	—	—		
—	—	1050	南001	E21K	表土	陶器	桂林	大室2期か3期		—	—	—		
—	—	1051	南001	E21K	包合層	陶器	桂林	大室		—	—	—		
—	—	1052	南001	E21K	表土	陶器	桂林	大室		—	—	—		
—	—	1053	南001	E21K	包合層	陶器	山茶網	東濃型		—	—	—		
—	—	1054	南001	E21K	包合層	陶器	灰釉開反面小丸瓶	大室1期か2期		—	—	—		
—	—	1055	南001	E21K	包合層	陶器	灰釉開反面小丸瓶	大室1期か2期		—	—	—		
—	—	1056	南001	E21K	包合層	陶器	灰釉開反面小丸瓶	大室1期か2期		—	—	—		
—	—	1057	南001	E21K	包合層	陶器	桂林	大室		—	—	—		
—	—	1058	南001	E21K	包合層	陶器	天日茶網	大室1期		—	—	—		
—	—	1059	南001	E21K	包合層	陶器	桂林	大室		—	—	—		
—	—	1060	南001	E21K	包合層	陶器	丸瓶	大室		—	—	—		
—	—	1061	南001	E21K	包合層	青磁	桜花瓶			—	—	—		
—	—	1062	南001	E21K	包合層	陶器	灰釉開反面小丸瓶	大室1期か2期		—	—	—		
—	—	1063	南001	E21K	表土	陶器	桂林			—	—	—		
—	—	1064	南001	E21K	表土	陶器	桂林			—	—	—		
—	—	1065	南001	E21K	表土	陶器	天日茶網	大室1期か2期		—	—	—		

第28表 桜洞城跡出土遺物観察一覧表(25)

第29表 桜洞城跡出土遺物観察一覧表(2)

第30表 桜洞城跡出土遺物観察一覧表②

件目	団版番号	整理ID	出土遺構	出土地区	出土層位	取上番号	種類	器種名	編年類	産年	年代	口径cm	底径cm	成形・調整・施等特徴	備考	
-	1178	南001	S3IK	4層	陶器	埴輪	大葉			-	-	-	-			
-	1179	南001	S3IK	4層	陶器	埴輪	大葉			-	-	-	-			
-	1180	南001	S3IK	4層	陶器	埴輪	大葉			-	-	-	-			
-	1181	南001	S3IK	4層	陶器	埴輪	大葉			-	-	-	-			
-	1182	南001	S3IK	4層	陶器	埴輪	大葉			-	-	-	-			
-	1183	南001	S3IK	4層	陶器	埴輪	大葉			-	-	-	-			
-	1184	南001	S3IK	4層	陶器	埴輪	大葉			-	-	-	-			
-	1185	南001	S3IK	4層	陶器	埴輪	大葉			-	-	-	-			
-	1186	南001	S3IK	4層	陶器	埴輪	大葉			-	-	-	-			
-	1187	南001	S3IK	4層	陶器	埴輪	大葉			-	-	-	-			
-	1188	南001	S3IK	4層	陶器	埴輪	大葉			-	-	-	-			
-	1189	南001	S3IK	4層	陶器	埴輪	大葉			-	-	-	-			
-	1190	南001	S3IK	4層			青磁	不明			-	-	-	-		
-	1191	南001	S3IK	4層			白磁	瓦			-	-	-	-		
-	1192	南001	S3IK	4層			白磁	瓦小瓶			-	-	-	-		
-	1193	南001	S3IK	4層			白磁	瓦小瓶			-	-	-	-		
-	1194	南001	S3IK	4層			陶器	天日茶碗	大葉1期		-	-	-	-		
-	1195	南001	S3IK	5層			陶器	天日茶碗	大葉1期か2期		-	-	-	-		
-	1196	南001	S3IK	5層			陶器	天日茶碗	大葉1期か2期		-	-	-	-		
-	1197	南001	S3IK	5層			陶器	天日茶碗	大葉1期		-	-	-	-		
-	1198	南001	S3IK	5層			陶器	天日茶碗	大葉2期		-	-	-	-		
-	1199	南001	S3IK	5層			陶器	埴輪	大葉3期		-	-	-	-		
-	1200	南001	S3IK	5層			陶器	埴輪	大葉		-	-	-	-		
-	1201	南001	S3IK	5層			陶器	埴輪	大葉		-	-	-	-		
-	1202	南001	S3IK	5層			陶器	埴輪	大葉		-	-	-	-		
-	1203	南001	S3IK	5層			陶器	埴輪	大葉		-	-	-	-		
-	1204	南001	S3IK	5層			白磁	瓦小瓶			-	-	-	-		
-	1205	南001	S3IK	5層			白磁	瓦小瓶			-	-	-	-		
-	1207	南001	S3IK	5層			陶器	丸瓶	大葉1期		-	-	-	-		
-	1208	南001	S3IK	5層			陶器	丸瓶	大葉1期		-	-	-	-		
-	1209	南001	S3IK	5層			陶器	天日茶碗	古瀬戸後開IV期新設置		-	-	-	-		
-	1210	南001	S3IK	5層			陶器	灰釉暗反瓦小丸瓶	大葉1期か2期		-	-	-	-		
-	1211	南001	S3IK	5層			陶器	灰釉暗反瓦小丸瓶	大葉1期か2期		-	-	-	-		
-	1212	南001	S3IK	5層			陶器	灰釉暗反瓦小丸瓶	大葉1期か2期		-	-	-	-		
-	1213	南001	S3IK	5層			陶器	灰釉暗反瓦小丸瓶	大葉1期か2期		-	-	-	-		
-	1214	南001	S3IK	5層			陶器	灰釉暗反瓦小丸瓶	大葉1期か2期		-	-	-	-		
-	1215	南001	S3IK	5層			陶器	包合層	埴輪	大葉		-	-	-		
-	1216	南001	S3IK	5層			陶器	包合層	埴輪	大葉		-	-	-		
-	1217	南001	S3IK	5層			陶器	包合層	埴輪	大葉		-	-	-		
-	1218	南001	S3IK	5層			陶器	小造点小瓶	大葉1期か2期		-	-	-	-		
-	1219	南001	S3IK	5層			陶器	包合層	綠釉小瓶	古瀬戸後開III期	-	-	-	-		
-	1220	南001	S3IK	5層			陶器	天日茶碗	大葉1期		-	-	-	-		
-	1221	南001	S3IK	5層			陶器	灰釉暗反瓦	大葉1期		-	-	-	-		
-	1222	南001	S3IK	5層			陶器	灰釉暗反瓦	大葉1期		-	-	-	-		
-	1223	南001	S3IK	5層			陶器	灰釉丸瓶	大葉2期		-	-	-	-		
-	1224	南001	S3IK	5層			陶器	灰釉丸瓶	大葉2期		-	-	-	-		
-	1225	南001	S3IK	5層			青磁	瓶			-	-	-	-		
-	1226	南001	S3IK	表面			陶器	林	大葉		-	-	-	-		
-	1227	南001	E2IK	5層			陶器	灰釉丸瓶	大葉2期前半						E2IK拂土と接合	
-	1228	南001	S3IK	5層			陶器	灰釉暗反瓦小丸瓶	大葉1期か2期		-	-	-	-		
-	1229	南001	表土				陶器	埴輪	大葉		-	-	-	-		
-	1230	南001		4層			陶器	灰釉暗反瓦小丸瓶	大葉1期か2期		-	-	-	-		
-	1231	南001		4層下			陶器	灰釉暗反瓦小丸瓶	大葉1期か2期		-	-	-	-		
-	1232	南001		4層下			陶器	灰釉暗反瓦小丸瓶	大葉1期か2期		-	-	-	-		
-	1233	南001		表土			陶器	天日茶碗	大葉		-	-	-	-		
-	1234			72-79IK	包合層		陶器	天日茶碗	大葉		-	-	-	-		

第31表 桜洞城跡出土遺物観察一覧表²⁸⁾

桝號	区段番号	整理TB	出土遺構	出土地区	出土層位	取上番号	種類	器種名	編分年類	產年	地代	口徑cm	底径cm	成形・調整・施釉等特徴	備考
-	1235		72+79K	包衣署			陶器	天目茶碗	大業						
-	1236		72+79K	包含署			陶器	天目茶碗	大業						
-	1237	[済]001			4層		陶器	鉢							
-	1238	[済]001	E11K		4層		陶器	天目茶碗	大業2期						S31K4層と接合
-	1239	[済]001	E31K	4層下			陶器	鉢	古瀬戸後期II期	14世紀~15世紀					
-	1240	[済]001	E21K	4層下			陶器	縁付小鉢	古瀬戸後期I期	14世紀~15世紀					
-	1241	[済]001	E21K	4層上			白磁	盤小鉢							
-	1242	[済]001	E21K	4層上			白磁	盤小鉢							
-	1243	[済]001	E21K	4層上			白磁	盤小鉢							
-	1244	[済]001	E21K	4層下			白磁	盤小鉢							
-	1245	[済]001	E21K	4層下			白磁	盤小鉢							
-	1246	[済]001	E21K	4層下			白磁	盤小鉢							
-	1247	[済]001	E21K	4層下			磁器	不明	中国						
-	1248	[済]001	E21K	4層下			磁器	不明	中国						
-	1249	[済]001	E21K	4層下			陶器	灰釉丸瓶	大業2期か3期						
-	1250	[済]001	E21K	4層上			陶器	甕		常滑					
-	1251	[済]001	E21K	4層上			陶器	甕		常滑					
-	1252	[済]001	E21K	4層上			陶器	甕		常滑					
-	1253	[済]001	E21K	4層上			陶器	甕		常滑					
-	1254		38+19K				陶器	瓶子	古瀬戸後期						
-	1255	[済]001	E31K	5層			白磁	瓶							
-	1256		611K	包衣署			陶器	瓶	大業						
-	1257	[済]001	E31K	包衣署			白磁	瓶小鉢							
-	1258		拂士				陶器	瓶子	古瀬戸後期						
-	1259	[済]001	E11K	拂士			陶器	縁付小瓶	古瀬戸後期IV期古占隠						
-	1260		30K	包含署			陶器	天目茶碗	大業1期						
-	1261		31K	包衣署			陶器	縁瓶	大業2期						
-	1262	[済]005	59K	襪土			白磁	小坪							
-	1263	[済]005	59K	襪土			白磁	小坪							
-	1264	[済]005	59K	襪土			白磁	小坪							
-	1265		16K	包含署			陶器	瓶類	古瀬戸後期I期から苗葉						
-	1266		39K	包衣署			陶器	瓶類	古瀬戸後期I期から苗葉						
-	1267		83K	4層			陶器	甕							
-	1268		83K	4層			陶器	甕	大業						
-	1269		83K	4層			陶器	甕	大業						
-	1270		83K	4層			陶器	甕	大業						
-	1271		83K	4層			陶器	甕	大業						
-	1272		83K	4層			陶器	甕	大業						
-	1273		83K	4層			陶器	甕	大業						
-	1274		83K	4層			陶器	甕	大業						
-	1275		83K	4層			陶器	甕	大業						
-	1276		83K	4層			陶器	甕	大業						
-	1277		83K	4層			陶器	甕	大業						
-	1278		83K	4層			陶器	甕	大業						
-	1279		83K	4層			陶器	甕	大業						
-	1280		83K	4層			陶器	甕	大業						
-	1281		83K	4層			陶器	甕	大業						
-	1282		83K	4層			陶器	甕	大業						
-	1283		83K	4層			陶器	甕	大業						
-	1284		83K	4層			陶器	甕	大業						
-	1285		83K	4層			陶器	甕	大業						
-	1286		83K	4層			陶器	甕	大業						
-	1287		83K	4層			陶器	甕	大業						
-	1288		83K	4層			陶器	甕	大業						
-	1289		83K	4層			陶器	甕	大業						
-	1290		83K	4層			陶器	甕	大業						

第32表 桜洞城跡出土遺物観察一覧表²⁹⁾

補66	区版番号	整理番号	出土遺構	出土地名	出土層位	取上番号	種類	器種名	編分年類	產年	地代	口径cm	底径cm	成形・調整・ 施釉等特徴	備考
—	—	1291	S31K	4層	陶器	便		大室		—	—	—	—	—	
—	—	1292	S31K	5層	陶器	便		大室		—	—	—	—	—	
—	—	1293	S31K	5層	陶器	便		大室		—	—	—	—	—	
—	—	1294	S31K	5層	陶器	便		大室		—	—	—	—	—	
—	—	1295	S31K	5層	陶器	便		大室		—	—	—	—	—	
—	—	1296	S31K	5層	陶器	便		大室		—	—	—	—	—	
—	—	1297	S31K	5層	陶器	便		大室		—	—	—	—	—	
—	—	1298	S31K	5層	陶器	便		大室		—	—	—	—	—	
—	—	1299	S31K	5層	陶器	便		大室		—	—	—	—	—	
—	—	1300	S31K	5層	陶器	便		大室		—	—	—	—	—	
—	—	1301	S31K	5層	陶器	便		大室		—	—	—	—	—	
—	—	1302	59K	包古層	陶器	便			八尾5+	—	—	—	—	—	
—	—	1303	59K	包古層	陶器	便			八尾5+	—	—	—	—	—	
—	—	1304	59K	包古層	陶器	埴輪		大室		—	—	—	—	—	
—	—	1305	68K	包古層	陶器	丸皿		大室2期		—	—	—	—	—	
—	—	1306	58K	包古層	陶器	便			常滑	—	—	—	—	—	
—	—	1307	58K	包古層	陶器	便			常滑	—	—	—	—	—	
—	—	1308	58K	包古層	陶器	便			常滑	—	—	—	—	—	
—	—	1309	58K	包古層	陶器	便			常滑	—	—	—	—	—	
—	—	1310	58K	包古層	陶器	便			常滑	—	—	—	—	—	
—	—	1311	80-81K	包古層	陶器	埴輪		古瀬戸後期1期から3期		—	—	—	—	—	
—	—	1312	80-81K	包古層	陶器	灰釉丸皿		大室1期		—	—	—	—	—	
—	—	1313	80-81K	包古層	陶器	灰釉丸皿		大室2期		—	—	—	—	—	
—	—	1314	80-81K	包古層	陶器	灰釉丸皿		大室2期		—	—	—	—	—	
—	—	1315	80-81K	包古層	陶器	灰釉丸皿		大室2期		—	—	—	—	—	
—	—	1316	80-81K	包古層	陶器	灰釉丸皿		大室2期		—	—	—	—	—	
—	—	1317	80-81K	包古層	陶器	便			常滑	—	—	—	—	—	
—	—	1318	80-81K	包古層	陶器	山茶碗		東濃型若6型式(白土原)	13世紀	—	—	—	—	—	
—	—	1319	80-81K	包古層	陶器	片口			中津川山						
—	—	1320	80-81K	包古層	青磁	碗				—	—	—	—	—	
—	—	1321	80-81K	包古層	青磁	碗				—	—	—	—	—	
—	—	1322	31K	包古層	陶器	鉢皿		古瀬戸後期		—	—	—	—	—	
—	—	1323	31K	包古層	陶器	便			常滑	—	—	—	—	—	
—	—	1324	13~31K	包古層	陶器	便			中津川山						
—	—	1325	18-19K	包古層	陶器	便			中津川山	—	—	—	—	—	
—	—	1326	18-19K	包古層	陶器	便			中津川山	—	—	—	—	—	
—	—	1327	21K	包古層	陶器	便			中津川山	—	—	—	—	—	
—	—	1328	21K	包古層	陶器	便			中津川山	—	—	—	—	—	
—	—	1329	21K	包古層	陶器	便			中津川山	—	—	—	—	—	
—	—	1330	不明遺構001	61K	繩土	白磁	小坪			—	—	—	—	—	
—	—	1331	不明遺構001	61K	繩土	白磁	小坪			—	—	—	—	—	
—	—	1332	不明遺構001	61K	繩土	白磁	小坪			—	—	—	—	—	
—	—	1333	不明遺構001	61K	繩土	白磁	小坪			—	—	—	—	—	
—	—	1334	不明遺構001	61K	繩土	白磁	小坪			—	—	—	—	—	
—	—	1335	不明遺構001	61K	繩土	白磁	小坪			—	—	—	—	—	
—	—	1336	不明遺構001	61K	繩土	白磁	小坪			—	—	—	—	—	
—	—	1337	不明遺構001	61K	繩土	白磁	小坪			—	—	—	—	—	
—	—	1338	不明遺構001	61K	繩土	白磁	小坪			—	—	—	—	—	
—	—	1339	不明遺構001	61K	繩土	白磁	小坪			—	—	—	—	—	
—	—	1340	不明遺構001	61K	繩土	白磁	小坪			—	—	—	—	—	
—	—	1341	不明遺構001	61K	繩土	白磁	小坪			—	—	—	—	—	
—	—	1342	不明遺構001	61K	繩土	白磁	小坪			—	—	—	—	—	
—	—	1343	不明遺構001	61K	繩土	白磁	小坪			—	—	—	—	—	
—	—	1344	不明遺構001	61K	繩土	白磁	小坪			—	—	—	—	—	
—	—	1345	不明遺構001	61K	繩土	白磁	小坪			—	—	—	—	—	
—	—	1346	不明遺構001	61K	繩土	白磁	小坪			—	—	—	—	—	

第33表 桜洞城跡出土遺物観察一覧表⑩

件番	団版 番号	整理 ID	出土遺構	出土 地区	出土 層位	取上 番号	種類	器種名	編 分	年 代	產 年	地 代	口徑 en	底径 en	成形・調整・輪軸 等特徴	備考
—	—	1347	不明遺構001	611K	複土	白磁	小坪				—	—	—	—	—	—
—	—	1348	不明遺構0001	611K	複土	白磁	小坪				—	—	—	—	—	—
—	—	1349	不明遺構0001	611K	複土	白磁	小坪				—	—	—	—	—	—
—	—	1350	不明遺構001	611K	複土	白磁	小坪				—	—	—	—	—	—
—	—	1351	不明遺構001	611K	複土	白磁	小坪				—	—	—	—	—	—
—	—	1352	不明遺構001	611K	複土	白磁	小坪				—	—	—	—	—	—
—	—	1353	不明遺構001	611K	複土	白磁	小坪				—	—	—	—	—	—
—	—	1354	不明遺構0001	611K	複土	白磁	小坪				—	—	—	—	—	—
—	—	1355	不明遺構001	611K	複土	白磁	小坪				—	—	—	—	—	—
—	—	1356	不明遺構001	611K	複土	白磁	小坪				—	—	—	—	—	—
—	—	1357	不明遺構001	611K	複土	白磁	小坪				—	—	—	—	—	—
—	—	1358	不明遺構001	611K	複土	白磁	小坪				—	—	—	—	—	—
—	—	1359	不明遺構001	611K	複土	白磁	小坪				—	—	—	—	—	—
—	—	1360	不明遺構001	611K	複土	白磁	小坪				—	—	—	—	—	—
—	—	1361	不明遺構001	611K	複土	白磁	小坪				—	—	—	—	—	—
—	—	1362	不明遺構001	611K	複土	白磁	小坪				—	—	—	—	—	—
—	—	1363	不明遺構001	611K	複土	白磁	小坪				—	—	—	—	—	—
—	—	1364	不明遺構001	611K	複土	白磁	小坪				—	—	—	—	—	—
—	—	1365	不明遺構001	611K	複土	白磁	小坪				—	—	—	—	—	—
—	—	1366	不明遺構001	611K	複土	白磁	小坪				—	—	—	—	—	—
—	—	1367	不明遺構001	611K	複土	白磁	小坪				—	—	—	—	—	—
—	—	1368	不明遺構001	611K	複土	白磁	小坪				—	—	—	—	—	—
—	—	1369	不明遺構001	611K	複土	白磁	小坪				—	—	—	—	—	—
—	—	1370	不明遺構001	611K	複土	白磁	小坪				—	—	—	—	—	—
—	—	1371	不明遺構0001	611K	複土	白磁	小坪				—	—	—	—	—	—
—	—	1372	不明遺構001	611K	複土	白磁	小坪				—	—	—	—	—	—
—	—	1373	不明遺構0001	611K	複土	白磁	小坪				—	—	—	—	—	—
—	—	1374	不明遺構001	611K	複土	白磁	小坪				—	—	—	—	—	—
—	—	1375	不明遺構001	611K	複土	白磁	小坪				—	—	—	—	—	—
—	—	1376	不明遺構001	611K	複土	白磁	小坪				—	—	—	—	—	—
—	—	1377	不明遺構001	611K	複土	白磁	小坪				—	—	—	—	—	—
—	—	1378	不明遺構0001	611K	複土	白磁	小坪				—	—	—	—	—	—
—	—	1379	不明遺構001	611K	複土	白磁	小坪				—	—	—	—	—	—
—	—	1380	不明遺構001	611K	複土	白磁	小坪				—	—	—	—	—	—
—	—	1381	不明遺構0001	611K	複土	白磁	小坪				—	—	—	—	—	—
—	—	1382	不明遺構001	611K	複土	白磁	小坪				—	—	—	—	—	—
—	—	1383	不明遺構0001	611K	複土	白磁	小坪				—	—	—	—	—	—
—	—	1384	不明遺構001	611K	複土	白磁	小坪				—	—	—	—	—	—
—	—	1385	不明遺構001	611K	複土	白磁	小坪				—	—	—	—	—	—
—	—	1386	不明遺構001	611K	複土	白磁	小坪				—	—	—	—	—	—
—	—	1387	不明遺構001	611K	複土	白磁	小坪				—	—	—	—	—	—
—	—	1388	不明遺構001	611K	複土	白磁	小坪				—	—	—	—	—	—
—	—	1389	不明遺構0001	611K	複土	白磁	小坪				—	—	—	—	—	—
—	—	1390	不明遺構001	611K	複土	白磁	小坪				—	—	—	—	—	—
—	—	1391	不明遺構001	611K	複土	白磁	小坪				—	—	—	—	—	—
—	—	1392	不明遺構001	611K	複土	白磁	小坪				—	—	—	—	—	—
—	—	1393	不明遺構001	611K	複土	白磁	小坪				—	—	—	—	—	—
—	—	1394		596K	包合層	白磁	小坪				—	—	—	—	—	—

第4章 自然科学分析

第1節 桜洞城跡出土遺物放射性炭素年代測定

1) 桜洞城跡東空堀出土炭化物の放射性炭素年代測定

1.はじめに

桜洞城址は岐阜県下呂市萩原町に位置する戦国時代（16世紀）の城跡である。桜洞城址より検出された試料について、加速器質量分析法（AMS法）による放射性炭素年代測定を行った。

2. 試料と方法

測定試料の情報、調製データは第34表のとおりである。

試料は東空堀の2区から出土した灯明皿内面に付着した炭化物2点である。いずれの灯明皿も内面の半分以上が付着炭化物で覆わっていた。付着炭化物は黒色～褐色で光沢が強く、一部は発砲しているように見られた。黒色の炭化物が厚く付着する箇所を選び、試料を採取した。

試料は調製後、加速器質量分析計（パレオ・ラボ、コンパクトAMS：NEC製 1.5SDH）を用いて測定した。得られた¹⁴C濃度について同位体分別効果の補正を行った後、¹⁴C年代、暦年代を算出した。

第34表 測定試料及び処理

測定番号	遺跡データ	試料データ	前処理
PLD-14356	調査区：SR109 造構：東空堀（2区） 層位：5層上 遺物No.65 その他：09.06.16	試料の種類：土器付着炭化物 器種：灯明皿 部位：内面 特徴：黒色～褐色、光沢強い、一部発砲 状態：dry	酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸：1.2N、水酸化ナトリウム：0.1N、塩酸：1.2N）
PLD-14402	調査区：SR109 造構：東空堀（2区南地区） 層位：5層上 遺物No.64	試料の種類：土器付着炭化物 器種：灯明皿 部位：内面 特徴：黒色～褐色、光沢強い、一部発砲 状態：dry	酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸：1.2N、水酸化ナトリウム：0.1N、塩酸：1.2N）

3. 結果

第35表に、同位体分別効果の補正に用いる炭素同位体比（δ¹³C）、同位体分別効果の補正を行つて暦年較正に用いた年代値、慣用に従つて年代値、誤差を丸めて表示した¹⁴C年代、¹⁴C年代を暦年代に較正した年代範囲を、第67図に暦年較正結果をそれぞれ示す。暦年較正に用いた年代値は下1桁を丸めていいない値であり、今後暦年較正曲線が更新された際にこの年代値を用いて暦年較正を行うために記載した。

¹⁴C年代はAD1950年を基点にして何年前かを示した年代である。¹⁴C年代（yrBP）の算出には、¹⁴Cの半減期としてLibbyの半減期5568年を使用した。また、付記した¹⁴C年代誤差（±1σ）は、測定の統計誤差、標準偏差等に基づいて算出され、試料の¹⁴C年代がその¹⁴C年代誤差内に入る確率が68.2%であることを示す。

なお、暦年較正の詳細は以下のとおりである。

暦年較正とは、大気中の¹⁴C濃度が一定で半減期が5568年として算出された¹⁴C年代に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の¹⁴C濃度の変動、及び半減期の違い（¹⁴Cの半減期

5730 ± 40 年) を較正して、より実際の年代値に近いものを算出することである。

14C 年代の暦年較正には OxCal4.1 (較正曲線データ : INTCAL04) を使用した。なお、 1σ 暦年代範囲は、OxCal の確率法を使用して算出された 14C 年代誤差に相当する 68.2% 信頼限界の暦年代範囲であり、同様に 2σ 暦年代範囲は 95.4% 信頼限界の暦年代範囲である。カッコ内の百分率の値は、その範囲内に暦年代が入る確率を意味する。グラフ中の縦軸上の曲線は 14C 年代の確率分布を示し、二重曲線は暦年較正曲線を示す。

第35表 放射性炭素年代測定及び暦年較正の結果

測定番号	$\delta^{13}\text{C}$ (‰)	暦年較正用年代 (yrBP ± 1 σ)	14C 年代 (yrBP ± 1 σ)	14C 年代を暦年代に較正した年代範囲	
				1 σ 暦年代範囲	2 σ 暦年代範囲
PLD-14356 遺物 No.65	-29.14 ± 0.15	296 ± 20	295 ± 20	1524AD(46.7%) 1558AD 1631AD(21.5%) 1647AD	1516AD(66.7%) 1595AD 1617AD(28.7%) 1651AD
PLD-14402 遺物 No.64	-29.02 ± 0.22	303 ± 22	305 ± 20	1522AD(51.3%) 1574AD 1627AD(16.9%) 1645AD	1496AD(1.8%) 1505AD 1512AD(69.1%) 1602AD 1616AD(24.6%) 1649AD

4. 考察

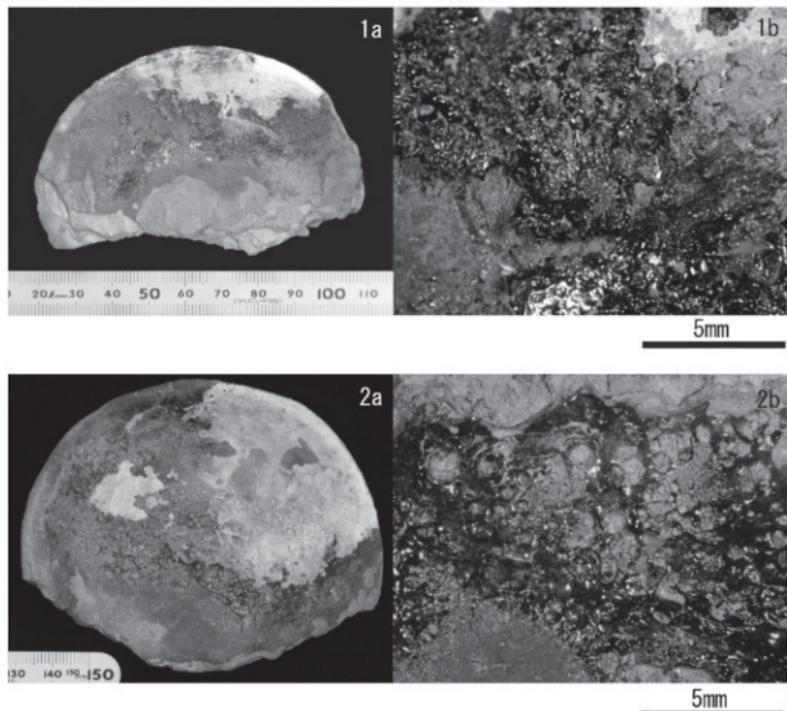
No.65 (PLD-14356) の暦年代範囲は、 1σ 暦年代範囲（確率 68.2%）が 1524–1558calAD(46.7%) および 1631–1647calAD(21.5%)、 2σ 暦年代範囲（確率 95.4%）が 1516–1595calAD(66.7%) および 1617–1651calAD(28.7%) であった。 2σ 暦年代範囲に着目すると、16 世紀前半～17 世紀中ごろの範囲を示した。

No.64 (PLD-14402) の暦年代範囲は、 1σ 暦年代範囲が 1522–1574calAD(51.3%) および 1627–1645calAD(16.9%)、 2σ 暦年代範囲が 1496–1505calAD(1.8%)、1512–1602calAD(69.1%)、1616–1649calAD(24.6%) であった。 2σ 暦年代範囲に着目すると、15 世紀末～17 世紀中ごろの範囲を示した。

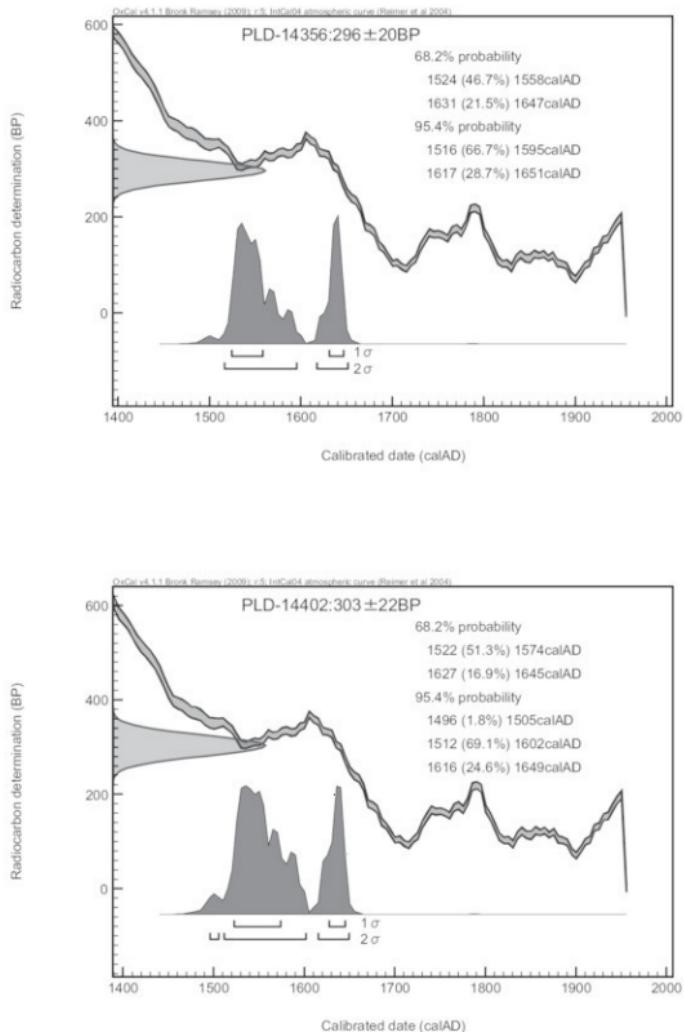
いづれの結果も戦国時代（16 世紀）とされる遺跡の発掘調査所見と矛盾しない。

参考文献

- Bronk Ramsey, C. (1995) Radiocarbon Calibration and Analysis of Stratigraphy: The OxCal Program. Radiocarbon, 37, 425–430.
- Bronk Ramsey, C. (2001) Development of the Radiocarbon Program OxCal. Radiocarbon, 43, 355–363.
- 中村俊夫 (2000) 放射性炭素年代測定法の基礎. 日本先史時代の 14C 年代, 3–20.
- Reimer, P.J., Baillie, M.G.L., Bard, E., Bayliss, A., Beck, J.W., Bertrand, C.J.H., Blackwell, P.G., Buck, C.E., Burr, G.S., Cutler, K.B., Damon, P.E., Edwards, R.L., Fairbanks, R.G., Friedrich, M., Guilderson, T.P., Hogg, A.G., Hughen, K.A., Kromer, B., McCormac, G., Manning, S., Bronk Ramsey, C., Reimer, R.W., Remmeli, S., Sounthor, J.R., Stuiver, M., Talamo, S., Taylor, F.W., van der Plicht, J. and Weyhenmeyer, C.E. (2004) IntCal04 terrestrial radiocarbon age calibration, 0–26 cal kyr BP. Radiocarbon, 46, 1029–1058.



第67図 灯明皿内面付着炭化物 1. No. 65 : PLD-14356 2. No. 64 : PLD-14402



第68図 歴年校正結果

2) 桜洞城跡不明遺構 001 出土炭化物の放射性炭素年代測定

1. はじめに

桜洞城址は岐阜県下呂市萩原町に位置する戦国時代（16世紀）の城跡である。桜洞城址より検出された試料について、加速器質量分析法（AMS法）による放射性炭素年代測定を行った。

2. 試料と方法

測定試料の情報、調製データは第36表のとおりである。

試料は調査区北側の不明遺構より検出された2点である。不明遺構からは貿易陶磁が出土しており、桜洞城址の中で階層の高い人間が居住していた場所と推定されている。遺物No.51(PLD-14905)は炭化種実塊を構成する炭化イネ1点である。なお、炭化種実塊は炭化した板材が上に被さった状態で出土した。遺物No.52(PLD-14906)は人為的な埋め戻し層から出土した炭化材である。人為的な埋め戻しが近世以降に行われた可能性があるため、埋め戻し時期を検討するために年代測定を行った。炭化材に樹皮は見られず、最外年輪は確認できなかったが、残存する中で最も外側から数年輪を採取した。

試料は調製後、加速器質量分析計（バレオ・ラボ、コンパクトAMS：NEC製 1.5SDH）を用いて測定した。得られた¹⁴C濃度について同位体分別効果の補正を行った後、¹⁴C年代、曆年代を算出した。

第36表 測定試料及び処理

測定番号	遺跡データ	試料データ	前処理
PLD-14905	調査区：SB.109 遺構：不明遺構 遺物No.51 取上日：09.11.16 その他：炭化種実塊	試料の種類：炭化イネ(1点) 状態：wet	粗音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸：1.2N, 水酸化ナトリウム：1N, 塩酸：1.2N）
PLD-14906	調査区：SB.109 遺構：不明遺構 層位：人為層 遺物No.52 取上日：09.11.16	試料の種類：炭化材（一部未炭化、針葉樹） 試料の性状：部位不明（できるだけ外側から数年輪） 状態：wet	粗音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸：1.2N, 水酸化ナトリウム：1N, 塩酸：1.2N）

3. 結果

第37表に、同位体分別効果の補正に用いる炭素同位体比（δ¹³C）、同位体分別効果の補正を行つて曆年較正に用いた年代値、慣用に従つて年代値、誤差を丸めて表示した¹⁴C年代、¹⁴C年代を曆年代に較正した年代範囲を、図1に曆年較正結果をそれぞれ示す。曆年較正に用いた年代値は下1桁を丸めていない値であり、今後曆年較正曲線が更新された際にこの年代値を用いて曆年較正を行うために記載した。

¹⁴C年代はAD1950年を基点にして何年前かを示した年代である。¹⁴C年代(yrBP)の算出には、¹⁴Cの半減期としてLibbyの半減期5568年を使用した。また、付記した¹⁴C年代誤差(±1σ)は、測定の統計誤差、標準偏差等に基づいて算出され、試料の¹⁴C年代がその¹⁴C年代誤差内に入る確率が68.2%であることを示す。

なお、曆年較正の詳細は以下のとおりである。

曆年較正とは、大気中の¹⁴C濃度が一定で半減期が5568年として算出された¹⁴C年代に対し、過

去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の^{14C}濃度の変動、及び半減期の違い(^{14C}の半減期5730±40年)を較正して、より実際の年代値に近いものを算出することである。

^{14C}年代の暦年較正にはOxCal4.1(較正曲線データ:INTCAL04)を使用した。なお、 1σ 暦年代範囲は、OxCalの確率法を使用して算出された^{14C}年代誤差に相当する68.2%信頼限界の暦年代範囲であり、同様に 2σ 暦年代範囲は95.4%信頼限界の暦年代範囲である。カッコ内の百分率の値は、その範囲内に暦年代が入る確率を意味する。グラフ中の縦軸上の曲線は^{14C}年代の確率分布を示し、二重曲線は暦年較正曲線を示す。

第37表 放射性炭素年代測定及び暦年較正の結果

測定番号	δ^{13C} (‰)	暦年較正年代 (yrBP ± 1 σ)	^{14C} 年代 (yrBP ± 1 σ)	14C年代に暦年代に較正した年代範囲	
				1 σ 暦年代範囲	2 σ 暦年代範囲
PLD-14905 遺物 No. 51	-25.01 ± 0.30	342 ± 23	340 ± 25	1491AD(23.7%) 1524AD 1559AD(29.7%) 1603AD 1610AD(14.8%) 1631AD	1470AD(95.4%) 1635AD
PLD-14906 遺物 No. 52	-24.66 ± 0.12	366 ± 19	365 ± 20	1466AD(47.6%) 1515AD 1598AD(20.6%) 1618AD	1452AD(59.7%) 1523AD 1572AD(35.7%) 1630AD

4. 考察

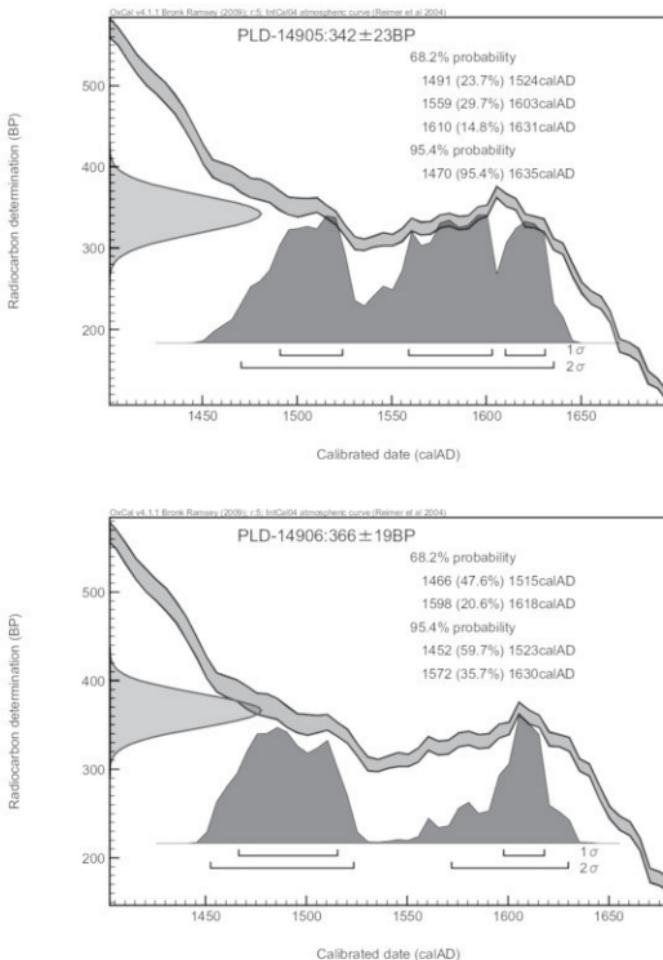
遺物 No. 51(PLD-14905) の暦年代範囲は、 1σ 暦年代範囲(確率68.2%)が1491-1524calAD(23.7%)、1559-1603calAD(29.7%)、1610-1631calAD(14.8%)、 2σ 暦年代範囲(確率95.4%)が1470-1635calAD(95.4%)であった。 2σ 暦年代範囲に着目すると、炭化種実塊の年代は15世紀後半～17世紀前半の範囲に収まると言える。

遺物 No. 52(PLD-14906) の暦年代範囲は、 1σ 暦年代範囲が1466-1515calAD(47.6%)および1598-1618calAD(20.6%)、 2σ 暦年代範囲が1452-1523calAD(59.7%)および1572-1630calAD(35.7%)であった。 2σ 暦年代範囲に着目すると、15世紀ごろ～17世紀前半の範囲を示した。ただし、部位不明の材である点に注意が必要である。木材は最外年輪であれば枯死・伐採年を示すが、内側の年輪であれば、それに応じて枯死・伐採年より古い年代を示す。これは古木効果と呼ばれる。遺物 No. 52は残存する中で最も外側を採取したものの、古木効果の影響も考慮する必要がある。したがって、遺物 No. 52の木材は15世紀ごろ～17世紀前半あるいはそれ以前に枯死したか伐採されたと考えられる。今回の結果から、遺物 No. 52の木材を含む人為的な埋め戻し層の堆積時期を絞り込むことはできなかった。

参考文献

- Bronk Ramsey, C. (1995) Radiocarbon Calibration and Analysis of Stratigraphy: The OxCal Program. Radiocarbon, 37, 425-430.
- Bronk Ramsey, C. (2001) Development of the Radiocarbon Program OxCal. Radiocarbon, 43, 355-363.
- 中村俊夫 (2000) 放射性炭素年代測定法の基礎、日本先史時代の^{14C}年代、3-20.
- Reimer, P.J., Baillie, M.G.L., Bard, E., Bayliss, A., Beck, J.W., Bertrand, C.J.H., Blackwell, P.G., Buck, C.E., Burr, G.S., Cutler, K.B., Damon, P.E., Edwards, R.L.,

Fairbanks, R.G., Friedrich, M., Guilderson, T.P., Hogg, A.G., Hughen, K.A., Kromer, B., McCormac, G., Manning, S., Bronk Ramsey, C., Reimer, R.W., Remmele, S., Southon, J.R., Stuiver, M., Talamo, S., Taylor, F.W., van der Plicht, J. and Weyhenmeyer, C.E. (2004) IntCal04 terrestrial radiocarbon age calibration, 0–26 cal kyr BP. Radiocarbon, 46, 1029–1058.



第69図 歴年較正結果

第2節 桜洞城跡出土炭化種実塊の同定及び形状観察

1) 炭化種実塊の同定および形状観察

1.はじめに

岐阜県下呂市萩原町桜洞に所在する桜洞城址において行われた発掘調査で、長さ約100m、幅約10mの空堀からおにぎりと推測される塊状の炭化種実が出土した。時期は戦国時代（16世紀）と考えられている。この炭化種実塊の表面の種実同定および形状観察を行い、どのような過程で堆積した種実塊かを検討した。また炭化物の表面にイネ科植物の葉や茎と思われる微小遺体が認められたため、植物珪酸体分析を行った（詳細は植物珪酸体の項参照）。

2. 試料と分析方法

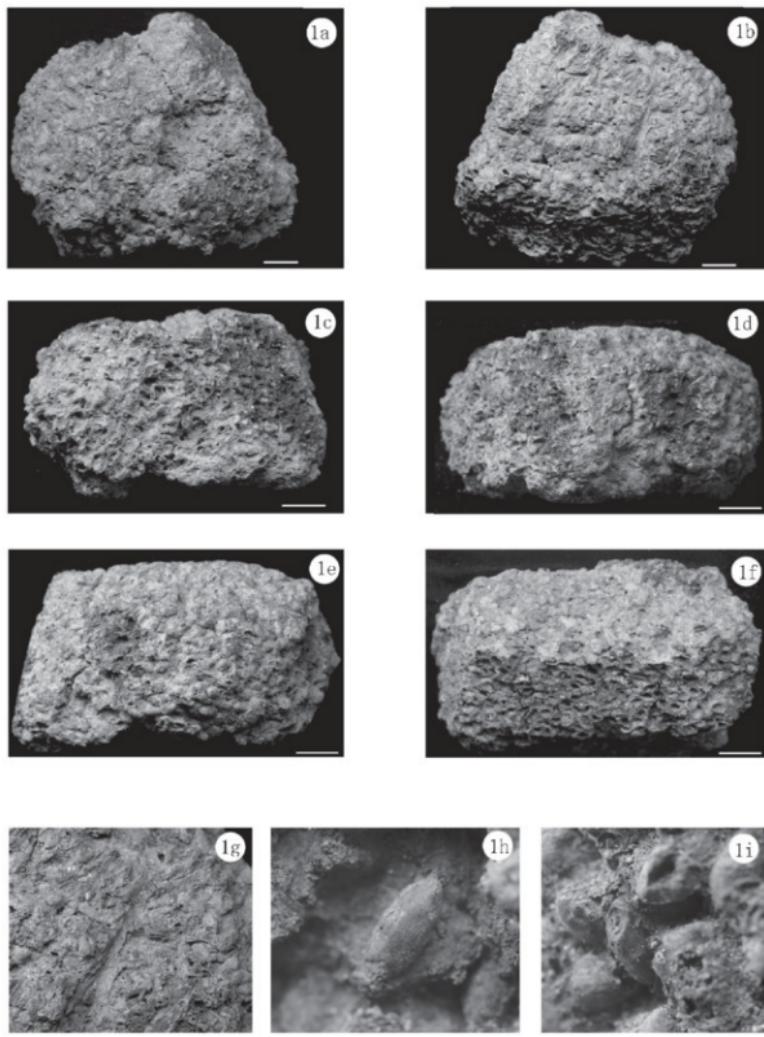
試料は東空堀2区北5層より出土したややいびつな直方形の炭化種実塊1点である。便宜的に広い平坦面がある面を上面、下面とし、側面を4面に分けて写真撮影を行った。その後、肉眼および実体顕微鏡下で塊の表面および塊から外れた種実の同定を行った。また塊から外れた種子の中から10点を任意に抽出し、計量を行った。試料は下呂市教育委員会に保管されている。

3. 結果および考察

炭化種実塊の全体形および拡大写真を図版に示す。炭化種実塊はいびつな直方形であり、大きさは長軸84.5mm、短軸71.4mm、厚さ43.8mmであった。それぞれの面はほぼ平坦であるが、上面のみ凹みが目立つ。また下面にのみ、イネ科植物の葉や茎と思われる縱方向の筋が明瞭で、長軸方向に長い破片が認められ、ほぼ下面一面にランダムな方向で複数付着していた。側面のうち、色がより黒色の部分は割れ口が新しいため、比較的新しい段階でできた割れ面と判断される。

表面観察を行った結果、炭化による発泡や変形で形状が判断できない箇所をのぞき、イネ炭化果実または炭化種子であった。同定に至らなかった部分についても大きさなどから判断すると、イネであったことが想定される。部位別にみると、果実（穎）の割合は少なく、ほとんどが種子であった。ただし、部分的に果実片が散在していた。種実の形状を観察すると、同定可能なイネ炭化種実は形状を保っていた。炊いた米が炭化して埋没した場合、容器に入れられた米やおにぎりとして握られた米はその表面に平坦に潰れた粒が複数みられ、粒の方向は不揃いで糊化して付着している様相が認められるが（佐々木, 2008; 佐々木ほか, 2009）、本試料には粒が抜けて、その外形のみが残存している個体が多いものの、粒は本来の形状を保っており、粒同士が密着しているものや潰れた様相は観察できなかった。そのため、この炭化種実塊は調理前のイネであったことが推定される。現況では種子が多いが、果実や果皮が散在してみえることから、本来は果実の状態であったものが炭化時や埋没段階でほとんどの個体の果皮が剥落したと考えられる。

炭化種実塊の下面にはイネ科植物の葉や茎と思われる微小遺体が多数付着していた。その一部を用いて植物珪酸体分析を実施したが、母植物の検討に必要な機動細胞珪酸体や短細胞珪酸体は認められなかった。そのため、稻藁を素材とする俵などの容器に入っていたとは考えられにくい。しかし、炭化種実塊の下面のみに付着していたことから植物珪酸体を形成しない何らかの植物の葉が敷かれた上



スケール 1a-1f:10mm, 1g-1iは任意

第70図 桜洞城址から出土した炭化種実(1)

1. イネ炭化種実塊 (1a. 上面, 1b. 下面, 1c. aの右側面, 1d. 上側面, 1e. 左側面, 1f. 下側面, 1g-1i. 拡大)

にあった粉が炭化した可能性が高い。密な状態で炭化したことを考え合わせると何らかの容器に入つて貯蔵されていた可能性がある。

なお、塊から外れた 10 点の炭化種子の重量は 80mg であった。現状での炭化種実塊の重さは 44.7g であるので、単純に復元個体数を求めるとき、約 560 点あったことが想定される。ただし、実際には塊に果実も含まれており、内部に土壌が残存している箇所があるため、この復元個体数は目安にされたい。

以下に産出した炭化種実を記載する。

(1) イネ *Oryza sativa L.* 炭化果実・炭化種子 イネ科

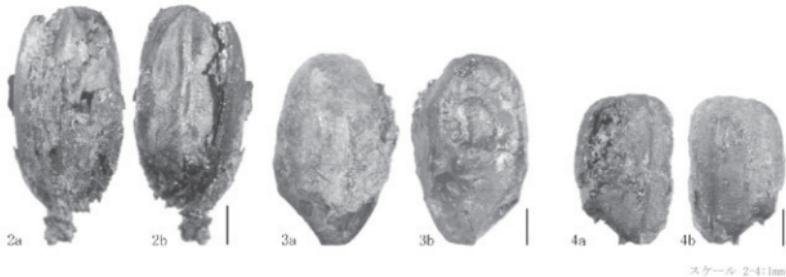
果実は長楕円形。表面には規則的に配列する独特の顆粒状突起がある。基部が残る個体もあるが、完形はみられず一部が残存している個体が多い。長さ 6.3mm、幅 3.1mm。種子の上面觀は両凸レンズ形、側面觀は楕円形。一端に胚が脱落した凹みがあり、両面に中央がやや盛り上がる縦方向の 2 本の浅い溝がある。任意に抽出した 10 点の大きさは長さ 4.1 ~ 5.4 (平均 4.6) mm、幅 2.4 ~ 3.2 (平均 2.7) mm。図版にはほぼ最大と最小の大きさの写真を示した。

4. おわりに

空堀から出土した炭化種実塊を検討した結果、何らかの容器に入つて貯蔵されたイネ果実(粉)が炭化して塊状となって出土したことが推定された。

引用文献

- 佐々木由香 (2008) 炭化米塊の表面および内面の観察と保存処理、妙高市教育委員会編「斐太歴史の里確認調査報告書III」: 70-73、妙高市教育委員会。
- 佐々木由香・バンダリ・スダルシャン・米田恭子・村田健太郎・小石川篤 (2009) 北川表の上遺跡出土炭化種実同定および炭化種実塊の X 線 CT 画像解析による検討、財団法人 横浜市ふるさと歴史財団 埋蔵文化財センター編「港北ニュータウン地域内埋蔵文化財調査報告 42 北川表の上遺跡」: 423-435、横浜市教育委員会。



第 71 図 桜洞城跡から出土した炭化種実 (2)

2. イネ炭化果実、3,4. イネ炭化種子

2) 炭化種実塊に付着した植物遺体の植物珪酸体分析

1.はじめに

イネ科植物は別名珪酸植物とも呼ばれ、根より吸収した珪酸分を葉や茎の表皮細胞内に沈積させることが知られている。こうして沈積・形成された植物珪酸体（短細胞珪酸体や機動細胞珪酸体）のうち、機動細胞珪酸体についてはイネを中心形態分類の研究が進められている（藤原、1978など）。

岐阜県下呂市萩原町桜洞に所在する桜洞城址において行われた発掘調査で、おにぎりと推測される塊状の炭化物が検出された。時期は戦国時代（16世紀）と考えられている。この炭化物の表面にイネ科植物と推測される微小遺体が認められ、その一部が採取された。この得られた微小遺体について上記のことからその母植物を検討する目的で植物珪酸体分析を行った。以下にその結果について記す。

2. 試料と分析方法

試料は東空堀2区北5層より検出された炭化種実塊の表面に認められた植物遺体小片である。植物遺体の付着部位は炭化種実塊の下面のみである。

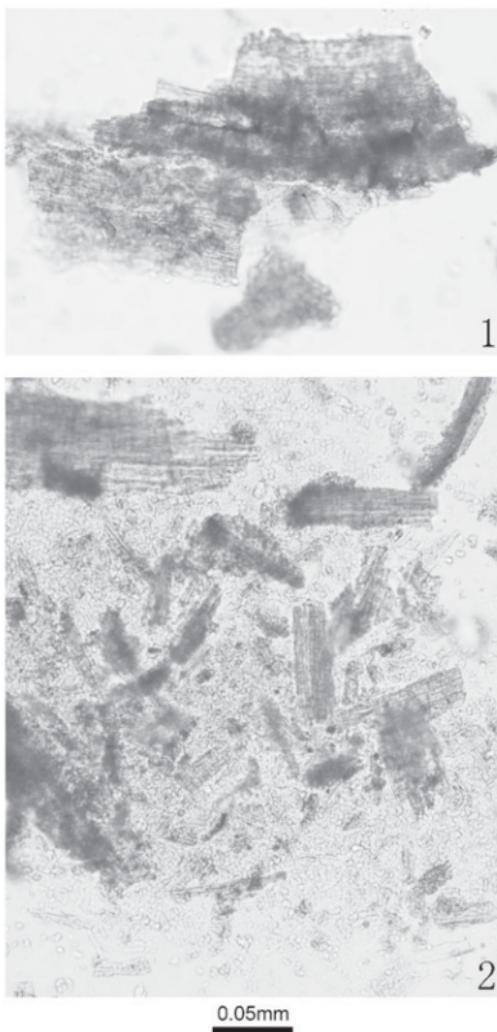
この植物遺体の母植物を検討するにあたり、現生植物の標本作製と同様の方法を用いて植物珪酸体の有無を調べた。すなわち編組製品より採取し乾燥させた植物遺体を管瓶にとり、電気炉を用いて灰化するのであるが、灰化する行程は藤原（1976）にほぼしたがって行った。その行程は、はじめ毎分 5°C の割合で温度を上げ、 100°C において15分ほどその温度を保持、その後毎分 2°C の割合で 550°C まで温度を上げ、5時間その温度を保持して、試料の灰化を行う。灰化した試料について一部を取り出し、グリセリンを浸液としたプレパラートを作製し、生物顕微鏡下で観察した（600倍）。

3. 結果

観察の結果、繊維状組織は観察されるものの、母植物の検討に必要な機動細胞珪酸体や短細胞珪酸体は認められなかった（写真図版参照）。こうしたことから炭化種実塊に付着していた植物遺体の母植物について、植物珪酸体から検討することは出来ない結果となった。

引用文献

- 藤原宏志（1976）プラント・オパール分析法の基礎的研究（1）—数種イネ科植物の珪酸体標本と定量分析
法一、考古学と自然科学, 9, 15-29.
藤原宏志（1978）プラント・オパール分析法の基礎的研究（2）—イネ（Oryza）属植物における機動細胞珪酸体の形状一、考古学と自然科学, 11, 9-20.



第72図 プレバラートの状況

第3節 桜洞城跡出土朱書き天目茶碗の元素マッピング分析

1. はじめに

桜洞城址より出土した土器の底面に施された朱書について、元素マッピング分析を行い、文字の判読を試みた。

2. 試料と方法

分析対象資料は、桜洞城址の東空堀より出土した天目茶碗で、高台内に赤色顔料で「十二」らしき文字は見えるものの、「十二」の上にも何か書かれており肉眼でははっきりとは判読できない状況であった（第72図上段）。朱書の場合、炭素を主成分とする墨書とは異なり、赤色顔料の材料に鉄や水銀などの無機化合物の使用が予想され、蛍光X線分析の利用が有効であると考えられる。

分析装置はエネルギー分散型蛍光X線分析装置である（株）堀場製作所製分析顕微鏡XGT-5000Type IIを使用した。装置の仕様は、X線管が最大50kV、1.00mAのロジウム（Rh）ターゲット、X線ビーム径が $100\text{ }\mu\text{m}$ または $10\text{ }\mu\text{m}$ 、検出器は高純度Si検出器（Xerophy）で、検出可能元素はナトリウム（Na）～ウラン（U）である。また、試料ステージを走査させながら測定する元素マッピング分析も可能である。

マッピング分析に先立って、赤色部のポイント分析を行い、顔料の種類を調べた。統いて、その結果を基に、高台内の元素マッピング分析を実施した。測定条件は、ポイント分析が50kV、0.12mA、ビーム径 $100\text{ }\mu\text{m}$ 、測定時間500s、元素マッピング分析が50kV、1.00mA、ビーム径 $100\text{ }\mu\text{m}$ で、測定時間は10000sを8回走査した。

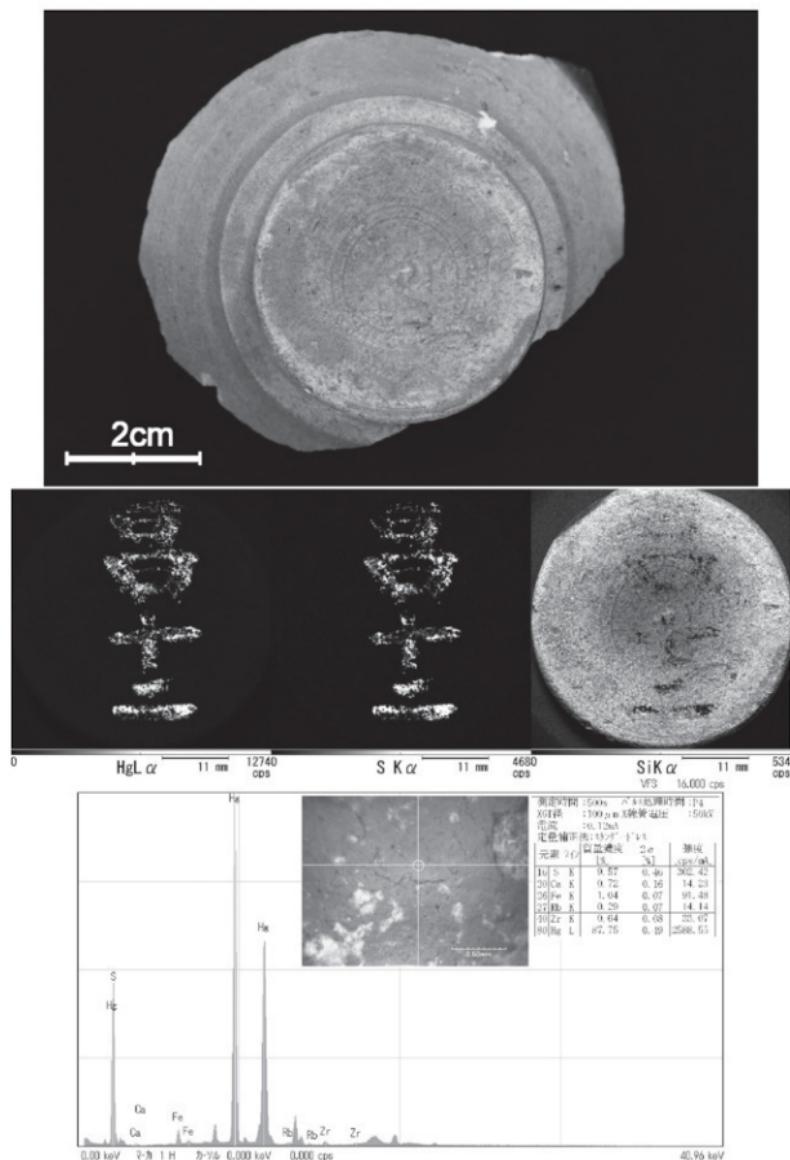
3. 結果

赤色部のポイント分析により得られた蛍光X線スペクトル図と、ファンダメンタル・パラメーター法で算出した半定量値を第72図下段に示す。分析の結果、水銀（Hg）と硫黄（S）が高く検出されたことから、使用されている顔料は水銀朱（硫化水銀HgS、鉱物名辰砂）と判明した。

高台内の元素マッピング分析により得られた水銀（Hg）、硫黄（S）、ケイ素（Si）のマッピング図を第72図中段に示す。マッピング図より「十二」の上に「昌」の文字が書かれているのが明瞭に読み取れる。水銀、硫黄ともに赤色顔料が肉眼で確認できる箇所だけでなく、肉眼では存在がはっきりとしない箇所からも感度良く検出することができた。特に水銀のL α 線は蛍光X線のエネルギーが高い分硫黄よりも感度が良く、硫黄では検出できなかった箇所からも検出することができた。

4. おわりに

桜洞城址より出土した土器底面に施された朱書について分析した結果、使用されている顔料は水銀朱であり、「昌十二」の文字が判読できた。



第73図 桜洞城址出土朱書き土器の元素マッピング分析

第5章 総括

第1節 桜洞城跡の城郭構造について

桜洞城跡の城郭構造について、過去の文献資料と本発掘調査の成果から考えてみたい。

過去の文献資料は、江戸時代後期編纂の『飛州志』、明治初期の『斐太後風土記』、大正年間に記録された角竹喜登の調査報告書がある。それぞれの文献に記録された古絵図を見ると、桜洞城が機能を失った後の変遷の過程を知ることができる。

『飛州志』に掲載された桜洞城の古絵図（第74図①）を見ると、江戸時代の享保年間前後には城外に堀ア・クが二重に巡り、最も内側のアの堀は四方をすべて囲っていた。さらに城内のエとキの一帯にも部分的に土塁が存在したようである。城内は「長百間 横八十間」と記され、それをメートル法に換算した場合、長さ約180メートル・幅約144メートルになり、発掘調査で推定された規模とほぼ一致する。

次に、明治6（1873）年に刊行された富田禮彦編『斐太後風土記』（第74図②）の桜洞城跡略図に至ると、『飛州志』のクに対応する空堀は確認できない。どうやらこの時点でクの空堀は埋められたようである。その結果、城を取り囲む堀と土塁は一重になっている。なお、『斐太後風土記』のアの空堀とイの土塁は、『飛州志』のアの空堀とイの土塁に対応する。また、『斐太後風土記』には『飛州志』の段階では示されていないウという土塁が記される。『斐太後風土記』の桜洞城跡略図は、略図ではあるが現時点の城跡の様相と対比しやすい表現方法が採用されているため、城郭構造を知る上で定點になる。

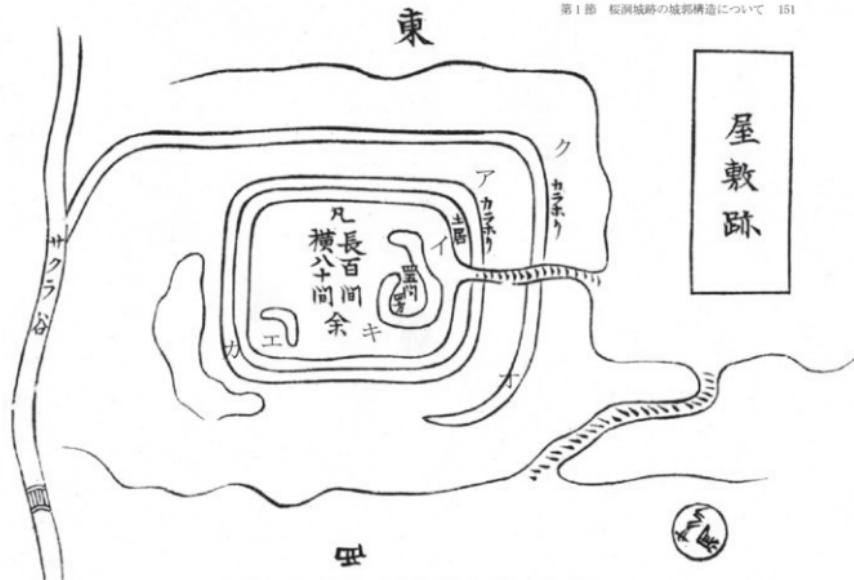
さて、飛驒の郷土史家としても著名な角竹喜登氏は、昭和12（1937）年に『岐阜県史蹟名勝天然記念物調査報告書』（以下、『報告書』と省略）に「桜洞城跡」と題して略図（第74図③）付き解説文を掲載した。実は、そのための事前調査が以前より進められていたことが飛驒高山まちの博物館所蔵の「角竹文庫」の資料から最近判明した。角竹氏は大正8年（1919）7月1日に現地にて略側図を作成している。その略側図は、『斐太後風土記』からアの空堀とイの空堀が消滅した図である。

その大正8年の略側図には、昭和12（1937）年刊行の『岐阜県史蹟名勝天然記念物調査報告書』掲載の略測図とほぼ同じ内容が記載されているが、唯一異なるのはオからカの間にある土塁が一部消滅している点である。それは、昭和8（1933）年8月25日に飛驒萩原から飛驒小坂間の高山本線開通に伴う、それ以前の鉄道敷設工事により切り崩されたものである。

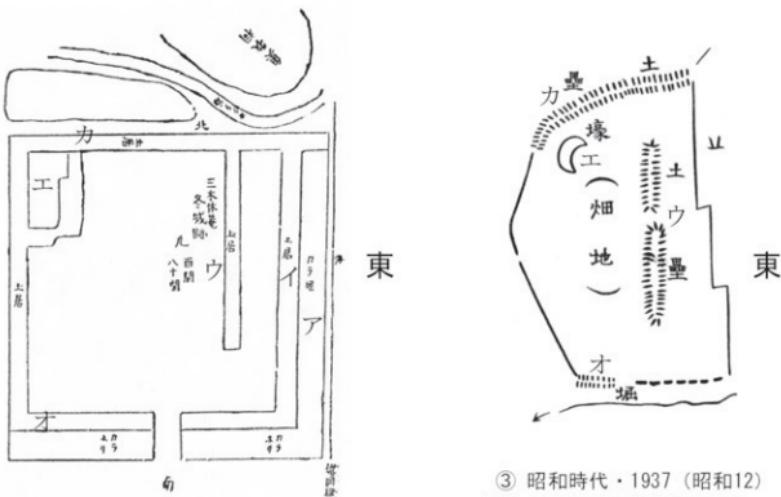
また、角竹文庫に残る萩原町住民から角竹氏に宛てられた手紙（飛驒高山まちの博物館所蔵『角竹文庫』城郭103）には、ウの土塁が耕地整備のため全て破壊されたとある。手紙の年代は不明だが、第74図③の略図の年代より後の状況を示していることは間違いない。

このように、昭和前半期に急速に桜洞城跡の原型が変化していく姿を、過去の記録から読み取ることができる。なお、本発掘調査開始時点の状況を示した『岐阜県中世城館跡総合調査報告書』の「桜洞城跡」（第75図、佐伯2005、以下、『佐伯縄張図』と省略する）では、『斐太後風土記』に示された空堀・土塁のうち残存するのはエ・オ・カに限られていることがわかる。

さて、角竹氏の記録（角竹1937）には土塁の高さが記される。角竹氏の数量標記単位をメートル



① 江戸時代・18世紀前半『飛州志』



② 明治時代・1873（明治6）
『斐太後風土記』

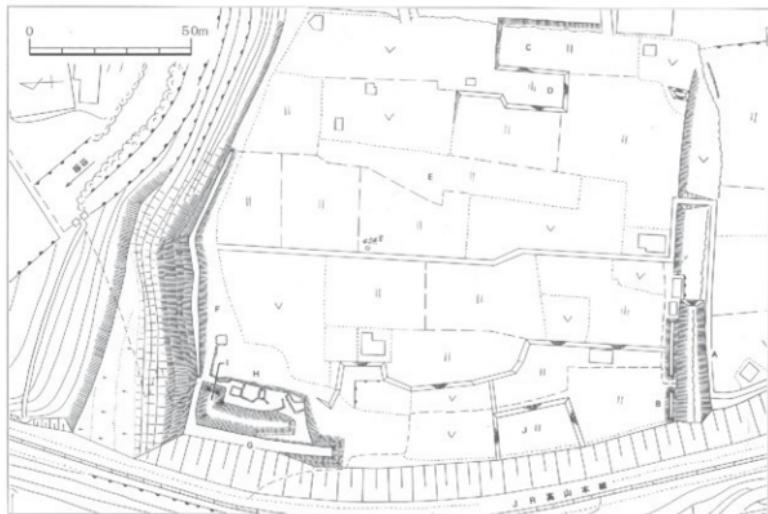
③ 昭和時代・1937（昭和12）
角竹『岐阜県史蹟等報告書』

法に換算すると、第74図③の才と推定される土壘の高さは0.9m～2.4m、幅は0.9m～2.1m、長さは約36mである。才の空堀・土壘は本発掘調査の時点でも確認ができた。現測量では、47Tの断面図を基準にする城内の現地盤高から土壘の頂点まで約1.0m、空堀の底から土壘の頂点まで比高差2.9mである。現在と角竹氏の測量結果はそう大差ない。なお、エの土壘・空堀部分は、現測量で空堀最低面から土壘最頂点の比高差が約3.6mである。

さて、才では土壘に対し直交するように試掘坑を設定した。その結果、表土下に地山の土である黄褐色砂質土と人頭大以上の巨大な亜円礫が堆積していた。そしてその下層に黒色粘質土が堆積する状況であった(写真図版1 47T付近)。カも同様な土層堆積状況であった。エは史跡保護範囲であるため、発掘調査は実施しないが、現在、地表面に人頭大以上の亜円礫が露出・転石する。そのため、才・カと同様な土層堆積状況が推定される。つまり、エ・才・カの部分は平地に振をうがち、その土砂を搔き揚げることで土壘を造成したことがわかる。

また、本発掘調査時点では既に失われ、確認ができなかったウの土壘については、角竹氏によるとウの北部分の最も高い箇所で約1.8m、最も幅広い箇所で約2.1m、長さは約24mであるとし、半分が破壊されているという。また、南部分で最も高い箇所で約3.6m、最も幅広い箇所で約6.6m、長さは約42mである(角竹1937)。北部分と南部分の中間は破壊されているが、長さは66mを超えていたことがわかる。佐伯氏は本土壘の痕跡を『佐伯繩張図』の中で既に指摘しており(佐伯2005)、現地表面の凹凸からもある程度の過去の姿を推定することができる。

さて、本発掘調査により、現在の田畠の下に埋没した空堀が姿を現し、またこれまでの略図にはない空堀の存在も確認された。桜谷に連なる『飛州志』(第74図①)のクの空堀は確認できていないが、『斐



第75図 桜洞城跡縄張図(佐伯2005)

太後風土記』(第74図②)のアの長大な空堀、イの土壘跡の痕跡を確認し、またエの東側に沿う新たな空堀を見出した。ただし、イからウの間に空堀跡を検出することができなかつたこと、また『斐太後風土記』(第74図②)より古相の様子を示す『飛州志』(第74図①)にウの土壘に相応する構造物が見当たらないため、ウの土壘が元来城跡に伴う構造物であったのかや不安要素は残す。しかしながら、ウの土壘が戦国時代の土壘でないであるならば、何のために明治時代前後の人々が造成したのか、例えば耕地目的とも思えないためその点も不自然である。やはり、ウの土壘は城郭の構築物と考えるのが妥当であろう。

とすれば、桜洞城は少なくともゆるやかに傾斜する地形の東西の一角に複数の土壘を構築し、また空堀を掘削することで東西についてはより防御性を高めていたことが推定される。そして北は、天然の要害である桜谷が存在する。

このように桜洞城は、平城とはいえども桜谷という自然の要害を活用し、また飛騨川を眼下に望み広い眺望を確保できる河岸段丘の先端に築城を行った工夫を窺い知ることができる。桜洞城は溝001とした南側の空堀内側から北側の土壘の頂点まで約151m、溝001の東側の空堀内側から高山本線鉄道敷設地まで約135mの南北にやや長い、少なくとも約20,000 m²の城内面積をもつ城である。「東空堀」とした溝001では、幅約8mを超える箱形の底をもつ溝が検出されており、長大かつ幅の広い空堀と、比高差約3mを超えるそびえ立つ土壘の姿は、外敵を寄せ付けない印象を与えるのに充分威力を発揮したと考えられる。

第2節 不明遺構 001 出土の貿易陶磁について

61区中央付近で、青磁・白磁等の貿易陶磁破片が大量に出土し、注目された。遺構検出面で黒いシミ状の広がりが確認されたため、ベルト設定後に掘り下げていくと、貿易陶磁の小破片がシミ状の広がりのほぼ中央に偏る状態で、特に第2層に集中して出土した。遺構の性格が明瞭に判別できなかつたため、不明遺構とした。

不明遺構は、先述の通り、多数の貿易陶磁が包含されていた第2層自体が黒色粘質土と明黄褐色粘質土の互層（バームクーヘン状）である。そのため、自然堆積ではなく、何らかの人为的な理由による堆積できることが容易に想像できた。ここでは、「意図的な埋め立て」と考えておきたい。

さて、不明遺構 001 出土遺物組成は、明らかに他の遺構出土の陶器組成と異なる。その点が同遺構の注目される理由である。出土した貿易陶磁の中で特に注目されるのは14世紀中頃から後半の龍泉窯系青磁酒会壺とその蓋、青磁香炉、青磁盤の他、朝鮮系と推定される徳利といった中国・朝鮮陶磁の他に、茶器の一つである茶壺・鉄釉四耳壺（祖母懐壺）である。他に、同遺構の特殊性を示す貿易陶磁に、青花皿と白磁皿があり、更に十数個体はあると推定される白磁杯（小杯）がある。

白磁皿と白磁杯の組み合わせは、森田分類の中で一乘谷朝倉氏館跡出土品が数多く充てられているE群に相当するものであり、16世紀の年代を与えることができる。なお、白磁が多数出土する福井県内の事例と対比すると、15世紀中葉の年代に位置づけられている福井県諏訪間興行寺第III期（富山・

清水 2012) の貿易陶磁では、龍泉窯系青磁碗 B2 類 (小野 1982 の青磁連弁碗 B 群) が主で、なおかつ白磁角坏の組成が明瞭である。桜洞城跡不明遺構 001 は、白磁角坏の欠落、小野 1982 の白磁端 C 群 (白磁端反皿) の組成 (106・108)、皿の外面に牡丹唐草文、見込みに玉取獅子文のある小野 1982 の染付皿 B1 群 (104) の組成といった点から、貿易陶磁編年における 15 世紀後半から 16 世紀代に絞り込むことができる。

次に、不明遺構 001 にて貿易陶磁に伴った土師器皿の年代的位置づけを検討する。先述の通り、129・130 は井川分類 B2 類に該当する土師器皿である。桜洞城跡出土土師器皿には井川分類 B1 類に該当する土師器皿が確認できず、また井川分類 C3 類も認められない。その組み合わせは、井川編年の IV 期に絞り込むことが可能であり、年代は 16 世紀前半である。

また、127・128 の灰釉皿底部と推定される破片は大窯 1 期か 2 期に該当する。その他、灰釉端反皿か丸皿の断片と天目茶碗の断片は、天目茶碗の 1 点を除き、いずれも大窯 1 期か 2 期に該当するものである。土師器・陶器各々の年代の検討の結果、不明遺構 001 は 15 世紀末から 16 世紀第 2 四半期までの間の年代を与えるてもよいであろう。

このように、出土した貿易陶磁の白磁・染付、土師器皿、瀬戸美濃窯製品いざれもその年代幅に顕著はなく、また大きな差もない。そのため、不明遺構 001 は遅くとも 16 世紀第 2 四半期中には「埋め立て」られた可能性が高い。

なお、不明遺構 001 から出土した貿易陶磁は、いざれも出土時「碎片」状態で出土した。他の空堀のように完全形ないしは完全形に近い形状で出土することが全く確認できず、異質な出土状態であった。意図的に「壊された」貿易陶磁とも思える様相であったことを、ここに添えておきたい。

第3節 出土した中世陶磁器・土師器の組成

出土した中世陶磁器と土師器のうち、古瀬戸および瀬戸・美濃窯の時期鑑定を藤澤良祐氏にお願いすることができたため、その結果をここで示す。

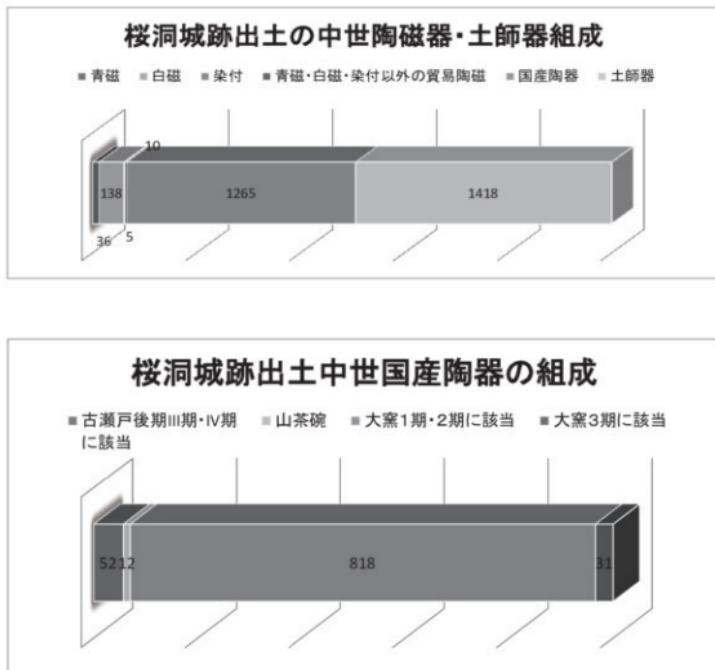
今回の発掘調査の結果、出土中世陶磁器のうち、貿易陶磁の青磁は 36 点 (1.3%)、白磁は 73 点 (4.8%)、染付 5 点 (0.2%)、その他貿易陶磁は 10 点 (0.3%) であった。国産の陶器は 1,265 点 (44.0%)、土師器は 1,418 点 (49.4%) である (第 76 図上)。個体も破片も同一の基準で 1 点とカウントしたため、厳密な量比というわけにはならないが、国産陶器と土師器の目立つ傾向であることは確認できる。なお、近世以降の陶磁器は 579 点出土した。

次に、中世の国産陶器の中でも古瀬戸・瀬戸美濃窯を対象に、藤澤良祐氏の年代観に従って時期組成を検討した。第 76 図下に示した通り、古瀬戸後期様式該当品が 69 点 (7.5%) で、うち古瀬戸後期 III 期・IV 期該当品が 52 点である。そして、大窯 1 期から 2 期該当品が 818 点 (89.1%、大窯 2 期か 3 期という資料を 7 点含む)、大窯 3 期該当品が 31 点 (3.4%) である。大窯 1 期と同 2 期の比率は、所属時期が明らかな製品を比較する限り、ほぼ等しい。また、山茶碗が 12 点出土しており、12 世紀から 13 世紀に生産された東濃型第 5 型式や第 6 型式該当品が合計 9 点、14 世紀から 15 世紀に該当する東濃型第 10 型式と第 11 型式が合計 2 点出土した。12 世紀から 13 世紀代に遡る山茶碗が出土したことにより、桜洞城築城前に、中世集落等の別な遺構が存在した可能性があることを推定できる。

さて、桜洞城跡出土の古瀬戸・大窯製品の組成のうち、約9割が大窯1期から2期該当品で占められる傾向から、桜洞城の年代に言及できることはないだろうか。

鈴木正貴氏は、愛知県の清州城下町遺跡、岩倉城跡、小牧山城跡の出土古瀬戸・大窯製品の組成を点検した結果、大窯製品の組成の変化と、文献史料に示された各城関連の変遷が一致すること指摘した。永禄2(1559)年に織田信長に攻撃され廃城になった岩倉城では、古瀬戸後期IV期が約61%、大窯第1段階が約28%、大窯第2段階以降は合計10%である。永禄6(1563)年から永禄10(1567)年に限定された小牧山城城下町では、古瀬戸と大窯第4段階以降がほとんどなく、大窯第1段階が約19%、同第2段階が約63%、同第3段階が約15%であるという(鈴木2001)。

一方、天文4(1535)年に洪水のため廃絶した岐阜市城之内遺跡枝広館遺構群出土製品では、大窯第2段階までが出土し、かつ大半は古瀬戸後期IV期新段階から大窯1期であるという。それは、内堀信雄氏のII期(1509年頃~1535年頃)に該当する。続いて、内堀氏のIII期(1535年頃から1552年頃)では、大窯1期が大半を占める一方で、擂鉢等に大窯2期・3期が少量含まれる。そして、内堀氏のIV期(1552年頃~1567年)では、大窯製品は第2段階・第3段階が中心を占める。また、



第76図 桜洞城跡出土の中世陶磁器・土師器と中世国産陶器の組成

III期までに見られた土師器の「城之内タイプ」(井川分類のB2類)が全く認められないと指摘する(内堀 1998)。

各遺跡出土の大窯製品等の組成は、陶磁器の生産と流通のタイミングのズレを考慮しなければならないため、一概にいずれの地域でも同じタイミングで流通していたとは考えられない。しかし共通するのは、鈴木正貴氏が指摘するように、大窯第2段階製品の生産が開始する1530年頃に、大窯第2段階製品が組成の中心になっていることはない、という点である。

桜洞城跡出土古瀬戸・大窯製品の組成は、結論から言えば、内堀氏のIII期の構成内容に類似する。大窯製品の中でも第3段階以降が中心にならず、一方で消耗の著しい鉢鉢に大窯第3段階製品が加わる点、土師器皿の井川分類のB2類が明瞭である点、そして白磁については、小野正敏編年第II期の遺物群に対応する白磁皿C群がほとんどである点が共通する。内堀氏のIII期(1535年頃から1552年頃)の年代は、まさに桜洞城の築城を行った4代目三木直頼の時代であり、また直頼が諸豪族への影響力を広範囲に拡大した全盛期の時代である。内堀氏の年代観を援用することが許されるならば、桜洞城の存続幅は、遅くとも16世紀の中頃までというのが推定できそうである。直頼が没した天文23(1554)年を契機とした桜洞城の16世紀中頃廃絶説を補強する有力な材料になろう。

第4節 龍形青銅製品について

069の龍形青銅製品は、80・81区の掘立柱建物跡001西側で遺構精査中に発見された。何等かの生物の意匠を象ったものであることは異論のない所である。更に観察を進めると、頭部の相対する箇所に2つの突起があり、また頭部に相当する部分から背に向かって発する突起が確認できる。前者は「角」、後者は「鬚(たてがみ)」と考えられ、「龍」である可能性が高いことが想定された。そのため、ここでは「龍形青銅製品」と名付ける。長さ2.2cm、幅1.8cmの小形の青銅製品は、「龍」の足に相当する部分が、例えば青銅製品の容器等に溶接されていたことは、足に相当する部分の観察から判断できた。

桜洞城跡出土の「龍形青銅製品」と類似する青銅製品が富山県から2例出土する。一つは石名田木舟遺跡(木舟城跡、酒井編2002)、一つは加納谷内遺跡(富山県文化振興財団2006a・2006b)である。

石名田木舟遺跡例は足を4本持つ金銅製品である。顔面、足、尻尾が明瞭で、身体をくねられるポーズをとる(右下写真)。前足左と後足左を一部欠損する。足の裏の状態から、なんらかの物体に溶接されていたことがわかる。正面顔の背後に角と思われる長さ1mmから2mmの突起を2ヶ所もち、さらに、身体の背に1mm程度の突起を11ヶ所、列状にもつ。

列状突起は、龍の鬚に該当するものと推定される。また、眼窓を意匠した突起も2ヶ所認められる。本例は、桜洞城跡の龍形青銅製品と、意匠のポーズ、意匠表現とも極めて類似する。酒井重洋氏から金銅製の香炉の把手装飾であろうとのご教示を頂いた。金銅製の仏具や茶器として、花瓶・香炉・燭台の3点セットは構成されることがよくあるとのご指摘も合わせて頂いた(例



石名田木舟遺跡出土の金銅製

として、広島県立歴史博物館 1995『茶・花香—中世にうまれた生活文化—』の写真 152)。出土地点は、B 2 区包含層である。なお、同区包含層からは、戦国期の土師器皿、天目茶碗、白磁、青磁、青花の他、木製品、鉄製品、青銅製品が数多く出土する。酒井氏によれば、龍形金銅製品は 16 世紀半ばぐらいに比定できるものとご教示頂いた。また、同遺跡 3470 の鶴形金銅製品も、同様に、香炉の装飾の一つの可能性があるとご指摘があった。

また、正式報告は今後であるが、加納谷内遺跡例は青銅製品で、桜洞城跡例・石名田木例に比べ、意匠がかなり省略されている。しかし、前 2 例と共に通るのは加納谷内例も身体をくねらせるポーズを採用しており、共通した意匠であることは容易に想像がつく。

このように、桜洞城跡出土の龍形青銅製品と極めて類似する石名田木舟遺跡例と、そして省略形ではあるが加納谷内例は、同類の意匠をもつ金属製品が分布していることからも、富山と飛驒の物流を考える上で示唆的な出土品である。すなわち、それら金属製品が酒井氏の指摘する「仏具」であり、かつ大名の権威品とするならば、類似する意匠をもつ仏具が分布する範囲から、それ以外の例えば青磁などの貿易陶磁の流入ルートを推定することは無理な話ではない。

桜洞城跡出土の「龍形青銅製品」は権威品としての意義をもち、かつ富山方面との物流ルート及び交流上の強いつながりを考える上で貴重な材料となろう。

第5節 戦国時代の飛驒の大名、三木氏と桜洞城の発掘調査成果

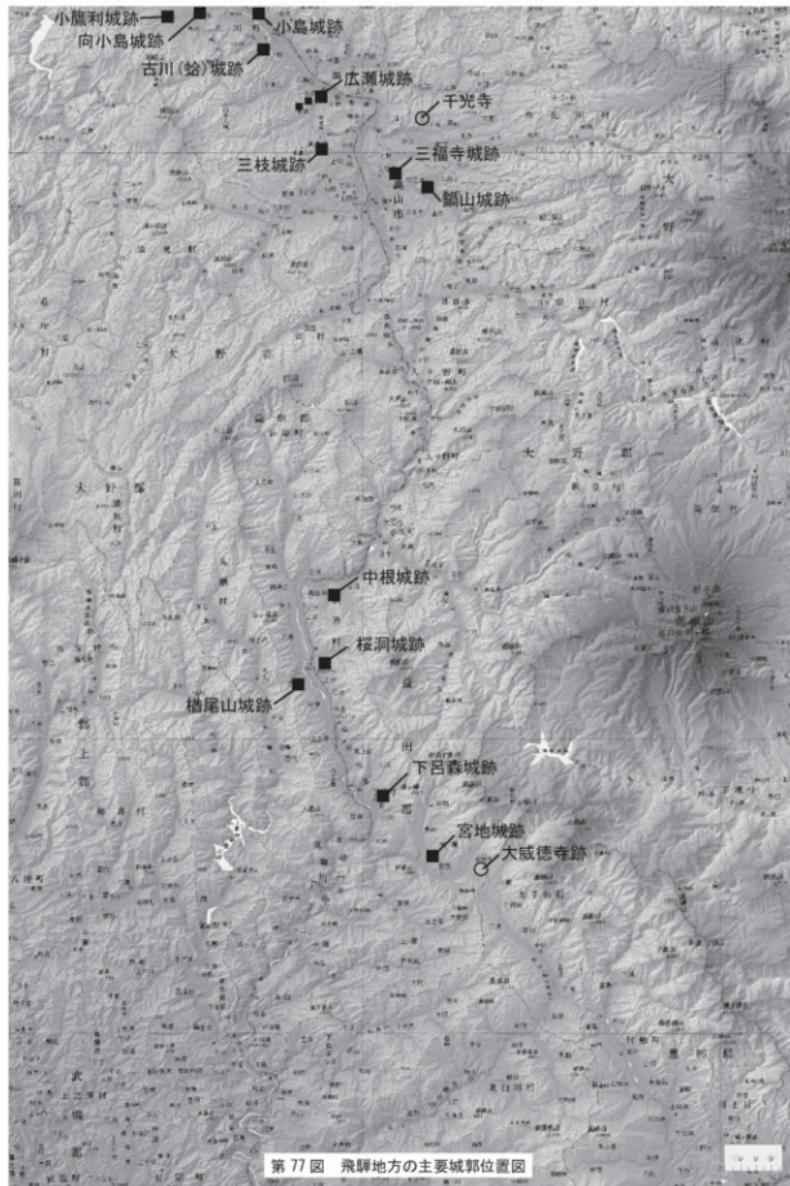
1) 史料に見る三木氏の動向と飛驒南部の城郭

これまでの文献史から把握できる三木氏の動向について、簡単にまとめてみよう（第 38 表～第 40 表）。

まず、桜洞城築城までの関連史料を点検してみよう。第 2 章第 2 節「歴史的環境」で触れているが、三木氏が飛驒に登場するのは応永年中（1394 年～1427 年）である。飛驒国司姉小路伊綱が起こした乱の鎮圧軍に三木氏初代正頼は加勢し、その論功行賞として飛驒南部の現在の竹原地域（乗政・官地）を領地とすることことができた。寛正年中（1460 年～1465 年）に 2 代目久頼は姉小路基綱との合戦で戦死したようであるが（谷口 1986）、勢力は保持したようで、3 代目重頼は益田郡を手中に収めるとともに、現在の萩原町上村（うわむら）に居住したとある。史実に基づけば、三木氏の本拠地は、下呂市域南部の乗政・官地から下呂市域北部の萩原の上村へ重頼の代に移動することになる。久頼の死去が文明 3（1471）年、重頼の死去が永正 13（1516）年であるため、上村への本拠地移動は 15 世紀後半と推測することができるであろう。

さて、史料において桜洞城の築城が明示されるのは 4 代目直頼の代である。『飛州志』の巻六「桜洞城」には、永正年中に直頼が築城し、5 代目良頼、6 代目自綱まで居住したとあり、同じく「三木氏系図」には、永正・大永（1504～1527）年間に阿多野郷（現在の高山市朝日の阿多野）や馬瀬郷（現在の下呂市馬瀬）を合戦にて併合し、桜洞に城郭を構え居城したとある。ここに、旧益田郡（飛驒南部）の範囲を直頼は手中に収めたことがわかる。

さて、史料によれば直頼の勢力範囲は飛驒南部に留まらず、高山盆地・国府盆地のある飛驒北部に



まで及び、また、享禄元(1528)年には長野県木曾王滝に出張し、木曾占領まで企てていたともある（岡村 1921、166 頁）。大永元(1521)年にはその詳細は不明ながら「大永合戦」が勃発し、高山の三仏寺城に在城していたことが確実であり（谷口 2007、50-52 頁、史料「寿楽寺大般若波羅密多奥書」）、また享禄3年から4年(1530~31年)には姉小路古川氏・同向氏の内紛に直頼が介入し、益田衆が向氏の重臣・牛丸与十郎が立て籠もる忍城を攻略、またその勢いで古川城も攻め落としたことが判明している（谷口 2007、53-54 頁、史料「飛州志所取飛驒一宮水無神社棟札」）。

すなわち、16世紀前半三木直頼の動向を示す史料は、飛騨南部の出来事より、圧倒的に飛騨北部での出来事が多い。『飛州志』の記載に沿えば、桜洞城が直頼の本拠地であったことが読み取れるのだが、その他史料にはむしろ桜洞城以外での動向が頻繁に記されている。

ただし、直頼の本拠地が桜洞城であったと窺わせる記事が天文年間の史料に見られる。その点も触れておきたい。天文元(1532)年に直頼は桜洞城下に某天宗恵のために禅昌寺を創建（再建とも）。某天宗恵の師・明叔慶俊を開山とした（岡村 1921、160 頁）。以後、直頼と禅昌寺との懇意の関係は長期間継続し、直頼が度々禅昌寺に書状を発したことが谷口研語により指摘されている（谷口 1986）。

直頼は、禅昌寺の創建（再建）により、禅宗勢力を三木氏の有力な支援者とするとともに、「遠交近攻」の手段で飛騨北部と南部の諸勢力を討伐し、領地を併合していく。一方で、江馬氏との婚姻による同盟関係の成立、姉小路氏内紛への介入による同氏への影響力の保持、本願寺との懇意による一向衆勢力との良好関係の構築に腐心し、更には中津川苗木に本拠地を構える苗木達山氏（達山正廉）や岩村達山氏（達山景前）とも良好な関係を保っていた。天文年間の前半は、そうした同盟関係の構築に特に力を注いでいた。

しかしながら、天文年間の後半には、再び合戦の記事が多くなり、その舞台に飛騨北部が再び登場する。天文8(1539)年9月に郡上郡畑佐兄弟へ合力し郡上衆（東氏か）を討伐し（谷口 1986、史料 II-37）、同9(1540)年に「土岐殿（土岐頼芸か）」に合力し、東美濃の米田嶋城・野上城など3つの城を攻略した（谷口 1986、史料 II-37）。後者の合戦では、姉小路三家・廣瀬・江馬の各勢力からの支援を受けている。ただし、天文8年の合戦では「三木新介」、天文9年の合戦では「三木新九郎」といった三木一族の武将が出張しており、直頼自らの出陣ではない。更には、天文13(1544)年の飛騨で発生した詳細不明の内乱にて、三木新九郎・三木四郎次郎が三仏寺城近くの鍋山へ出張したことがわかっている（谷口 1986、史料 II・19）。

このように、天文年間後半の記事からは直頼自らの出陣ではなく、一族の武将が出張することで事態の收拾を図っていたことがわかる。天文9(1540)年10月に、直頼は一族の領地巡視のため、「古河」・「三枝」・「八賀」に立ち寄っている。谷口は、大永合戦の際の拠点になった三仏寺城を「八賀」に、現在の三枝城付近あるいはその一帯を「三枝」と推定し、直頼の代における飛騨北部の前線基地と両城・両地域を考える（谷口 2007、89 頁）。また、天文15(1546)年に、現在の丹生川にある千光寺を直頼は再興する（谷口 1986、史料 II・40）。直頼は千光寺を、飛騨北部にて三木氏の守りを固める勢力として考え、支援したのであろう。

このように、直頼は、桜洞城に自らの拠点を構えつつも、周辺勢力の動向を監視するため、高山盆地の「八賀」と「三枝」に飛騨北部前線基地としての城（砦）を配置し、また同盆地の東の千光寺、また西方の照蓮寺といった寺院勢力を味方にすることで飛騨全体の動勢を見守っていたというのが実

態に近いのであろう

ただ、三木氏の飛騨南部の前線基地はどこであったのか、という点については、不明瞭な点が多い。現在の下呂市内には、小川にある下呂森城、宮地にある宮地城がその可能性として指摘できるところであるが、それら城郭の由来については確固たる当時の史料があるわけではなく、伝承程度に留まる。また、佐伯哲也氏による縄張り調査の所見では、下呂森城跡が16世紀後半頃とある（佐伯2005）。直頼の代では中津川市界隈を領地としていた遠山氏と友好関係にあったため、軍事的緊張もなく、敵方を監視するような城郭の設置も進まなかつたのであろう。

しかし、天文23(1554)年の直頼没後、良頼の代に情勢は一変する。天文年間末に勃発する武田氏と長尾（上杉）氏の著名な抗争「川中島の戦い」は、弘治元(1555)年に第二次の抗争が発生し、その影響は飛騨にも及んだ。武田氏、上杉氏の策略により江馬氏は内部分裂し、三木氏は上杉方に合力した。一方、苗木遠山氏は遠山直廉が武田方の扇動によって三木氏の攻略を窺っていた（千早2008）。情勢は、上杉方に三木良頼と江馬輝盛、武田方に江馬時盛と遠山正廉という勢力図へと変化し、また武田方には本願寺勢力が加勢しているため、良頼は東に武田、南に遠山、西に本願寺勢力といった各勢力と敵対しなければならなかつた。そのため、飛騨南部に前線基地を設けるとすれば、三木氏と遠山氏の緊張が極度に高まつたと考えられる永禄年間(1558～1569年)がふさわしい。

だが、それに相応する城郭は現在不明瞭である。筆者はむしろ、飛騨南部には當時機能していた城郭がなかったのではないかと考えている。それは、「威徳寺合戦」で衰退・荒廃した大威徳寺跡を合戦場として使用している点に注目するからである。「威徳寺合戦」の年代は記録により諸説あり一定しない。だが、元禄7(1694)年の史料（村瀬1886、史料II・89）の「飛州乱逆之時分賊徒等焼払申由」という記述や、遠山家文書『高森根元記』、同文書『御家譜』（千早2008）など複数の史料に、大威徳寺跡が合戦場になったことが明示されている。千早氏は、「威徳寺合戦」の有力年代を遠山直廉が死亡した元亀3(1572)年と考えるが、筆者は『高森根元記』が示す永禄年間も、先述の三木・遠山の極度の緊張関係の高まりから、「威徳寺合戦」の候補の一つから完全に消去できないのではないか、と考える。

さて、桜洞城の終末期を示す史料も、ここで合わせて紹介したい。『斐太後風土記』によれば、天正7(1579)年に高山に松倉城を築城した三木自綱は、長子宣綱を桜洞城城代にしたと記述する。また、天正13(1585)年に、豊臣秀吉から三木討伐の命を受けた金森長近は、可重に益田郡方面の攻略を任せ、同年8月に數日もかからずうちに桜洞城を陥落したとある（谷口2007、211頁）。また、閔ヶ原の合戦の際の慶長5(1600)年に、西軍側として三木残党を率いたと考えられる三木次郎兵衛（自体）が「萩原城」に立て籠もつたとあり（岡村1921、231頁）、それが桜洞城の可能性もある。しかし、「萩原城」は「萩原諒訪城」の可能性もあるため、桜洞城としての確実性には乏しい。そのため、史料に見る桜洞城の城郭としての機能停止は、とりあえず天正13年と見てよいであろう。

このように、桜洞城と飛騨南部の城郭を取り巻く戦国大名の動静を整理した。次に、そうした動静を踏まえながら桜洞城の発掘調査成果を検討してみよう。

2) 発掘調査成果から見た桜洞城とその廢城

これまでの検討の結果で判明した内容をまとめておく。今回の発掘調査にて空堀・城内から出土し

た大窯製品の大半が大窯第1段階・第2段階という大窯前半期にほぼ限られていた。16世紀初頭から前半の永正年中築城という、史料が示す桜洞城の築城とはほぼ近い結果を得たことになる。

次に、廃城ないしは機能停止の時期については、出土遺物の年代から遅くとも16世紀中と考えてよいであろうか、それ以上の絞り込みについては不明遺構001が鍵を握る。本報告書では、意図的な「埋め立て」地として判断される不明遺構001が16世紀第2四半期中に埋め立てられた可能性を推定した。しかし、大窯製品の生産年代をそのまま消費地の年代に適用する危うさを指摘する声（鈴木2001）もあり、単純に年代を割り出すことに躊躇を覚える。ここで年代の結論を出すのは早計であるのかも知れない。

ただ、不明遺構001出土品には貿易陶磁や茶器という三木氏の権威を示す品々が集中しており、その遺構付近に、三木氏屋敷の「主殿・会所」といった権威の空間が存在したことを推定させる。残念ながら、こうした空間を示す遺構を検出することはできなかったが、貿易陶磁や茶器が碎片に至るまで「壊された」異様な状態で出土が確認された不明遺構は、桜洞城跡の廃城と密接にかかわる事象と考えられる。

すなわち、不明遺構001にて確認できた、「壊された」三木氏の権威品に象徴される権威空間の機能停止は、桜洞城跡の廃城時期とも重なる事象と考えられる。仮に、不明遺構001の出土遺物の年代をもとに桜洞城の「廃城・機能停止」を16世紀半ばと考えた場合、三木氏4代目の直頼が没した天文23年（1554）とも限りなく近い。また、桜洞城跡から出土した古漁戸・大窯製品の組成は、内堀氏のIII期（1535年頃から1552年頃）とも一致する。

なお、禪昌寺の僧明叔慶俊が遺した「明叔録」によれば、直頼没後の翌年には、「飛驒国錯乱」とあり、直頼の影響力が弱まつことで国内になんらかの混乱があったことが考えられる（谷口2007）。また、その後の永禄年間は信州から武田氏にたび重なる侵略を受けており、高山盆地は相当な緊張状態にあったことが推定される。残念ながら5代目、良頼の本拠地が桜洞城であるのか、あるいはそれ以外の場所にあったのかを示す史料はない（注1）。ようやく6代目自綱の代の天正7（1579）年に高山の松倉城を築城したという記録が『斐太後風土記』に登場するが、わずか1史料であり、その確実性には課題が残る。

ここでは、直頼没後から松倉城築城が推定される天正7年頃までの間の、少なくともおよそ25年間、桜洞城以外に三木氏の本拠地が置かれていたという推定が可能性のあることと触れて、本発掘調査報告書の終わりとする。

注1）三木良頼が桜洞城城主であった可能性を示す史料に、波邊謙一郎氏所蔵文書（『岐阜県史』史料編古代中世補遺）がある。享禄元年（1528）9月1日付と考えらる箱ウハ書史料だが、次の点において、城主「良頼」と考えるには難点がある。自綱生誕の天文9年（1540）を基準に生誕年不詳の良頼の年齢を考慮すると、享禄元年に良頼はまだ10歳にも満たない年齢の可能性がある。そのため、箱ウハ書の内容をそのまま受け入れることは難しい。

第38表 三木氏主要事件年表①

西暦	年号	三木氏当主	内 容	出典
1394～1427	応永年中	正賴 三木忠右衛門正頼、竹原郷に京極氏の代官として従す。		「三木氏略系」「飛州志」
1411	応永18	応永飛脚の是。姉小路伊綱・広瀬常登入道と飛脚守護京極氏、信濃小笠原氏、越前斯波氏被官朝倉氏が合戦。伊綱戦死。		
1412	応永19	白井太郎利國が久津八幡宮再興。		久津八幡宮棟札(竹原町誌)
1460～1465	寛正年中	久賴 三木右京進久頼、竹原郷に住す。寛正年中に益田郡刈り取る。		「三木氏略系」「飛州志」
1471	文明3	8月、美濃国守護代斎藤妙椿が姉小路基嗣に書状送付。「去る七日三木討封す。」	「国華余芳」「斎藤妙椿書状」「飛脚下呂」史料II-18-1	
1504	永正元	重頼 7月、飛脚國三木重頼、數百の兵を率いて加子母から白薙岬をこえ木曾谷の木曾氏を攻めた。	「木曾考」	
1516	永正13	三木重頼更に「前作作潤山春大澤守門」永正十三年丙子二月二日卒去。なお、重頼更に「景庭院潤基美義櫻公尼首座」。	「禅昌寺所藏三木重頼位牌」「飛州志」	
1594～1597	永正～大永 年中頃	この頃三木直頼(大和守・初名右衛門尉)、阿多野郷・馬瀬郷を併合。桜洞城を築城。	「桜洞城跡」「三木氏系図」「飛州志」	
1521	大永元	大永合戦の年。直頼、高山の三寺寺城に在城。	「寿楽寺大般若波羅密多經愚書」「飛脚下呂」史料II-1-37	
1528	享禄元	桜洞城主三木直頼、龍澤山禅昌寺を再興。明叔慶俊を再興第一世とする(飛州志)。	「飛州志」	
		7月、飛脚の兵(三木か?)、木曾谷王滝へ侵攻する。木曾義元と合戦になり、傷がもとで木曾義元死去。	「飛脚編年史要」166頁	
1530	享禄3	姉小路吉川氏内部にて騒動。広瀬へ逃却。	「飛州志所収飛脚一宮水無神社棟札銘」「飛脚下呂」史料II-1-39	
1531	享禄4	姉小路氏牛丸與十郷志野比に立て難るもの、益田衆(三木)が攻め落とす。続いて3月古川城も落城。4月に両小島(小島時親・宗熙)を孔のめ訪問。	「飛州志所収飛脚一宮水無神社棟札銘」「飛脚下呂」史料II-1-39	
1532	天文元	三木直頼、益田郡木洞城下に某天宗惠のために禅昌寺を創建し、某天宗恵の師明叔慶俊を推して開山となる(編年)。	「飛脚編年史要」169頁	
1540	天文9	1月に三木良頼の初室、江馬氏娘死去(明叔錄)。法号は「月江宗光大禪定尼」。 8月に三木新九郎、「土岐頼宗(土岐頼芸)に合力し、東美濃米田鳩城、上野城など三つの城を落す」、姉小路三家・廣瀬・江馬から兵の支援を受ける。新左衛門尉直弘が祈持する。 10月、木曾殿より馬が届く。また岩村殿(遠山景前)より大魚一匹が届いたが、皆齋ていよい。また市村より来たふらわが「瀬戸物はとても貴重なものであった。出羽次第、人を使わずと禅昌寺仁谷に申し出る。 10月、三木直頼、吉岡・三枝・八賀を巡視する。	「飛州志備考24頁注37」「寿楽寺大般若波羅密多經愚書511章」「飛脚下呂」史料II-1-37 「飛州志所収禅昌寺文書」「飛脚下呂」史料II-1-6 「飛州志所収禅昌寺文書」「飛脚下呂」史料II-1-7	
1541	天文10	12月、本願寺証記、越中勝興寺・瑞泉寺・照蓮寺・聞名寺等と入瀬に預かりたうえの三木直頼の申出に、申し下す旨の返答をする。また、この年より「三木大和守」が古文書にあらわれる。	「証記上人日記」「飛脚下呂」史料II-1-41	
1544	天文13	3月、三木新九郎、四郷次郎が三寺禅昌山まで出張する。直頼は八賀衆の意を汲んで出兵せず。攝中衆も出兵したとは噂であった(谷口研吾氏は「天文十三年の乱」と呼ぶ)。	「飛州志所収禅昌寺文書」「飛脚下呂」史料II-1-19	
1546	天文15	春、三木太和守直頼、高山の千光寺を再興(梵鐘)。5月、江馬左馬助時経死去(編年)。11月、三木右衛門尉良頼(大和守宇子)が上洛、本願寺訪問(延知)。	「千光寺梵鐘銘録」「飛脚下呂」史料II-1-40、「延知上人日記」「飛脚下呂」史料II-1-41	
1554	天文23	6月、三木直頼57歳にて死去(明叔錄)。禅昌令殿前和州太守徳島宗功大居士。10月、後奈良天皇の時代、広橋国光、禅昌寺仁谷へ禅昌寺に十刹の輪旨を下す(編年)。		
1555	弘治元	良頼 8月、長尾景虎・信州川中島出陣(第2次川中島の合戦)につき、朝倉宗演(教説)、加賀本多寺勢力を攻撃。また陣営を上杉陣へと派遣。その際の越中覚までの踏取次を良頼に依頼する。 10月、飛脚国隣乱(明叔錄)。	「禅昌寺明叔錄所収文書」「飛脚下呂」史料II-7-1,34-1	
1556	弘治2	3月、姉小路三家にて内紛か(一族)。9月、禅昌寺守仁谷親。	「禅昌寺諸僧法跡」「飛脚下呂」史料II-34-1	
1558	永禄元	1月、三木良頼、徒五位下・飛脚守を叙任(一族)。 6月、武田耕信、飯富・甘利・馬場の将をもって飛脚東邊に派兵(編年)。 10月、麻生野右衛門大夫(時経息子)、武田信玄に通じる。この年、三木光頼、飛脚国司を任せられる。	「歴名士代」「飛脚下呂」史料II-1-47 「甲陽家譜」「武田信玄修驗駿田大成院藏文書」「飛州志」274頁、「お湯殿上の日記」「飛脚下呂」史料II-1-45	
1559	永禄2	8月、木曾義康、武田耕信の命で兵を飛脚阿多野に進める(編年)。		

第39表 三木氏主要事件年表②

西暦	年号	三木氏 当主	内 容	出典
1560	永禄3	経小路 三木良頼+光頼、姉小路性を下闕され、良頼は從四位下、光頼は從五位下 良頼	3月、上杉憲政から家督・関東管領職を譲りされ、名を上杉政虎とする。	「歴名土代下飛脚下呂」史料II-47
1561	永禄4		7月、上杉政虎・川中島に兵を進め、第4次川中島の戦いが勃発。それに応じて、江馬時盛が武田に応じて兵を擧げるが、三木良頼・江馬輝盛之を討つ(編年)。 12月、上杉政虎、是利義輝の一字を嗣ぎ、上杉輝虎と改名。	
1562	永禄5	良頼 (嗣頼)	2月、三木良頼、従三位を叙任され、嗣頼と改名する。12月、嗣頼、中納言	「公卿補任」『飛脚下呂』史料II-48
1563	永禄6		越後上杉の持、河内長親、越中より飛騨に兵を入れる(編年)。	
1564	永禄7		7月、武田信玄・上諏訪神社に戰勝祈願し、飛騨に侵攻(史考234頁)。千光寺、武田軍により焼失する(千光寺焼却)。 8月、第5次川中島の合戦。 8月、山村三郎九郎、繪田次郎左衛門尉を討ち取る。	『信濃史料』・『国府町史』資料編 『山村文書』
			10月、越後河田長親から江馬輝盛家臣河内中務秀に書状。江馬時盛は武田方に組みし、三木良頼・江馬輝盛は上杉輝虎方に付き、合力して高原を攻撃。上杉は川中島に出陣し(第5次川中島の戦い)、約60日間、武田軍を牽制した。	『河上文書』(史考235頁)
1565	永禄8		6月、飯富昌景、高原を越えて越中新川郡に出て、椎名康胤を攻撃し、之を降す。中山地盤の馬の持河内中務に守らせ(編年)。	
1567	永禄10		5月、武田信玄・飛騨高原を越えて越中國城を巡視し、攻撃に備える(編年)。	
1568	永禄11		12月、武田信玄・駿河に出兵。今川氏直攝川城に逃走(編年)。	
1569	永禄12		2月、上杉輝虎・堀尾景前守を介して、三木良頼に各地の情報を伝えるよう打診(史考255頁)。三木良頼、廟号・直江大和守・村上國清に椎名康胤不都のことを伝え、信玄・信長・京都の様子を伝達。 2月、三木良頼、反目する康胤と輝虎の調停役を買って出るが、不調に終わる。	「上杉家文書」「村上文書」 『飛脚下呂』史料II-19・28、 『古川金蔵氏所有文書』 『飛脚下呂』史料II-23
1570	元龜元		織田信長、1月に諸大名に上洛を促す。3月、信長上洛。経小路中納言上洛。12月、上杉輝虎、謙信を名乗る。 この年、上杉・北条の同盟成立。北条三郎、上杉謙信の養子となり上杉景虎を名乗る。	「信長公記」『飛脚下呂』史料II-46
1572	元龜3		3月、自綱の子綱宜が從五位下に叙位され、同日宣諭と改める(一族)。	
			10月、直江景綱・河内忠清・熊田長家の三名が吉江喜三郎に宛てた書状に、三木良頼がよくやく率揮するとの記述あり。	『上杉家文書』『飛脚下呂』史料II-19-3
			10月、上杉謙信が開闢の河内伯耆守に宛てた書状に、良頼病中のため子自綱が上杉の陣に參上するとある。	『關道文庫文書七村上文書』『飛脚下呂』史料II-26-1
			11月12日、三木良頼没。	
1573	天正元	自綱	3月、自綱の子綱宜が從五位下に叙位され、同日宣諭と改める(一族)。	
			4月、武田信玄没。9月、自綱の兄弟、織島豊後守(頼綱)に武田信玄・勝頼書状を送る。自綱討伐を決し、雪溶けをまって出陣する。自綱変節するとも頼綱勘定なきこと祝着(一族)。	「千光寺大般若經奥書」『飛州志』 『松雪公採集遺稿類纂』 『飛脚下呂』史料II-30-1
1575	天正3		5月、長篠の合戦。織田・徳川軍に武田軍破れ、多数の重臣を失う。	
1577	天正5		2月、岡本豊前守夫妻、自綱により殺害される(編年)。9月、上杉謙信、加賀手取川にて織田の羽柴秀勝家の軍勢を破る。	
1578	天正6		3月、上杉謙信没。	
1579	天正7		この年、自綱、松倉城築城、板洞城城代は子宣綱(風土記)。また安土城完成。2月、自綱、父自綱により殺害される(編年)。6月、高岡原合戦で江馬氏を破る。	「船坂文書」『飛脚下呂』史料II-8
1580	天正8		板洞城の改築(風土記)。	
1581	天正9		自綱、久津八幡宮拝殿を造立。	「久津八幡宮拝殿造立棟札銘」 『飛脚下呂』史料II-38

第40表 三木氏主要事件年表③

西暦	年号	三木氏当主	内 容	出典
1582	天正10		3月、信長の村柴田勝家、魚津城の上杉軍を包囲。 3月11日、織田信長に攻められ、武田氏滅亡。	
			6月2日、本能寺の変で信長死亡。	
			9月から10月、荒木八日町の合戦で、自綱・弟小路向氏連合軍が江馬輝盛を討つ。自綱、家臣拵板又在廟門に感謝狀を受ける。	「寿楽寺大般若經書」『飛脚下呂』史料11・37、「船版文書」『飛脚下呂』11・8-3
1583	天正11	秀綱	9月、自綱、末弟鍋島豊後守鍋島を殺害。また、広瀬宗祇との共同作戦で小鷹利の牛丸鍋親を討つ。さらに同月、自綱は広瀬氏を滅ぼす。秋、秀綱に家督を譲る(史要)。この年、秀吉、本廟寺跡地に大阪城を工。	
1585	天正13		8月、秀吉、北陸に出陣。佐々成政代ら、金森父子が自嗣を攻撃し、三木降伏。秀吉、橋梁築石助廟通を飛脚団に封する。 『金森飛脚攻撃に関する事』・『三木防戦松倉落城之事』『飛州志付録』に詳しい。 11月、大地震で内ヶ島氏居城帰雲城が崩壊、埋没する。	「宇野主入日記」『飛脚下呂』史料11・42

*(飛州志)：『飛州志』、(編年)：『飛脚編史要』、(一族)：『飛脚三木一族』、(風土記)：『斐太後風土記』、(明叔錄)：『明叔慶俊和尚語錄』
(史考)：『飛脚史考』中編

参考・引用文献

- 井川信子 1997 「15世紀後半から16世紀前葉の土器部屋—中濃地域を中心として」『美濃の考古学』第2号、125-140頁。
- 井川信子 1998 「美濃における中世後期の土器部屋」第17回中世土器研究会報告資料一京都系土器部屋の伝播と需要ー、16-23頁、中世土器研究会。
- 岩田伊人編 1939 『大日本地誌体系』斐太後風土記上・下、雄山閣。
- 岩田伊人編 1984 『萩原の風土と生きもの』萩原町教育委員会。
- 上田秀夫 1982 「14世紀～16世紀の青磁碗の分類について」『貿易陶磁研究』No.2、55-70頁。
- 内藤道雄 1998 「考古資料から見た16世紀代の美濃(1)『横影一先生古希記念論文集』、278-287頁。
- 大庭久八郎 2002 「明叔慶俊和尚語錄」『萩原町史』第1巻、自然・原始古代・中世編、397-611頁。
- 大庭久八郎 2011 「北朝・室町幕府と飛脚國司(師小路氏)」『師小路と廣瀬』、114-123頁、師小路家・廣瀬家特別事業実行委員会。
- 岡村正敏 1979 『飛脚史考』中世編。
- 岡村正敏 1986 『飛脚史考』近世編。
- 岡村利平編 1909 『飛州志』、住伊書店。
- 岡村利平 1921 『飛脚編史要』、住伊書店。
- 岡村利平編、上村木曾右衛門編義理 1917 『飛脚国中案内』(後刻版 1987、かすみ書房)
- 小野正敏 1982 「15・16世紀の染付碗」皿の分類とその年代』『貿易陶磁研究』No.2、71-87頁。
- 小野正敏 1997 「城下町、館・屋敷の空間に権力表現」『国立歴史民俗博物館研究報告』第74集、165-175頁。
- 鶴谷正敏 1979 『飛脚貿易合府』、住伊書店。
- 小瀬司司はか 2011 『三枝城跡』、岐阜県文化財保護センター調査報告書第116集。
- 佐伯也勤 2003 「下呂市」『岐阜県下世城跡総合調査報告書』第4集(飛脚地区・補遺)、138-149頁。
- 酒井洋次編 2002 「名石田本舟跡発掘調査報告書」、富山県文化振興財團埋蔵文化財調査報告書第14集。
- 鈴木洋貴 2001 「尾張の概念地城跡踏跡出上の瀬戸内瀬戸陶器—時期別組成の分析を中心に—」『研究紀要』第2号、51-66頁、愛知県埋蔵文化財センター。
- 鈴木洋貴 2002 「中世土器の象徴性—「かりそめ」の器としてのかわらけ」『日本考古学』第14号、71-88頁、日本考古学協会。
- 舟舟也勤 1937 『桜洞跡』『岐阜県史稿』第6編。
- 谷口研磨 1986 「三木丹波守史料」『飛脚・下呂』史料11、1-67頁。
- 谷口研磨 2007 『飛脚三木一族』、新人物往来社。
- 手早保之 2008 「岐徳寺合戰考」『吉木遠山史料館レポート』、1-7頁。
- 富山正保・清水孝之 2012 「諸藩訪問興行令」、福井県教育厅埋蔵文化財センター。
- 富山県文化振興財团埋蔵文化財調査事業所 2006a 「加納谷内遺跡」『とやま発掘だよりー平成17年度発掘調査報』。
- 富山県文化振興財团埋蔵文化財調査事業所 2006b 「(6) 加納谷内遺跡」『平成17年度埋蔵文化財年報』。
- 中野史郎 2002 「土器の名前—中世土器の登名考証試験」『日本史研究』第483号、1-36頁。
- 村瀬潤良 1986 「宗我族」『飛脚・下呂』史料11、69-322頁。
- 広島県立歴史博物館 1994 「茶・花香—中濃にうまれた生活文化ー」。
- 藤原良祐 2002 「瀬戸・美濃大窯編年」『瀬戸市埋蔵文化財センター研究紀要』第10輯、53-175頁。
- 藤原良祐 2007 「編年表」『愛知県史』別編2、家業2、中濃・近世瀬戸系、766-793頁。
- 馬原和彦 2001 「鎌倉・今治路(御小学校内)・北谷3面地土層下」『季刊考古学』第75号、50-51頁、雄山閣。
- 森井啓助 1982 「14世紀～16世紀の白磁の分類と編年」『貿易陶磁研究』No.2、47-54頁。
- 森達也 2000 「宋・元代窯業青磁の編年的研究」『東洋陶磁』第29号、77-103頁、東洋陶磁学会。
- 森達也 2001 「韓国・新安沖沈没船構造(青磁)」『季刊考古学』第75号、52-53頁、雄山閣。
- 森達也編 2012 「日本人が愛した中国陶磁—龍泉窑青磁展」、愛知県陶磁資料館。
- 森本一雄 1987 「定本・飛脚の城」。

写 真 図 版



遺跡遠景



東空堀掘削前



東空堀北面断面



東空堀2区北側断面



東空堀調査完了



東空堀4区調査完了



東空堀3区北面断面



東空堀3区遺物出土状況



南空堀1区 47丁付近

図版 2



南空堀3区調査風景



南空堀3区北面断面



南空堀3区西侧



南空堀1区 47 T断面



溝002 北側



溝002 南側



溝002周辺完全掘削



溝002掘削後



溝 002 内出土状況



80・81 区遠景



80・81 区掘立柱建物跡



80・81 区掘立柱建物跡拡大



80・81 区掘立柱建物跡柱穴拡大



SK 001 遠景



SK 001 半裁



30・31 区溝 003

図版 4



30・31区溝 003出土遺物



58区調査完了



59区溝 005



60区調査完了



60区不明造模 001断面



60区不明造模 001断面質化材



60区不明造模 001遺物出土

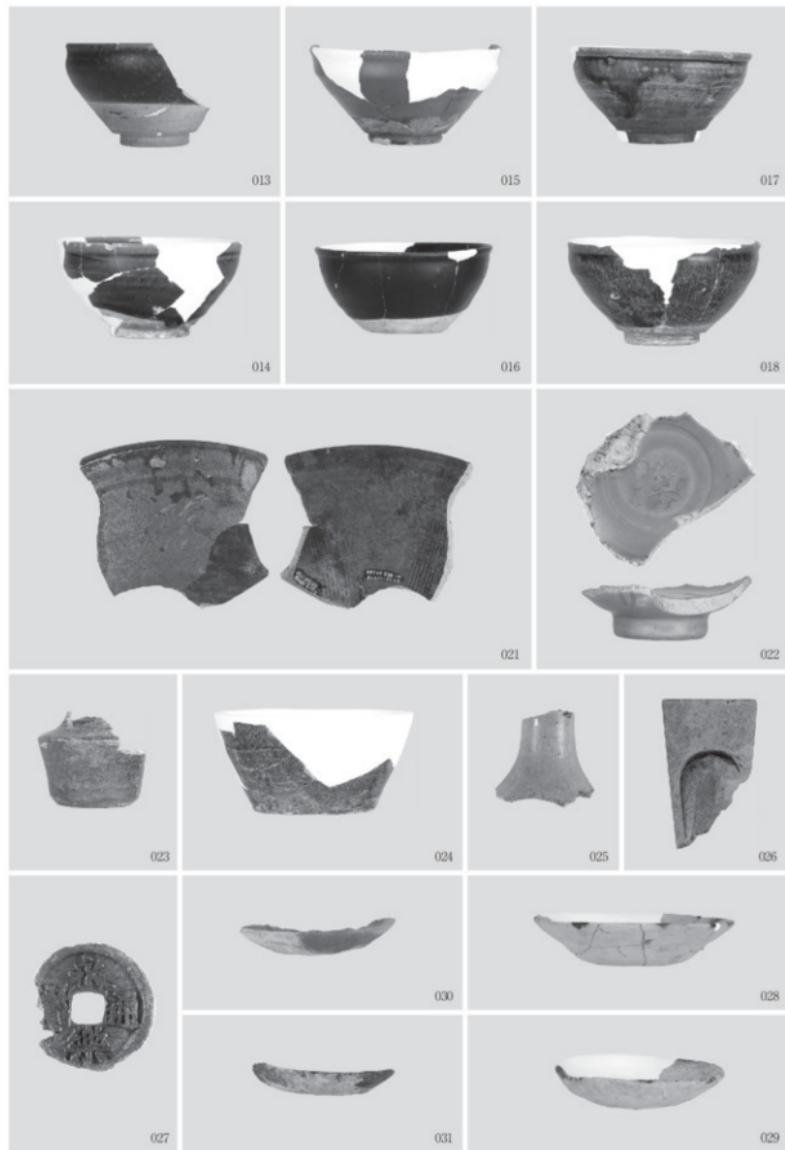


60区不明造模 001断面質化材

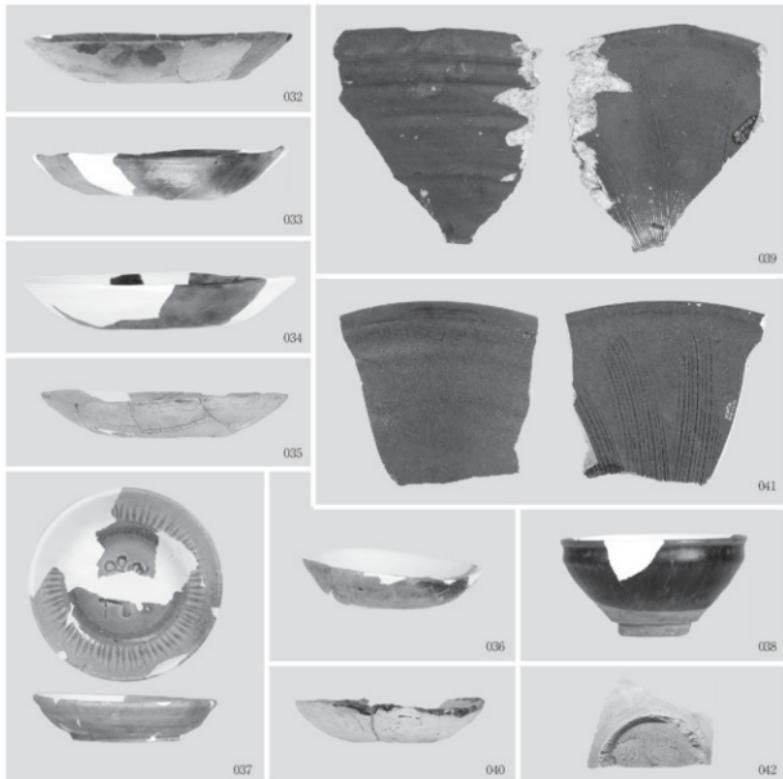


東空堀出土遺物①

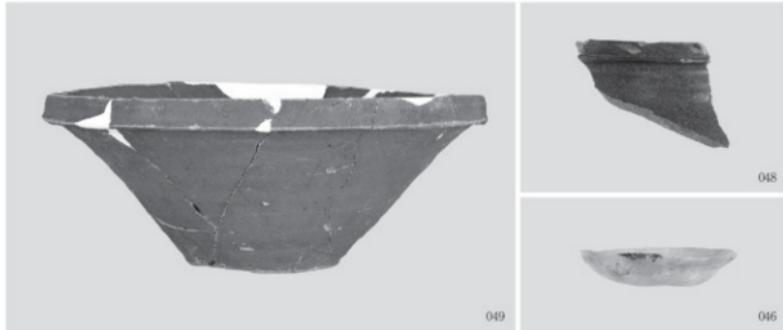
図版 6



東空堀出土遺物②



東空堀出土遺物③

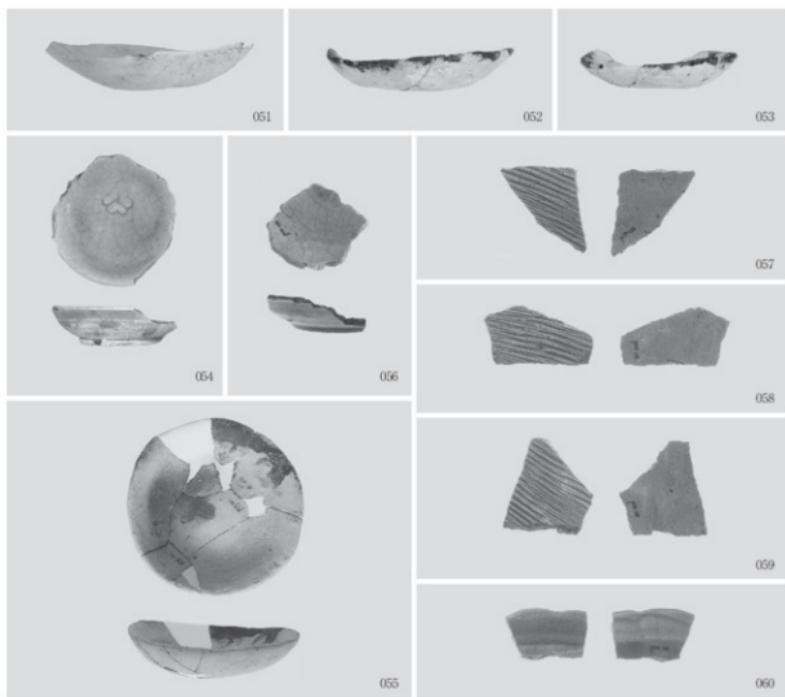


南空堀出土遺物①

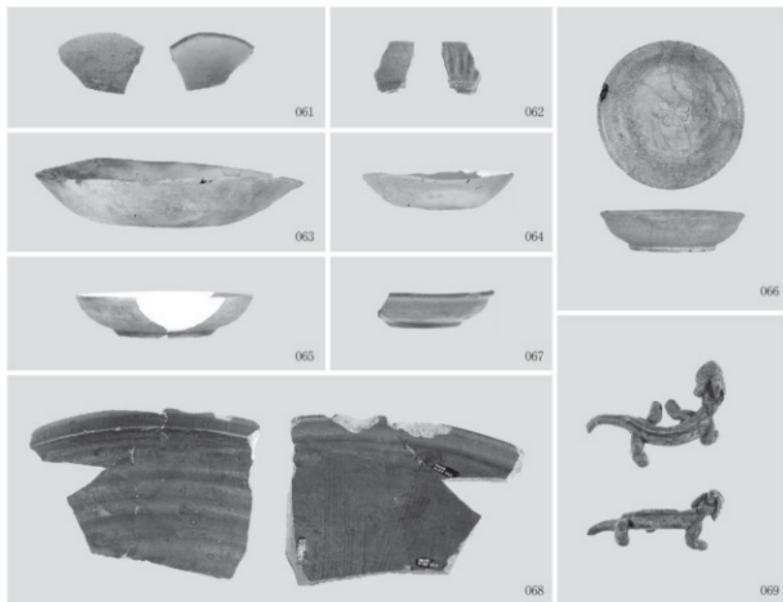
図版 8



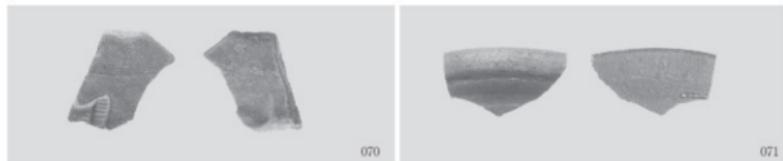
南空堀出土遺物②



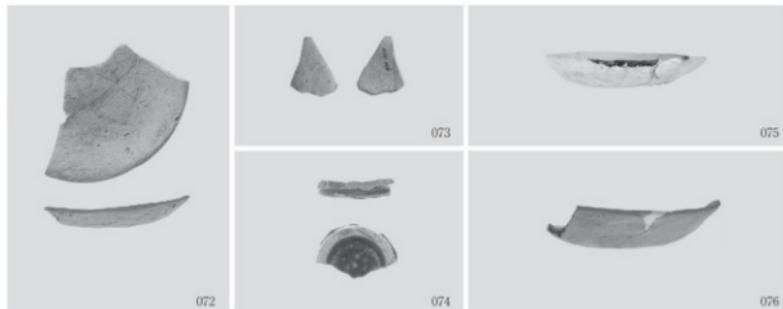
溝 002 出土遺物



80・81 区土坑及び包含層出土遺物

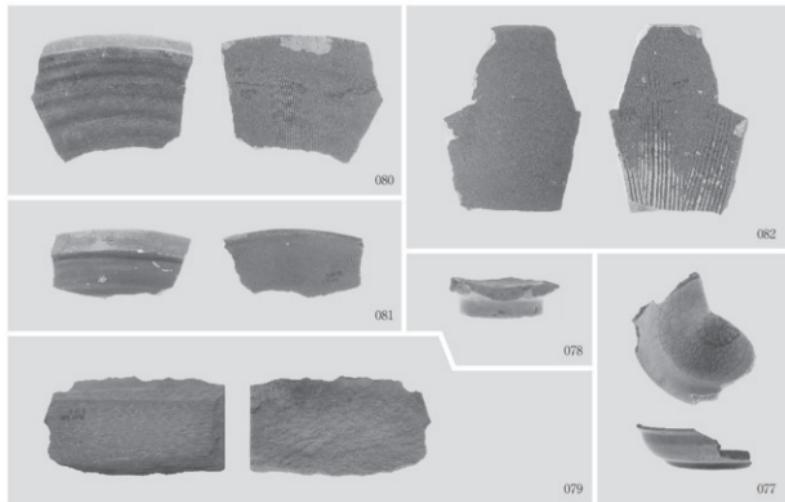


72・79 区出土遺物

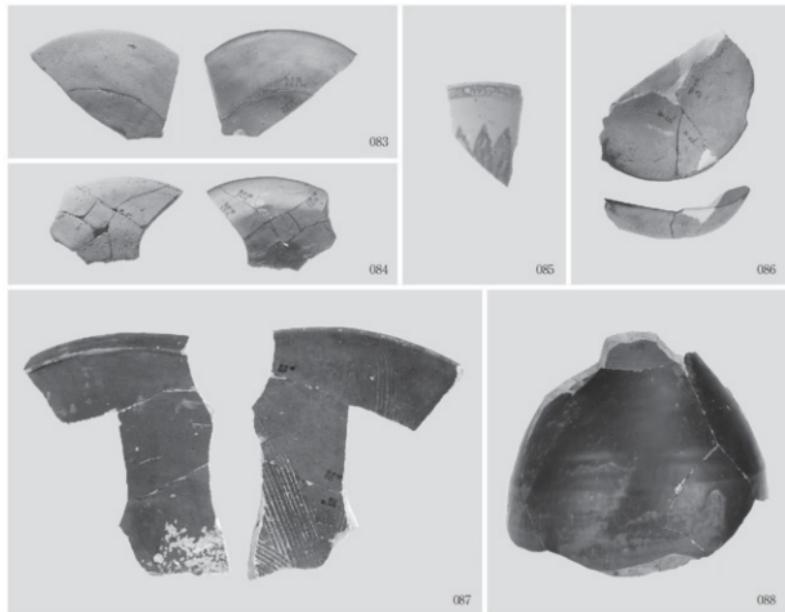


13～31 区出土遺物

図版 10



58 区出土遺物



59 区出土遺物



61区溝・土坑出土遺物、不明遺構 001 出土遺物①

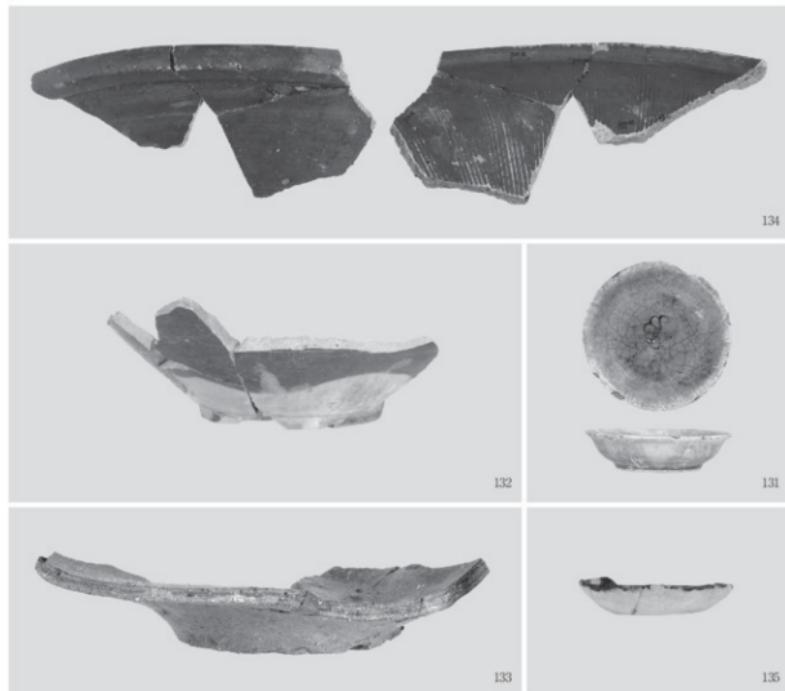
図版 12



61区不明遺構 001 出土遺物②



61区不明遺構 001出土遺物③



61 区包含層出土遺物

報告書抄録

2014年1月6日 初版発行 2015年1月16日 第2版発行

下呂市文化財調査報告書第3集

桜洞城跡発掘調査報告書

編集・発行 下呂市教育委員会

〒509-2517 岐阜県下呂市萩原町萩原1166番地8

電話 0576-52-2900

印刷・製本 有限会社斐太企画工房